

---

# ゼルプスト・ミュトス

はまな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼルプスト・ミュトス

### 【Nコード】

N1682I

### 【作者名】

はまな

### 【あらすじ】

地球上での、国家同士の争いは『夢の』統一国家の成立を促した。

しかしそれそのものの成立自体が戦争行為なしには実現され得なかった、半ば強制的な統一に異を唱える者はいた。そんな反発者たちは、技術革新と共に月へとわたる。

月の少年ヨセフは友人と共に、人がつくった最も外宇宙に近い宇宙基地で、全く予期せぬ戦いへと巻き込まれていく。

数世紀未来の宇宙で行われる戦いと対話を通じて、ヨセフは成長

し、思い巡らせ、やがてこの争いに「つけるべき」決着を見出そうとする。

## 0 プロローグ（前書き）

\* 十月十一日現在、第一章中の表記の誤りを修正いたしました。「L3」「L2」です。既にお読みになられていた方には、申し訳ありませんでした。

## 0 プロローグ

### 0 プロローグ

「気になさらないで。もうじき私は……」

続く言葉にしかし、と言いかけた使いの者を手で制し、ミウ・ミレトスは部屋の隅のスピーカーから発せられる声に耳を向けた。

「……世界中、全ての民族、国家を巻き込んで起こった史上初の地球規模での争いは、世界大戦の名でその後数十年間人々を強く戒め、多くの学びを与えてきました。しかし地上で戦禍を癒し続けていた人類は、痛みと共に英知を失い、また英気を養うと共に過剰なまでの新たな力を求め続けました。結果として人類は、多くの国家たちが己をかけて戦うという愚行から、二度の大戦の経験を生かして抜け出すということが叶わなかった。夢破れた人類たちは、それと気が付かぬままに、その後の数十年を過ごし、そして来るべき日を迎えてしまったのです。大国たちが手を結び大きく布陣の分かれた構図で行われた、不完全な世界大戦ではない、ほんものの人類戦争。

全国家、様々な武力組織、人が持つ全ての技術と思想、宗教、人種、主義主張、果ては旧来の生活を続けていた原住民すら巻き込んだ戦争が始まりました。一体どれだけの人が、その発端を言い当てることが出来るでしょうか。国家と言う共同体に縛られていた人々はその瑣末な帰属によってその後百年以上の永きにわたって戦乱の世を作り続けたのです……三次限定戦、収束核戦、統一民族戦……この百年は、いわば我々人類にとっての一つの終末であつたとは言えないでしょうか。

しかし、終わりを迎えたのは、人類そのものではありませんでした。地球人口を二千年当初から四十パーセントも減じて、そこに残った人々はようやく掴むに至ったのです、そう、我々がかつて手に入れかけた英知、過ちを二度と繰り返さぬための賢しさを、です！

今日この日、この祝福されて然るべき瞬間、地球は新たな財産を手にしめます！ 我々が夢見た単一国家、人類すべてのための人類の国家、全人類による理想の民主主義国家 』

ミウ・ミレトスは乾いた息を喉の奥から搾り出した。死ぬのはいい。寿命は嘆くことではない。しかし死を目前にしてこんな呪いじみた放送を聴いてしまったのは不幸としか言いようがないではないか。

『地球人類連合民主国、人類連合が、今、今正に生まれようとしているのです！ 初代首相が今その手で連合憲章にサインを……』

レポーターは明らかに興奮していた。音声のみの放送を聴いているに過ぎないというのに、ミウ・ミレトスの脳裏には血走った女性レポーターの眼球が映し出されていた。

理想郷。人類に与えられる、単一国家。

いつの間にかミウは息を止めていた。鼓膜が高い音で鳴り、視界が赤黒く染まる。ラジオの音が遠ざかり、安堵する。

二千年。

最初の世界大戦が終わったとき、既に人は二千年以上の争いを続けていたのだ。

その意味を、華やかな放送の向こうの人々も、それを澄み切った心で聞く人々も、全く理解してはいない。

なんとしたものか。

自らの弱い鼓動を気遣いながら、ミウはしばし黙考した。数年間共に暮らし、すっかり家族のようになってしまった召使に言ったことは嘘ではない。医者診察によると自分はとつくの昔に死んでいたほうが自然なくらいだと言うのだ。

つまり、大して時間がない。

ミウは地位と共に権力、財力を表裏両面の世界でそれぞれ有している、いわば『有力者』というやつであったが、寿命をどうこうする方策は既に尽きている。

なにせ、ミウは前々世紀の終わりから生きているのだ。軽く見積もっても百五十年以上である。あらゆる延命には手を出したし、そ

うして手に入れた時間のうちでやれることは最大限進めてきたはずだった。

しかしそれも存命中のこと、死んで後の世をどうこうすることは酷く難しい。

『現在この放送はL1ポイントに建設中の月面と地球をつなぐ中継基地から発信しております。国家が形を変え、変革が訪れた我々が後の世で目指す新世界、そのための宇宙基地建設は戦争の終結無くしてなかったことではないでしょうか？』

少なくとも……

「こんな連中に任せるわけにもいかないでしょうね」

「は？」

呟きに、戸口に立ったままであった召使が疑問の声を上げる。

そのぽかんとした間抜けな顔に向かって、ミウは命じた。

「総主会と回線をつなぎなさい。大事な遺言を残すわ」

「え、あ、その、まだ戦後処理のための電波規制が」

「無理矢理でも何でもいいわ。なんならメンバーを幾らかここに呼びなさい」

「は、はい！ すぐにかかります！」

「有難う」

言い終わって。ミウは長く深い呼吸を数度繰り返した。肺の奥には神経を掻き乱すような痛みが常に残っている。

次代を担う者。人の次を描くべき者。そういった人間は案外いつの世も現れているし、それを見つけることがそこまで難しいわけでもない。

問題は、いつの時代も変革されるべき大衆は変革されていない故に、優れた人間よりもなんであれ体制と言うものの方を選ぶ、ということであつた。タダで手に入る安寧は民衆にそれほど大事にされないものであるが、彼らは自らが変わると言う大きな代償を払って価値を得るほどの気概もないのである。

（そんな人間たちにはどうあつても渡してはならない。『扉』を

……扉の持つ秘跡を……）



## 1 スペース・パースペクティブ

### 1 スペース・パースペクティブ

大国がしのぎを削りつつも均衡状態を保っていたのは、西暦二千年を超えて十数年が限界だった、と、世界中の歴史の教科書には憐憫と共にそう書き記されている。

そして次の行には大抵自慢げに、太字でこう続くのだ。

『しかし人類は、その後幾多の争いを経験しつつも、ついに個々の国家と言う悪しき因習、争いの元からの脱却を果たしたのです！そうして出来たのが世界単一国家、皆さんの住む人類国家、オール・ピープル・カントリーです』

華々しく写真も添えられているだろう。しかし、その後の歴史について事細かに書き記した教科書は、今現在地球にはあまり存在しないと聞く。

それも仕方の無いことであつた。世界が平和を歌って以来約七十年間、いまだ戦乱は途絶えることなく続いているのだ。

二世紀以上前からの悲惨な争いによって疲弊しきることを恐れた当時の大国たちはその力を欺瞞と疑念の混じる中無理矢理結集させることで、国際連合というもののあり方を変えた。各国が各国ごとの利益をなるべく穏便に手に入れる体制から、連合そのものの利益へと、人心の帰属の変化を促したのである。

その後、つまりは三次大戦と収束核戦争を経験した後発足した強大な連合国家は、連合内からは『革新』として称えられ、反連合組織からは『地球規模の絨毯爆撃』として揶揄される統一民族戦を経て現在の統一国家、人類民主国へと繋がる。

当然と言えば当然だが、連合内で実権を握ったのは前世界で力を有していた国家の人民であり、いくつかの大国、米朝や欧州連合、

中国、ソビエトなどが寄り集まったものに小国が吸収されて出来たものであるともいえる。

大国の影で立ち位置を得て存続していた小国たちは連合が発足した時点で多かれ少なかれ犠牲を払うことになったのだ。隷属か、今まで以上のゴマすりか、兎に角そんなものが彼らには求められた。国家としてのイデオロギー、国家としてのミームは、そんな状態の中上手く溶け始め、連合はますます増長していくことになる。

しかしさらに悲惨だと言えるのは、そもそも国連の中で批判的に見られていた国や、国連そのものに睨まれていた国家、国家や集団と言ったものの国際的な自治権を背景に世界のいわば『多数派』に対して抗議や反抗を続けていた人々である。

テロ組織や反政府組織は当然として、民主制を受け入れなかった国家たちの全てが『統一』のために肅清を受けることになったのだ。特に中東連合、東欧国家などは統一戦において連合との間で大規模な衝突を幾度も繰り返した。

つまるところ、『夢の』世界政府、統一国家は、血みどろの生存競争の結果として死体の中で屹立した物であると言える。

更に言えば、その血みどろの争いは現在に至っても続いている物なのである。人類国家は厳しい情報統制をとり、地球の住民たちに未だに戦争が続いていることを隠そうと躍起になっている、らしい。

ぜんじんるい（おーるぴーぼー）。なんとも間の抜けた響きである。

ヨセフは溜息混じりに窓の外へと目をやった。大気を介さない星の光が自らにもクリアーに届いている。宇宙空間は色や形よりも気配で捉えたほうが概して理解しやすく、また浸りやすい。自論を脳裏で読み上げて、ヨセフは満足した。

『L2小型コロニー』『エフェソス』。

月の裏側に建造された人工の地下都市、『プリユタネイアー』のために建造された宇宙基地である。

月面都市は二十世紀から唱えられていた物であつたのだが、それが実現している背景には戦乱の影響が多分にある。

かつて三次大戦から統一戦、或いはそれ以降も連合と反目し続けた人々は、無論地球各地に拠点を有していたのだが、惑星全体を勢力圏とする連合に対して地上の拠点はそれ単体ではあまりに無力であつたのだ。

そういつた事情を深く理解していた一部のグループは、かなり早期から宇宙への進出を狙っていた。宇宙基地自体は既に二十一世紀末には貧相な魚の背骨のようなステーションではなく、本格的な研究や長期の居住までを可能とするものが小型ではあるものの実用化されていた。彼らはありつたけの財を投入して宇宙への入植を開始したのである。

当初は無謀そのものだといわれたその行動が、反連合組織にとつての最善の一手として歴史に刻まれるようになったのは、それから程なくしてのことだった。

疲弊していたはずの反連合組織はあるときを境に莫大な財産と高い技術力を手にする。その背景については様々な噂があるが、連合との取引や貴重な資源衛星の捕獲から果ては宇宙人とのコンタクトまで、枚挙に暇がない。要するにほとんどの人間が知らない、ということだ。

ともかくその時期から組織は持ち直しに成功する。

そして約三十年前、統一国家の現出からちょうど三十年後に、月の裏側に建設されていた都市群が一応完成するのだ。

それまで『イスラエル』と名乗っていた国家群を中心とした反連合メンバーたちは、それを境に他の組織のメンバーとの合併を繰り返し、月へとその総人口の七割を移動、『ユダ』と名を改め月面に『国家群』を形成した。

無論これは人類統一国家を謳う連合へのあてつけであると同時に、自らたちの求める「国家という形の維持」の具現でもあつた。

ヨセフが穏やかで美しい宇宙をその只中に浮かぶ施設から眺めら

れるのも、そうした事情があつてこそ、だ。

ヨセフが立っている、というより地面に足をつけて静止しているのは、無重力区画の端、スペース・ベイの待合ロビーである。

『エフェソス』は基本的に二つの区画に大別される。遠心力によつて擬似重力の恩恵が得られる重力エリアと無重力の弊害と恩恵を同時に享受できる無重力エリアだ。大きな鯨のような、軍艦のような形をした無重力エリアはいまヨセフがいる港や各種研究施設、そしてこれが大半を占めているらしいのだが 軍事施設と資源採掘、貯蔵施設が存在している。それに対しその鯨の胴体の中ごろから伸びた数本のシャフトで繋がれた、ドーナツ形の建造物が重力エリアであり、平時であれば絶えず鯨の周りをぐるぐると回っている。およそ地球の七割ほどの重力が得られるこの区画では基地で働く職員や、政府・軍の高官が滞在する為の居住施設が主に収められている。ちなみに人工重力のための回転は時速に直せばなかなかのものであるため、重力区画にはあまり窓がない。流れ続ける風景に酔いを覚える人間が後を絶たないからだ。

ヨセフが少し前まで借りていた部屋も、そこにあつた。

（慌ただしいな）

窓に映つた自分の顔が、疲れと緊張を混ぜた色に染まっている。ひどく素直に言うことを聞くおとなしい黒髪と、宇宙をそのまま映したかのような黒目は日系の血が原因らしいと昔両親に聞いたことがあつた。日本というのがどんな形の国か残念ながらヨセフは知らなかつたが。

どこか線の細い、紳士というよりは音楽家と言つたほうが分かりやすそうな面立ち。ヨセフ自身はそれが少しだけ気に入らないところではあつた。ずいぶん昔のことだが、幼い頃友達によくからかわれたのだ。

（今はどうしているのかな……）

ポツリと、呟く。宇宙の深遠を目前にして少々ナイーブになっているのかもしれない。

「ヨセフ」

細い、だがよく通る声で、ヨセフははつとして振り返った。

「荷物、もう準備できたの？」

声の主は、栗色の髪 of 少女だった。

「ああ、うん。アラム、君も？」

「うん。ほら」

そう言つて少女、アラムは左手に下げた鞆を軽く振つて見せた。数日間の滞在に備えての荷物のためそこその大きさだが、無重力下では当然ゼロキログラムである。

アラムはヨセフと同じ学校に通う生徒同士である。もう少し言うなら友人であり、同じ部活の仲間でもあった。

準備、とは、帰る準備のことである。元々月の地下都市で暮らすヨセフとアラムは、ヨセフの義理の父である軍関係者の招待でこの基地に滞在していたのだ。それが昨日になって突然民間人や一部職員への月への移動命令が通達されたのである。

そのために今港にいるのである。

「あ、チケットとかは……」

そう言つて出向手続きでこつた返すロビーを見回す彼女に、ヨセフは窓から離れながら答えた。

「ああ、それなら大丈夫だよ。僕たちの席はイマダさんがとつておいてくれるから」

「イマダさん？ ああ、ヨセフのお父様？」

「うん。まあ父つてよりは頼りになるお偉いさん、って感じだけど。まだ養子に迎えられて短いしね」

「何だか凄い人なんでしょ？ 何人も行き詰つた子供を迎え入れるとかで」

「そうらしいね。まあ、僕もラッキーだったかな」

そう言つて、ヨセフは壁に取り付けられた時計に目をやった。自分たちの乗るシャトルまでまだ少しある。

「でも、いきなり月に帰れだなんて」

「仕方が無いよ。地球のほうで小競り合いがあつたらしいんだ。民間人を軍事施設に置いておくわけにも行かないんだろっさ」

一般論で軽く返したヨセフだったが、アラムは納得がいかなかったらしい。軽く頬を膨らませて困つたように呟いた。

「私が不満なのは、そう言うことじゃないんだけれど」

「え？」

「なんでもないよ」

なんなんだろうか。二日前にこの港に降り立ったときは、たとえ重力が存在していたとしてもどこまでも飛び上がっていきそうなほど喜んでいただが、それほど強制退去が嫌なのだろうか。

「はあ……それに、まだ十分に観測だつてしてないのに」

観測、とは、この基地からの宇宙の星星の観察のことである。アラムはヨセフ共々、月都市の一区画にあるハイスクールで天文部に所属しているのである。エフェソスのあるラグランジュ・ポイントと呼ばれる重力安定圏は地球と月を繋ぐ直線を更に月の裏側から外宇宙に向かって引き伸ばした位置に存在し、つまり人類の生活圏では最も『外側』にある場所であるのだ。ヨセフが無理をいつて父イマダに頼み込んだのは、何より知的好奇心とアラムの嬉々とした表情が何となしに好ましかったからである。いつだつて気を許せる友人というのはヨセフにとって最も大切にすべきところである。

「それに、戦争つてもう終わったんじゃないの？ 今年にも休戦協定がどうか、言つてたのに」

こんどは、如何なる不満の色もなしに、純粹な疑問としてアラムが訊いてきた。

『ユダ』が国家群を立てて成立してから、三十年がたった今、連合とユダの関係性は当初とは大きく変化し、実に微妙な色合いを見せていた。

ユダは成立と同時に地球上と月との両側から当時の地球最大都市東京へと攻撃をかけ、これを皮切りに統一戦後最も大きな争いが巻き起こっていく。数々の争いの中で、圧倒的な勢力を誇っているは

ずの連合は、ユダの持つ技術力や、宇宙に本格的な施設を持つという地の利にひどくてこずることになる。ユダが当時一枚岩に近い組織として質の高いまとまりを持っていたのに対して、連合が名前だけの統一といってもいいような脆い体制であったことも、この苦戦に一役買った。何せ無理くり統一を進めたがために端はユダに身売りする元国家まで出てきたのである。

戦争当初ユダはL1という地球と月との間のラグランジュポイントにあった連合の拠点を奪取し、空からの地球攻撃を進めた。が、連合は圧倒的な数の力で軌道エレベーターと呼ばれる地上から宇宙まで伸びた塔を中心として宇宙への進出を開始、L1ポイントは連合の手に戻る。

そこにいたって両軍は手酷いダメージを負っており、連合は余力はあるものの無理な統治の上での戦争で内部崩壊一步前であったし、ユダはユダで地球にいる組織が身動きを取れなくなれば月での生活が立ち行かなくなる（月都市といっても、出来て間もないものであり、人の生活には絶えず地球からの物資の輸入が必要であったのだ）ために休戦の頃合を見計らっていた。

両者の希望が偶然交差する形で、十五年ほど前からは実質的な休戦状態であった両軍は、今年中に正式な休戦協定を結ぶと、ヨセフはネット・ニュースで昨日も聞いていた。

「らしいけど。でもそんなのどう転ぶかわかんないよ。まだ互いに嫌悪し合ってる人たちはいるみたいだし、連合だつてここ十五年で上手く内側のこたごたを収めてるって話も聞いた事がある。今更正式に休戦つても変な話さ」

言いながら、ヨセフの脳裏にはちらりと過去の記憶が想起されていた。赤熱する艦内、くずれ行く客室ブロック……

（いけないな）

軽く目を閉じて、それらの妄想じみた記憶の再生をヨセフは追い出した。

目を開けてアラムのほうを向くと、彼女はほんの少々ながら不安

げにこちらを見つめていた。

「大丈夫かな」

「大丈夫さ。今回だって、L1の連合の軍隊がよく分からないまま何か動き出してるってただだよ、そうニュースで言ってた」

言いながら、ヨセフは愛想笑いもしていない自分に気が付いていた。ヨセフやアラムといった十台の子供たちは月で生まれた第一世代の子供であり、また三次大戦以降の地球圏では非常に珍しく戦乱の経験をほとんどたない者達である。ユダと連合が実質休戦状態になって十五年であるのだから、記憶がまだほとんどないような幼年期にしか大きな戦争のなかった世代であるのだ。

そのためか、年上の者に比べて、ヨセフたちは『統一国家』と『国家群』、ユダと連合の対立、といった図に、そこまでの入れ込みはないことが多い。大人たちが目の色を変えて政治的、外交的な問題に取り組む姿は、何かこう、ピンとこないのだ。

それでも、両陣営のきな臭い緊張状態というものはヨセフもしっかりと感じていた。大丈夫、だって？ どこからそんな言葉が出て来るんだか……。

ヨセフはすぐに、友人に対して責任のない言葉をかけてしまったことを後悔したが、そのことをわびる前に、アラムはくすりと笑って言葉を返してきた。

「うん、そうだね。有難う」  
見透かされているな。

ヨセフはそう感じた。自分がアラムを何とか安心させようと軽率な言葉を吐いたと後悔するそれを、分かっているのだ。彼女は時に非常に聡いのである。

と、俄かに搭乗窓口の方が慌しくなった。振り返って見てみるとどうやらシャトルが着いたようだった。残念ながらまだヨセフたちが乗る便ではない。

人の群れが、狭くはないもののそれほど広大というわけでもないロビーを移動する。どうやら無重力に慣れていない者もいるらしく



（恐らくは軍人でも研究員でもなく、宇宙に不慣れな月の政府高官だろう）、人の数以上に騒がしさが広がっている。

「おっと」

目の前をぐるぐると回りながら搭乗口のほうに飛んでいく、哀れな中年男性を避けるために身を引く。近くにいるアラムの手を引いて一緒に避けることも忘れない。

「お、わわ、誰か！」

そう呻いて、人々の中に駆け足以上の速度で突っ込むものの誰も手を差し出そうとはしていない。何せ危険である。

しかし、その男性が壁に激突することはなかった。ちょうどシャトル搭乗口からロビーに入ってきた（つまり今しがた着いたシャトルで月かどこからこの基地に来た）人影に真っ直ぐ向かっていたからである。

「危ない！」

その人影をあまり確認しないままに、ヨセフは叫んでいた。登場口の向こうは即宇宙、なんてことはありえないが、二人がもつれ合つてエアロックの扉にでもぶつかったら事である。エアロックは頑丈だが、人体は人二人分の質量がある程度加速するだけで非常に危険な状態に陥ってしまう。つまりは、そんなに堅牢なものではないのだ。

付け加えるならば、このとき搭乗口に立っていたのは少女だったのだ。

一瞬少女は目を見開いて驚愕したが、すぐに事態を把握したようだった。綺麗な形の瞳がきゅっとすばまったかと思うと、地面を蹴って自分から男性のほうに軽く跳んだ。

（ぶつかる！）

そう思いヨセフは一瞬目を閉じたが、少女は男性に接触する直前に手足をそれぞれ別別の方向に伸ばして、宙に浮いたままで巧みに姿勢を変化させる。すれすれでかわした後で、男の腕を掴み、もう一方の手を壁にそつと当てて制動をかける。

見事だった。OG運動はヨセフの通う学校でも一通り教えられ、また一部の生徒は部活動として積極的にその習得を目指していたが、少女のそれは今までに見た人々の動きの中でも一頭抜きん出ている。ゆっくりと床に降ろしてもらった男性は恐らく数十歳は年下の少女に気の毒なほどに頭を下げてから、シャトルに乗り込んでいった。それを軽く手を振って見送り、少女はくるとヨセフのほうを向くと、透き通った声音で声を投げかけた。

「ありがとう！ 助かったよ！」

洗濯された直後みたいな汚れのなさ。強烈な白色電灯を思わせる笑顔に、ヨセフも軽く笑って手を振ろうとして、ぱたりとその動きを止めた。

それと同時に、彼女も笑顔をきよとしたものへと変化させる。きっかり三秒。

いきなり、少女は先ほどの男性もかくやといった速度でヨセフの下へと、跳んだ。

\*

トーエは、静かにエア・ロックを抜けて歩いていたが、内心では様々な思考が立て続けに生起していた。つまり、少々焦っていた。

特別間に合わないような用事があるわけではない。予定通りの便で予定通りエフェソスに乗り込めたのだから、問題はない。

しかし、そういったことは別に、胸を締める微かな不安感が呼び水となって、焦燥感のようなものを心に与え続けていた。

軍部から与えられた命。それが主だった不安の原因だ。溜息をついて、トーエは顔を軽く伏せた。

ユダの軍隊、それに志願したのは、もう五年前になる。当時たったの十四で軍なんてものに身を置くときだって、こんな感じは味わわなかったのだが。

とある特別な家の娘として生まれたトーエは、自らの立場を十分

理解していたし、軍に入ることをご政府や家に薦められたときにも特に反抗はしなかった。自ら軍隊に入る理由が家や政府とは別に存在したからだ。

そうして半分だけ日常から外れた場所に立つようになって五年。

軍部は、月の表に設置した監視施設からの情報で、連合の宇宙軍に不穏な動きを察知、とある新型兵器のパイロット候補として機体テストをする予定であったトーエに、予定を繰り上げてここエフェソスでの試験の実施を命じたのだ。

（戦争、か）

きつと唇を引き締めて、トーエは顔を上げた、時には既に眼前の光景は一変していた。

「危ない！」

緊張感を多分に含んだその叫び声で、トーエは瞬時に神経を尖らせて事態を把握した。不幸な男性を捕まえてやって、シャトル搭乗口へと送ってやる。

そうしてロビーへと顔を向け、叫びの主に例を言つて手を振った後に、トーエは自分が手を振っている相手の顔に見覚えがあることに気がついた。

気化したガソリンに火がつくようにして、一瞬で記憶が引き出されると同時に、その記憶に押されて莫大な情動が濁流のように流れ込んでくる。

気が付けば、トーエはその彼に向かって跳んでいた。床を蹴つて加速、彼にぶつかつた勢いで片手を彼の首に回して抱擁し、もう一方の手で危うく激突しそだった壁材を押して減速する。

五年間！胸の内で祝福の鐘が鳴つたのだ、といつても許されるだろう。トーエは単純に歓喜していた。

「トーエ！ トーエだろう？」

驚きに満ちた声で、彼、ヨセフがそう声を上げた。

「ヨセフでしょう？ 一発で分かつたよ！」

こちらで質問で返して、トーエは腕の力を弱めて、間近からヨセフ

の顔を見つめた。随分と大人っぽくなったものの、どこか可愛らしく、大人しそうな顔立ちは変わってはいない。

「久しぶりだね……」

彼はしみじみとそう言った。

「ホントに、久しぶり！」

満面の笑みでそう答えるトーエに目をやりつつ、二人のすぐ近くでアラムは疑問符を大量に貼り付けた顔を晒していた。

\*

月都市ブリユタネイアーと、エフェソスとを結ぶ往復シャトルは通常の便に加えて現在は大量に臨時便が運行されている。燃料その他の資源を大量に消費するシャトルの運行は平時であればエフェソスの規模に対して少なめとも言える本数しかないのだが、軍と政府が地球の連合軍に不穏な動きを見て取ったことから民間人や閣僚などの退避のため、今日一日はこれでもかというほどの運行本数である。

当然シャトル運行を管轄する民間会社（半分は公的機関のような立ち居地ではあるが）の慌しさもいつもの比ではない。月側から基地に向かう人はあまりいないが、基地から帰ってくる人々や船の対応に職員は東奔西走していた。港はひっきりなしに出入りするシャトルや貨物船などでいつもそこにあるはずの落ち着きはすっかり消えてしまっている。

そのせいもあつたのだろう。窓口やゲートで搭乗者チェックを担当していたスタッフはどこことなく疲弊しており、仕事に欠ける熱意も低下していた。誰が責めることも出来ない。なにせ急な話である。それに、チェックが正常に行われていたとして、どうなったものではない。

ラバンが隠し持っていた凶器は全てが金属反応の出ない特殊なセラミックス製であつたし、彼自身の持つ身体能力の高さやしつかり

と詰め込まれている訓練の記憶はいかなシステムとも言えども感知できない。

仕方が無いのだ。

ラバンはシャトルの窓から外を眺めつつ、嘆息した。そう思わなければやっていられないではないか。

軍の上官はいつも憎たらしいが、その軍に要望を出してくる政府の人間たちは憎憎しさを通り越して呆れてしまうものだ。たとえ馬鹿みたいな任が下ったとして、そこでふざけるなと怒鳴る事を許されていない身では、仕方が無い、と誰にともなく呟くほかない。

地球に帰りたい。

数年前に月に入り込んで、そう思わなかった日などない。自分は使命感に燃えているわけでもなければ、『統一国か個々の国家か』などという思想の対立にも興味はない。

仕事なのだ。この仕事のおかげで祖父も母も悠々自適の生活が送れるのだ。文句を言うものではない。

「どうされたのですか？ 顔色が優れませんが」

そう声をかけられて横を向くと、隣の席に座った青年が微笑んで座っている。

「ああ、大丈夫ですよ」

「軍の方が何かですか？ こんなときにあっちにわざわざ向かうなんて」

「ええ、そうです」

君が考えてる軍隊とは逆なんだけれどな。

そう思いつつ、すぐ自分の脇の通路を乗務員が通り過ぎて前のほうにある操縦席へと向かうのに気が付き、立ち上がる。

「トイレですか？」

そういつて通路側の席である青年が立ち上がりどいてくれる。

軽く礼を言ってから、ラバンは乗務員を追って操縦席へと向かった。

乗務員が扉のロックを解除して開いたタイミングに合わせて、ラ

バンは乗務員の首根っこを捕まえて真後ろに放り投げた。無重力の神秘を体現しつつ客席の中央を機体後部に向かって飛んでいく乗務員を視界の端に捉えてから、操縦席に入り込んで扉を閉める。

驚いて振り向くパイロット二人に向かってラバンは腰から獲物を抜いた。

全く、仕方が無い。

そう思っておけば、少なくとも不幸にはならないのだ。ラバンは一人でそう納得していた。

\*

闖入侵入介入、今日はそういったことが頻繁に起こる。

軽く身体を浮かせてアラムは溜息をついた。月を離れて、初めての宇宙基地への旅行、それもよりによってヨセフと二人きりだったのだ。それが『政治的判断』という厄介な代物で妨害を受け、それに納得したとたん今度はヨセフの旧友を名乗る人間が現れた。

自販機からヨセフが紅茶を取って手渡してくる。軽く礼を言ってからストローに口をつけて、横目にちらりとその人を窺う。

目に付くのは、小柄な体躯と長い毛髪、だろうか。先ほどの見事な動きとは裏腹に、その体格は元々華奢なアラムより更に一回り小さく見える。皮膚の色は漂白剤に漬け込まれたように白く、しかし血色は不思議と良い。

色素のこれまたうつすい髪の毛は腰辺りまで伸びきっており、癖がなく、新品のタオルかシーツのようである。そしてその根元……要は頭だが、整った顔面に自信に満ちた猫か、或いは人の三倍の知能を持ったカラスみたいな造作の目鼻がついている。まとめて、一般的な表現にするならば少しだけ気の強そうな、やや幼い美人だ。

その少女、トーエは今は屈託の皆無な笑いを浮かべてヨセフが放り投げた果汁ジュースのボトルをキャッチしていた。

搭乗口ビー手前の小部屋、本来軍関係の人間や要人が待機するた

めの部屋で、ヨセフとアラム、それにトーエは落ち着いていた。ヨセフと再会したトーエが職員に掛け合つてこの部屋を用意してくれたらしい。

「びっくりしたな。トーエが軍にいたなんて」

複雑な笑いと共に、ヨセフがそう切り出した。

「あはは。まあ、言つてなかったしね」

それに対してトーエはややバツが悪そうに視線を落として答えた。

「五年ぶりか」

「五年ぶりだね」

五年ぶりらしい。ここに来る途中ざつとした事情はアラムもヨセフから聞いていた。何でも自分と会う前まで月での親しい仲の友人だったらしい。アラムがヨセフと学校で出会ったのが二年前であるから、ひどく古い友人なのだろう。

二人はしばらく談笑していたが、やがてヨセフがその表情のトーンを落としてから、低く尋ねた。

「……なんで、急にどこか　軍、か。軍へ？」

その声にはどこか、哀愁というべきか、未だ十台終盤でしかない少年には似つかわしくない仄暗さがあつた。

それを聞いて、トーエは一瞬複雑な表情を見せた。悪夢から覚めた瞬間のような、シヨックと不安のないまぜになつたような……。

「ああ、いや、違う。その、責めてるわけじゃない」

ヨセフが言葉を足す。トーエはすぐに笑顔を取り戻して、部屋の一面に取り付けられた大窓から港に出入りするシャトルや特殊な船舶などを見つめながら答えた。

「ごめん。私も、後で少しだけ後悔したよ」

「急にいなくなつてさ、捜したんだ。だけど、何だか見つからなくて……軍関係だったら仕方ないか」

「ちゃんと話してから行きたいと思つたんだけど、その」

そこで一旦言葉を切つて、トーエはアラムの方を少しだけ確認すると、後を続ける。

「あの時は、色々ヨセフも、ね」

それで伝わったらしい。今度は若干ヨセフのほうに苦い笑みを浮かべた。

「そうだった」

そうして二人で軽く笑いあう。その様子を眺めて、そこから言い知れぬ信頼感を感じたアラムは、複雑な思いが心中に来訪してくるのを感じていた。

「でもヨセフは何だか大人になったね。それに、さっぱりしてて、昔より良い感じかも」

「そうかい？」

「うん。良い知り合いのおかげかも、ね」

くるりとトーエがアラムのほうへと身体を回転させた。

「アラム、さん？」

「え？ あ、はい」

「宜しく」

「え、ええ。こちらこそ」

軽く握手を交わす。卵白を固めて作ったと言われたら信じてしまいそうなほどに、トーエの手の平の感触は不思議なものだった。軽く淡く、実感に乏しい。

「ついでにもう一つ宜しく、と言ったら、分かるかな？」

ちよっとしたいたずらを考え付いたような目つきでヨセフのほうに視線を送りつつ、トーエはアラムに問いかけた。

一瞬間、アラムは思案してから、その意味に気が付いた。

「お仕事が大変だから、ってことですね」

「そ」

短く応答して、息を吐き出す。再び窓のほうへと向き直って後を続ける。

「もうあと一時間もしたら、次の仕事に行かなきゃならないらしいし、その後もしばらく月には戻れないだろうし。せつかく会えたのに、残念無念、また来週、どころじゃないのがこれまた残念！」



ようは、自分が軍と共に東に西にと忙しいから、ヨセフを頼む、と言うことだった。ただし、ヨセフがそんな頼りない人物性を備えているとはアラムには思えなかったが。

「あ、あれ！」

突然、トーエが窓の外を指差した。

ヨセフとアラムの二人が近寄って指し示す先を見ると、民間シャトルの発着場の隣、特殊な貨物船などが停泊するスペースに、見慣れぬ形の機械が入っていた。全長十五メートルほどの、旧世紀のジェット戦闘機と宇宙用のごちゃごちゃした戦闘艦を掛け合わせたような形状で、今は鼻先を小型の輸送船らしき船に牽引されてゆったりと港の一角に落ち着きつつある。

更にそのすぐ後方からは同じような外観の物体がこれまた同じ型の輸送船に引つ張られていた。

「あれは……なんだい？ 戦闘機みたいだけど……」

ヨセフが呟いた。

「あれに、これから乗るんだ。試験、つてやつ？」

軽くトーエは言ってみせた。ヨセフが僅かに瞼の開きを大きくして、驚く。

「乗るつて、それは」

「新型の機動兵器なんだつて。もう一部のメディアには情報も開示してるんだけど、報道は来月あたりまでされないからここで見られてラッキーかもね」

「いや、そうじゃなくてさ」

やや取り乱していた。ヨセフにしては珍しく、慌てて先を続ける。

「乗る、つて、パイロットつてことだろ？ その、大丈夫なのかな、あれ、兵器だろ？」

「だから、試験だつて。テストパイロット。べつに敵とドンパチやるわけじゃないよ」

「敵……」

敵。てき。

何度かそれを口の中で反芻して、アラムもヨセフも奇妙な思いにとらわれた。

敵や見方だなんて、そんな言葉はハイスクールの運動競技や何かでしか使わない言葉が、巨大な兵器を前にしてやけに生々しい。

「すつかり、軍人さんなんだね」

しばらくの間を空けて、ヨセフがようやくそう切り返すと、トーエはほんのりと表情の中に冷えた色を混じらせた。

「そうだね」

「なんだか、分からないな。久しぶりに出会った親友が、いきなり軍籍だったのは……奇妙だ」

それについてはアラムにも十分感じられた。が、実感としては乏しいともいえる。よく知っていたはずの人間が、そういった特殊な場所に行ってしまったというのは、どういった気分なのだろうか……。

三人の間には、いつの間にか中途半端な温度の空気が横たわっていた。特にアラムにとっては、話の核となっているトーエは他人同然である。同じく全くの他人である軍隊の話も合わさって、わけが分からないと言ってもいい。

無重力のむずがゆさを感じて、アラムは身を震わせた。なんだろうか、これは。

「……ごめんね」

そういつてトーエはヨセフから顔を背けた。何かそこに深い洞察が無ければいけないような感じがして、アラムは戸惑った。

「いや、ただ心配だったというのもあるんだ、その……よく分からないだけさ」

やや気まずさと照れのようなものの混じったヨセフの言葉に、数秒の間トーエは何も反応しなかった。が、その直後、またというべきか、いきなりヨセフに抱擁した。

抱擁した？

アラムは頭の中でエラーメッセージが高速で大量に流れるのを自

覚した。今時の軍人さんはスキンシップを大切にすぎる傾向があるのかな、などと馬鹿な想像をかき消して頭を振る。

「うわ、わ」

ヨセフ自身も、驚きを声で示していた。

「いやーあはははは！　なんともまあ、変ってないねー、ヨセフは。愛い奴だよ！」

いきなり出会ったときのような快活な笑みを浮かべて、笑いながらそう言う。ひとしきり笑った後でヨセフを解放するついでに頭をわしわしと撫で回しまでしてから、トーエはジュースを飲み干して部屋の隅のダストボックスに放り込んだ。

「変ってないのは、やっぱりそっちもだよ」

やや赤面した顔を手で覆って隠しつつヨセフも答える。

それからしばらく落ち着くのを待ってから、出入り口の扉を背にしてトーエが改まった雰囲気で姿勢を正した。

「それじゃあ、そろそろ私は行くね」

「ああ、そんな時間か……」

残念そうにヨセフは肩を落とした。それから胸元のポケットからペンを取り出して、同じくポケットから出した小さなメモに何かを書いて手渡す。

「それ、今住んでるところの連絡先。なにかあったら、メールでもいれてくれれば読むから」

「ん。分かった」

大事そうにそれを折りたたんで、トーエは扉を開いた。

「また、近いうちにでも三人で！」

元気にそう言い残して、思い切りよく外へと出て行く。素早い小動物のようにすると通路を進んで、視界から消えた。

「何だか、大変な人だね」

アラムにしてみればそれは率直な感想でしかなかった。トルネードのように威勢よく駆け抜けて、後にはやや困惑中の自らが取り残されているのみ、だ。

しかし、それに対してヨセフはほんのりと、深みのある笑顔である。

「そうだね。大変な人だ……」

その声音に特殊な感情と大量の安堵と喜びが含まれていると見て取って、アラムは嘆息しなければならなかった。

また一つ、ヨセフの鈍さ以外に『懸案事項』が増えたわけである。

\*

レーダーが捉えきれぬぎりぎりの範囲で、一隻のシャトルらしき影がその軌道を不自然に変えた。それによって、カナンは安堵の息を吐いた。

窮屈なシート、圧迫感だけが詰め込まれたコクピットは、宇宙空間に在るのだという意識と合わさって最高の閉塞感を演出してくれる。カナンはそういった特殊な環境に対して迅速に対応可能な、ある種の才覚を認められたからこそその場に座っているのだが、それでもそこが快適であるはずが無い。

形のいい眉を少しだけゆがめて、神経を尖らせ続けることに集中する。

作戦は、極めて単純な物だ。カナンの直接の上司であるベニヤミンが作戦司令官に三度も問い合わせをしていたほどに、だ。

要するに、強奪と、破壊工作、である。

月側の小型基地エフェソスは彼ら月の民の防衛拠点の一つであると同時に、研究所であり観測所であり、機密と軍事力の巢窟である。先の宇宙戦争ではこういった基地の存在こそが連合の宇宙部隊を最も苦しめたとされる。宇宙進出はユダのほうが一歩早く、こういった基地の数もその質も勝っているというのがつい最近までの一般的な認識である。

しかし、今では連合の宇宙関連技術も捨てたものではなくなくなってきている。強気になった連合が、無茶な作戦を立てる理由の一つで

あつた。

エフェソスでの新兵器の実験、という情報が入ったのは、一月ほど以前のことである。

その情報によればそれは革新的な技術と思想の集合体であり、月側にとつて最重要事項の一つという話だった。

いずれユダと決着をつけなければならぬとすれば、基地に集合した戦力は厄介であるし、ようやく縮まった技術的な距離をまた話される前に手を打つべきである、と考える政治家に賛同するものは多かった。

そういった状況の中、数々の偶然が、今回の作戦を実現可能と推し量る物へ仕立て上げた。

月に潜伏する協力者、十数年間の平和による緩み、実験空域が月でなくエフェソス周辺であること、そしてカナンが、自分が存在したこと。

それら全てがカナンをこのパイロット・シートへと向かわせたのだ。

「あと少し……」

我知らず声が出る。最後に月の協力者が送ってきた予定まで、僅かしかない。

緊張感が稲妻のように体内で荒れ狂っていた。

カナンは特殊な兵士である。もう少しいうならカナンの所属する部隊も、カナンを擁するだけに特殊である。それはカナンが年端も行かぬ少女であることから、またたつた一機で最初に仕掛けなければならぬと言ふ事実からも明らかである。

カナンは自身の特殊性についても熟知していた。だがそれで緊張や恐怖が消えるわけでもない。

ユダは旧世紀とは比べ物にならない、革新的なレーダー技術を所持している。地球の人々に『天網』と恐れられるそれは、どれほど高度にステルス処理された機体をも見つけ出し、またその有効範囲は常識はずれ、今までのレーダー対偽装のパワーバランスを見事に

打ち崩す存在であつた。その性能は地球の科学者が大声で非常識と叫び嘆くほどであり、ユダの高い技術程度の中でも特別視されていた。

そういった感知システムをすり抜ける方法は、ほとんど存在し得ない。それ故に超長距離ミサイルや遠距離からの攻撃が極めて効果を発揮しにくいために、戦争の手法まで変化してきているのだ。

しかし、全能というわけでもない。なにせ、人間の管理による物である。

無論コンピュータ制御は抜かりないだろうが、人の介在しないシステムは人の戦争には用いられない。

月の表側で連合の艦隊が上手く不審行動をとったことで、今月と月基地の慌しさは平時の比ではないし、だからこそその奇襲作戦だった。

「大丈夫かな」

コクピットの側面につけられたスピーカーから声が発せられる。ベニヤミンだった。外見通りに優しく温和な声である。

とたんに、戦闘を前にしているのとは別に大きな緊張に身体を固めて、カナンはやや高めの声で答えた。

「はい、いつでも行けます」

通信は、敵に気づかれなかったためにカナンの乗っている小型機とベニヤミンの母艦との接触面を通じたアナログな音声通話である。厚い壁の向こう側でベニヤミンは苦笑したような吐息を洩らした。

「恐ろしかったら、今からでもいい。私が変わるが」

そういいかけたベニヤミンをカナンは制した。

「いいえ、大丈夫です」

それは端的に、彼に見つとも無い姿を晒さない為の返答だった。

「そうか……無事を祈るよ。それと、地球のお偉方を呪うことにする」

「そうしてください」

ベニヤミンのジョークに答えて、二人で軽く笑いあう。

軌道を変えたシャトルが基地へと突撃する。その後の混乱に乗じて基地内部では監視システムの破壊が行われ、そこにカナンが攻撃をかける。それに続いて母艦から一般の兵が乗る機動兵器が出撃し、新型をカナンが奪取した後に撤退戦に持ち込む。

全てにおいてカナンはキーポイントであり、危険さに振り回されなければならない。

軍の抱える特殊な機関（カナンの生まれた組織でもあるのだが）は、新型奪取についてカナンが搭乗することを強く勧めた。多くの軍人や政治家は眉をひそめたが、この特殊機関は前の戦争から連合を支える、いわば切り札のような物であり、軍のトップ達はその要望を無視し得なかった。

殺されることも、殺すことも、生き残ることも、生き続けることも、多分に億劫な話である。

カナンはそう思っていたが、同時に今この瞬間であつてもそれなりに幸福だと判じていた。

不幸と幸福の間を往復し続け、人の悪意に押し流され続けようとも、人類は幸福でありえる。それがカナンの信念の一部だった。

自らがおかしな生まれであつたとしても、構わないのだ。

人の歴史は、輝きに満ちている。

「いつてきます」

夕飯までには帰って来いとは、さすがに誰も言わなかったが、軍において規律も何もあつたものじゃないこのアットホームな言葉に、しつかりベニヤミンは応えてきた。

「いつてらっしゃい。無事でな」

母艦から、機体が切り離される。カナンは慣れた手つきでコントロールグリップを握り、スラスターを使って加速をかけた。

遠くに光が見える。星でも人口のものでもない明かり。

エフェソスの崩れる光だった。

しばらく窓の外を見つめていて、自分の頭がおかしくなったのかと疑った。一般用のシャトルが、見慣れた光景として港に減速しつつ入り込むことを止めてしまっている。明らかに拳動のおかしい一機が、凄まじい速度で港に差しかかっていた。

その直後のことだった。ヨセフはアラムの肩を持ち引き寄せて、真後ろに跳んだ。なにやらアラムは「え、ええ!？」などと慌てながら何故か赤面までしていたが、構わずそのまま扉をくぐって優雅な部屋を出る。

激震が走った。

ヨセフは地球についての学問に積極的であり、地表において過去には大きな災害とされていた『地震』というものを一瞬思い浮かべたが、今の振動たるや恐らくどんな地震も敵わないのではないか。

何より重力を持った地面が無い。

跳ね上がった床に飛ばされたヨセフはアラムを自分の身体で包んで保護した。天井に背中をしたたかに打ち付けて、悶絶する。死ぬかも、と心のどこかが涙混じりにそういつていた。

現実には盛大に背骨はきしんだが、それだけである。無理矢理息を吐き出して呼吸を整えてから、ヨセフはアラムを離れた。

「わ、よ、ヨセフ!」

素っ頓狂な声を上げる。ヨセフは痛みをこらえつつ苦笑、しつつ、尋ねた。

「怪我は?」

「ない、けど、ヨセフは大丈夫なの?」

「心配ないよ」

見回してみると、当たり前だが騒然としている。通路の奥、搭乗口ビー側を見ると、ほんの数分前まで無機質なゲートがあった場所に、なにやら白い金属の塊のような物が見えていた。辺りの壁をひしやげさせているそれがシャトルの鼻先であるときがついて、ヨセフは身震いした。



（何てことだ）

どうやら自分は何一つ見間違つてなどいなかったらしい。シャトルが港からそのまま基地に突っ込んできたのだ。

民間用の輸送シャトルは、せいぜい大型の物でも十メートル二十メートルといった程度の物が多く、質量的に言つてそれほど物ではない。しかし、宇宙基地などというものは真空中に浮かぶ、人にとっては常時危険な場所である。シャトルが突っ込むだけであつても、どんな被害の広がり方をするものか分かつたものではなかつた。

「一体何が起つたの？」

「シャトルが壁を突き破つたんだ……激突したらしい」

「事故？」

「いや、あれは」

多分、人為的な何か。

窓からの風景を思い返して、ヨセフはそう結論していた。

登場口のほうを見ると、幸い大穴が開いて空気が一瞬にして、ななてことはないようである。どうやら、シャトルが港の内側に入つた後に、港の最も外側、普段船が入ったり出たりしている宇宙と基地の境目辺りの大型の隔壁が閉じられたらしい。ロビーにいた人間の何人かが狂乱する人々を押しつけてシャトルの先と破れた壁の間の隙間に入り込もうとしていた。

（脱出艇か）

ヨセフは気が付いた。港には常時数隻の脱出用の船があるし、壁には緊急用の小型ポッドも取り付けられている。

「まだ基地がどうなるか分からないけど……」

ヨセフたちは通路にいた分、シャトルの衝突で怪我を負うようなことも無かつたが、その分出遅れたとも言えた。

「行こう」

一か八か、そうなつてしまふかもしれないが、無事に月に帰るためには自分も脱出へと向かつたほうがいい。そう考えて、ヨセフはアラムの手をとつた。

「そんな、脱出するほどの損傷なのかな？」

最もな疑問だった。他に専門家でもいるなら、ヨセフ自身問い詰めていただろう。

「分からない……けど、このまま震えて基地内にいるよりは安全な気がするよ」

「そう……だね」

俯き答えるそのアラムの顔は、やや青ざめていた。指先が微かに震えている。

普段は大人しいかわりに、滅多な事では動じない性格だとヨセフはアラムについて何となしに思っていたが、さすがに状況が状況である。

ヨセフ自身は、実を言えば自覚のあるヘタレであるのだが、平時よりそれを気づかせないよう振舞う癖（言ってみれば格好つけだ）があり、さらに先ほどの奇妙な再会が現実感を薄めていたこともあって自分で驚くほどに冷静だった。

ロビーを抜けるために、床を蹴る。

「あ」

アラムが声を上げた。

一体何かと彼女の視線を追うと、ひどく嫌な物が目に飛び込んでくる。いや、物と言ってもよいのか、判別つかないが。

「見ないほうがいい」

そう言つてアラムの目を覆いつつも、ヨセフはだれか僕の目を隠して手を引いてくれと願った。

ロビーに浮かんでいるのは、何も壁の破片だけではない。考えればすぐに分かるのだが。

狂奔する人々に反応を示さず、ただ漂っている、それ。

死体は、当然幾つも出来上がっていた。多くはシャトルや壁に強くぶつかったものだろう、それほどひどい有様ではないが、中には凄惨な有様のものもある。シャトルと床の間からも黒っぽい何かが見えていた。

息が荒くなったヨセフの手を、アラムが強く握ってくる。安心は出来なかったが、それでも正しい呼吸の仕方程度は取り戻すことが出来た。

（何なんだ！ 一体……）

生々しい感覚が、肋骨をすり抜けて体内に入り込む。奇妙な感触に襲われて、ヨセフは心中で悲鳴を上げていた。アラムがいなければ盛大に取り乱していたかもしれないかった。

気を取り直して、シャトルへと急ぐ。搭乗ゲートは五つほど存在したが、そのうち四つはシャトルの激突によって大破している。最後の一つに駆け込む前に、ヨセフは壁際の緊急用のロッカーに近づき、乱暴に開いて中身を取り出した。

「それは？」

「宇宙服だよ。最悪、必要になるかもしれないだろ」

すでにいくつも持ち去られていたが、何とか二着分確保して、一つをアラムに渡す。

まだ人類が地球の低軌道にステーションを建設して無邪気に喜んでいた頃には分厚く、まるで鎧のようであった宇宙服だが、度重なる技術革新によってその扱いやすさは格段に向上していた。冬物の服程度の薄さで強い強度を持ち、取り扱いにさして専門知識を要求しない。それがこの時代の一般的な宇宙服であった。

腹が大きく開いたそれに強引に足や腕を入れて、首元までの開閉部分を閉じる。首元にあるボタンを押して余分な空気をぬき、身体にフィットさせてから、ヨセフは重ね着の不快感に顔をしかめた。本来は薄いシャツや専用の下着の上から着る物だが、そうも言っていられない。

アラムを確認すると、彼女も着終わったようだった。ヘルメットを片手に持って、搭乗ゲートをくぐる。

（正解だったかな）

慌てて閉じられた隔壁は、一部が損傷しているらしかった。微かな音と共に風が吹いている。空気漏れだった。

それはシャトルに群がっている人々も分かっているのだろう。一層焦りを重ねて、いくつもの大声が辺りに響いていた。

シャトルは、簡単に言ってしまうえば二等辺三角形のような形だった。旧世紀のスペースシャトルから外観だけならそれほど変化していない。

ヨセフはその外壁に開いている扉に軽く床を蹴って近づいた。

「すみません！ 乗せてください！」

大声を上げて、扉に手をかける。中は大勢の人間で混沌としているようだった。座席以外の場所、通路や荷物置き場にまで人が浮かんでいる。

扉の近くにいたやや太り気味のスーツ姿の男が怒鳴る。

「もうこれ以上乗れるかよ！ パイロットだって乗せるなって言ってるんだ！」

「そんな」

無茶苦茶な、と言おうとしたが、ヨセフは通路の奥やコクピットから発せられる刺々しい視線に射抜かれて、口を噤んだ。どうやら出遅れたところかロビーの生き残りはあらかたこのシャトルに乗り込んで、自分たちは最後だったらしい。

舌打ちする。

「他の脱出艇は？」

「そんなもんがあったら俺が乗りたいね！」

そう言つて、男がヨセフの身体を振り払うように迫ってきた。それ avoidance しようとした瞬間、轟音が響き渡った。

シャトルの激突に比べれば小さな物だが、明らかに爆発音と分かる。

（何が起こってるって言うんだ！）

アラムの手を離さないように気をつけながら、体制を整える。振り返ると、アラムが不安げな表情を向けてきた。

（そりゃ、そうだよな……こんな状況じゃ、どうしようもなく不安なわけだ）

息を吐くと、ヨセフは決断した。

強めの視線を送れるよう意識して表情を硬く、鋭くしてからスーツ男のほうを向く。

「じゃあこの娘だけでも乗せてやってください！ 僕はポッドを当たります！」

男はしばし考え込んでいたが、アラムを見て、頷いた。ヨセフの剣幕に押される形で交渉が成立する。

「そんな！ ヨセフ！」

珍しく激怒した声だ。アラムの声から抗議の色を感じ取りつつ、そう評する。

「それじゃ、ヨセフはどうするの！ 泳いで月に帰れるわけじゃないのに！」

「そうだけれどね」

ちらりとヨセフは港の壁を窺った。平坦な金属の表面に、いくつかの小さな扉が見える。

（まだ使えるのが残ってるといいけれど）

脱出用の小型ポッドは、大型船舶で言う救命ボートのようなものである。少数の人間が一時的に避難するためのもので、シャトルのように耐久性も無ければ宇宙空間を移動するためのスラスタ類もおざなりにしかついていない。基本的には宇宙を漂流してシャトルや大型船に回収してもらうのを待ったためのものである。

また港の壁に設置されているポッドの内、一体何機が無事に使えるものかわかったものでは無かった

無論、安全性は低く見積もらざるを得ない。

「大丈夫だよ。心配ない」

またも根拠のない言葉で場を締めくくろうとして、ヨセフは軽く笑った。だが今回ばかりはアラムも簡単に折れる気はないようであった。

「何言ってるの！ それなら私もポッドのほうに行くから」  
言いかけた言葉をさえぎって、ヨセフはアラムの手を引いた。肩に

負担をかけないように配慮しつつ、シャトル船内へとその足先をつける。

そうしてアラムが何か抗議の声をあげる前に、先ほどの男性に命じる。

「それじゃあ、よろしくお願いします！　急いで出発したいんですよ？」

タイミングのいいことに、その発言と時期をあわせてまたも振動が走った。

「あ、ああ」

「僕が港の隣のブロックに行ったら、出発してください。そうじゃなければ、空気の流れて押し出されてしまいますから」

男はすっかり最初の威勢を失って、素直にうなずいた。満足して、ヨセフは扉から手を離す。

「ヨセフ！」

アラムが叫びをあげる。心なしか、目元が赤く見える。

「気をつけて！」

「ばか！　それはこっちの言うことで」

船体を蹴って、離れる。空中で体の向きを変えて、ヨセフは今しがた出てきた登場ゲートから見て左の壁を指すことにした。背後でシャトルの扉が閉じる重たい音がする。

港はいくつかの区画に仕切られており、それぞれの区画は壁とエアロックによって仕切られている。つまり、隣に行ってしまうとシャトルが発進するために外に通じる隔壁を開いてしまっても、宇宙に放り出されずに済むというわけだ。

隣は恐らく軍事用の港になっているはずである。ヨセフはトーエと話しながら見ていた窓の外の光景を思い出しながら考えていた。

見たことの無い新兵器の置かれたエリア。そこに踏み込むことに多少の躊躇はあったが、緊急時である。まさかこんな時にまで軍人はいいち立ち入り禁止を叫んだりしないだろう。

楽観的にそう結論して、壁に近づいたとき、ヨセフは自らの目論

見が音を立てて崩れるのを感じた。

（何てことだ……）

壁の一部に、数メートル四方の穴が開いていた。無理やり爆破でもしたかのように穴の淵は変色し折れ曲がっている。

爆破？

思い返す。先ほどから数度大きな振動を感じていたが、何か関係しているだろうか。

何にしろ、これではシャトルが出港するときに発生する空気の流れに巻き込んでしまう。基地内の空気が真空の宇宙へと流れ出すその勢いは、決して侮っていいものではない。

「くそ」

毒づいて、穴に飛び込む。とにかく時間との戦いになることをヨセフは背中に迫る焦燥感から感じ取って、宇宙服のヘルメットをかぶった。

宇宙服には、背中の部分にビジネスバッグほどのケースがついており、中には十分な酸素と、無重力下で移動したり方向を転換したりするための噴射ノズル、その燃料などが圧縮されている。

今のヨセフにとっては生命線であったが、たとえそんなものを着ていても身一つで宇宙に放り出さればそこで味わうことになるであろう危険さは脱出ポッドの比ではない。

穴から抜け出して前方を見ると、トーエの話していたあの機体が目に付いた。全部で二機。それぞれが微妙に異なる形状と、まったく異なるカラーリングを持っていた。

そのうち一機は、各部に存在するセンサー類が光を放ち、そう、なんと言うべきか、稼動状態にあった。

（動く、のか？ まさか）

その威容に一瞬動きを止めて、見上げる。

優雅に機体の前方に伸びた、鼻先の部分が、何やら駆動音のようなものを立て始める。

いやな予感がして注視すると、どうやらその部分に取り付けられ

ているのは、何らかの射撃用の兵器らしかった。先端は開口しており、伸びた、と先に形容した箇所は砲身のようにも見える。

汗をたらす暇も、逃げる暇も、もちろん乗り込んでいるであろうパイロットに対して何らかの制止の声を上げる暇も無い。

それくらい唐突に、化け物が、火を噴いた。



## 2 回る炎の剣

### 2 回る炎の剣

視界が捉えた五つの光に、トーエは身震いした。

エフェソスからはまともな部隊が未だ発進していない。何度か通信を入れてみたが、敵の妨害も激しく、また宇宙から見てもわかるほどに、エフェソス内の混乱も激しい。

（やるしかない）

鼓舞する。自らが乗り込んでいる試作機『ソピステス』には十分な燃料も武装も積み込まれている。ほとんど実践用に整備されていたと言ってもいい。こんな状態でどんなテストをやるつもりだったのか、後で軍の研究員に問いただそう、とそう決めて、意識を切り替える。

パイロットシートに身体を沈ませて、軽く瞬きをする。意識を引き伸ばして、『自分が溶ける形』をイメージする。

機首、翼、推進器、レーダー、ミサイル、レールガン……乗りなれた自転車のように、それらが手足の延長、意識の延長となるように。

その広がった意識に、静電気のような刺激が走る。

瞬時に反応して、舵を切る。機体を真横に回転させて敵の一撃をかわずと、そのまま加速して敵とすれ違う。

シートの周りに広がる半球面のモニターに映った敵の姿は、どこか海洋生物に似ていた。軍で一通り受けた講義でトーエはその敵の機体についても習っていた。連合側が先の戦争からマイナーチェンジを繰り返しつつ使用し続けている、宇宙用の戦闘機だ。長く引き伸ばした鰓を持った魚のような形で、暗い宇宙を駆ける姿は不気味の一言に尽きる。

コントロール用のグリップを強く握り締めて、急制動をかけつつ

その場でターンする。強烈な視界の変化。敵の後方をとろうとして行った動作だったが、成功には至らなかった。

別の機体が横合いから接近してくる。

（やり辛い！）

悲鳴を上げる。宇宙での戦闘行為は、当たり前ながら全方位的なものにならざるを得ない。一対多という状況が、地上の何倍も不利に働いてしまうのだ。背にする壁はないし、あったとしても地面が無い。

それに加えて慣れない、たった数度の試運転とシミュレーションしか行っていない機体である。相手が連合のやや古い型の戦闘機であつても、まともな戦いを行うには公平さが欠けすぎていた。

ただし、救いが無いわけではない。ユダの造った機器のレーダー機能や、ジャミングの技術は、連合の比ではない。これについては軍部でも最高機密に配されているほどで、詳しい仕組みは知らないものの、連合の艦隊が超遠距離から強力な狙撃や支援射撃をしてこないのは安心できる場所である。

荷電粒子砲の類だろう、微かな光を横目で見て、回避する。

先にすれ違った一機と、その後に攻撃してきた一機。それに加えて斜め上方から接近してくる一機。唇を噛んで、機体の向きを微妙に調整する。いくつかモニタウィンドウを増やして、様々な方向の映像やデータをいくつもの「窓」に展開して、トーエは注意を凝らした。

見つけた！

残った二機を知覚して、歓喜する。先ほどの二機も、もう一度アタックをかけるにはまだ時間が足りないだろう。

全ての敵をロックオンして、トリガーに指をかける。

同時に、トーエからは直接見えないが、機体の中央、戦闘機で言うなら腹の部分に当たる位置の装甲が展開して、中からせり出すように先が尖った円筒形の物体が顔を出した。

ひゅっ、と息を吸い、引き絞る。

一斉に発射されたミサイルが、美しく複雑な曲線を描いて敵機に迫る。敵もこれを回避しようと急旋回と急加速を繰り返すが、後方から追いかけるミサイルはその挙動を後ろから見ることで、より短い距離を走って食らいつこうとする。

五機中二機は機体後部から小口径の自動式ガトリングガンに火を吹かせ、迎撃を行う。機体すれすれのところで爆発して消えるミサイルにトーエは表情を歪めたが、ややそれからおくれ他其三機がミサイルに撃ちぬかれる。

魚がその特徴的な鰓をばらばらの破片に変えて、中央から不自然にひしゃげて四散する。

人殺しの罪悪感よりも、淡い安堵とすぐに訪れる次の攻防に対する緊張が胸に広がった。それを自覚して、トーエはざらついた手で内臓を撫でられたような感覚に襲われた。

それでも、残りの二機を見据えて、操縦を続ける。

（やれる……！）

モニターの隅に映った小さな白い影。強襲されたエフェソスにいるはずの友人を思い浮かべて、無理矢理に気迫を込めた。

\*

長い、長い時間。引き伸ばし続けて半ば永劫にも感じれるほどに肥大化してしまった時間の中で、ヨセフは炎を見ていた。

揺らめく炎の動きさえも、緩慢だ。停止しているようにも見える。ヨセフは恐ろしさのしかかられて、まともに息もできずにいた。しかし引き伸ばされた時間は、呼吸の必要性も奪っていく。吸うことも吐くことも出来ずに、じつと、ただただ見続ける。

特に仲の良くも悪くも無かった両親。寡黙な兄。いつも不機嫌な妹。

それらがまとめて薪になってしまつ、その光景が、網膜を焦がし神経をバリバリと食い破ってくる。

心の中とは裏腹に、ヨセフは乾いた表情を動かさずにいた。ひりつく空気も無視して、じっとしている。

助けてくれ。

淡泊に、自らの一部分がそう呟いた。自覚して、嘆息する。自分は一体何を……

助けてくれ！

絶叫。しかし、ヨセフの大部分は冷めたままだった。叫びは大きくなり、炎が消えてやがて宇宙に放り出されて家族が消えて船がばらけて漂って一人で考えて思っていていきぐるしさでもがこうとしててあしがほしほしをバックにふりまわされてうちゅうふくのかんしょくがきもちわるくて

とーえのこえがしたようなきがした

「……！」

小さく声を上げて、ヨセフは瞼を開いた。

（瞼？）

目を閉じていたのだ、ということを知って、一気に現実へと呼び戻される。荒々しく鳴り響く心臓をなだめつつ、辺りを見回す。

「最低、だ」

ぼつりと洩らす。せつかく治まりかけた動悸が再び嫌なビートを刻んでしまうのを抑えられない。ヨセフは、宇宙空間にゴミの様にただ一人で浮かんでいた。

バックパックのスラスターを使って体の向きを変えると、エフェソスが見えた。ひどく離れてしまっている。

あの新型が機首につけられた何らかの兵器、恐らくは射撃系の何かを使って隔壁に大穴を開けて、その結果空気の急激な流れで押し出されてしまったのだろう。今も自分が慣性で流されていることに気づき、焦って停止しようとスラスターを吹かす。

少しの間試行錯誤して、やがて（恐らくだが）動きが止まる。宇

宙服の使い方については年に一度ほど学校や自治体の元で確認ための講習が行われるのだが、出席しておいてよかったと心からヨセフは安堵した。

しかし、止まったところでどうなるのか。それに気が付き、危機感が喉にせり上がってくる。心情が二転三転と忙しい日だ、と冗談を言う余裕も無かった。

宇宙服内の酸素は数時間分であるし、エフェソスにまで背中の中の小さなバックパックのスラスタールで行くことも難しい。月にいたっては、逆立ちしても無理だ。

何か、例えばエフェソスの破片がそれなりの速度でぶつかれば人体は簡単に再起不能になってしまうだろうし、場合によっては破片の仲間入りだ。救助を待つというのがもっとも苦勞が無く、一般的ではあるが、そもそも小さな人間一人をこの広い宙域から見つけるのは骨の折れることだろうし、それまで無事でいられる保証も無い。不安が骨の奥から身体に回ってくる。嫌に涼しいような気がして震える。

恐慌状態に陥る手前で、ヨセフは自分のこれ以上無いある種致命的な脆弱さを感じた。色々なものが、恐ろしい。

その恐怖に答えたかのように、突如視界が黒く染まる。星の輝きが見えなくなり、目を閉じたかと勘違いしてしまう。

「何が」

起こったんだ。二三度瞬きしてもその黒々とした光景は消えることが無い。その代わりに、落ち着いた視界はより鮮明にそれを映し出した。

どくん

緊張や恐怖ではない、根っここのところから異質な鼓動が耳を貫いた。

そいつは、港に置いてあった新型機そのものだった。壁を破った

やつかとも思ってたが、機体の色が違った。目の前に漂うそれは、濃緑でも濃紺でもない、漆黒に塗られていた。

息を呑む。機体はどうやら港に留まっていた、起動していなかったほうのものらしく、自分と同じ境遇で強制的な外出を迫られたのだろう。

四枚の大きな翼、複雑に大小の機関が詰まった胴体、そして前方に伸びる二本の長く角ばった物体。その巨体の中心部付近が目の前を通り過ぎる辺りで、コクピットらしきものを見つけて、慌ててヨセフは背中のスラスターを操作した。

機体はどうやらかなりゆっくりした速度で流れているらしい。何とか近づいて手をかける。

コクピットは、羽がついているほうを背中、その逆を腹、二本の突起の付け根を頭とするなら、腹と頭の間辺りに存在した。

それがコクピットではないかと判断できたのは、ハッチが開いていたからだ。

（元々開いたままで港に置いてあったって事か……）

そうであるならば、港の隔壁を壊してしまったあの機体もそうだったのだろうか。誰かがあれを強引に港から運び出した……。

（まさか、ね）

常識はずれもいいところだ。が、そもそも基地がシャトルによって損害を受けるのも、こうして宇宙を漂うことも、如何なる常識の範疇でもありえない。

もうヨセフにも分かっていた。不自然なシャトル事故、港の事、何か悪意が絡んでいる。自分のいるこの空間に、敵意が同居している。

危機感に後押しされるようにして、ハッチに手をかけてコクピット内を除く。

シートと、シートに取り付けられた小型の机のようなコンソール類、バイクのハンドルを複雑にしたようなグリップ、それくらいしか見当たらない。シートの後ろ側は平面の壁になっており、何かの

ファンや構造材がむき出しになっている。

それ以外の壁面は天球のように、ボールを二つに分けた片割れ、半球面を描いている。

（使える、か？）

十中八九、無理だろう。そう冷たく囁く理性を、兎に角何にでも縋らなければならぬという思考で上書きする。

「最悪、中に入って救助を待つだけでも」

通信装置が使えるば、更に生存率は高まる。だがそもそも試作段階の兵器は簡単に起動してくれるものなのか。燃料が無かったら、動力が未搭載だったら、諸々の疑いを頭を振って追い出し、中に入る。が、そこでまたもヨセフは目を見開いて驚いた。

少女。まだ十二、三だろうか。年端も行かぬ少女が、目を閉じてコクピットの隅に浮かんでいる。宇宙服のメットでよく見えないが、近づいてみても、それ以外何も分からなかった。

今度は幾分刺激の少ないものだったが、それでも意外性はシャトル激突と同程度だった。

「おい、君」

軽く肩に手をかけて、自分のメットを少女のものに押し当ててヨセフは声をかけた。空気がない空間でも、メットのバイザーを通して声の振動は伝わるのである。この時代の宇宙服用のメットは、そういったことも考慮して造られており、原始的な方法ではあるもの。かなりクリアに声を伝えることが出来る。

しかし、少女に反応はなかった。

（死んでるんじゃないだろうな）

心配になってくる。宇宙服に破れなどは見当たらなかったが、その内側で息をしていなくても不思議ではない。

だがじつと見つめていると、微かに頬や、瞼が動いているのが見て取れた。

（兎に角、何とか基地か月に連絡を……）

少女を引き寄せて上手く壁に寄せて座らせる。重力が無いので上手

く収まらないが、仕方が無い。  
シートに座る。

（どうしたものか）

コンソールパネルは、シンプルにまとまっており、それが兵器の、戦闘機のものだとは信じがたいものだった。

「自爆装置とか、無いよな」

冗談として言ったつもりだったが、口に出してから後悔する。自分が乗っているのは工事用の重機でもスーパーカーでもない、戦闘機なのだ。脱出装置のかわりに自爆装置がついていたっておかしくないのかもしれない。

つばを飲み込み、恐る恐る手をかける。コンソールは所々で淡い光を放っており、ヨセフは機体自体が完全に停止しているわけではなく、スタンバイのような状態にあると判断した。

（まずはハッチをどうにか閉じないと）

機密できれば、空気の節約になる。

集中して、コンソールを見つめる。『それらしい』ボタン類があるかどうか……。

数分ほどして、ようやくヨセフが決心しかけたときだった。開いたままのハッチから見える景色が一瞬光に包まれ、続いて振動が機体そのものを大きく揺らした。

心臓が握りつぶされたかと思うような恐怖を感じて、何が何だか分からずにヨセフはコンソールを操作していた。

意外なほどに軽い音がして、ハッチが閉じる。同時に辺りの風景が半球状の壁の部分、モニターに映し出された。

（攻撃された？）

先ほどの振動が直撃ではなく、単に近くを弾が掠めただけだと言える証拠がほしかった。

辺りを見回す。モニターに表示された宇宙空間は、基本的には目で直接見たものと同様であるが、極端に暗い部分や、危険な大きさの障害物などはやや明るく補正されたり、輪郭線の色付けされたり



して表示されていた。

更にその画面に、警告文がいくつか羅列される。素早く表示されていくためにヨセフはほとんど分からなかったが、「敵機」だとか「危険」だとか言う意味の単語が多く入っていることくらいは容易に感じ取れた。

モニターの宇宙を、いくつかの小さな影が高速で飛びまわっていた。

直感する。それらの影が救助隊やエフェソスからの脱出艇ではない、それがヨセフの不安な脳裏を焼いた。

自分が乗っているのは、民間シャトルではなく、軍事的な代物であるのだ。もし近くに『敵』がいるのだとしたら、無事に放っておいてくれるものなのか。

（敵？ 敵って何だよ？）

混乱した。敵というのは、味方と分かれて争う相手だ。

「戦争だつて言うのか！」

遅すぎる結論だ、と、冷静な脳の一部が囁いた。

そしてその叫びを裏付けに来たかのように、モニターがこちらに向かってくる三機ほどの小型の機体を映し出した。

勘違いであってくれ、通り過ぎるだけに、という願いも空しく、相手は一直線に接近してきている。三機のうち一機は港で見た、「あいつ」だった。その周りを二機の、鰐が伸びたか、頭から羽でも生えたような魚のフォルムの機体が護衛するように飛んでいる。

ヨセフはシートに体をうずめそうになった。僕は軍人じゃない、とその叫びを相手にどう伝えたらいいのか。

コンソールをいじってみるが、通信チャンネルからは雑音ばかりが聞こえた。戦時には大抵大規模な長距離攻撃を嫌ってユダも連合も相手の通信やレーダーなどを無効化するためにジャミングを行うのだという話を、学校で聞いたことがあった。数で劣るユダが戦時に何とか連合を退けていたのは大規模破壊兵器の使用を索敵機能の阻害で成功させたためだと。

それならば自分の乗っている機体は。ヨセフは自問した。

モニターに映っている敵だけではない。よく見れば、一定の範囲をかううじてレーザー機能がカバーしているようだった。だからこそ警告メッセージなど出たのだ。

しかしそんな謎解きは、後回しにしなければならなかった。

目の前の機体、敵機が、発砲したのである。

今度は確実に機体を掠めた。断言できる。

轟音と、衝撃。身体を揺さぶられることよりも、自身のおかれた状況に関する気配が、ヨセフの肝を冷やしきる。

ヨセフは自らがくだらない怖がりであるということを自覚していた。恐怖の気配に怯えて、自身の情動をどこか自分の奥のほうへと放り投げてしまって、表面上冷静な振りをする。先ほどのエフェソス内でもそうだった。アラムよりもよほど怖がっていたのは、自らである。

ヨセフは冷たい手をグリップにかけたまま、シートの上で自身の心が恐怖を拒否して、自身を手放そうとする感覚を覚えた。

自分が広がり、溶けていく。

明確な悪意の位置が、直接届いた。

ヨセフは悲鳴を上げた。

\*

おろおろと彷徨う敵機に軽く接触し、体勢を崩したその腹にレー・ガンを叩き込む。

爆散する前に離れて、索敵。すべてが順調である。

カナンはメットのバイザーを開いて、汗をぬぐった。こんなときには伸ばした髪が多少鬱陶しい。

月に潜入していた協力者、ラバンたちがエフェソスへの道を開け

てくれた。大した警戒網に引っかかることも無く基地の近くに侵入して、ラバンが新型を奪取、操縦して、内側からエフェソスの壁を打ち抜いて外に出てきたところを、ラバンと入れ替わりで新型に乗り込み、基地から遠ざかるうとした。そのときには、さすがに敵も展開し始めていた。

ユダの機体は、その多くが連合の魚のフォルムの一般戦闘機、『ウルゴス』と似たり寄ったりのものだった。ただしユダが使っている戦闘機のほうが多くの面で優れていることは否めない。これはそもそもウルゴスがユダの戦闘機のデッドコピーまがいの物であるからだった。

ユダの主力戦闘機『コリユーン』は無駄の無い流線型が美しい、どこかの芸術家がデザインしたロケットのようであった。そのつるつるとしたラインの装甲の下に、様々な兵器や動力を備えているのである。連合の機体は、これ一機に対して二機でかかることが望ましいと、カナンは教わっていた。ユダはこちら側から知ることの出来ない戦場の状況を、強烈な索敵システムで原理不明にジャミングを無視して察知していたりするのだ。

しかし、カナンは先ほどこから一人でコリユーン三機を撃墜していた。

（この機体は凄い）

事前に得ていた協力者からの情報と、実際乗ってみてのぶつつけ操縦だったが、期待は問題なく稼動した。単純なパワーもスピードもまた操作性や探知システム、武装とその補助システム、全ての面で正にスペシャルと呼ぶに相応しかった。カナンが乗りなれたウルゴスや、恐らくだが、コリユーンよりも格上である。

と、カナンはその視野の中に奇妙な影を認めて、機体に制動をかけた。

「あれは」

私の、といいかけて、思いなおした。エフェソスの破片やコリユーンの残骸が漂う空間に、小さくだが、はっきりと見える。それは、

今正にカナン自身が操縦している機体にひどく似ていた。

（港にならんでいた新型は三機。）

残りの二期のうちのどちらか、ということだろう。

映像を拡大してみると、なんと間の抜けたことに、ハッチが開きっぱなしで流されるままになっている。

出撃前の指令では、奪取したものの以外は可能ならば破壊を、とあった。港ではすぐにでも衛兵が駆けつけてきそうであったので爆破などは出来なかったが……。

カナンは、共に戦う二人の仲間に声をかけた。

「ラバン、マイヤー、私の前方に見える新型を破壊したのち、この空域を離脱する！ 敵の造園が来る前に母艦へ向かうぞ」

新型は極めて強い、特殊な通信機能も備えているようだった。ダメ元で行った通信だったが、どうやら届いているらしい。二機のウルゴスが自分の後方につくのを見て、カナンは感嘆した。

これほどまでに電波妨害を無理矢理にであっても無視できる機体は、見たことが無い。

それに何と言うべきか、華南は先ほどから奇妙な感覚に気がついていた。

機械的にモニターなどに表示される情報とは関係なく、もつと感覚的、原始的に、このコクピットに座っていると、周囲の状況が流れ込んでくるような気がするのだ。皮膚感覚といえは少しは伝わるだろうか。

（これが、上の言っていた……？）

秘密の多い新型。なにやら機体の形状を変化させる機能まで搭載されているようだったが、それについては制御方法が全く分からないので、カナンは手をつけていない。

もう一機の哀れな新型へと接近する。

しかし、後一步というところでカナンの意識が痛みにも似た危険を察知した。

進行方向に対して左上方から、立て続けに光が走る。瞬時に回避

するが、三機のフォーメーションは失われてしまう。

ばらけた三機の死角に入り込むように、敵が後方へと回っていく。

「マイヤー！」

警句に答えて、マイヤー機が方向を変える。ぎりぎりのところで、その位置をまたも光が通り抜ける。

「カナン！」

声を上げたのは、ラバンだった。ラバン機には特別な通信装置など無いはずだったが、カナンはそれを聞いていた。

（任せるということか）

機体の動きと合わせて瞬時に理解する。

ラバンにマイヤーが追従し、敵へと向かっていく。その敵の姿を見て、カナンは目を細めた。

「三機目」

新型三台が全て勢ぞろいというわけだ。

微かに後悔する。今ここで戦闘に参加しているということは、敵は少なくとも一機、パイロットが乗り込みエフェソスからの出撃に成功したということだろう。もっと迅速に奪取に向かえば、破壊も容易だったのだが。

ぼやいても始まらない。

焦点を正面、漂う哀れな方の新型へ。

「堕ちろ」

深く静かに、トリガーを絞った。

\*

六機目を撃墜して、疲労と焦りでトーエは背中を焼かれていた。ようやく友軍も出てきたが、その数も少なく、また何故か性能で劣っているはずの敵に苦戦を強いられている。

いつまで保つかかわからない。

残壇に注意しつつ、敵の気配を背後に捉えて、宙返りする。目ま

ぐるしく視界が移り変わるその最中に、ほとんど目に頼らずにタイミングだけで攻撃する。

レールガンをその身に受けて、二機のウルゴスが砕け散る。

その爆発の向こうに、自分の機体とほぼ同型の機体を見つけて、驚愕する。

（何で、あれが！）

ユダ内での機密である機体が、そこで動いている。この機体のテストパイロットに自分以外の名前を見たことは無い。

（まさか……）

遠く離れたL1での不審な連合艦の動き、シャトル事故、タイミン  
グを合わせたの攻撃。シャトルとこの攻撃の関連は考えずとも結び  
つけるのが当たり前だったが、L1での動きが陽動だとすれば、そ  
れはつまり、今回の事を起こすための陽動だということではないか。  
嫌色の線が、結んでほしくない点同士に橋をかける。

新兵器の奪取、そのための大規模な陽動。戦争、開戦という文字  
が躍る。

そいつは、見事なターンを決めてコリューンを抜きさり、すれ違い  
ざまに機体の一部を軽く接触させて相手をよろめかせ、更に敵機か  
ら遠ざかりながら放火を浴びせている。同じ機体だというのは、数  
段速く見える。

その同型が、機首を翻す。

一瞬トーエは自分が見つかったのかと思ったが、そうではなかった。  
敵の見つめる先には、最後の機が存在していた。

その一機を自らも見て、ズームをかける。ちょうど角度としては、  
トーエはコクピット内が見える、良いポジションにいた。

（誰か、乗っているって、そんなことは）

飲み込んだ息が、擦れて霧散する。

ちらりと見えた人影。宇宙服に包まれて、よく見えない、単なる  
人影。

しかし、わかる。

「ヨセフ！」

悲鳴と共に、敵機三機へと急速に接近をかける。

レールガンを放ち、敵三機の中心に穴を開け、突破しようとするが、それを三機のうちのコリューン二機が牽制するように立ちはだかつて阻害してくる。

「どけえ！」

至近まで近づいて、ひるんだ相手にほぼ接触しかける位置でミサイルをお見舞いする。爆発の余波が機体に響き、がたがたとゆれる。

しかし気にしている暇は無かった。

残りの一機が距離をとって、進路を塞ぐ。その間にも、奪われた新型がヨセフに近づいていく。すでに十分射程距離圏内のはずだった。

二度三度とフェイントをかけつつ、機体をコンパクトにロールさせて加速するが、出し抜けない。ウルゴスの機銃が火を吹き、立て続けに機体を打ち据える。

「ああ！」

致命的な破損には至らない。が、十分だった。

ヨセフの乗る機体に向かって、その同型機がレール・ガンを発射した。

\*

着弾する直前、ヨセフはとっさにペダルとグリップを滅茶苦茶に動かしていた。機体がかろうじて動き、その場で向きを変えようとする。

その辺りで、信じがたい衝撃が襲ってくる。

コクピット全体が大きくその位置をずらし、一瞬意識と体がばらばらになったかのような苦痛を味わって、すぐにそれが吐き気に変

換された。

撃たれた！

傾き、また激しく震える思考で、ヨセフはそう結論付けた。顔を起こすと、無残な光景が目に入る。コクピットハッチに縦に亀裂が入り、その向こう、モニター越しではない宇宙が細長い穴から見えてしまっている。

恐らく、殺すつもりでの攻撃であっただろうし、これで終わりということも無い。

息が引きつる。壁際に座ったままの少女に目をやって、ヨセフはどうしようもない悲しみに包まれた。

「子供だっているんだ……子供だって！」

この子を抱えて、すぐにここを飛び出すか。それでなんになるのか。敵が見逃してくれる物か！

見捨てて逃げろ、という当たり前な選択肢が、既に胸中では消えて去っていた。なんてことは無い、ただの少女だ。だが目を閉じて微かに胸を上下させているその様子からは、そうしてはならないという、脅迫感を感じてしまう。

モニターは全損というわけではない。しかし視覚的情報はかなり粗雑な物にされてしまった。

敵は、どこで、誰で。

自分はどこで、誰で。

するべきことは

（分かる、はずだ）

それは、ほとんど信念と呼んでいい、他人からすれば不確かな感覚だった。自らの状態、相手の位置、動き、息遣い。機体の構造、操り方。

ヨセフは目を閉じて、シートの上で息を長く引き伸ばして、吐き続けた。肺から空気が押し出され、痛いほどに静まり返る自分をイ



メージする。

誰か。誰だ。誰？誰なんだ。誰、誰、誰。

誰でもない。故に、誰でもありえる。何でもなく、何者でもあり続ける。

咆哮を上げた。手足が、或いは心が勝手に動き出す。

ヨセフの機体は、驚異的な軌道でもって、相手へを接近をかけた。たった一瞬でその胴体をぶつける。両者が弾かれ、それぞれ反対の方向に飛ばされた瞬間、ヨセフの機体が『開いた』。

複雑に胴体部分に織り込まれていたものが展開する。更に胴体が半ばほどから身を起こす。

それは、誰もが目にしたことのある姿だった。見慣れすぎている、自然で、それでいて不自然な。

『人型』へと変貌したその姿に、相手の機体がわずかに怯む。困惑の色が、その乗り手から発せられていると見て取って、ヨセフは機体の背中に刺された二本の棒状の物体、レール・ガンを一つ手にとって、構えた。銃身に取り付けられたセンサーが相手の動き、速度、距離などの諸要素を読み取って狙いを補佐すると共に、銃身そのものがスライドして、射撃形態へと移行する。

無言のまま、ヨセフは撃った。躊躇いもないままに、立て続けに発射する。

相手が回避したと同時に、背中中の推進器を噴射する。相手の進路を先読みして射撃し、そのルートを強引に捻じ曲げつつ接近する。

右手でレールガンを保持したまま、左手を開き、背中の中の一つの銃を抜いた。ライフルと呼んだほうが相応しいような長大な兵器を両手に構えて、敵に仕掛けていく。その姿はどこか悪魔的だと感じられた。

敵がミサイルを放つ。合計四発のそれに対して、少しも怯まずに突っ込んでいく。両手からの射撃で二発を叩き落とし、さらに左手のレールガンを一瞬だけ放し、手の平にある小口径のバルカンで残りの二発を爆発させる。

もう後一步で、というところで、別方向から攻撃される、その予感に対して機敏にヨセフは反応した。機体の上体を逸らして、全体を捻る。斜め後方から接近しつつ放たれた攻撃をかわす。

ウルゴスだった。

「このっ」

振り向きざまに二発。どちらもかわされるが、回避のために相手も体勢を崩す。その隙を見逃す今のヨセフではなかった。

照準システムががちりと相手をホールドする。もはや外しようがない。

躊躇い無く、引き金を引こうとして、ヨセフは頭の中で声が弾けるのを感じた。

駄目っ！

しかし、遅い。鋭く尖り、半ば加速した知覚と反応速度の中で、その声を理解したときには既に弾丸は宇宙へと送り出されていた。撃墜。装甲や兵装が鉄屑となってヨセフの後方に流れていく。

肉が飛び散ったり、死体がモニターにへばりついたわけではない。ただ、分解された金属たちが飛び散っていっただけだ。

それにもかかわらず、ヨセフは強烈な不快感を感じて、呻いた。腹の奥から拒絶感が痛みとなって感じられる。

誰かが叫んでいた。若しくは、誰もが叫んでいた。冷え切った叫びの群れに包まれて、その叫びの中に一つ、目立つものがある。

一際大きな叫び。呪詛か、無念か、兎に角それは、殺した人間の叫びだ。

心の許容量、その限界点が、音を立てて爆ぜた。



### 3 ソピステス・アルバ

#### 3 ソピステス・アルバ

もう六年以上も前のことだ。

夢の中で、ヨセフは呟いた。そう、大昔だ。十七、八年しか生きていない人間にとって、そんなに昔のことは、霞んでしかるべきだ。だが、消したい記憶ほど消えないものは無い。むしろ意識し続けて、より固まっていくものだ。

十一歳になったばかりの自分が、目の前に座っていた。壁を背に、足を伸ばして力を抜いて、だらりと腕を投げ出している。瞳は中空を彷徨い、息は浅く、長い。

情けなくも、廃人寸前だった。意思の輝きも、情動の鮮やかさも抜け落ちてしまっている。

母と兄、そして妹と共に、運送業をしていた父を迎えに、ユダの本拠地である月面国家群都市、プリユタネイアを出発した。宇宙に出るのはほとんど初めてで、妹は怖がり、兄は機嫌が良かった。目的地は、すぐ近くの月面基地だった。軍事用ではない、月から採掘される物資の運搬用の基地。

父を迎えて、レストランで食事を行い、友達のために土産物を買った。妹に菓子をねだられ、兄は写真を撮る。

そうして岐路に着き、そこで一家は連合のトチ狂った強硬派の兵士崩れに、シャトルごと爆破される。資源運搬船と同行していた、単なる民間シャトル。脆すぎるそれは、細かく散らばり、燃え尽きた。ヨセフだけが、燃え残った。

そうして、どうしようもない空ろな子供が出来上がったのである。微動だにしない、過去の自分。それをただただ見つめていると、その自分に駆け寄り影が見えた。

喜色に満ちた声でその影　少女は、自分に声をかけた。無反応な少年の前で少女は子供の好みそうな、安っぽい菓子を掲げて見せた。それから少年の腕を引っ張って立ち上がらせようとして、それでも反応がないと知ると、その隣に自分も腰掛ける。

ひとしきり一方的に話すと、少女はその表情を明るく輝いたものから、ほんの少しだけ落ち着いた笑顔に変えた。

一言、二言。噛み締められるような言葉を、口にして、少女は自分の手の平を少年の頭に置いた。そうして自分も少年と同じように何も無い場所を見つめた。

乾いた砂のような少年は、いつの間にか、涙していた。

（あのとき彼女がいなかったら……）

現在のヨセフは、そう考えて、顔を上げた。

（僕は、どうしていたんだろう）

\*

覚醒は、穏やかだった。頭にふわりとした感触がある。

だからあんな夢を見たのか、と、声にならない声で毒づいて、ヨセフはゆっくりと瞼を広げていった。差し込む白い光が痛い。

小さな顔が、頭に手を当てて、自分の顔をのぞきこんでいた。見覚えがあるような、ないような、まだ幼さが十分に含まれた少女だった。

「君は」

誰だい、と問うよりも先に、少女のほうが高い声を上げた。

「起きた！　ラムサス、ヨセフが目を開けた！」

（ヨセフ？　ヨセフだって？）

名前を知られている。何故だ、と問うと共に、脳裏に気を失うまでの出来事が遅まきながら戻ってくる。

激しい戦い、敵を撃墜したこと。そしてその瞬間、機体の装甲越しに、とんでもなく不快な思いが飛来して、引きちぎられるように

意識が散っていった。

目の前にいる少女は、そうだ、思い出してみればなんてことはない。コクピットに眠っていたお姫様ではないか。

それがこうして至近にいるということは、一緒に敵に捕まって仲良く房に入れられているのか、それとも……。

「だから、怪我もしてなけりや病人でもないって教えてあげただろうが、全く信用しちやいないんだから。ほら、どいて」

しばらくすると、少女の顔が引っ込んで、ずいっと疲れた顔の男が視界に入った。狐になり損ねた人間、といった顔のつくりである。

「気分はどうかね。まあ、良くはないんだろうが」

ヨセフはそれに答えようと、体を起こした。節々が痛んだが、それ以外に特に痛みは無い。どうやらこの男が少女に言った言葉は嘘ではないようだった。

「ここは？」

我知らず声が出た。

「医務室。私は医者。そのお嬢さんは医者嫌い」

淡々と男、ラムサスといったか、が、答えていく。少女のほうに目を向けると、目が合って微笑まれた。くすぐったいな、と肩をすくめてヨセフは自分も笑って見せた。

「医務室って、ここは月なんですか？」

だとするとどれだけ眠っていたのだろうか。多少不安にはなる。

だが、医者は首を振った。

「いいや、ここは戦艦デルフォイの医務室だよ。栄えある私の左遷先、だ」

皮肉げに眉をゆがめて笑う。つられて笑っていいものか判断に苦しみ、ヨセフは辺りを見回した。

殺風景である。単なる病室なのだろう。固定されたベッドのほかは目立つものが無い。

「デルフォイ？」

「そう。ああ、一応安心はしている。れっきとしたユダの物だから」

とすると、助かったということか。最悪の可能性ばかりが乱舞していた宇宙から生還できるとは、思っていなかった。思わず安堵の息が漏れる。

「戦いは、どうなったんですか？ 何で連合が……」

立て続けに聞こうとして、咳き込む。喉がからからになっている。長時間寝ていたらしいのだから、当たり前だ、と納得しつつも何とか治めると、横合いから飲料水らしきボトルが差し出される。

「飲め」

少女だった。どこか尊大な口調だったが、その顔にあるのは気遣いと優しさである。

「有難う」

受け取る。まじまじとこちらを見つめる少女に戸惑いつつも、飲む。苦痛から開放される快楽が身体を通り過ぎ、意識もハッキリとする。

どこか気の強そうな視線、綺麗な笑み、血色のいい頬。背中の中ほどにまでかかる髪は、上品な布地を連想させる。

（似てる、な）

夢の中で見た、彼女に、である。ちょうど年のころも同じくらいではないかと思えた。

「安心しろと言ったが」

二人のやり取りを、覚めた目で見ていた医者がゆっくりと告げる。

「目が覚めたつてのはブリッジにも伝えちまったから、お前さん、これから大変だよ」

「え？」

「一応あの宙域の戦闘は終わったよ。お前さんが敵を撃墜してからすぐに、敵部隊は撤退した。それと同時に、俺たちデルフォイの面々は遅まきながら到着、警戒と救助に当たったってわけだ。成果は上々、シャトルだのポッドだの拾った上に、勝手に軍の機密まみれの新型操縦して戦争までしちゃった、若々しい民間人パイロット様まで発見できたんだからな」

嫌味をぶつけてくる。その声には疲労の色が強かった。救助にもあ

たつたというのならば、怪我人の数も相当数あつたのだろう。それがこうして自分だけ医務室に置かれ続けているのは、意図があつたことだと、ヨセフは思い至った。

「お偉いさんたちは蜂の巣つついたような大騒ぎ、なにせ両陣営が行き詰つたからこそその休戦つてタイミングで、新兵器の奪取に戦争行為、だ。俺まで駆り出されるわけだよ、楽な仕事だつて聞いてたのに、話が違ふ」

（新兵器の奪取……）

耳ざとくその一語に反応してしまう。やはり、敵は新型兵器を……。 「勿論大問題だ。俺の仕事の話もそうだが、新型が奪われたつて話に異様なほど本部は揺れてる。理由は知らんがね、だがその新型の一機を勝手に使つたりした民間人がいたとしたら、多い興味を抱くだろうな、高官どもは」

じろりと。医者視線が痛かった。

それは、当たり前のことである。軍事的なあれこれに、民間人が勝手に介入しただけでも、大きな犯罪とされる場合が多い。ことは個人の生き死にの問題ではないのだ。何かの情報を洩らすだけで、殺人罪よりも重い刑罰が与えられるのは、珍しいことではない。

自分のやったことを思い返して、ヨセフは足元に穴が開いたような気分にとらわれた。命は助かったが、助かったこの身は鉄格子行きかもしれない。

そんな様子を見て取つたのか、少女が動いた。医者とヨセフの間に入り込み、医者に向かつて厳しい声をかける。

「こら、なんてことを言う、貴様それでも医者か！　ヨセフは私を助けた恩人だぞ。礼を尽くせ！」

「おお怖い」

肩をすくめて、白衣を揺らす。数世紀前より一応今でも残る専門職の服だとヨセフは覚えていたが、無重力化でまで白衣を着る意味はわからなかった。

「君は……？」



暗い霧に包まれてしまった気分を誤魔化そうと、訊いて見る。少女はそれに反応して振り向き、はつきりとした声で答えた。

「私はアルバ！ アルバ・ミレトス。今回のことは、本当に感謝している。ありがとう、ヨセフ」

（感謝？）

それは、多少ずれた感覚を伴って耳に届いた。ヨセフからしてみれば、半ばパニックの中、自分が何とか生き残ろうとした結果である。それも、犯罪まがい、若しくは犯罪そのものだといわれても反論できない方法を使って、だ。

だが、いつの間にか自分の手を取り、両手で包みながら笑いかける少女を見ると、それも言い出せそうに無い。

（本当に、わけが分からない）

心中で深く嘆く。旅行だったのだ。他愛ない、学生の楽しみ。それが、わけの分からない災難にあつて、わけの分からない戦闘機にわけの分からない少女、わけも分からず操縦して、今現在、何も分からない状況におかれている。

だが少なくとも、この分からない状況が喜ばしいものではないということだけは分かっているのだ。

「何が何やら……」

「分からないだろうが、すぐ分かるようになるさ」

医者、ラムサスが、戸口を親指で指した。つられて首を振ると、ちょうどそれと同時に扉が開いた。スライドした板の向こう側から現れたのは、上品なスーツに身を包んだ男だった。

年の頃は四十に差し掛かるあたりで、中肉中背。落ち着いた、理知の色をともす漆黒の瞳が印象的な男である。その男を、ヨセフは知っていた。

「イマダさん！」

年に数度会うか会わないか。直接的な付き合いは乏しいものの、金銭的、社会的立場を言えば、ヨセフはこの男に頭が上がらない。

イマダは、ヨセフの義理の父と言ってもいい、両親などの後ろ盾

を失った子供を迎え入れて支援している男だ。だがヨセフが知っているそんな一面は、まさしく一面でしかなく、本職はユダの政府や軍との関わりの深い、重要な立場にあるのだという、それだけは聞いたことがあった。

そのイマダが、このタイミングで自分の前に立っている。ヨセフは安堵と緊迫感を同時に覚えねばならなかった。

「やあ、よく無事だったね」

片手を上げて、気さくに挨拶をしてくる。常時、こういった態度をとっている者が見せる特有の慣れがある。

「は、はい。その、色々ありましたけど」

「そうらしいね。大変だったと聞いている。それで、少し私は君と話さなければならなかったよ」

「仕事で来たって、そういうことですね？」

ヨセフの問いに、頷いて答えてくる。今回の事件に関係するということは、と考えて、ヨセフは申し訳なくなった。

「とにかく、一緒に来てくれるかな。ここじゃお医者様の邪魔になっってしまうから」

「ええ」

淀んだ思いを抱えて、ヨセフはゆったりと立ち上がった。だるさは残るものの、足元がふらつくということは無かった。

「それじゃラムサス、ヨセフを借りていくけど、いいね？」

「持ってけ持ってけそんなもん。もう健康体なんだから、帰ってこさせなくていいぞ」

なぜがイマダにまでもそんな言葉遣いで医者が答える。単に性格なのだろう。それを気にした様子も無く、イマダは軽く笑って、ドアを開けて外へと出た。

気の重さから、やや遅れてそれに続こうとすると、アルバがそつとささやいた。

「大丈夫。心配するようなことは無い。それでも何か困ったことになったら、私が何とかするから」

君が？そういいかけて、口を嚙む。たかだか十二三の子供に、何ができるというのだろうか。だがその自信に満ちた表情と声音に、ヨセフは仄かに信用をしまいそうになってしまっていた。アルバの持つ雰囲気には、何か特別な感触があったのだ。

「行ってくるよ」

迷った拳句、それだけを少女に言った。アルバは満足したように大きく頷き、手を振ってヨセフを送り出した。

\*

医者はここを戦艦だといった。イマダに連れられて小さな部屋に赴くまでの間に、それとなく通路などを観察していたヨセフは、正直に言つてこの場所が戦艦であるとは思えなかった。白く明るい廊下やシンプルながら整ったデザインの扉などが、無骨な軍隊のイメージからは遠かったのだ。

しかし、時折ヨセフたちの脇を通り過ぎる人の中には、テレビなどの中で見かけたことのある制服姿が混じっていた。

最近の軍つて言うのは、こういうものかと納得した頃には部屋についていた。

「ここは私の私室だよ。くつろいでくれ」

そう言つて、部屋の中央に置かれた机の向こうに座る。無論、固定された椅子に座ったような格好で触れているだけで、体重をかけられるわけではないのだが。

ヨセフもイマダに合わせて、イマダの向かい側に腰掛けた。

「さて」

僅かに、イマダの顔が引き締まる。そうすると案外イイ男なのだが、今はそんなことを考えているときではない。

「色々思うところはあるだろうけど、多分一番気になっていることから話そうか。そのために私もいるわけだしね」

「イマダさんが？」

「そう。私は、君が乗ったあの兵器に関係が深い組織に属している身なんだ」

それなら一層まずいのではないか。ヨセフは本気であるアルバという少女にでも縋りたくなつた。

「いや、心配しなくていい」

そんな表情を読み取つたのだろう。イマダは手を広げて、後を続ける。

「君は多分、今回の一件でまともに罪に問われることは無い」

その一言に、強張つた肩が若干ではあるが、弛緩する。

「その理由だけど、いくつかあるんだ。先ず第一に、君の行動が緊急的で、危機回避に関するものと認められたこと。二つ目が、あの機体にアルバが同乗していたこと。彼女の要望と、同じ宙域にいたユダの戦闘機による観測が無かつたら、さすがに危なかつたかも知ね。さて、その次が」

「ちょ、ちよつと待つてください」

話をぶつ切りにするのは本意ではなかつたが、ヨセフは堪え切れずに質問した。

「彼女、アルバっていいましたっけ？ 彼女の要望、って、一体あの娘は何なんです？」

「ああ、そっか」

イマダは慣れた様子で片手の握り拳をもう片手の平にぼんつと打つて、答えた。

「ヨセフ君、『ソピステス』って聞いたこと、あるだろ？」

「ええ、まあ……」

有名な名詞である。ヨセフも頭の片隅でその響きは記憶していた。

一般に知られているところをいえば、ソピステスとは、ユダの一部の有力者たちのグループをさす言葉である。一般公開されているネットや、政府広報誌の協賛欄にも時折見かける名前。しかしそれがどういった目的の集団であるのかは、『軍事、社会運営に関わる技術的、政治的機関』というところの無い情報しかなく、い

わゆる『お偉いさんが集まる詳細不明の組織』という、政党グループや企業グループのような受け止められ方を一般市民にはされている。

なんにしろ、あまりヨセフと縁があるとは思えない組織だった。

「軍と特に付き合いが深くて、政府からも重要視されているものなんだけどね。彼女、そのトップだよ」

目が点になる　　ということは無いだろう。人体の構造を逸脱しすぎていて。ヨセフは目を点にしながら何となくそんなことを思ってしまった。

冗談だろうか。しかし、意図が不明すぎる。

「はは、驚いてるね」

「そりゃ……驚きますよ。ソピステスって、雲の上の存在ですよ」

「市民感覚っていうのはそう言うものかな。だけど、何も実権を握っているってわけでもない。彼女は今はまだいわば、お飾りさ。言いは悪いし、失礼だけどね。ソピステスは歴史の深い組織で、代々初代の設立者の家の者がその中心的な位置を占めているんだ。彼女、ミレトスって名乗っただろう」

「聞いていたんですか」

「まあね。仲、良さそうだったじゃないか。それでそのミレトスってのは、その『設立者の家』の名前なのさ」

とすると、あの少女、アルバは、将来ユダの中で非常に重要な立場を得ることになるというわけか。

世襲という、古い体制はただでさえ月の人間には馴染みが浅い。そういった古典的なものは、統一国家である連合側が強く好むものだからだ。

ヨセフにはあの無垢に見える少女が軍や政治といった世界の中のコアの一つであるということが上手く想像できなかった。

（あれ？）

そのとき、ヨセフはあることに気が付いた。どうして今の今まで不思議に思わなかったのか、信じがたい。

ミレトス。その苗字には、聞き覚えがあった。名前のほうで呼ばないと、機嫌を悪くする人物であったから、ほとんど使うことは無かったのだが……。

「あの」

「なんだい？」

「トーエって、じゃない、『トエレア』って、ええと、パイロット？　だと思っんですけど、軍に所属してる」

「ああ」

あっけらかんと。当然といった表情で、イマダは快活な声で答えた。  
「そうだよ。彼女もミレトス家の一員だ。一族の中でも変わり者だね、軍隊に所属するのはまああることだけど、パイロット、ってのはね」

愕然とする。そうなのだ。トエレアという、本名を呼ばれることを嫌う、ヨセフの旧友トーエのフルネームには、ミレトス姓が入っている。

ヨセフは、半ば自動的に、幼少期の生活のことを思い出していた。トーエとは六つか七つのときに出会い、それからヨセフが一家を無くすまでの四、五年、仲のいい友人だったし、事件にあつてからの一年間はトーエの家に世話になっていたのだ。とすると、自分は政治軍事的中枢に住んでいたということだろうか。

しかし、ヨセフの記憶にあるトーエの家はそれほど一般的な感性から外れた家ではなかった。

（分家か何かだったんだろうか？）

混乱しつつも、もう一つの疑問を解消しにかかる。

「トーエを知ってるんですか？」

「そりゃ、彼女の家に厄介になっていた君を、財政的な意味ではあるかもしれないけれど引き取ったのは、私だからね」

「それについては」

「感謝してる、って言うんなら止めてくれよ？　あの家に世話になり続けることを申し訳なく思っていた君にとって私が助けだったと

「いのなら、私にとっても君は君は必要だったのさ」

「必要？」

「子供を引き取るのが趣味、なんていったら、醜悪だし、犯罪者め  
いてるね。説明は難しい」

そう言つて、言葉を切る。説明しがたいその理由こそが、曲がりな  
りにも援助をしてもらっているヨセフには気になるところだったが、  
無理に問いただすわけにもいかない。

「なんだか、信じられないですね。自分がそんな人たち二人と知り  
合いなんて」

「往々にしてそういうものさ。月の人口はかつての地球に比べれば  
ひどく少数だしね、有名人が近くにいたって不思議じゃない」

それに私だってユダの中じゃそれなり、なんだぜ？ とおどけてみ  
せる。一見するとその様子は軽薄だが、そういったことを流れるよ  
うに口にして相手の態度を和らげてしまうところには、このイマダ  
という男のしたたかさが現れていた。

「さて、話が半分色んなところに言ってしまったけれど、次が、最  
後の理由。大事な話だ」

ずっと、目が細められる。再びヨセフに軽い緊張感が巡る。

「君が乗ってしまったあの新兵器、あれは、当然軍や政府にとって  
大事な一ファクターだ。だけど、それ以上に、研究者たちにとって  
は重要で特殊なものなんだ」

「研究者というと……」

「軍の開発グループ、なんだけど、今言つた研究者たちは実は軍の  
外側から送られて、軍の出資で活動している、立ち居地の特別な集  
団のことなんだ。その外側というのが、さっきも言つた『ソピステ  
ス』なんだけどね」

そんなことをつらつらといわれても、あまり理解が出来ない。混濁  
した頭を整理しても、圧倒的に不足する実感と、トーエやアルバの  
ことがぐるぐると渦巻いて仕方が無い。

「で、その新兵器が特別である理由は単純、それが万人に扱えるも

のではないからだよ。歴戦のパイロットも何も関係なく、本当にごく僅かな確率でしか扱える人間が見つからない」

「扱えないって」

僕はどうだったんですか、と問うよりも先にやや早口でイマダが返す。

「ここからは機密にも触れるから、君が私の養子じゃなきゃいえないこともあるのだけれど、とにかく、『あれ』は開発経緯も何もかもおかしな代物でね、パイロットが務まる人間も、ひどく限定されるらしいんだ」

「トーエは」

「その限定された一人ということになるね。そして、これは当然君も」

止めてくれ。とつさにそう口に出しそうになり、こらえる。寒気のような感覚は、一体何に起因するものだろうか。

「含まれることになる。そこで、研究機関、ひいてはソピステスの人間が、君への興味を抱いた。それで、通常の処分が成されることはなかったってわけだ。君が回収されて起きるまでの六時間ほど、色々大変だったよ」

「興味、ですか……」

それが一体どういったものなのか、それは重要である。

「そう。彼らの中には君を使つてのテストも考える人もいるんだ。勿論、私が跳ね除けたがね」

横を向いて、口を尖らせてイマダはき捨てた。

「民間人を巻き込むなんて、どうかしてるよ。連合も、ユダも、さ良くも悪くもこの人は変に誠実であるのだ。直感して、ヨセフは息を吐いた。こういう人物が自分後見人であるというのは、まさしく幸運である。」

「いいかい、君は、表面上ここで私に嚴重注意を受けただけの民間人だけど、軍や政府からは少しだけ注目されている。ともすれば、利用されてしまいかもしれない、危うい立場だって事だけ



は、忘れないでくれ」

一も二も無くヨセフは頷いた。政治だの戦争だのは、まっぴらだった。

それを見て、イマダも満足そうに頷いた。

「さて、じゃあこれで『嚴重注意』の処分は形だけではあるけど、終わりだ」

つまりは、イマダがソピステスや軍の要望を押し留まらせて、軽い処分で開放するように仕向けたわけだ。しかもその処分も自分で行った、ということである。大した人物であるのは、その行動力と権力からもうかがい知れる。

「最後に、これが一番覚えておいてほしいのだけれど」

「はい」

「あの機体には、二度と乗るんじゃない。君が不幸になる」

その言葉の温度だけが、ひどく冷たかった。不気味だともいえる、異質な感触。

一瞬絶句してしまって、ヨセフは落ち着くのを待ってから、答えた。

「……頼まれたって、乗りませんよ。怖いのは、もう十分ですから」  
渴いた喉で、それが精一杯だった。

\*

イマダに開放されて、外の通路に出たヨセフは、大きく息をついた。

とりあえず自分の身が保障された安心感はある。だが、身近なト  
ーエについての知らない情報は、ヨセフを混乱させたし、イマダの最後の一言は内臓に刺さったまま消えようとしめない。

（あの機体が、危険なものなら）

アレに乗ったのは、自分だけではない。分かりきったことだが、三機分存在したその全てが、先の戦闘では稼動していたのだ。

（トーエは……）

その考えは、ヨセフの心を締め上げた。自分の身が危ないというよりも、更に危機感がある。

しかし、一体自分に何ができるといえるのか。自分よりも数段聡明なトーエに、一体何が。

ずるずるとした思考だ。自嘲して、ヨセフは愚にもつかないそれを打ち払った。

（さて、これからどうしよう）

イマダの言葉に気圧されて出てきてしまったが、この船がどうするのか、自分がどうすればいいのかまるで知らない。

が、それを考えるより先に、軽い足音がヨセフの思いなしを阻害した。

「ヨセフ！」

小さな影が、走りよってきていた。

「アルバ……」

と、呼びかけに答えてから、敬称をつけて呼ばなくていいのかと、一瞬間によぎる。が、それはそれで変な話である。

少女は笑いながらヨセフの片手を取り、隣に並んで言った。

「どうだった？ それほど深刻なことには、ならなかっただろう？」

「ああ、それは、その通りだったよ。……君が、助けてくれたんだって？」

そう言うのと、アルバは小さく噴出して、おもしろそうにヨセフの顔を見上げながら、指摘した。

「それは、順序が逆だ。ヨセフが私を助けてくれたんだろう」

「いや、でもそれは僕が助かるうとした結果に過ぎなくて」

「そうだとすると、それが感謝されない理由にはならないだろう。事情がどうであれ、あのままだったら死んでいたのだから、私は助けられたとしかいえない」

その言葉に、内心ヨセフは驚いていた。アルバという少女が持つ感性や、言葉といったものが、その外見の幼さを裏切って、非常に賢いものであったからだった。

「そう言って貰えると、助かるよ。でもなんで、あんなところに？どこか身が軽くなる。アルバとの会話にそんな実感を抱きつつ、訊く。」

「月からあの機体に忍び込んで、エフェソスに密航したのだ」

「密航って」

尋常なことではない。それも、子供が一人でとなると、アルバがソピステスの主だということ以上に信じ難い。

「まあ、色々あってな……」

思い悩む顔だけは、無垢な子供のままである。ころころと変わる表情が、元の笑顔へと切り替わって、ヨセフの手を引いた。

「それより、ヨセフ、これからのことは、聞いたか？」

「いや、何もまだ」

小さな手に引かれて通路を歩き出す。

「それなら、ついてこい。皆のところに案内する」

「皆？」と返す前に、ヨセフの手をとったまま、アルバが軽く前方に跳んだ。アルバの髪が視界を覆い隠し、ヨセフが慌てると、アルバは上手く体を移動させて、ヨセフに併走する。

くすくすと笑う血色のいい顔は、やはり子供のそれである。

目指す先は、どうやら船の後部のようだった。

## 4 少女たち (前編) (前書き)

4章は長くなってしまったので分割してアップします。

## 4 少女たち（前編）

### 4 少女たち

最後の一機、それが、トーエの前を飛び回っていた。

既にその挙動はまともなパイロットのそれではない。戦場に取り残され、慌しさの中回収してもらえずに、残骸の陰に身を潜めていた不幸な敵。所々、遠目にも分かる破損を抱えたそのウルゴスは、トーエの投降を促す言葉に耳を傾けようとしなない。不安定な軌道を描いてトーエの裏を取ろうと苦心し、それが不可能と分かると無謀にも発砲を繰り返した。

多量の苦味と共にそれを撃ち落して、実際に人殺しを行ったのは今日がはじめてであるとはたと自覚する。一日と経っていないというのに、既に「慣れ」のような感覚が、グリップを握る腕には宿ってしまっている。

しばらく息を整えて、索敵を続けていると、帰等命令がモニターの隅で輝いた。

激しい戦闘が終わり、民間人の救助にその場が移行してから、六時間ほど。何度かの休憩を挟みつつ、戦艦デルフォイを母艦としてその活動に参加していた苦勞も、ようやく終わりごろだろう。

デルフォイはそもそも新型の搭載を予定されていた比較的新しい型の戦艦である。搭載機数も中型艦としては優秀であり、新型三機を乗せても更に予備戦力としてコリューンを何機か積み込んで十分ゆとりある運用が可能であった。

しかし、プリユタネイアーの近くから緊急的に無理矢理呼ばれて出てきたデルフォイには、その真価を発揮するだけの『中身』が伴ってはいなかった。

クルーの数も少なければ、乗せてこられたコリューンも数少なく、

更に生き残ったコリユーンの数といえば、たった一機だったのだ。

回収したヨセフの乗る機体からアルバが出てきたことや、元々イマダが乗っていることもあって、『デルフォイ』は重要な要素を抱え込みすぎている。そのため元もとの予定もあって、トーエはデルフォイへの移動を命じられたのだった。

船のハッチが開く。戦闘時に使うカタパルトデッキのものではなく、その脇にある小さめのハッチだ。そこに減速しながら入り込んで、着艦を果たす。戦艦側の誘導を受けて半ば自動で機体を止めると、トーエの身体はずるとシートの上でうなだれた。

疲れきっている。

体の全てが、酷使する側であるトーエの思考に囁く。

ずるずると何かに引きずられてしまいうようにして、トーエは夢と現の境へと落下していった。

（みたくもなーい、ゆめーがー……）

どろどろと、とろとろと。視界が歪む。

現れるのは、気分の優れないときに頻繁に見てしまふ、自らの記憶の圧縮品であった。

過去。高貴な生まれの身とは、トーエにとっては呪わしいと言ってもいいものだった。

ミレトス家は、そもそもは古き時代の地球において類稀な賢しさを持っていただけの、平凡な一族である。だが様々な経緯と問題に包まれて今現在にいたり、はるか過去の親族が聞けば泣面を作ってしまうであろう『名家』というやつになってしまっている。

大人たちは、幼いトーエには「ずれた」存在でしかなかった。

彼らはトーエに様々なことを望み、その上で微笑む。が、トーエの胸中にあるのは、決定的な懐疑だった。

跡継ぎ、家、組織、政治、軍事……。それらは全て、『既に生きていた者たち』の問題であるはずで、『生まれてくる側の』問題ではない。

ひどく幼い頃から、トーエはそういった感じ方をしてきた。誰か

が何かを望み、子供がそこに出来ても、子供の望みはそこには無い。そういった、論理というものが、トーエにはありありと感じられ、ずれとして認識された。

やがて少しだけ成長したトーエは、人々が数千年もの間戦乱に包まれているのも、それが原因ではないかと空想した。生や死、人そのものや宇宙について正しく考え続けなければこそ、ずれたまま事を成し続け、そうして本人たちすら気が付かないずれの蓄積が戦いへと、悲劇へと繋がる。

やや沈んでいた、と表現すればよいのか、他の子供に比べて大人しかったトーエは、生まれもあつて大抵は丁重すぎる扱いを受ける傾向にあつた。

が、それを気にしないのが、子供というものである。

ヨセフは初めからどこかとぼけた印象を持った少年であり、最も始めにトーエと仲が良くなった、小学時代の親友であつた。

家を嫌った上に、妹が生まれたことを利用して親類の家に逃げたトーエは、そのままヨセフと、大勢の友人と時を過ごし、やがてヨセフの事件を経て、軍籍の身となっていく。

それらの経緯を、今のトーエは無責任な、第三者の視点で早回しをして見ていた。

とても鑑賞に堪えうるような出来ではない。ドキュメンタリーだといったら月のテレビ局の人間に張り倒されるだろう。

(ヨセフ)

呟く。声にはならなかったが、どこかに反響して、わななく。

\*

道すがらアルバに聞いたところによれば、これから船はすぐ近くの中規模月面都市、『アゴラ』に降下するらしい。

エフェソスの位置は首都プリュタネイアの真上に近い位置、L2という重力安定圏にあるのだが、今回の事故で宇宙へと脱出し、

散らばってしまった人々は実に色々な方向に移動をしてしまっていた。宇宙空間でのことであるから、その方向は四方八方どころではない。中でもこの『デルフォイ』が救助した人々は、最も「流されて」しまった人々なのだそうだ。

それ故に、プリユタネイアーに直接帰還するためには時間がかかりすぎてしまう。戦艦であるこの船は、久方ぶりの有事に混乱するユダにあつては貴重な戦力であり、現場要員である。これより先の作戦行動が地球や、地球と月の間の連合基地、L1地点などになることを鑑みて、より現場に近い月面の都市へと寄航するように上からの命令が下っているらしい。

民間人であるヨセフや救助された人々は、アゴラで民間用の輸送機などに乗り換えて、プリユタネイアーに戻ることになる。

そのために、民間人は機体後部の、シャトルや機体を収容した格納庫近くに存在する、予備格納庫に集められているのだという話だった。

やがて通路の先、エレベーターを潜った後に見えた扉を前に、ヨセフはいくつかのことを祈った。

（僕がトーエのことを話題に出したときに、イマダさんは特別おかしな反応を示さなかった……つまり、彼女は無事である公算が高い）それとともに、回収された民間人の中に知った顔があれば、それよりも望むことは他に無い。

そんなことをひたすら思っていたからか、やや厚めの扉が開き、人の群れで慌しく蠢く格納庫の中でアラムの姿を見つけたときには、歓声を上げそうになった。

最も、半泣き状態のアラムが振り回した小さな拳が胸に突き刺さって、それどころではなかったが。

それほど大した力ではない。咳き込むことも無く、飛ばされてしまった身体も壁に手についてすぐに止まることができる、その程度のものだった。

しかし、感じた痛みは大きく鋭かった。



「し、しし、心配！　どれだけ心配っ、したと！」

感情の高ぶりのせいか、舌をもつれさせて、言葉遣いまでおかしくなっている。切実な色の瞳に映されて、ヨセフは小さな声で謝罪した。

「ごめん」

「ごめんじゃないっ！」

ごつんと、アラムが頭をぶつけてくる。

緊急的な策だったとはいえ、時間が過ぎて行く恐ろしさに身を任せて馬鹿な判断をしたという自覚が、このときにはヨセフにもできていた。あのまま無理矢理にでも同じシャトルに乗ってしまったえばよかったのだ。強面の男がどうしたというのだ、宇宙に放り出されるよりも何倍もましだろ、と、過去の自分に毒づく。

そんな二人の様子を大笑いしつつ眺めていたアルバは、ほんの少しだけ意地悪そうな声音で、二人に囁いた。

「『皆のところ』と、言っただろう？」

つまり、アラムとの関係性を知っていて、ヨセフをここに連れてきたということだろう。明言しなかったのは、茶目っ気だったということか。

しかし、アラムと、彼女とヨセフの間柄を知っていたのは一体どういうことか。アラム共々顔面に疑問符を貼り付けて呆けていると、更に笑って、少女は付け足した。

「最初に私が救助されたときは、私もここに来たんだ。そのときには目も覚めていたし、な。だがそこで哀れにもヨセフの名を口にして右往左往している者がいる。医務室に運ばれたヨセフのことをトーエは名前で呼んでいたからな、ピンときた」

「それで医務室に？」

「ああ。礼もしたかった」

やはり、賢しらである。納得しているヨセフの傍らで、そういった一連の行動を思い出したのか、アラムが頬を染めてやや俯いていた。そんなアラムをアルバがからかったり（立場が逆だと思うのだが）

、幼いアルバに押されっぱなしのアラムを擁護したりしているうちに、ヨセフが入ってきた扉とは別のドア、予備格納庫から通常の格納庫への連絡通路のドアが音を立てて開いた。

宇宙空間から救助された安堵と、未だ自分が予定外の場所にいる不安がないまぜになっている人々は、そんな音にも敏感だった。一斉にドアのほうを向く。が、そこに現れたのが単なる軍人の一人であるとなると、興味を失いそれぞれが元の向きを取り戻す。

ヨセフもそれに習って、そちらを見やった。だが他の人々のように、すぐに視線を逸らすわけにはいかなかった。

「トーエ！」

叫んだ声は、何故かアルバと重なっていた。驚いてアルバを見るとヨセフの脇を通り過ぎてトーエの元に向かおうと床を蹴ったところであった。

（ああ、そうか）

遅まきながら、思い返す。イマダとの会話で二人がミレトス家のものだということは承知していたではないか。

つまり、彼女たちはやや年の離れた姉妹ということになる。

トーエは遠目にも分かるほどに憔悴していたが、アルバの姿を見ると笑顔を灯してその身体を抱きすくめた。アルバのほうはいえ、大人らしい、背伸びをしていた気配が消えて、親猫にじゃれつく子のようなのである。

「あの人も、この船に乗ることになったみたい」

アラムが教えてくれる。

「もう何時間も前から、何度か外に出て……お仕事？　をしてた、のかな」

それは多分、そう言うことなんだろう。ヨセフはトーエが身につけているものに着目した。詳しい型などは分からなかったが、明らかにそれと分かる、パイロットスーツ。民間のパイロットが着るものではなく、軍事的な、それも危険性のある任でパイロットが着用するものだ。

やがてアルバの相手をしつつも、ヨセフに気が付くとトーエは一目散に駆け寄ってくる。

ヨセフの肩に手を置き、一言ポツリと洩らす。

「無事で、よござんす……」

語尾は不鮮明で、口調もおかしい。不思議に思う間もなく、トーエははずるとヨセフにもたれかかる様に倒れこんできた。体の力が抜けて、肩においていた手は腕ごとヨセフの首に回る。

慌てるより先に、ヨセフが感じたのは郷愁のような、過去への思いだった。

子供の頃には、疲れきったトーエを彼女の家へと運んだことが幾度となくあった。いつも率先して何事も楽しもうとするのだが、最終的には体力に余裕のあるヨセフのほうだけが起きていて、彼女を背負うことになるのだ。

そんな懐かしさと共に、トーエの顔を至近から見つめる。神経質に気を張り続けていたのだろう、瞼のクマや、浅い呼吸が痛々しい。変わってしまった。ヨセフはひどく哀しい思いに包まれた。

現在の友人、過去の友人。二人とも傍ににいるというのに、何故こんな物騒で、危なっかしいところにいるんだろうか……。

そうして呆けているヨセフを近くに、アラムは身体を硬直させつつも、「そういう手もあるのか」と納得して、それから自然にトーエの身体を引き離すにはどうしたらいいかと思案した。なんとなく、もつと憤ましくあった方がいいではないか。そういった思いは、無論のこと言い訳に過ぎなかった。

\*

ベニヤミンは自分の頬を撫でて、一つ、溜息をついた。重苦しく、聞くものの耳のほうが参ってしまいそうなの、だ。

一隻の船の艦長を任されていると共に、『カナン』という特殊極まりない存在をも任されているのは、組織の中での地位がそれに価

するほどになったからだ。単純な昇進だけでなく、お偉方に認められて声をかけられる、そういった気に入られる行為を重ねてきたことの証拠。

ベニヤミンはいつも考える。考えない日などない。

平穏を、平和を、理想的な世界、善と美の満ちた世界、人間社会。そういったものを、いつも考える。

理想は、その体現を、幾度と無く拒んできたと言っている。

人類が曲がりなりにも現在ののような姿をとって、一体どれだけの時間が流れたか。気の遠くなるような長い時間をかけて、それでいて人類は、未だに戦艦や機動兵器を使つて殺し合いを続けている最中である。

思うに、人は、理想と聞いて、その態度をいくつかに分化する。

一つは、それが可能であると知っている、確信と共に笑みを浮かべる、そういった態度だ。

二つ目が、悲観論。

可能であるとか、不可能であると表明するそれらの態度の間で、疑問と共に声を上げる第三の立場が、主にベニヤミンの考えるところである。

それは、既にそれが成されているとするものであった。

救済に満ち、罪が無く、善良で、それ以上求めるところのない世界……。一見最もこの世に似つかわしくない世界。

だがしかし、そこに至るに足りないのは、たった一つのことではないだろうか。兵器の廃絶だとか、国家の解体だとか、人の革新だとか、大げさで多岐に渡る何かではない、たった一つの、単純なことで。

今こと別にある理想世界、などというものを観念の切れ端として忘れ、それを求めることに飽きることに。それだけだ。

もう一度深く息をつく。

軍人としては致命的に夢想家だと、そう思わねばならない。ベニヤミン自身にも自覚はあった。が、そうした思考こそがベニヤミン

に鋼の意志力を与え、地位の階段を上らせ、彼にパワーを与えるのだ。

彼の目の前には、小柄な少女の姿がある。カナンだった。

細い肩や手の平をしっかりと整えて、姿勢よく立っている。

「『ドア』は、もう送ったのか？」

いつまでも立たせておいては、哀れである。そう思って、ベニヤミンは前置きなしでそうきいた。

「はい。ゼロ六で、つい先ほど」

ゼロ六とは、連合内で扱われている小型高速輸送艦の型番の一部である。長つたらしい名前があるにはあるが、研究員や高官たちが格好をつけすぎた命名と言うのは、度々現場の兵士に馬鹿にされるところである。そのためゼロ六はゼロ六と呼ばれる。それで十分だった。

「そうか」

そうか、そう短く言った途端、安堵が体を包んだ。

『ドア』は奪い取った新型の心臓ともいえる、最重要項目の一つである。複製がきかず、その解析すら想像を超えた困難が伴い、しかし完璧に理解されることなど無い機関。その意味では心臓というよりも脳、脳というよりも人格、意識に例えたほうが適切かもしれない。

それを無事、連合本隊がいるであろうL1の方角へと送り出すことができた。無論、ユダの妨害は考えられることであつたが、今のユダにそのような余裕があるかどうか怪しいところであるし、その妨害を退けなければならぬのは自分ではなく、輸送部隊のほうだ。そこまで心配しても始まらない。人のことを心配しているとあっさりやられてしまうのが軍隊なのだ。

ベニヤミンは、ブリッジのシートに座っていた。すぐ一時間前ほどまでは通信、情報監視、など等多くの目的のためにそれなりの人数の軍人が座っていたブリッジだったが、今はその影も無い。それもそのはずであり、今この戦艦は港、それも戦場から少しではある

ものの離れた場所にいる。ブレイク・タイムであり、ベニヤミン自身もキャプテンシートではなく、壁際のゲスト・シートにだらしく座っているだけだった。

ブリッジ前面のモニターには、何も映ってはいない。そのモニターの向こうには無骨なスペース・ドックがあり、更にそれを抜ければ、月のクレーターの地下に作られた街に出る。

いつもならば他の兵士がそうするように、自分も急いで街に繰り出し、短い休暇を最大限楽しむのだが、今は少しばかり疲れていた。大任を果たし、ぐったりときている。

「カナン」

「はい」

しばし迷ってから、ベニヤミンは後を続けた。

「街にでも、遊びに行つてこい。再出発するまで、何時間も補給の様子を眺めていても退屈だろう」

カナンは、普通の軍人ではない。特殊な生い立ちと、それによって形作られた行動規範が内に存在する少女である。

それだからか、一瞬だけ顔を輝かせた後に、すぐに軍人的な、厳しい表情をつくろつて言った。

「いえ、私は」

自分の立場というものを、彼女ほどに弁えている人間も珍しい。逆にそれが仇なのだ、とベニヤミンはそう思っていた。

「いいから、行つてこい。私が許すんだから、問題は無い」

「あ、その、でも」

すでに目が泳いでいる。わくわくとした気持ちや、幼い好奇心が胸いっぱいに溢れているのだろう。冷静さを気取ろうとし続けている少女の表情に、ベニヤミンは苦笑した。

「……偶の事だ。またすぐに仕事になる。今のうちに羽を伸ばせ」  
ややあつて。決心そのものを透明な声に乗せて、カナンは頷いた。  
「はい！」

やや急ぎ気味に、小走りでカナンがブリッジを後にする。その後姿

には可愛げというものがあつた。  
そうしてまた、ベニヤミンはひっそりと思考の中に意識をうずめた。

\*

目を覚ましたトーエ、何故か始終ヨセフの周囲をくると回ることを楽しみを見出したアルバ、そんなアルバを「いいな」と密やかに観察するアラム、そしてヨセフ自身を加えた四人は、トーエの私室に佇んでいた。

どうやらトーエはこのデルフォイにてなかなかいい待遇を受けているらしく、四人が一つの部屋に入ってしまったているのだが、手狭だとはぎりぎり感じない程度の広さがある。

そして何より現在目を引くのが、部屋の一面、船体の外部のほうに取り付けられた窓である。非常時には装甲が覆ってしまふその窓も、いまは透明感の溢れる宇宙空間を部屋の中へと晒している。

更にその窓の風景には、広大な宇宙空間だけでなく、見慣れた灰色の大地も映されていた。

月だ。

プリユタネイアーこそ見えないものの、こうして地面が地面として分かるほど（つまりはある程度平らだと思えるほど）近く見えると本能的な部分での安心を得ることが出来る。月でさえこれなのだから、根っからの地球人は宇宙にすることがどれほど不安だろう。ヨセフはふとそんなことを考えていた。

「あれが、アゴラ？」

アラムが、眼下に見える巨大なクレーターを指して言った。

「そう。悪名高い中立都市」

平坦な声で、トーエが答える。

アゴラは戦争末期に作られた、元々は物資運搬の中継基地だったクレーター利用の地下施設である。それが実質的休戦状態に入る少

し前から、町として発展すると共に、当時態度を軟化させていた連合軍の人々をも迎え入れるようになったのである。地球のユダからの物資補給にはある程度の連合側の「甘さ」とこのアゴラのような中継基地が不可欠であり、また連合にとっても宇宙での最前線であった場所であるこの月の裏側に近い場所に存在する基地は重要だったのだ。ユダ側からの連合の宇宙資源の輸入にも使われるこの街は、次第に連合とユダ、両陣営の想像を超えた無軌道な発展を遂げる。

始めは便宜的な措置としてとられていた悪魔でも一時的な連合側の受け入れと、町の内部での『両軍非武装中立』という定めは、その利便性からか度々更新され、現在ではユダ本部の反感を買いつつも公然と中立都市を名乗っているほどである。勿論ユダは再三脅しにも近い警告を出した。そのため、資料の上ではアゴラは『ユダの発展のための』街であって、そのための貿易都市、連合の受け入れも仕方の無い取引に限ったものであるということになっている。

が、そういった建前じみたものはまさしく建前であることが多く、このアゴラについても同様のことが言えた。

アゴラを治めるのは『市長』と名乗る（ユダの政治的な職の中に「市長」という項目はない）男を中心とした財産家たちである。戦争の恩恵を上手く活かして発展した街は、戦争で設けることを旨とする人間にとって確実に唾をつけておきたい場所なのである。

そういった事情もあって、トーエたち軍人にはあまりよくは思われていない、それがアゴラだった。しかし貿易都市としての発展は目覚しく、近年では安定した情勢や、街内部での非戦条約もあって観光客の出入りも多くなってきたといわれている。

皮肉にも、その町に始めて入る、その乗り物が戦艦なのだ。苦笑いを浮かべるこくらいしか出来そうにない。

「あそこについたら」

いきなり声を発したヨセフに、視線が集まる。

「トーエは、どうするんだ？」

半ば答えは分かっていた。トーエは軍籍なのだ。



「そうだね……テストパイロット、だったんだけど」

そのテスト機は、一機は奪われ、残りの二機はテストをとばして実践で戦火を上げてしまった。

「もしかしたら、Ｌ１とかにいくのかもね」

それはつまり戦場に赴くかもしれないということだ。ヨセフは額に眉を寄せた。渋い表情しか出来ない。

「まあまあ」

その背中を軽く小突いて、トーエは明るい声を上げる。

「月に降りたら、しばらくはゆつくり出来るだろうから。私も、救助された人もね。久しぶりに一緒にお出かけでもしようじゃないか、少年、それと」

びしっと指を突きつけて、続ける。

「アラム、さん。も、どう？」

「え」

いきなり誘われて、アラムは動揺した。しかし、一人で船に残ったり、プリユタネイアー行きのシャトルへ向かうわけにも行かない。何よりヨセフが行くのならば、一緒に、というのは価値がある。

「そうですね、是非」

「よし、決まり」

「私を忘れている！」

背伸びして、アルバが憤慨する。しかし、トーエはその額をぐい、つと人差し指で押し返して、留まらせる。

「それが、アルバはちよつとね。イマダさんが後で来てくれって、言ってたよ」

「そんな、くそ、イマダめ、密航したことへの説教でもあるというのか。先に愚を冒しておいて……」

「まあまあ。話が終わったら、イマダさんに街に連れて行ってもらったら？ あの人アレで、子供とは馬が合う人らしいし」

「断る！ うう、まあいい、機会はまたあるだろう」

それは半分、自分に言い聞かせるような声だった。少し可哀想かな、

とヨセフは感じたが、何せソピステスの長である。おいそれとその行動に口出しは出来ない。

「ヨセフ、アラム、また機会があつたら誘ってくれ」

そういつて上手く笑える辺りが、アルバのアルバたるところである。そうして会話に花を咲かせているうちに、クレーターは間近に迫ってきていた。円の外周の一部が競り上がってスライドし、黒々とした穴がそこに開く。港への、内部への入り口である。

誘導レーザーに導かれて、デルフォイはその巨体を月へと降ろしていった。

#### 4 少女たち（後編）

当然のこと、と言ってよいものか、それは判断がつきかねるところではあるものの、ヨセフにしろトーエにしろ、本格的な戦闘経験というものはエフェソスの事件において始めて得たものである。それは同時に、彼らが始めての人殺しを経験したということだったが、それを深く気にする者は、少なくともデルフォイには存在しなかった。

人殺しにおける罪惡とは、何であるのか。

惡とは否価値であり、善とは価値である。それはそういう風にしてお名前をつけたのだから、揺らぐことが無い。善を惡と言おうと、その逆を言おうと、本質的に価値・否価値をそうして指すこと自体に何の代わりも無い。

そう、善は善であり、惡は惡なのだ。

何故人は、人殺しをしては『いけないのか』と問う事が可能か。若しくは、なぜそうとしか問わないのか。『何故人を殺して善いのか』と問うべきではないのか……。

問うべきではないのである。それは何でもない、形式の定まりだというより他にない。人は何故か前者の問い方しか出来ず、そもそもそれを問うということにおいて既にその本質について知っていなければならぬという、逆接が浮上する。悪いと知っているからこそ何故悪いかが問う事ができる。

そしてその邪惡さ、人殺しへの邪惡さは、人に罪科と、決定的な心理的衝撃を与える。

殺人によって与えられる影響は、相対的ではありえない。それは、起こった事実からの正確でパターンの、定まったフィードバックといえる。

ヨセフやトーエが、機体の中で味わった苦痛は莫大なものであったが、船の中でくつろぐ彼らにその様子は見られなかった。心的外傷や、それに続くストレス障害とは無縁であったのだ。更に法的な罰則も適用されるケースではないために、彼らは自身の殺人行為に對して、意識的にも無意識的にも目を向けることが無いのである。

それがどれほどに異常か。

そういつた異常さの理由を、『装甲越しに殺したせいで実感が欠如している』などという言い方で、理解できるものだろうか。それは、ナイフでなく銃を使えば誰も気分を害することなく人殺しが出来るということの無理さ加減を含んではいないだろうか。

このとき、街に降りる彼女らがそのような異常さにまみれていることに気がつけなかったのは、何故か。何がそうさせたのか。

『あるべき意識の流れ』というものが、いかにして捻じ曲げられたのか。

それについて、ある推測が立てられる立場にいるイマダは、自室で狂おしい思いに捉われていた。ヨセフはとりあえずだが、事態から引き離せばいい。それで、かれは普通の人間に返ることが出来る。ではトーエは。若しくは、あれを奪取して扱ったという敵パイロットは。

救えないのか。

罪科。そう、罪科。

個人が作り出した悪に對して課せられる罪科は、それは個人に課せられるものなのだろう。だが、そうであれば、例えば戦争。全体性や共同体が作り出した状況によって起こされる殺人は、一体誰に罪科を押し付けるのか。戦争に關与がないといえる共同体などは存在しない。航海時代が終わった時点で、地球にはほとんど、他の共同体との關連を持たない、知りえない共同体というものは、失われてしまっているのだ。

人類の共同罪科。陳腐な響きが、何かを押しつぶしつづあった。

港は、広い。

アゴラの港は、クレーターの外周に沿うように作られたハッチの先、つまり円周上の地下に存在する。

小型のものでも百メートルほど、大型のものであればその何倍かになるような宇宙船を何隻か停泊させる。それが一つ一つの港の役割であるのだから、その地下空間の広大さには尋常ではないものがある。人が宇宙に本格的な進出をしてまだ百年経っていないというのに、その躍進は月の地下に大穴を開けるまでに至っている。

ヨセフと一行は、船から降りるなり改めて月の都市というものの構造に、深く驚いていた。

月の施設は、絶えず地球とは異なる脅威に晒されている。ユダはやむにやまれぬ事情から過去につきへの移民を行ったが、二十世紀や二十一世紀には、月や火星への入植よりも完全に人工物で構成された巨大なスペース・コロニーのほうが現実的であるとされてきた時代が存在した。それほどに、月は住環境に恵まれていない。

大気が存在しないという欠点は、その際たるものの一つであると言っている。有害な放射線などの類は無論のことそもそもなぜ大規模なクレーターが無数に地表に穿たれているのかは、考えるまでも無いことだ。

そのために、都市は頑強な守りの内側に造られなければならなかった。鎧となる外郭に包まれ、さらに地表にはいくつもの対空防御システムが設置されている。レール・ガンなどの技術が隕石の迎撃という名目ではあるものの平和的に利用されている、数少ない例である。

ヨセフたちは例に漏れず、そんな事情によって造られた地下都市へと足を進めた。港から街への侵入は、ひどく容易なものだった。軍は事前に避難民の身元を照合した上で連絡を取っていた。ユダの人間はユダの統治下にある都市ならば基本的なデータが共有されて

いる。細々とした入場チェックは行われなかった。

二枚の扉を潜り、味気の無い通路を出た瞬間に、一同は突如開けた視界に眩暈を覚えた。

プリユタネイアーには数段以上劣る規模の都市。だが、地球で島国に住んでいるからと言って自分のいる土地が狭いと感じるものは少ない。それと同様に、ビルが軒を連ね、大通りが長大な姿を横たえている都市を見れば、それがどこまでも続くといわれても信じてしまいそうになってしまう。

空は、というより天井はそこに高い。上手く天然の空に偽装されており、現在は地球の時刻で昼近くだからだろう、広大な天井のいくつかの場所に取り付けられた強力な照明は強い光を放ち、擬似的な青空が演出されている。

「いい天気」

トーエがそう言う。たしかに、そうだ。これ以上ない天気である。人が宇宙で臨む、最上の晴天だと言っている。技術的な面から言っても、アゴラの天井の設備の多くがプリユタネイアーよりも後になって造られたものである。清清しさも、一際大きい。

アラムが笑顔で伸びをする。気分がいいのは、ここにいる三人共通の思いだ。閉塞感が払われ、体がリラックスする。ヨセフも開放感を存分に味わっていたし、それが当然だと思っていた。

だがいつ手にしたのだろうか、ちゃっかりトーエもアラムもアゴラの簡単な案内図や観光者向けの店などが紹介された広報用データを携帯端末に入れていた。旧世紀のように無線でそんなことが出来るわけがないから、恐らく港で、だろう。

しかし、街は当然のことながら、平時のにぎわいを失いつつあった。連合の攻撃のことは既に民間の知るところである。プリユタネイアーなどは戦々恐々だろうし、この街はただでさえ特殊な事情を持っている。

公式発表では「市長」は既に連合側の人間を排除するために動いているという。これ以上の連合の船の受け入れは拒否し、居住圏の

連合側人民は段階的な退去を命じられることになる、と。

しかし既に十数年以上ごった煮ちゃんぽん状態の街である。事件が起きてからまだろくに時間が立っていないということもあり、ユダの人間も連合の人間も自由な行動が許されていた。本格的な非難や退去命令が始まるのは、数日から一週間以上も先だと見ていいだろう。ここはそういつたいいい加減さが満ちているのだ。

「どこへ行くか決めているのかい？」

ヨセフが尋ねると、トーエもアラムもすぐに頷いた。

月における高級な食事とは、何のことは無い、地球であればそれほど高価でなくともよいような、自然的食品の多く使われた料理のことだ。日常の食事であれば不自由なく調達できるのが現代の月の町というものであるが、それでも一部の地球産の食材は、月のプラントでは調達が出来ないものである。

が、アゴラにはそういったものが集まる。貿易の町というのは伊達では無いのだ。

一流の店ではない。だが整った内装に、落ち着きある木のテーブル。

「月の民レストラン」はアゴラの中心部、『鳥魚商店通り』に存在する。ヨセフたちが最終的に行くかと予定している店舗の一つだった。

「すごい……」

アラムが商店街の入り口で感嘆の溜息をつく。ヨセフも同様の心境だった。

思わず月である事を忘れる、と、地球育ちの身ならばそう表現していただろうか。活気に溢れた商店街は、粗雑ではなくどこか上品さを残しつつも、熱気や人の情念に満ちている。すでに退去し始めている人も多いはずだろう街であるのに、そこには人ごみと形容して差し支えない情景が広がっていた。

買い物に、食事。おしゃべりと、再開の約束。ヨセフたちが行う

べきことは、そういったことであつた。それだけを言つてみれば、学生のお遊びでしかない。戦争が、遠く感じられる。しかし、ここでの別離は、間違いなくその戦争によるものだ。トーエは戦場に向かい、アラムとヨセフはプリユタネイアーで震える日々をいずれ送ることになるだろう。

そんなことは全員が分かつていた。だからこそというべきか、トーエもアラムも目一杯この馬を楽しもうという心意気だった。はしやぐことこそが、この場での正当さだった。

「うわ、わくわくする。これは大変だよ」

そう言つて、トーエはアラムとともに近くの商店へと早速駆け込んだ。続いてヨセフも入ろうとして、立ち止まる。いかにも女性向け然とした雑貨屋であつたのだ。少々気恥ずかしい。

嬌声を上げるトーエや静かに、しかしあちこちせわしく目を動かしながらちよこまかと店内を動き回るアラムの姿を時折視界に挟みつつ、ヨセフは店先の商品などを見て二人を待った。

アクセサリーや、置物の時計などを眺めつつ、仲の良い姉妹のような二人を見るともなしに見る。トーエの快活な接し方に、アラムも戸惑いつつも笑顔を返している。

トーエは大抵の人とすぐに仲がよくなる。ヨセフが過去に良い友人となれたのも、彼女のそうした人物特性が良い方向に働いてくれたのだと、ヨセフは思っていた。実際にはトーエはまるきり同じことをヨセフに対しても思っているのだが。

「あ、わわ」

慌てたような声が、耳に飛び込む。

振り返ると、雑踏の中、人並みに押されてよろめく人影が一つ。ヨセフはそれが自分の近くであることを見て取り、反射的に手を伸ばしていた。

軽く、淡く。

存在感の希薄な、それでいて印象深い。



腕に流れ込む感触に、思わずヨセフは言葉を失ってしまった。  
「す、すみません」

腕の中の人、少女が、詫びつつヨセフの腕を掴んで、体勢を立て直す。

トーエよりも更に少し幼いか。ヨセフの一つ年上であるトーエよりも二つ三つ下であると直感が告げる。震度の深い海のような暗く清んだ瞳と、全身から発せられる常人離れした、どこか浮いた印象が特徴的である。

「あの」

呆けていたヨセフに、少女が更に投げかける。

「ここ、『鳥魚商店街』、で合ってますか？」

「え？」

疑問符で返してしまう。すぐに繕って、表情を引き締める。

「そうですよ。ここから向こうにずっと続いているみたいです」

慌てながら答えると、少女はその頬をほころばせた。

「よかった」

ひどく無垢な笑顔であった。思わず疑問に思ってしまうほどである。一体、どういった人間がそういった笑みを作ることができるのか、と。

安堵の表情。見た目の年齢以上に幼く見えるともいえる、そういった顔だった。

「お待ちせ、ヨセフ。何で中に入ってこなかったの、って、その人は？」

対照的に、実感を伴った明るさを持った声がかかった。トーエとアラムが、外へと出てきていた。

「ああ、何だか、ここがどこだかって、尋ねられてたんだ」

少女との邂逅に、ひどく狼狽している。自覚して、ヨセフは内心首を傾げた。なぜそんなに心乱す必要があるのか……。

「ってことは、避難民の人か、何か？」

住民なら迷ったりしないのだから、とそう言う意味で、トーエが少

女に向かって問いかけた。

少女は一瞬驚いたようなそぶりを見せた後に、

「ええ、そんなところですよ」

とだけ答えた。

「へえ……ヨセフやアラムのほかにも、街に出た人がいたんだ」

多くの救助された民間人たちは、プリユタネイアー行きのシャトルに乗るためにアゴラについてすぐに別の港に移動するか、戦艦の中で時間を潰していた。アゴラの中は日常的な風景が広がっていても、救助民は悲惨な戦闘を体験してきてしまった上に、その多くは知り合いや親類がいないか、失ってしまったかのどちらかである。ヨセフのように連れ立って街に出た人間は必然的に少数派だった。

そういつた事情もあって、また、その少女のどこか頼りなさげな雰囲気もあってだろう。トーエは、一つ提案をした。

「ね、私たち、これから少し観光するんだけど、一緒にどうかね」  
唐突といえばこれほど唐突な誘いも無い。だが、トーエらしいといえ、らしい行動だとヨセフは納得した。そうした唐突さに嫌味が全く匂わないのが彼女の特徴なのである。

さすがに少女も驚いたようだった。

「え、でも、お邪魔じゃ……」

「いいーよ。避難民だって言うなら、最終的には同じ場所でシヤトルに乗らなきゃいけないわけだしね。ヨセフやアラム、あ、こちの二人の事ね、この二人とは一緒に帰ることになるだろうから作れる縁を無視するのは勿体無い、と笑う。

ともすれば見境なしの縁というもののつなげ方は、ことトーエに関しては外すことがない。つまりは、悪辣な縁を結ぶことはない。人の本質を直感する人間であると、トーエにそうした評価を下す人間は多いのだ。

少女はなおも迷ったようだった。しかしそもそも一人で見知らぬ街を歩くことの不安もあったのだろう。トーエの透き通った笑顔にやがてこっくりと頷いた。

「よし、けつてーい」

そうして一行は四人になり、再度混雑した商店街を歩き始めた。

\*

イニシユモア号、正確には中型戦闘艦エンガスは、月の上空を急ぎ足で飛ぶ羽目になり、各部のガタを無視して任務に集中しなければならなかった。

イニシユモアという勝手な名称の親である（余談であるが、その愛称は作戦時の個別名称として軍部に正式登録が成されている）ミツヤは、艦長用のシートに腰掛けつつも、せわしく足を組み替え、時にシートの肘掛を指で軽く叩き、つまりは焦っていた。

「追いつけますかね」

ミツヤとは別の、通信士が呟く。イニシユモアはひどく自由な気風の漂う船であつたから、誰も咎めない。

「追いつくだけなら、そりゃ何とかなるだろうな」

それに対して、操舵を一任されている男が答える。どこか不貞腐れた目つきの、いつそ不良めいたと表現するのが正しそうな男だった。「問題は」

その声にかぶせて、ミツヤは何度も思い返したことを口にした。しなければならなかった。

「確実に妨害があるだろうってことだ。どこでは知らないが、目的に達するためには見事それを抜いてみせなければならん」

イニシユモアはポピュラーな戦艦だった。そこそこの火力と機動兵器の搭載数を持ち、足も速い。

が、今回下された任は、高速輸送艦の撃墜、それにある機密の回収だった。

軍の試作機という名称だけが嫌な輝きを放つデータの資料には、確かに見たことの無い戦闘機らしきものが映っていたが、たった一機の試作品、それもほとんど奪われてしまつて取り返しがつかない

と言つてもいい物をどうにか取り返せというのだから、それがただの試作機であるはずもない。

恐らくは重要な新技術の搭載されたものか、或いはそれだけではない、何かが……。

「たつた二機ですか？」

操舵の男が不満げに呟く。

そりゃ俺がききたいよ。ミツヤはうんざりとしながらもそう答えることはしなかった。

「……妨害の規模も輸送艦の戦力も分からん。何も絶対的に不利つてわけでも無かるうさ」

「だいいいですがね」

外へと目を動かす。ブリッジから見える、斜め前方には同型の戦艦が一機だけぽつんと浮かんでいた。

戦艦二機での追跡。しかも敵は月の上空を逃げている。追いかける側としては、相手の妨害部隊に察知されやすいことこの上ない。

「目標の輸送艦、前方に視認しました。ですが」

「なんだ」

「月表面から、敵部隊、接近しているようです。確認できるだけでも機動兵器が五機、母艦らしきものも一つ見えます。更にクレーター付近の港がいくつか開放されてますね」

ブリッジ前面のモニターに詳細が写される。足元近くのクレーターから敵が飛び出してきている。

「アゴラだな」

操舵士の不満げな呟き。

「どうしようか」

通信士の平坦なぼやき。

うんざりだ。うんざりなんだよ。ミツヤは顔を手で覆って、指示を飛ばした。

「名前は？」

ときいたところ、少女は一瞬だけ間を置いてから、静かに答えた。

「セシルです。セシル・フロツワフ」

フロツワフ。ロシアかどこかの家名だろうか。トーエはそれを聞いて、彼女をセシルと呼ぶことに決めていた。

その姿に何か奇妙さがあつたわけではない。しかしトーエもヨセフと同様に、かどつかは本人たちには全く分らないことであつたが、ともかく彼女に対して何か違和感というべきか、奇妙な感覚を覚えていた。

しかし、トーエの抱いたその気持ちは、気持ちの悪いものではなかった。むしろ逆である。

親近感？親しみなどと、馴れ馴れしいはずだが……。

しかも、実際に話してみれば、何のことはない普通の少女である。律儀で、丁寧で可愛らしい。変な感覚などとは別に、好感の抱ける人物である。

安物の時計を陳列した棚の前で視線が彷徨い続けているセシルに、トーエもアラムも、ヨセフまでが世話じみたちよっかいを出すのも、彼女の性格というか、人品に触れていれば当然のことだった。

「これは？ この赤いやつ。肌が白いから映えるよ」

「このこつちのは？ 小さくて可愛い……私も一つ買おうかな」

「これなんか、どうかな。水深二十五メートルまでの防水って宇宙では何だか笑えると思うんだけど」

最後のヨセフだけがずれている気がしないでもない。

セシル本人はといえば、真剣に薦められた物を吟味している。このような商店街はトーエもアラムもヨセフも初めてだったが、その三人よりも更にセシルのこのショッピングの楽しみ方というのは真剣で、どこか微笑ましいものだった。たまに家族で出かけた時の幼い子供を連想させる。一生懸命なのだ。

そのことでくすくすとトーエが笑うと、セシルは敏感にもそれに

気が付いた。

「あ、なんですかトーエさん！」

「いや、何か子供みたいだな、って」

「え」

自分のはしゃぎように気が付いたのだろう。赤面して、顔を抑える。が、その両手には時計が握られたままだ。

「凄く同感。あ、ほらほら」

アラムまでがそう言つて、笑っていた。セシルの左手の、上品な赤色の時計をはめてやる。

どうやらトーエのセンスは間違つていなかったらしい。赤く塗装された金属の冷えた色が、セシルには似合っていた。

「もう」

おちよくられて冗談ながら、セシルも怒つてみせる。が、一瞬後には四人揃つて笑いながら店員へ会計を頼む。人のよさそうな店員の老人は、少しばかり値を負けてくれた。

その後は皆で連れ立ってレストランへ。実際レストランというのは少し言いすぎな、こじやれた大衆食堂でしかないのだが、そのほうが今の四人にはありがたかった。格式ばった場所では、友人同士と今しがた仲良くなつた人間たちが盛り上がることは出来ない。

「今日は、凄く、楽しかったです」

頼んだ料理が持つてこられるまでの間に、噛み締めるように、セシルはそう三人に告げた。

「そうだね。楽しかった」

それに続いて、ヨセフも同意する。

「私、こんな場所も何も、初めてで……皆さんに一緒にさせてもらつて、本当に良かった」

そういわれれば、今度はトーエが照れる番である。半ば強引に誘つたのはトーエだったし、その理由すら本人の中では曖昧なままだ。

「また、来ればいいよ」

何気なく、アラムが提案する。

「今は慌しいけど、戦争が早く終われば、またこうしてここで集まることも出来るだろうし」

それは、多分この場にいる全員が望むことだった。戦乱に接してすぐの後にこうして平和的な情感を味わってしまったのである。

「そう、ですよ。また、きっと」

「まるで、何十年後かみたいじゃない。三人はまたプリユタネイアーに帰れば、一緒でしょ？」

何か今生の別れのように言うセシルがおかしくて、トーエは当たり前提案をした。

「私もすぐに帰れるだろうし」

「そうなの？」

ヨセフが反応する。トーエは苦笑した。彼に嘘をつくときだけは上手くクリアな笑顔にならない。

「所詮テストパイロットだからね。ミレトス家って、ああ、ヨセフも聞いたんだよね。あの家の名前があるから、そうそう無茶なことはさせられないよ」

実際は、トーエ自信が前線に出ることも承知している上に、そのミレトス家事態の要望もあって従軍したわけだが。

しかし、その話を聞いて、ヨセフが不安げに目を伏せるよりもはつきりとその表情を曇らせたのはセシルだった。

表情を一変させて、驚愕の中に不安さのような影を走らせていた。引きつっているともいえるだろうか。

「どうしたの、そんな」

そんな、愕然として。だが、最後までセシルも言わせなかった。

「いえ、その……トーエさんが軍人だって、知らなかったから。残念、だし、心配だって」

「ああ……そうか、ごめん」

「いえ、違っんです、そんな、悪いなんてことじゃ」

「分かってるって」

ぐりぐりと頭を撫で回す。小さめの頭がトーエの手にはちょうど良

く、心地よい。その行為一つで、その場の妙な空気は流れてしまった。

あとはただただ何てことはない、学生同士の楽しい食事である。テーブルにかつてきた物を並べての寸評会。珍しい食材に驚き、恐る恐る皆で挑戦する。

笑い。辛さに弱いヨセフが本格的なチリソースに悶絶し、珍しくアラムが大笑いする。

トーエは対照的にけろりとしたままで何でも食べ、周囲を驚かせる。

しかしそういった中、セシルの表情の端、誰も気が付かないほど微細なところに、形容しようのない影が蠢いていた。そして矢張り誰も気が付かない。そういったことを隠すすべには、セシルは不要なほどに長けていた。



## 5 カナン（前編）

### 5 カナン

イマダは眼前の少女に、どう説得を試みたらいいかと考え、やがて諦めた。そんな方法はない。それに、そんなことが出来ても何の正当さもそこにありはしないのだ。

それでも、苦し紛れに問いかける。

「何で密航なんてしたんだい」

少女、アルバは、今だの部屋に来るまでは歳相応の不満げな表情だったが、今は既に掻き消えている。かわりにその端正な顔立ちの上には、どうしようもなく冷たく、尖った気配が上塗りされていた。

「分かっているだろう。『扉』を軍に使わせるわけには行かなかった、だから、阻止しに来た」

「無茶だろう」

さすがに驚く。こんな、十二、三の子供が、あの完成した試作機をどうしようというのか。

「君は」

子供だ、と言おうとした。

「私はソピステスの長だ。責任と覚悟だけでは足りない、誰もが私を裏切るならば、実行力が必要になる。自分の手足を使っただのは、文句を言われることではない」

開いた口が言葉を霧散させて閉じてしまう。

（これが、ミレトス家……、いや、アルバ・ミレトスというべきか）英才教育の賜物が、受け継がれてきた天性の賢しらか。アルバという少女は、己が使命のためになると、恐ろしく賢く、強い。

「……そのソピステス自体や、政府、軍だって君の行動を快くは思っていない」

「だろうな」

ふ、っと、目を伏せたアルバに、倦怠感が、諦観のようなものが見え隠れする。そしてその小さな口が開く。

「そもそも、『扉』を軍事や政治に利用とした愚かしさそれそのものが、ソピステス内部から出たものだ」

自嘲するように、軽い笑い。

「イマダ、お前は知っているのか。元々ソピステスは、はるか昔、地球に住む人間の一部がその聡明さを発揮した結果生まれた、単なる思考・直感者の集団だったのだ。人とは何か、存在するとはどういうことか、生とは、死とは、意味とは何か。言葉とは一体何たるか……誰もが生きることだけに明け暮れる中で、その根本に驚き、現象それ自体を考えつめようとした人々。自然に驚き、星星や大海、空や山々に畏敬を抱き、それ故に考え続け、正しき人として生き、死のうとした人々！ だがしばしば彼らは人々の共同体の中で孤立した。当然だ。人がそれと信じて疑わず、善悪正邪を無視することが土台になり、その上で安寧を得ているのが社会というものだ。根本的な思考とは、それら社会にとって致命的な毒に他ならない。

何故ソクラテスやナザレのイエスが殺されたか。それこそ彼らが天才であり、社会にとって致命の毒であった証左だ。人を賢しなものとするでないものに分ければ、後者が圧倒的に多いのは明らかだろう。正しさとは、常に大衆にとって恐ろしい敵だ。

そうした中で、ソピステスの祖先たちは、寄り集まった。個々人において既に絶対的に満たされることの出来る彼らが集まったのは、彼らの正しさゆえだった。つまり、自分たちだけが幸福な人間になるということは出来なかったんだ。人全体に正しさを発してこそ、正しく生きることが出来る。彼らにおいて自らだけの幸福、というものは論理形式としてありえなかった。そうして集団を作り、彼らは身を隠しながら、考え続けた。

そもそもソピステスという名称は、ソフィスト（詭弁者）の複数形だ。元々は正しく知を働かせる者の意であったこの語は、数多く

現れた思考者ぶった否思考者、つまり詭弁論者の出現で悪名となった。それに伴い、『元々』ソフィストの名をあてがわれていたソピステスは、詭弁家と同時に追い立てられた。ソピステスは、そう、<sup>フィロソフィア</sup>愛知者の名が相応しい人間たちだったのだ。正しい意味でのソフィストが我らの名だったのだ。政治的組織でもなければ軍事的組織でもない！ ソピステスは、数千年の歴史の中で唯一穢れ無き組織だった……それが」

ぎろりと。イマダに向けられた視線は、怨嗟に満ちていた。

「それが、月にその身を移して数十年で、この有様だ。純粹な賢者たちの集まりのはずが、その内部には官僚や軍人が入り込み、拳句の果てには、ソピステスの所持する機密、『扉』までが軍事利用される始末。わたしが先人たちの唱えた正しき『扉』の運用法を叫んだとき、メンバーたちはそれを戯言と跳ね除けた！」

「しかし国家の安寧にはそれが」

「そうやって考える振りをして、お前たちは数千年間飽きずに戦争を続けてきたのだろう！ そんな人類をどうにか変革しようというのが我々ソピステスだったのだ！」

イマダは、はつきりと宣言する少女の何倍も、自らが幼いと嫌ほどに知っていた。泣けてくる。これが、凡人ということなのか……。

「私はソピステスの正当な後継に値する人間だという自覚が、確信と言ってもいい、それが、ある。その私の言葉を聞かず、政治と軍事に介入し始めた、いや、され始めたこと自体、すでにソピステスが消え去ってしまったことの証拠だ」

「消え去った、証拠？」

「そう。すでにソピステスは腐った政治の、いや、もっと大きな、『変わらない人々』の道具にすぎない。だから私は」

一拍おく。その行動を咎めるためにつれてきたというのに、ソピステスの一員であつたはずのイマダは、この少女に『吞まれて』いた。「私は、この事態を收拾したい。私なりに。私と、私の周りの賢き者だけが、今のソピステスだ」

＊

ラゲルは常々思っていた。物足りない……。

「どけてんだよ」

今日も相変わらずその想いが胸を占有していた。苛立ちを手足の微細な動きに変えて、機体の操作に神経を向ける。すれ違いざまに敵のウルゴスを胴体から二つに引き裂いて、嘆息した。

ラゲルの駆る機体、コリユーンは、他の一般的なそれとは異なる仕様を持った機体だった。本来無駄な凹凸が見えないように設計された美しい流線型のボディの中ほどからは、細長い二本の棒が生えている。その見た目から軍の仲間には触覚と呼ばれるそれは、中近距離において比類なき威力を誇るレーザー砲だった。付け根の部分でフレキシブルに稼動して、バルカンやミサイルのカバーできない状況に対応が出来る優れものではあるが、そもそもレーザー自体まだ技術的に未成熟なものであり、量産化には至っていない。扱いづらい試作品を実践で活躍させることが出来るのは、ラゲルの天性の腕と経験があつてのことだった。

「かつ」

笑いを上げて、少々気が晴れたと喜ぶ。ばらばらになった敵の残骸がゆっくりと落ちていった。

アゴラの上空は、本格的な戦闘に突入している。

連合の高速輸送艦を追う二機のエンガス、そこから放たれた十機ほどの小型機動兵器は、月面からその進路を妨害するように浮上してきた連合の機動兵器と衝突を繰り返していた。

ラゲルはエンガスの片方、イニシュモアから出撃したパイロットであり、同時にユダの中でも一際優秀で、キワモノだとされる人物であつた。

爛爛とした眼光を宿す典型的な三白眼が輝く。連合の機体は数が多い。彼にとっては狩猟の獲物が多いということとほぼ同義だった。

月面からエンガスの進路に半球面状に展開して立ちふさがる連合。急ぐ身としてはすぐに切り抜けなければならないが、さすがに数が多い。エンガスの艦長たちも無理な任務遂行は諦め、今はこの宙域の占拠を優先しろと命令を下していた。

それが、気に入らない。

敵がアゴラに伏せておいた余剰戦力を小出しにしていたら、ここはなんとしても突破を志すべきであると、ラゲルは判断していた。そして不幸なことにパイロットとして優秀すぎるラゲルは艦隊責任者などにはならず万年パイロットであり、大抵の上司よりは的確なその判断力も、生かされることが少ない。

「無様な背中を晒して、ちょこまかと！」

攻撃を外し、体勢を整えようとulgosを見て、吼える。旋回能力でもコリューンに劣るulgosは、苛苛するような、いや、苛苛するそのとろさでのろろと方向を変えている。

容赦はしない。する必要がない。

ラゲルはトリガーを立て続けに引いた。

一機がミサイルで。もう一機がレーザーで。その最中に接近した一機をバルカンで。

ほぼ同時に三機。苛立つ内心とは裏腹に、絶対調だった。

「敵は新型を奪ったって話じゃねえか」

しかもその新型ときたら、これは奪われたものではなく『噂の』民間人が操った機体の話だが、変形までして見せたという。

実に愉快的話だった。ユーモアに富みすぎている。

変形？ 拳句の果てには人型ロボットなどと

「最っ高だな。俺によこせて言えば、軍部はどんなお叱りをくれるのかね」

ひとりごちて、次の敵を引きちぎろうと索敵に気を回し、そこで母艦からのレーザー通信が入る。短距離限定で、妨害も少ない通信法だが、旧世紀の長大な無線に比べればお粗末なものだ。

『絶対調だな、エース君』

ちつ、と我知らず舌打ちしてしまう。ラゲルは顔をしかめた。

通信相手、ミツヤは、ラゲルにとって見れば青二才以外の何者でもない。若く、浅く、弱弱しい。

しかし野心なのか使命感なのか、ともかく指示を飛ばし統制することだけはしっかり行おうとするのだ。鬱陶しいことこの上ない。

『突出しすぎだ。今更お前にフォーメーションだとかそんなことは言わんが、あまりアゴラの表面に近づきすぎるな。あれはユダの都市だぞ』

お前？ お前ときた。お前か、こいつはひどい。

「所詮頭のいかれた『市長様』の小さな王国でしょうが。少しばかり壊れてどうってこともない」

『今あそこにはデルフォイが停泊しているんだ。それにどの港から敵が強襲してくるか分からん、お前だってそんな危険は』

無視して、スラスターを噴かす。強烈な加速で景色が変わり、照射されていたレーザーも外れることになる。

聞く必要の無い話だ。そうラゲルは判断して、また戦闘へと戻っていく。

（くそ、気分を途中で途切れさせやがって）  
気に入らない。せつかくのつてきたところだというのに。

不満を溜め込むラゲルの眼下、クレーターの淵が数箇所せり上がる。ミツヤの忠告どおりに、敵は複数の港に潜んでいるというわけだ。

「醜い魚は、いつも深いところにいやがる」

接近をかける。適当にミサイルをばら撒き、牽制しつつ、機敏な動きを見せつける。

出撃直後を狙われてどよめく敵の一機に狙いを定めて、レーザーを発射する。

高速で接近するそれは、発射されてからの回避が難しい。如何に発射予測が立てられるか、という点が肝であるのだが、ウルゴスのパイロットはその熟練が足りなかった。

レーザー光が敵機に刺さるといよりもなぎ払うといったほうが近いような形で直撃する。爆散する機体の陰にすぐに入り込み、他の敵の射撃をかわす。

「遅いなあ！」

子供相手のドッジボールのようだった。機体をロールさせて悠々かわし、真正面から突っ込んでいく。相手もそれを見て機体を横に逃がそうとするが、そもそも戦闘機というのはそんな直角に曲がるためのものではない。間に合うはずが無かった。

「触覚」からレーザー光を短く数度に分けて出し、敵の脇スレスレを通り過ぎるそのタイミングで砲身を振り回す。

遠くからそれを見たものには、まるでアメコミの中のワンシーンにでも見えたのではないだろうか。ライトサーベルだかビームサーベルだかあるいは光の剣、何でもいい。そういった武器のように敵を切り刻んだように見えたはずだった。

それは勿論兵器開発者の意図した使い方ではない。そもそも非効率的もいい戦い方だった。

つまりは、お遊び。ラゲルの悪趣味の具現だった。旧世紀のSF映画が戦争の次に好きだというのは、彼の友人なら誰でも知っている。

更に二機。別の港のハッチから出てくる。

「子バエか、貴様ら」

いい加減うんざりしてくる。十二個のクレーターの淵に作られた地下港は、そのまま排水溝をイメージさせる。ラゲルは地球の、あまり衛生的ではない環境での生活にも慣れていた。前戦争をたっぷり体験した世代であり、地上、宇宙の両方で適正が高い稀有な人物でもあるのだ。

その場の思いつきで、ラゲルは今しがた敵が出てきた港をモニター上でマーケティングする。

（元をたたねえとな）

思いついて、歓喜する。いいアイデアだ。シンプルで、経済的だ。

ラゲルは単機で、更に月表面へと近づいた。港そのものを破壊するつもりだった。敵が使っている港が分かれば、まあ、そこは攻撃しても問題ないだろうというのが、信じがたい感性を持った彼の認識だった。

敵が飛び出した港のハッチはまだ閉じていない。これならいけると確信して、ラゲルは出てきた敵二機に同時に集中する。

ロックオン。ミサイルが直線的に接近する。回避に動いた二つの光を、レーザーが貫いた。

月の重力に引かれて、落下する。その大きな残骸が、一つ、開ききっていた港のハッチへと吸い込まれた。

ややあつて、内側から爆発が起こる。開いたままのハッチから光が溢れる。

「チップ・インだ！ はは、それともピッチャー返しか！」

興奮して、笑う。もう一機のほうは惜しくも、二つに折れ飛んでクレーターの中心辺りに落ちてしまった。が、一機が成功しただけでも奇跡的である。

これを観測して、母艦であるイニシュモアの艦長ミツヤは青ざめて立ち尽くしていたのだが、それを思いやるラゲルではなかった。手を打ち鳴らして、純粹に喜ぶ。

そうしてひとしきり嬉しがってから、バイザーを上げて目尻の涙をぬぐいつつ、ラゲルはポツリと呟いた。

「ああ、あのクレーターって街の天井なんだっけか」

強固とは言っても、たかだか天井である。月の弱い重力でもウルゴス一機が直撃して、大丈夫だという保証はない。撃墜時に大いに加速されたものだったのだ。

「まあ、いいだろ。戦争なんだから」

ラゲルは、そう言う男だった。意味不明に素直なのである。



勿論、何一ついいということは無く。

アゴラに走った振動と衝撃音は、その管理者と住民の全てを脅かした。大地、天井、側壁、その全てがけたたましく揺れたかと思えば、街の中央部、一際賑わう辺りの天井の灯がいきなり落ちる。照明が消え、一角だけが薄暗くなった不自然な風景の中、不気味な音を立てて暗い天井が、たわんだ。

レストランから外へと駆け出して、ヨセフたちが見たのは正にそれだった。広大な天井の中心が、目に見えて変形してしまっている。にわかに、少し筒ではあるものの、住民たちの中でパニックが広がり始めていた。戦争が再開される、という状況の中かろうじてこれまでの平穏を保っていたアゴラだ。エフェソスの事件に続いて自分たちが第二の被害者に、という意識は潜在的に広がっている。

狂乱。混沌は、吼えたけり、だ。

しかし、軍人たるトーエの対応は、さすがに冷静で素早いものだった。すぐに腰から携帯用の通信機を取り出して、デルフォイへと連絡を取る。その反応の的確さと素早さに、ヨセフは驚いていたが、その視界にもう一つ異質な動きが含まれていた。

一般人とは異なった対応、表情をするトーエと同じような顔で、なにやら小さな端末らしきものの画面を見つめている。セシルだった。

（なんだ……？）

疑問が浮上する。彼女は何を、と一瞬だけ考えるが、それはすぐにかき消される。

「アラム、ヨセフ、デルフォイに戻るよ！ アゴラの上で戦闘が起こってるって」

「戦闘？」

引きつった声で、アラムが返す。未だエフェソスでの一件が尾を引いているこのタイミングである。ヨセフも似たり寄ったりな心境だった。

「何故デルフォイに？ プリュタネイアーへのシャトルへ急げば…

……  
そう疑問を投げかけたヨセフだったが、同時に甘い考えとも気が付いていた。戦乱に巻き込まれた民間機など、不安定さの具現ではない。

「デルフォイの港が近いし、ヨセフたちが搭乗予定の港はすぐ近く  
の港が攻撃されてまともに動くかどうか分からない！ だから」  
だから、また戦艦へと。言葉が棘を持つ。皮肉だった。

「……だから、早くデルフォイへ」

このときにはトーエ自身にも出撃命令が下っていた。いつ連合が隣の港から船を攻撃に来るか分かったものではないのだ。クレーターの上ではユダが善戦しているということだったが、それも輸送艦の追撃任務を失敗させられていることの代わりでしかないのだ。

「分かった……」

と、言つてすぐに、ヨセフは目を見開いた。セシルが、三人に背を向けて走り出していたのである。ちらりと見えたその顔にはヨセフたちとは別種の焦燥感が浮かんでいた。小柄な体躯を揺らして、通りを走り抜けていく。

「セシル！」

叫ぶが、振り返らない。

と、大地が揺れる。

悲鳴が上がった。ついに天井の一部が崩落してきたらしい。人々の叫びや慌てふためいた息遣いは、それはそのまま見えないタイムリミットであるかのようにだった。

「くそっ」

何故か。何故だか、ヨセフは彼女に何かを感じ取っていた。

それが、その足先をトーエやアラムとは別方向へと向けさせた。

「ヨセフ！」

アラムが今度はヨセフに声をかける。

「トーエ、アラムを頼む！」

「ヨセフ、何を」

「セシルが」

指差す。トーエモアラムも事態を飲み込んだようだった。

「でも、危険だよ!」

それはその通りだ。トーエモアラムも、見知ったばかりだからと言って人を軽く見るような人間ではない。それは分かっていた。

しかし、今は状況が特殊すぎる。こんなときに、一人わけの分からない方向へと走り出したセシルを追うなどということは、お世辞にも正しい選択とはいえない。

が、そうであっても、ヨセフに淀みは無かった。

「すぐに戻る。だから、二人は先に船へ! 大丈夫、間に合わなくても、他の港へ行けば予定のシャトルだってあるし、なんとでもなる」

「ばか、無茶だってことが」

アラムの悲鳴じみた声を振り切って、走り出す。エフェソス以来、彼女に対しては、そんな仕打ちばかりだった。罪悪感が内臓をかき回す。

(だけど……!)

彼女は、セシルは、ここで一人いかせてはならない。

常識的に考えて、彼女が一人で行動するのは危険でしかないし、彼女が避難民であるならばヨセフたちと共に行動することが条理である。

それに加えて、ヨセフは更に深い部分で、彼女に追いつかなければならないと直感していた。

それは、あの兵器に乗った際、相手の動きや操作方法が、論理を飛ばして『分かってしまった』その感覚に似ていた。

(僕は、頭がおかしくなったのか?)

そういうことなのかもしれない。

それでも足は止まらなかった。

すぐに息は切れる。体力なんてものは、最低限しかない。元々出来損ないでしかない、体の全ては『扉』に合わせてチューンナップされていると言っている。そのせいもあって、中々体力がつかない。こんなときにはそれがもどかしい。

様々な煩わしさが頭の中を過ぎ、カナンは唇を噛んでそれに耐えた。

自制しろ。

自らに言い聞かせる。耐えなければならない。

大通りを抜けて、路地に入る。ビルが無機質な壁に圧迫されて空気が滞っているような印象を受ける。

港に急がなければならぬ。ここで包囲、殲滅を受けてしまえば、自分も仲間も命はない。更にユダが追撃を成功させれば、せっかくの苦勞が泡と消えてしまう。ラバンやマイヤーが命を賭したのに、それが自らの遅れで、無駄になってしまう。

矢張り、静かに待機していればよかったのだ。馬鹿みたいに浮かれて、身の程も弁えず、遊び呆けた結果がこれである。自身を苛むより他にない。

ユダがこれほど迅速に対応するとは、連合側も思っていた。アゴラに隠れていた友軍で見逃すことなく敵の追撃部隊を補足したのはいいが、その上で敗北してしまっただけでは意味がない。

港へ。母艦へと急がなければならない。萎えそうになる足へ叱咤を飛ばして、無理矢理働かせる。が、酸欠気味で視界にも注意がいていなかったのか、カナンは軽い下り坂に差し掛かった途端に転倒した。

血が滲む。膝をすりむいたに過ぎない、それも月の重力下で、だ。大したことではない。

だが一度止まった手足は疲労を最大限訴えてきていたし、痛みや心臓のオーバーワーク気味な鼓動は、まとめて一つの大きな苦痛へと変わる。

涙が滲みそうになる。情けない、とカナンは呟いた。  
ゆつくりと。壁に手をつき立ち上がって、前を向く。  
そこに、彼がいた。

「セシル！」

\*

呼びかけに応えて、開かれた瞼の中、瞳の中心が収縮する。

跳ねるように走って、息が荒れた頃に、ようやくセシルに先回りすることが出来る。月表面での運動にはなれていたし、彼女は見た目からして運動には向いていない。当然だった。

ヨセフは軽く二度ほど短く息をして、呼吸のペースを整えた。

「セシル、僕たちの乗ってきた船が、港にある」

先に何故あの場から走り去ったのか、それを問うべきかも知れないと、そんなことを感じながらヨセフは続ける。

「一緒に、来れば」

「出来ません」

はつきりと。あまりにはつきりした拒絶に、ヨセフはたじろいだ。路地の中で、セシルの背筋が伸びる。体勢を立て直した彼女には、先ほどまでともに遊んでいた少女とは別の、鉄の煌きのようなものが感じられた。

「私は、いけません。みんなだけで、行ってください」

極めて平静な声で、セシルはそうヨセフに告げた。

セシルにしてみれば、追ってこられたこと自体が信じがたいことだった。非常識にもあの場を走り去ったという感覚はセシル自身持っているものであったし、それに関して罪悪感も感じているのだ。

「みんなだけって……」

戸惑い、思考が宙を泳ぎかける。

「セシル、民間の港はもうどうなっているか、これからどうなるか、分かったものじゃないんだ。僕等の船は、軍の戦艦だ。ここを切り

抜けられる確率が高いし、安全に清めば」

「駄目です」

にべも無く断った、その顔にはほんの少しだけではあったが、悲しみが滲んでいた。が、すぐに消えた。

「私、行くべきところがあるんです。ヨセフさんたちとは違う場所です、一緒には、いけない」

「行くべき……？ bekitte、この状況下でやるべきことなんて」

「あるんです。逃げるんじゃない、別のことが。だから、ヨセフさんは、自分の場所に帰ってください」

「セシル！」

再び駆け出しそうになったセシルを手で制して、ヨセフはその進路上に立ちふさがった。そこで行かせてはならないという、直感、そう、『直感』が働いていた。

「……どいて下さい」

こんな少女であつたのか。疑問が、ヨセフの脳裏を満たす。

素朴で、歳相応で。

そういつた少女への印象とは、ずれが大きい。しかし、だからといって引き下がって言い訳ではない。一刻を争う危険な状況で、みすみす少女一人を危険な状況に送り出していいものか。

ヨセフは自らのとっている行動がひどく常識的で、矛盾のない判断だという実感とともに、実はその正反対なのではないかという疑念も持ち合わせていた。

「……どこへ、行くつもりなんだ」

「言えません」

自分は止めなくてはならないのか。それとも行かせてよいのか。単純であつたはずの問題、ただセシルを安全な船へと導くだけであつたはずのことが、今は全て茫洋としたこととして捉えがたいものになつてしまっている。

この子は、一体、誰だ。

「さようなら」

歩き出したセシルの方に反射的に手を伸ばして、しかしそのヨセフの動作は半ばで停止した。

固い感触。冷たく、鈍く。

息をするのも忘れて、それを見つめる。

「……セシル……」

拳銃だった。首筋に押し当てられた黒い樹脂性の銃身が、僅かに見える。

混乱が竜巻のように心中を巡る。が、一方では納得するような実感もある。別々の実感が、ヨセフを更に乱す。

「本当に、楽しかったです。皆さん、良い方ばかりで。ほんの少しの時間でしたけど、あんなふうに遊んだことは、無かったんです」何を。言っているのか。

「大事な思い出です。だから、それを駄目にするようなことには、したくないんです」

その発言は、間違いなく単なる少女のそれであった。

伏せた目の、その端には暗い影があるばかりである。

「今日は、有難うございました。皆さんにも、伝えておいてください」

そう言い残して、今度こそ遮られること無く、歩み始める。

首筋に余韻を漂わせる銃口の香りが、ヨセフの動きを止めていた。あれほど必死に止めようとしていたのに、拳銃一つで魔法にでもかかったかのように、動けない。

セシル、『ヨセフにとつてのセシル』が道の向こうに消えてしまつてから、ようやくヨセフはずるずるとその場にへたり込んだ。

決定的な間違いを犯した。そういった思いが、胸の中を満たしていた。何か取り返しのない、選択の誤り。後に大きな波となる、そういったことが。

誰に苛つけばいいのか分からず、ヨセフは地面を殴りつけて身を起こした。

だから、それを駄目にするようなことには、したくない……。

いつまでも、熱を伴ったその声の響きが、消えようとはしなかった。



## 5 カナン（後編）

舌打ちがコクピット内に反響する。いくらなんでもひ弱すぎだと、ラゲルは不条理に対して心の中で舌を尖らせて抗議した。

が、実際のところ、それはラゲル一人の意見でしかない。客観的立場、例えば専門の技師などがいたならば、あんたのほうが非常識なんだと面と向かって言い切っていただろうか。

ラゲルの乗る特別仕様のコリューンは、軽やかな曲芸で敵の港を一つ潰した後、更に数機の敵機を撃墜したものの、その勢いを失っていた。理由は単純で、無軌道な戦闘を続けたために武装やスラスターのエネルギーや燃料が不足し始め、その隙をつかれて損傷まで負ったからだった。

イニシュモアは位置的に遠く、どうしようかと悩んでいる最中に足元からデルフォイが発進してきたのは、ラゲルにとって好都合だった。故に、彼はほとんど一方的に入用だと伝えてその戦艦へと接近し、無理矢理に着艦までしてみせたのだった。

「もうすこしもたん物かね、コリューンってのは」

その上で、コクピット内で一言不満を洩らすのだから、デルフォイの乗員にとって見ればちょっとした災厄である。

格納庫に降り立ったラゲルを見る整備士たちの視線も、どちらかといえば暗いものが多かった。が、戦闘中である。特に気にしすぎるような者もない。

そしてラゲル自身も、他人様の領内だからと身を小さくするような男ではない。不貞腐れたような足取りでじろじろと辺りを見回しながら歩く。

デルフォイに搭載されるはずの機体は新型三機を含めていくつが存在していたのだが、先の事件の混乱で有耶無耶になってしまい、

更に補給を受けるはずだったアゴラでも緊急発進前に新しい機体が積み込まれることは無かった。

つまるところ、格納庫はその広大さに対して詰め込まれているはずの機体を多く欠いている、ということだった。トーエの乗る新型一機と、ヨセフが一度操ったもう一機の新型。まともな戦闘用の機体はそれだけで、あとは船の整備などに使う小形の作業用のロボットや宇宙服の上に着込む強化アーマーのみである。

そんな状態であるから、ラゲルはすぐにそれに目を留めることになった。

「そうか……そうだよな、デルフォイだってことは、こういうことだよな」

嬉しげに、維持の悪い笑みを浮かべて、ラゲルは新型機、二つ並べて置かれたそれらに近づいた。内一機は床面ごと移動しており、どうやらカタパルトデッキへと運ばれているらしかった。

もう出撃が始まっている。

そう理解してラゲルは急ぎ足で残りの一機へと向かった。軍の機密である新型機だ。謎だらけで、軍の仲間内でも何かと話のネタとして使われていた、正体不明の機体。そうそう拝めるものではない。「ちよつと、あなた」

当然、整備士の一人が気づいて声を上げる。

「別に弄りはしないぜ？」

そういつて腕を広げたラゲルだったが、歳若い女の整備士は、不審げな視線を変えようとはしなかった。

「それにあまり近づかないで下さい」

「こいつは出ないのか。もう一機は今出撃してるようだが」

全く相手の話を聞かずに質問を浴びせる。その不遜な態度に、やや表情を険しくしつつも整備士は応えた。

「パイロットがいないですから。動かせる人間がいなきゃ、どうしようもないでしょう？」

「ほう？」

面白い。そう思うと同時に、ラゲルの脳内には急速に欲が溜め込まれていった。

そもそも、こんな巡りあい自体が、幸運なのだ。活かさない手はないだろう、と。

近寄り、手を触れる。

「駄目ですって！ それには普通の人は乗れないんです！」

慌てて制止に入る整備士に、幾分課の鬱陶しさを感じつつも、ラゲルは振り向いて言ってる。

「ああ、そうだろうなあ新型なものな？ そりや普通の人には無理だろうな。ところで俺の乗ってるコリューンも普通の兵士は乗れないんだ。改造品だからな、特にスラスター類を弄ってあって、適当に動かすとパイロットシートの上で背骨がばらける」

「すげえだろ、と笑ってみせる。無邪気な笑みといえは聞こえはいいだろうが、無邪気に邪悪という、一見矛盾した表現がマツチする表情もこの世には存在する。」

「ま、規格外品のパイロットってことでは俺以上のやつはそうないんだから、任せとくのがいい心がけてやつだよ」

「そういつて、コクピットの位置を探る。整備士の手を振り払い、ようやくハッチを見つけて開いた辺りで、整備士の必死な声が格納庫に響く。」

「ちよつと、誰か！」

（変質者にでも襲われたのか、この女は）

キンキンと耳に響く声は、耳障り以外の何者でもありえない。

早々にコクピット内に入ってしまったほうがよさそうだと判断して一歩足を踏み出したその背に、女が手をかけて強く掴む。それを無理矢理腹って突き飛ばすと、小さく悲鳴を上げた。ようやく障害を取り払ったラゲルに、男の声がかかった。

「何をしているんです！」

失意なのかなんなのか、判別つかない曇った感情を胃の底に溜め込みつつも、急いでデルフォイへと帰ったヨセフは、迷わず奇跡的に辿り付いた事に対して感謝していた。船はあと少しで発進するところまで来ていたらしく、船体側面の扉でヨセフを迎え入れた軍人は迷惑そうにその腕を引っ張って内部に引き入れた。

何とか船内に入ることは出来た。だが、安堵すると今度はまたもやもやとした感覚が戻ってきてしまう。

あれでよかったのか。もつと何かあったのではないか。

一方で、それが勘違いだとする判断も頭の中にはある。ただか見知って数時間の少女一人である。それが大事でないわけではないが、ああも一方的にわけの分らないことを言ってどこかへ行ってしまった人間を何故気遣わなくてはいけないのか。

だが、引つかかる。見逃している。妄念だと言ってしまうばそれまでの、こびり付いてはなれない実感。

「戦いが始まっている、早く予備格納庫へ！ 民間人はそこで待機だ」

通路を漂うユダの軍人が、指示を飛ばしている。その軍人に近づいて、ヨセフは声を上げた。

「何で戦いなんて！ ここは中立の、それも大勢人のいる街でしょう？」

「知るかよ。まあ市長も儲け時だと考えたのかもな」

「儲ける……？」

あまりに実感とかけ離れた言葉である。

「ああ、元々混ぜ込み式で成り立ってきた場所だ。戦争の不均衡があれば、揺れの中で両陣から利益が引き出せる」

「そんな、馬鹿みたいなことを」

本気でしてしまうのが、要は眩んだ人間だということなのか。愕然とするヨセフを、軍人は格納庫のほうへと促した。

逆らわずに床を蹴って、向かう。

予備に限らず、格納庫の辺りは混乱の坩堝にあった。突然の戦闘に、半端な状態で挑まなければならない軍人たちが焦っているならば、街から呼び戻され、プリユタネイアーに帰ることも出来ずに再び戦艦などに乗り込まなければならなかった民間人も、また非難時に親しい者と分かれてしまった不幸な人間も、焦燥感で焦がされ続けているようだった。

「ヨセフ」

そういった状況に包まれていたために、予備格納庫の中でそつとかけられたその声にヨセフは心底安堵した。

「アラム、良かった、無事にここに来れたんだ」

「ヨセフのほうこそ」

駆け寄るアラムの肩を掴んで再会の幸運を享受する。

「セシルさんは？」

「……駄目だった。ごめん」

詳しいことは、恐らく話しても余計に分からなくなるだけだろう。

そう判断して、ヨセフはそう言うておくにとどめた。

「……そっか」

それをどういった風にとったのか、それは推し量ることしか出来ないが、アラムは小さく嘆息して、目を伏せた。

と、消沈するヨセフとアラムのほうへ、大声が降り注いだ。

「おい、その！」

驚いて振り返ると、予備格納庫の壁の一角、格納庫へと続く扉から、軍の整備士らしき男が呼びかけていた。

（僕のこと、だろうな）

当たりをつける。アラムに軍人が用を持つとは考えがたいし、考えたくもない。

短く返事をして、近づく。辺りの人間の例に漏れず、その整備士も青年とも中年とも取れぬ中途半端な顔の上に狼狽の色を乗せていた。

「ちょっといいか」

そう言われ、格納庫へを連れて行かれる。

いくつかの怒号が協奏する、金属だらけの大部屋。

それが、実際に使用されている戦艦の格納庫の、ヨセフにとっての第一印象だった。

そしてその中にあの新型を見つけて、ヨセフは舌の奥に苦いものが広がる感覚を味わった。見ると、整備兵のほうも同じものを見ている。

「あれ、お前さんが乗ってたやつだろ」

「え？」

確かにそれは、そうであつた。格納庫の中には既に一機の新型しか見えない。一機がトーエによって出撃させられているならば、残りのはあの自分の乗ったものだということになる。

「なあ、あいつ、出せないか？」

「出す？」

意味が上手く汲み取れない。軍人でも何でもないヨセフからすれば、当然だった。しかし、軍人の側からすれば鈍さもいい加減にしろというものだったのだ。

「だから、出撃だよ、出撃、今は一機でも戦力が欲しいつてのに、

この戦艦にはまともに戦闘機が無いんだ、だから」

「馬鹿なこと言わないでください！」

それは実際、他の軍人からしても戯言でしかなかっただろう。狂乱した現場だからこそ、出てくることの出来る馬鹿な輩だった。

何考えてるんだ、とこれは心の中だけで吐き捨てて、ヨセフがきびすを返そうとしたとき、ちょうど見つめていた新型の辺りで悲鳴が上がった。

「きゃっ！」

よく見てみれば、女性の整備士らしき人影が、機体に張り付いている男に弾き飛ばされたようにも見えた。

「何してるんです！」

その状況だけを適当に見た、それだけで、反射的にそう叫んでしま

つてから、ヨセフは後悔した。軍の事情で色々やっているだろう戦艦の中のあれこれについて、例えそれがトラブルめいたものだろうと自分が口を挟む理由がどこにあるというのか。

しかし男はしっかりと反応してしまう。怪訝そうに振り向いた顔には見事は三白眼が輝いている。

「なんだ、お前」

なんだとはなんだ、などと言いつ返しそうにはなかった。胡乱なだけではなく、その男には危うい雰囲気がまわりついている。

「誰か、この人を止めて、その機体に無理やり乗ろうとしてるんです！」

ヨセフの近くまで飛ばされてきていた女性が、そう叫ぶ。一気に格納庫内が張り詰めた空気に満たされる。

危険な匂いだ……。そう感じ取って、ヨセフは慎重に言葉をつむいだ。

「それ、ほんとに変な機体なんです。止めといたほうがいいですよ、碌な物じゃない」

「……………」

しばらく、男は機体とヨセフを交互に見て考える素振りを見せていた。やがて、合点がいったのだろう。ヨセフに歩み寄り、寒気の走る表情を作った。

「お前、新型を勝手に使ったって餓鬼が？」

「中に入ってただけです。ろくに動かしてなんか」

「ろくに動かさずに敵機を初めての戦闘で撃墜した、ってか。大したもんじゃないか。仲間内じゃ、噂になってたよ」

「……知っているならわざわざ聞くことは無いでしょう。それに、それだつてまぐれなんですから」

そう言うと、男は大声で笑いを上げた。あまりのことに、しばし呆然としてしまう。一体この男は何者だというのか。見た目では軍のパイロット用宇宙服に身を包んでいるが、どうにもただの軍人とはいえない、どこか動物めいた男だった。

「まぐれか、いいな、それ。まぐれ」

何がそんなに面白いのか、ひとしきり笑った後で、男は急に視線にそれまで以上の鋭さを込めた。威圧されてヨセフは半歩後ずさる。

「なあ。今この船は困ってるんだ、ピンチなんだよ。俺のおかげでさつきまでは優勢だったけど、その俺がいなくなったら途端連合に押され気味だ」

困ったもんだよな、と息を吐く。

「ここにいる兵士はともかく、民間人も何も、このままじゃ無事でいられないかもしれない。いずれ戦闘が長引けば、下の街もどうなることやら。だから、なあ、俺がそいつを使ってやろうってことだったんだが……ちょうどいい、お前がいるなら、その新型だって満足に動くんだろう」

「正気ですか。僕はただの民間人で」

「なら横槍入れずに指くわえて座ってる。もう一機のパイロットは一人で大変だろうから、俺が補佐してやるさ。お前みたいなちんちくりんの代わりにな」

一体なんなんだ。怒りとともに、ヨセフは呆れをも感じていた。

そしてまた、それとは別に、気になることもあった。

（トーエが出撃している）

心臓に針が投げ込まれたような、生々しい危機感。彼女は軍人であるのだからなどと言う理由では消化しきれない。実感というものの恐ろしさを、味わってしまふ。

「気に入らないかい」

分かりきった事を訊く。

「ええ」

「なら乗るか。ただの民間人が。はは」

乾いた笑い。おちよくっているのだろう。

懸案すべきは、そう、この男の言った通りなのだ。苦戦しているというのが事実であれば、トーエも、この船の人々、特にアラムやアルバ、そしてアゴラ自体も心配すべき対象となる。それほどのも



のを抱え込むことの出来る立場も強さもないと自覚はしているが、それとは無関係にそういった感情は沸いてしまう。

そして、それら以外に更に一つ。

（セシル）

彼女が何者かは知らないヨセフだったが、あの街にいた以上、この戦闘に巻き込まれないということはない。

（僕に、僕にどうしろって言うんだ）

人はその時々には最適な行動があり、それを正確に選び取り続けることこそが善なる生き方だというならば、今は一体どうすべきなのか。無茶な状況が重なってしまった今は。

絡まり、ほつれ、複雑になった思考迷路を抱えたまま、機体を見つめる。

『できる』

根拠のない、実感。ヨセフは己が内で何かが「切れる」音を聞いた気がした。

「乗りますよ」

そう言つて、男のほうへと、機体のほうへと一気に近づく。男の目が一瞬見開かれ、驚きとも感嘆とも取れないような吐息がその口からこぼれた。

「それで文句ないんでしょう。退いて下さい」

止めておけ。抜かすな餓鬼。馬鹿なこと言つてないで云々……そういった叱咤と共にこの馬鹿げた行動を止めてくれるものがないかと、ほんの少しだけ期待してしまつてから、ヨセフはコクピットへと乗り込んだ。

相変わらずわけが分からない機器があるだけである。

「本当にこんなものを一度動かしたつて言うのか……」

計器は半分も意味がわからないし、グリップやペダルが大体スラスターや武器の操作などに関与していることは推測できるものの、そ

もそも機体のどこにどれだけの推進器やカメラや武器が存在し、それらをどう個別に動かすのか、まともに考えれば何一つ知らないと言っている。そもそも軍隊の武器を素人が操るだなんて、旧世紀に流行った漫画や映画の世界だろう。

「なあ、お前」

考えていると、コクピットに顔を向けて、男が言う。

「手伝ってやるよ」

何を、と問いかけるより先に、男は視界から消える。

どうせ善意ではない。分かっているが、不安感が増え続けていった。

\*

全てがぎりぎりであつたと言っている。

発進直前のデルフォイにヨセフが乗り込めたのも、発進直後にトーエが出撃したことで敵に狙い撃ちされることが無かったことも、スレスレの危険さの上に成り立った出来事だった。

当初、戦闘はユダの優勢のままに進行していた。しかし、デルフォイが戦場へと飛び出したときには既にその様相は混迷を極めていた。

いくつかの港から沸いてくる連合の戦闘機や小形戦艦は、あるタイミングを境に増加し、更に機動兵器の中には新型と見られる影もちらつき始めたという話だった。

トーエはこちらに機首を向けた敵戦艦の鼻先にミサイルを打ち込み、牽制しつつも状況の分析に気をすり減らしていた。

混乱した現場の状況に加えて、中途半端な補給しか受けていない母艦や、試験装備のまま出撃し続けている自らの乗った機体はまとめて不安要素と判断するしかない。

そして、その不安要素がもう一つ。

いまデルフォイが出てきた港からいくつか離れた港から少し前に

飛び出してきた敵の戦艦がそれだった。機体の形からは一致する船が導き出せないとデルフォイの分析官はそう結論付けていた。つまり、高確率で敵の新型艦だということになる。いつからアゴラにいたのかは知らないが、そういった敵がやすやすとユダの領内に入っていること自体が既に脅威と言っている。天網と呼ばれる監視設備さえ、矢張り磐石のものではないのだろう。

敵新型艦は、その腹部から数機のウルゴスと、見たことのない機動兵器を射出して、他の戦艦と共にアゴラ上空を制圧しようと上昇しつつ辺りのユダを牽制していた。ざっと見ただけで、新型艦のほかに五つの船、そして十数機の機動兵器が舞っている。

それに対してユダはデルフォイを含めて三隻の戦艦と、その搭載機だけである。錬度や機体の性能では上回っている、戦力差は厳しいものだった。

（あれを落とすしかない）

敵新型戦艦。連合の布陣の指揮は、恐らくあれが握っている。そう判断して、トーエは機敏なターンで機首をその船へと向けた。

それに呼応するかのごとく、船からも二つの影が飛び出してくる。二つとも、ウルゴスではない。既存の宇宙用戦闘機からすればひどく奇妙な、いつそ奇抜と言っても良いような形状。

腕をそぎ落とした人間のような、とトーエは一見してそう思った。細身の胴に、戦闘機の機首のように尖った頭部らしきもの、そして人においては脚部に当たるところは、きちんと二本に分かれている。それぞれの足が翼と推進器のようなものを持ち、更に何かしらの兵器の砲身らしき物も外側に取り付けられている。

二機は不規則な軌道を描きながら、トーエを狙って接近してくる。「くっ！」

そのままデルフォイに近づかれてはお終いである。不利を承知で飛び込むしかない。

出来る限りの速度で、懷に飛び込む。しかし背後に回りこむ残りの一機を気にすると、上手く攻撃に移ることもできない。

立て続けにグリップとペダルを操作し、時にプログラムされた動作を織り交ぜつつ回避に移る。敵が同時に放った攻撃が、機体を霞めて通り過ぎる。目に痛いほどの光の筋……。

（レーザー？ いや、違う）

恐らくそれは、粒子加速砲の類か。荷電粒子砲は機動兵器の搭載する武器としては珍しい。

更に数発、息の合ったタイミングで砲火があびせられる。ロールして急ターン、身体にかかる勢いに悲鳴を洩らしつつも、回避する。「やられてばかりじゃ」

どうにもならない。減速と加速を巧みに使い分けて、百八十度向きを転換し、敵へと迫りながら、レールガンとミサイルとを続けて発射する。相手の虚を付くための無茶な軌道は新型機の性能とトーエ自身の適正の賜物だった。

しかし、ウルゴス相手であれば確実であつた攻撃も、敵の未確認機二機に対しては効果が薄かった。打たれた一機は両足を巧みに使い、機体の質量の移動と両愛の推進器の使い分けでもって急激に方向を変えて、間一髪でレールガンを回避する。更にミサイルのほうはといえば、残りの一機が正確に狙撃してしまう。

とにかく敵の動きが読めない。形状からも分かったが、戦闘機のそれとは比較にならないものだった。

（まずい……！）

危機感が頭の奥でちりちりと小さな痛みを感じさせる。

二つの機体が不規則な動きで、徐々に包囲を狭めていつているのだ。支配圏から抜け出そうとするが、適当に撃った弾は軽々と避けられてしまう。

頃合。

敵のパイロットと、どこか同調したような気分に駆られて、トーエの胸が激しく脈打った。優秀な兵士ならば当然の結論、敵味方の間に横たわる、戦いの中での共通原理。それが、今この瞬間が連合側のパイロットにとっての好機であると宣言していた。

ビームの連射が襲う。最初の数発をかわすが、別々の方向からの攻撃に対処が遅れる。何発かが気体をかすめて振動がコクピットを揺らす。

やられる。

覚悟したとき、声が聞こえた。

\*

奮い立たせるための叫びが必要だった。ラゲルのやや乱暴すぎる助け、つまりはブリッジの許可も得ずにヨセフ機を発進させてしまうための行動を受けて無理矢理出てきたこと自体は、上出来と言っている。上手く機体を操れたことも奇跡だ。しかし、怯える心がまだ障害として残る。ヨセフは声を上げながら、トーエを取り囲む二機に向かって接近した。敵も機敏に反応し、一旦その場を引いて少し離れてから体勢を整えてくる。

その動きを見て、ヨセフは判断した。

（戦闘機では、分が悪い）

基本的に、宇宙用の戦闘機は地球の大気圏内で使う「戦闘機」とは異なる思想で設計が成されている。だが機体の形状は大きな翼こそないもののシャトルのようであったり、ロケットじみていたり、古めかしい『乗り物』という概念からは脱却していない。宇宙用ということと各方向への機動性は飛行機などとは比較にならないほど高く、様々な方向への移動、向きの転換が容易である。

とはいってもパイロット自体が古くはロケットや飛行機に親しんできた人類の末裔である。基本的に前進し、頭の方を変えんということで行き先を変えんという機体のつくりは昔の飛行機と同じなのだ。

それに対して、ヨセフが一度経験したあの新型機の『変形』後の形態は画期的だった。無重力下や低重力下というものは突飛な形状はそのデメリットを少なくし、メリット、つまり機体各部のスラス

ターや機体の分散され移動可能な質量そのものを最大限生かすことが出来る。

それは、今の敵の機体も同じことのようなだった。

その奇妙な一致に、不快感を覚える。

「ヨセフ？ ヨセフなの？」

驚愕したトーエの声がスピーカー越しに聞こえるが、それに反応することなく、ヨセフは機体の感覚に埋没していた。

（一度やったことだ……！）

加速しつつ、機体を『開く』。一瞬で人型へと変貌したヨセフ機の前に、敵もトーエも一瞬戸惑うような挙動をみせた。

「トーエ」

自分の感覚が曖昧になる、この機体を操縦する際のおかしな感覚に耐えながら、ヨセフは声を上げる。

「一機引き受けるから、残りの一機を！」

「なんで、そこに、ヨセフ！」

困惑を色濃く滲ませてそう返してくるが、猶予のないこの状況ではどうしようもなかった。ヨセフが敵に対して発砲すると、それと同時にトーエも上手くもう一機の敵へと攻撃態勢をとる。

（これで五分五分、か？）

実際は素人が一人紛れ込んでいるのだから、それは間違いかもしれないが。

狙いをつけて、撃つ。

超高速で飛来する弾丸は、しかしトリッキーな動きについてはいけなかった。

「当たらない！」

焦りが震えに変わる。そもそも自分がどうやって今機体を動かしているかすら、ヨセフは自覚できていないのだから、その足元のおぼつかない感覚はひどく大きく感じられていた。

あっさりこちらの攻撃をかわした敵が、今度は仕掛けてくる。両足につけられた砲身からタイミングをずらしてビームが光の帯を描

く。

「何！」

目の眩むようなスピードで動く敵からの攻撃に、動揺してしまう。それはダイレクトに機体に伝わってしまい、結果、左足が直撃を受けることになる。

「がっ」

外から見れば、爆散するように散った足の部分を基点に少し体勢を崩しただけに過ぎないが、コクピット内に伝わった衝撃は生半可なものではなかった。

凄まじい衝撃に内臓を揺らされて、歯を食いしばりながらモニターへと視線を戻したヨセフは、自分に向かって急接近する敵の姿を見て寒気に戦いた。

敵の機体は脚部が稼動し、膝の辺りが延びきった状態から更に「前方向」へと折り曲がり、更に爪先が変形する。細い足先が開き、内側から伸びてきたのは、赤く輝く刃だった。

敵が、急速に接近してくるその意味を理解する。

（接近戦！）

信じがたいことではある。軍事に対して無知なヨセフでも驚く。宇宙で接近戦など……。

しかし、迫り来る敵はまごう事なき現実そのものである。爪先の武器は、赤熱した刃か何かだろう。

「ふざけるなよ」

ほとんど危険に対する怒りだけで、反射的に機体を操作する。意識したのは、エフェソスでのトーエが見せた動きだった。

あの再会の場面。シャトルの発着ロビーで男性とぶつかりそうになったトーエの軽やかな動き。

スラスターを短く吹かし、機体を回転させる。腕を振り、更にねじりを加えた。

敵機とすれ違うように、回避運動を取ったのである。今までヨセフに肉薄していた敵の機体は、その刃で空を切る。

しかし、難度の高い回避運動をきめたヨセフに対して相手も高度な動きを取って見せた。急激な制動をかけつつ足を背面に振り上げて無理矢理に推力の方向性を変える。

（なんて奴だ！）

そのままヨセフの機体に振り上げた足で蹴りを入れようと、機体を捻ってくる。

「おおああああ！」

知らずと、叫びが漏れた。

相手の動きが、鮮明に、頭に入ってくる。その予測が次々と立てられていく。回避策がないことも悟る。

（だったら……）

奇妙に引き伸ばされた時間感覚を最大限利用して、ヨセフは思い付きを実行に移した。

背中のスラスターに点火し、一気に加速する。元々接近していた二機である。それがどうということかは、ひどく単純なことだった。ぶつかる。

コンソールの上に身体をしたたかに打ちつけて、肺の空気が搾り取られる。肋骨を折ったなどということはなかったが、瞬時にして鮮烈な痛みが産声を上げた。

勿論、両者の機体も損傷する。ちょうど胴と胴がぶつかる形となり、強固なはずのハッチ部分に致命的な損傷が走る。

モニターの形が歪んで、その多くが黒く塗りつぶされる。

（死にやがった）

外部のカメラは機体の各所につけられたものであるから、死んだのはモニターそのものだろう。ハッチの損傷に伴って内部までが傷ついたということだった。

どうにもならないと判断して、ハッチを開放する。まさか生の視界での戦闘ができるとは思わなかったが、そもそもヨセフの感覚ではこの機体での戦闘はそれ自体どこか視覚情報よりもそれ以前の深い感覚のほうにたつような気がしていたのだ。母艦に帰還する



くらいならば、どうという事もないかもしれない……。

が、ハッチが開放され開けた視界に映ったものに、ヨセフはびっくりとした。

相手の機体。それも、自分と同じようにコクピット近くに損傷を負った機体が、目の前に居る……。

どうやら、相手はぶつけられた側ということもあって損傷が激しいようだった。コクピットを保護していたであろうハッチそのものが千切れかけ、中が完全に見えてしまっている。ヨセフがぶつけたあと一目でこの機体も胴にコクピットがあると分かったのは、そのおかげだった。

互いのコクピット同士の距離は数メートル。短い距離である。相手のパイロットが銃でも使えば、恐らく簡単にヨセフなどは殺されてしまう。

自覚して、恐怖はわいてきたが、しかしヨセフは動けなかった。相手のパイロット、ぐったりとシートの上で身を屈めているそれから、目が離せない。

少しあってから、そいつが身を起こす。

ヘルメットのバイザーの中の、瞳同士が互いを捉える。

視線同士が一本の線を作る。

いつの間にか、ヨセフの喉からは息が消えていた。肌がざわめき立ち、汗が浮き出る。

予想通りか。どこかでそんな自分の声が聞こえた。意地悪な声。そう、予感、予感はしていたかもしれない。飛躍しすぎて、何でそんな予想が立てられたのか分からない。意識もしなかった、予感。距離を開けて、バイザー越したというのに、はっきりと見える。

敵パイロットは、セシルだった。



## 6 古い話（前編）

### 6 古い話

カナンは、カナンの心は怒りに満ちていた。憤怒、怒号……恨みと激情の叫びに満ちていると言っている。

だがそれをそのままに発散したことはなかった。そんなことが出来る環境を経験したことはなかった。そして、本質的な激しい怒りとは、少し時間を置くだけで容易く悲しみへと姿を変えるのだ……。ボーナスの上乘せ。それが彼女の生まれた理由。

それが食費の足しになる程度のもだったのか、豪邸が買えるような札束であったのかは知らないし、知りたいと思ったこともなかった。

『行為』と『ルーツ』。その二つで、カナンの母は二人いる事になる。

（狂気の沙汰だ）

静かに、そう叫んだ。叫ばずに入られなかった。

どうしてこうなるのか！

目の前で目を見開いた少年に、カナンは心のそこから悲しみを覚えた。どうして、そう、どうして。

どうして、私はここににいるのか。

子供は、鏡のようであり、また反射的な生き物であると言ってもいい。そして、残酷なことに、『人間でありながら』動物の如く純粹であったりもする。ヒバリのように、ゾウのように……。

滑らかで、よどみのない空気。どこまでも清潔で、塵一つ見当たらない床と壁。

笑顔を、体の心から自然に溢れる笑顔を浮かべていたのは、幼き

日のカナンである。

時折その清潔な部屋の中に現れる人々は、部屋に似合う清潔な格好を小さなカナンへと晒していた。彼女に彼らは定期的に課題を与えた。

期待されれば、応える。それは、基本的な幼児の原理の一つであり、カナンとて例外ではなかった。

どういった課題であったのか。

それは、例えば読み書きであるとか計算であるとか、通常幼子に對して与えられるものとは質が異なっていた。が、それを判断することはカナン自身できるはずもなかったし、また周囲はその異質さをこそ求める人々で埋まっていた。

誰にも見えぬ、美しい自然の中で。清涼な大氣に囲まれた施設で、カナンは育つことになる。

大人たちの期待を、カナンは裏切らなかった。或いはそこで彼らを失望させていたならば、失望させることに成功していたならば、後の道行きも変わっていただろう。しかしそれは言っても栓のないことである。

カナンの示したポテンシャルというものは周囲の大人の目を輝かせた。あまりカナンへ興味を示してはいなかったはずの人々が次々にカナンの元を訪れ、その顔に大量の笑顔を貼り付けて通り過ぎていった。

そういった環境は、カナンにとっても笑顔の源となった。笑顔には笑顔が、相手が自らに對して抱く良好な感情は自らの正の感情を呼び起こす。鏡となり、安寧を得る。

コレシュ・チューダーは中でもカナンにとって最も親しい人物であった。彼女は狐めいた顔立ちの長身女性で、カナンと話す際は膝をついて屈む。

「どうも、母親です」

それが、初めて聞いた彼女の言葉だった。

相手が自失状態を脱する前に、カナンは行動を起こした。軍人としての冷えた心が、この状況で有利に働く。

相手の、ヨセフの機体へ爪先のソードを突きこむ。そのままパワーに任せて足を振りぬき、ユダの人型マシンの腕を切り離す。

ヨセフが何かを叫ぶ。が、聞こえない。機体同士接触しているために、パイロットの声は通常であれば機械的に処理され、増幅されて振動として届くはずである。しかし互いにコクピットは真空状態になりかけている。そもそも機体自体がパイロットの声を拾えていないのだ。

それでよかった、とカナンは思った。もし彼が何を叫んでいるか、それを聞いてしまったならば、とるべき行動など取れないという確信があつたからだつた。

（ベニヤミン……私を助けて！）

念じて、更にもう一度攻撃をかける。今度は左足に穴を開ける。その動きをそのまま活かして、返す足でその手に持っているレールガンも破壊する。

あらかた戦闘能力を奪いきつてから、その敵機体に足を絡ませ、がつちりと捕獲する。

「ヘラクレイトス！」

短距離通信で、母艦の名を叫ぶ。カナンの乗る船、その中の兵隊たちはやや動揺してはいたものの、やがてカナンの意思を読み取りこちらに向けて接近する。

それにあわせて、カナンも船へと加速する。ヨセフの乗る機体一つ分の加重がひどく重苦しいが、仕方が無い。

通常の手順をこれでもかというほどに省略して、カナンは船へと帰還した。平時には出撃用に使われるカタパルトデッキから無理矢理に船内へと突っ込み、逆噴射をかける。格納庫の整備兵たちが緊急に用意した制動用の特殊ネットに包まれて、寝転がるような姿勢でトーエの機体は停止した。

二本足の奇形機体。カナンとベニヤミンが出撃したこの機体は次

世代機のためのテスト用機体であり、本来は実践用ではないが、戦力をインスタントに補充するためにアゴラで受け取ったものだった。テオグースという名の付けられた、高性能機体ではあったが、今は格納庫の床で傷だらけの身体を横たえている。

（ああ……！）

カナンは朦朧とする意識に必死で抗いながら、嘆きの声を上げていた。

「私は、一体何で、こんなこと……」

\*

がんがんと痛む頭に、ヨセフは金切り声を上げそうだった。今自分がどうなっているのか分からない。セシルが見えて、いきなり攻撃されて、それきりだ。体の感覚が曖昧で、腕も足もどこにあるのか分かったものではない。そのくせ、頭だけは鮮やかな痛みを提供し続けてくる。痛み、痛み、痛み……だれの痛みだっただろうか。霞む。一体誰が痛がっているのか。ヨセフって誰のことだ……？

そう、昔の話だったかもしれない。

人気がない、寂れた一室。そこは、ヨセフにとっての秘密の場所のようなものだった。

町の中に広がる人口の太陽光が妙に気に障ることがある。苛立つて、息苦しさばかりを覚える。最初から月に生まれ月に住む身であるはずが、そういつたことがヨセフにはあるのだ。

馴染まない。

その感触の悪さが意識をひび割れにしたときにはいつもこの場所に来ることにしていた。

プリユタネイアーの最上部と言ってもいい。街の外周部からエレベーターを使って訪れることの出来るこの場所は、基本的には地下都市であるプリユタネイアーにおいて数少ない、一般人が宇宙を望

める場所、いわゆる『展望スペース』だった。

天井は透明な膜、強度と透明度の高い窓で覆われており、その向こうには奥深く清んだ宇宙が見える。何もかもを透過してどこかへと旅立って行ってしまうような、漆黒と、様々な色合いの散りばめられた圧倒的な空間。

空間、というこの語において、概念ではなく具体的な何かを思い浮かべるとしたならば、これ以上に相応しいものはないのだろう。宇宙。何者をも内包するのは、そう、この世そのものか、若しくはその別の名としての宇宙以外ありえないだろう。

数ある展望室だが、プリユタネイアーでもあまり人気のないこの場所のこの部屋には、ほとんど人が来ない。ヨセフが自身以外の人を見かけたことは、この場所では一度か二度ほどだった。

それがこの場所に何度も足を向ける一つの大きな理由だった。ヨセフは決して孤独ではなかったが、そう、どこか、『ずれて』いたのだ。何か、他人にはあまり推し量ることの出来ないどこかで。

そうしてこの場所に来ては、利用客など自分以外いないというのに手入れの行き届いた長椅子に寝転がり、『空』を見上げる。『小学生としては』あまり似つかわしくない習慣だという自覚程度はヨセフも持っていた。とは言っても止める理由もまたない。

（小学生……そうか。ぼくはこどもだものな）

一人呟く。小さな、微かな声が、広い室内に霧散する。そこは、宇宙そのもののように静まり返っていた。

しかし、その静寂が、破られる。エレベーターの自動扉が開く、上品な金属音が整った静けさを乱して散らばらせる。

誰かが、来た。

それは、非常に珍しいことではあったが、まあ、無いことでもない。疲れた顔をした主婦か、行き場のない浮浪者か。物好きは、いるものだから。

しかし、エレベーターのほうを見やって、ヨセフは驚いた。その頃は未来に比べて更に線が細く、中性的というよりは女性的な形の

瞳が開かれる。

そこに立っていたのは、女性だった。いや、女性というよりは、少女。ヨセフと同年代くらいの、子供だった。

「あ……」

その子供と目があう。少女は、気まずそうに声を洩らした。

すぐに、ヨセフは目を逸らした。気のせいかもしれないが、その少女の目尻が潤いすぎたような形跡が見られたからだだった。

なんにしる、この場所はダンスパーティーの会場でもなければ居酒屋でもないのだ。お互い立った二人の室内人員だからと言って何がどう、ということもない。

またもヨセフは寝転がった。椅子は多く設置されている。無駄に広い部屋に無駄な椅子。自分が長椅子を一つ占領しても、特に問題はないと、一人で納得して、長い息を吐く。

それが、ヨセフがトーエを始めてその目に映した日という事になった。

トーエがヨセフと同じ学校に通っているということが分かったのは、それから数日たったのことだった。上級生のクラスに大勢の生徒と共に展望室で見た少女の姿を見かけて、ヨセフはほんの少しだけ驚いた。そこにいる彼女はあの時見た、あの人気のない展望室に似合う、そう、例えば自分のような、周囲とずれた雰囲気を持つてはいなかったのだ。何人かの友人に囲まれて談笑する姿は、それはそれで違和感のあるものではあったが。

やがて、何度目か。

偶然に秘密の展望室で二人が同じ時間を過ごすことが、幾度か繰り返された。全くの偶然ではない。彼女もヨセフもこの場所が気に入っていた。気に入る人間であったということだ。

そうして、この展望室に集まりいつもは無言で過ごしていた。が、その日は別だった。



「ね、君」

唐突にかけられた声に、ヨセフは危うく長椅子から転げ落ちそうになった。

「……何、僕？」

「他にいないでしょ」

当然だ、といった顔でトーエはヨセフの座る長椅子に自分も腰をかけた。これまでに同じ椅子に座ったことはなかったので、ヨセフは驚く。

「私の事、知ってる？」

「暇人」

「それは君もでしょ」

勿論知っている

ほんの少しのことだけならば。大抵の人間関係ってのは、そう言うものだよね、と大人ぶって言ってみたヨセフに「えらそう」と呟やきトーエは初めてヨセフに対して笑った。

「何でこんなところにいつもいるの？ 暇じゃない？ なんにもないよ、ここ」

それは君も同じだろう、と思いつつも別の言葉を返す。

「何も無いからだよ」

自分でもやや意味不明なその応えに、しかし少女はある種の満足めいた感覚を得たようだった。好戦的な猫のような眼光にそういった色が走ったのだ。

「ね、ヨセフ君」

「名前、知ってたんだ」

「友達になろう」

お友達になりましょう。唐突と言ってこれほど唐突な言葉も無い。何故彼女がいきなりそんなことを言い出したのか、そもそも何故彼女は自分に目を付けたのか。友人に不足するような立場でもないはずの彼女が、一体何故。ヨセフ自身にも友人はいたし、極めて一

般的な子供であると言っている。その本質に本の少々、微々たる量の特異性があったとして、それを見抜けるものか。

しかし、トーエはなんにしろヨセフに対してそう言葉をはいた。それから二人は実際に友人めいた関係性を築く。登下校、寄り道、休日に集まって出かけ、そしてまた、展望室へも訪れる。

ある日、静寂が少しだけ和らいだ展望室で、トーエが不意に呟いた。

「いつもさ、ヨセフはここで何してるの」

「何って」

寝転がって、上を見て、それで。

「何もしてないよ。だらだら転がって、考えて……」

「私はさ」

紙風船を割ったかのような。インパクトのある、声。はつきりと、何か話がある方向へと引き寄せた。

「いつも、色々なことを考えちゃうんだよ」

「色々って？」

「色々。一言で言えないから、そういつてるんだよ」

そりゃそうかと納得してしまう。それから少しだけ彼女は考え込んだ。紡ぐ言葉に慎重になっているのが、幼いヨセフにも見て取れた。

「私、変なんだ。おかしいかもしれないんだよ。みんなが考えたりしないことばかり、考えて、それで、時々嫌になる」

だから、ここに来たんだよ、と笑う。

「私たちって、子供でしょ？ 別に何を考えなくても、それで楽しくやっていけるはずなんだよね。だけど、そうできない。考えてしまふ。そう、なんていうのか……噓、いいえ」

首を振って、適当な言葉を選び取る。

「欺瞞が、許せないから」

そっぴいきつた表情は、固かった。

何が言いたいのか、さっぱりだった。通常何かを話す際には論理立て、道筋を通し、分かりやすく手短に話す彼女からは意外なこと

だった。

\*

何も、ヨセフが窮地に陥るのを黙って見ていたわけではない。

一機をヨセフが引き受けたことによつて一対一の戦いという、単純極まりない構図が現出したのだ。

テオグース、そのときはまだトーエはその名前を知らなかったが、奇抜なデザインの敵機体は、その機体の性能と共に、パイロットの優れた腕をもトーエの全身に感じ取らせていた。

戦闘機などという存在が霞みそうな形と動きを持つその機体を、相手は十分に操って見せている、それだけで脅威だった。

（ヨセフ……！）

焦燥感と疑問とが頭の中でうねる。戦場に再びヨセフが出てきたなどと、予定外で済まされる話ではなかった。

はやく、仕留めてしまわなければ。

そうして、ヨセフを助けなければならない。実際今助けられたのは自分だったが、ヨセフに助けてもらっているなどと、冗談ではない。ここは戦場なのだ。

友人の無事を確実なものにするためにも、目の前の敵機を撃ち落さなければならぬ。敵機の不規則な動きに惑いつつも、無駄な発砲を控えて機を窺う。

（ヨセフのように、変形させれば）

恐らく、有利な戦いが出来ることだろう。しかし、それは。

（私には……）

ヨセフの機体とトーエの機体に差異はほとんどない。『人型』への変形機構は当然彼女の機体にも備わっているものだが、そもそもその機能自体がこの新型機の特長さの最たるところであり、また軽々しく使えるものではないシステムであるのだ。

それをヨセフが二度までも使ったということが、驚嘆すべき事実

だった。そのシステムの秘密について中途半端ながら知識を持つト  
ーエはその才覚に驚くと共に彼を強烈に心配しなければならぬ。  
戦争のための兵器として、人型などという奇天烈な形を取る意味  
それを考えれば、トーエが容易に変形できないことは当然だった  
が、トーエ自身は苛立っていた。

「ヨセフがやっているっていつのに！」

相手の攻撃を掻い潜る。戦闘機モードでは辛い攻撃だった。

接近されれば不利だ。そう判じて、足止めのために最後のミサイ  
ルを発射する。数発のそれが相手の軌道をずらし、迂回させる。

「堕ちろ！」

気合と共に、意識を一瞬で拡散させる。機体の照準そのものを『直  
感』して、発射する。

高速でレールガンの弾が打ち出され、相手を捕らえる。爆音と、  
手ごたえ。感じられるはずのない感覚でそれらを感じる。

（当たった？）

半信半疑で、モニターを見やる。片足を失った敵を目視して、安堵  
しそうになり、しかし逆に危機感が押し付けられる。

体勢を崩されながらも、敵はその狙いを定め続けていたのだ。自  
由に動く足と、そこに付けられたこれまた自由に動く砲身は、自身  
が攻撃されている最中でさえ獲物を狙うことが出来る。

一条の光が、トーエに迫った。

\*

変な子だなと、思うべきか。そう考えつつも、ヨセフはそれほど  
おかしいものだとは、思えなかった。元来ヨセフ自身が淡泊な、変  
わった子供であるということもあつたし、またそうでない理由もあ  
った。

大勢いる人々への圧倒的な懷疑は、ヨセフ自身も感じていたところ  
だったからだだった。

「おかしいよね。おかしいんだよ。全部、さ」

ただたどしく喋るのは、その内容が突飛なものであるからだ。

「色んな人がさ、色々なことを言って、ものすごい数の人々がそんな中で生きててさ、でも、おかしいことだらけなんだよ」

子供の感受性、直感性という話で片付けられる話ではない。ヨセフにも、それは分かっていた。

「本当はやりたくないって言いながら何かをやって、善くあるべきっていいながら善悪それ自体については考えない。そうやっておかしいな行動は出来るのは、さ、その人たちが自分が分かっていることが『分かっている』からでさ、そうでなければ、そんな矛盾した生活、できないんだよ」

声音には切実なものが多く含まれていた。

「でも、でもほとんどの人はそう言う人なんだよ。分かるでしょ、ヨセフ」

でも、それは言っちゃいけないことなんだ。そう小賢しくも応えようとして、ヨセフは止めた。大人は汚い、なんて言葉では済まされないこと。つまりは、世の中の人の大半が、実は汚く、無知でありながら、自身をそうでないと偽っているのが社会の実体なのではないかという嫌疑。

そしてその、人の大半、社会には、含まれるのだ。例えば……

「家族も、友達も」

しん、と静寂が戻る。一気に喋ったトーエは、いつもの自信ありげな瞳を今は揺れる夜の湖面のようにして佇んでいる。

確かに、こんな話は誰かにしても、気難しい子だと言って笑われるか、不遜だと叱られるに留まるだろう。

だが、何故彼女は自分にそれを話すのか。

半ば分かっているながら、ヨセフは沈黙していた。

「君とここで会ってから」

細く、しかし弱くは無い声。トーエとは大人びたヨセフをして深みを感じさせる人物だった。子供でも、大人でもない、そういった規

範から外れた人物。

「見てたんだ、時々、ヨセフのこと」

それには、ヨセフも気が付いていた。そうして友人と互いに名乗ってみせてからも、彼女は見ていた、観察していたと言ってもいい。

「ヨセフは、多分」

そうして、気が付いたのだろう。ヨセフにも察しはついていた。だからこそ彼女もこれを言う気になったのだろうと思えた。

「私に、似てる」

そうして、二人で見上げる。宇宙が、せせら笑うように渦巻いている。それはしかし不快ではない。

\*

戦いは、最低の形で終結した。軍隊自体がどう思っているのかはトーエには分からなかったが、少なくともトーエにはそれで十分だった。最低、最悪。

無茶な行動をしたヨセフに対する困惑と微量の怒り、そしてそもそもそんな状況に彼を置いてしまった自分たち軍に対しての嫌悪。不気味に混ざった心境というものが、ひどく恨めしい。

アゴラ上空は、ユダの遅すぎる増援が今は支配していた。ゆったりと警戒を続ける艦隊にすら、トーは腹が立った。

トーエと敵は相打ち気味に機体を損傷。両者とも退かざるを得ない状況に陥り、実際母艦への退却を実行した。しかし、一方でヨセフは。

「ヨセフ」

名を呼んで、応えるものがない。その事実がトーエの胸を痛烈に打った。

ヨセフは敵の手に落ちた。当然トーエは戦域を離脱しなければならなくなつた際に彼の存在を捜した。しかし、そのときには手遅れだった。めぐり合わせの悪さが彼を呪った。敵機に連れ去られたヨセ

フ機は敵母艦へと連れ込まれたのである。

敵がそうした意図もなにも、曖昧な予想しか出来ない。しかしヨセフが乗っていたのが例の新型である以上、軍の上層部はそれを放っておくことを良しとしなかった。

そう、上層部。

噛み締める。政治家や政治家気取りの軍人たち、ユダの内側で上部を占める彼らは新型の行方を心配すると共に、ヨセフとその監督官であるデルフォイを糾弾していた。同時に一部の人間は先の戦闘の記録を閲覧して、隠しめせずヨセフへの明らかな好奇心を見せた。醜悪だった。耐えられない醜さ。勝手な都合で巻き込んでおいて、いざ自分の足元がすくわれるかという、叫びだすのだ。

報告を終えたトーエは自室でぐったりと身を横たえていた。今船はアゴラに停泊して補給を受けている。元々トーエと敵機が相打ちになった時点で戦力が底をついていたのか、連合はあの後この街とその上空を放棄して退却した。今はそれを追撃するために急いで補給中だった。

上の人間の狙いは新型を取り戻すことである。それは間違いない。少々研究者の注目を集めつつあるとはいえ、単なる民間人のヨセフがどうなるかと彼らは指して興味を抱かないだろう。あくまで作戦目標は軍事機密だ。

しかし、彼を取り戻すチャンスであるということは間違いない。

（失敗できない）

あるいは、もうこんなことになった時点で手遅れなのかもしれない。そう考えて、トーエは不安感に全身を引きちぎられそうになった。ヨセフが自らを恨むかもしれない。それは、現実的でない話だ。しかし。

ヨセフが自らに見切りを付けるかもしれない。

その恐怖はじつとりと忍び寄ってくる。無論トーエは自分と彼の中をそれほど甘く見てはいない。しかし、真摯な友人関係であるからこそ、誤った選択を招き続けているその予感が、彼との間柄に悪影

響を与えるのではと感じてしまう。

五年ぶりに出会った彼は、落ち着いた感じがした。大人になった。そしてその分、賢しらさも得ているようだった。

自分はどうかだろう、とトーエは考える。

「私は」

ヨセフを、ヨセフのことを守護しようと進んで軍に入り、同時に家から逃げて、それでこんなことになってしまつて。もしかしたら、ヨセフとの間には自分の知らない隔たりが出来てしまったのではないだろうか。そう思うと、あのアラムという同年代の少女は、そういった隔たりがなく彼と接しているようにも思える。

「ヨセフと、似ていない……？」

空しい問いは、矢張り空しく広がるだけだった。



## 6 古い話（後編）

孤独というものは何であつたか。

それが何故辛さとともに語られることのほうが多いものであるのか。世の多くは、それを否定的に捉える。

しかし、一人で、独りで満たされないと嘆く人々が寄り集まってそれで何が満たされるものだろうか。寂しい寂しい辛い耐えられないと、嘆きわめき、自らを独りであつても生きていける、それだけの意識を育てずして、そういった人間が集まることに価値はあるのだろうか。元々同じ隙間を抱えたものが重なっても、透かしてみれば同じ場所に開いた穴から向こう側が見えてしまふのではないか……。

鋭い感性と、それを意識してしまうだけの言葉、思考能力を備えた人間というものは、そうではない人々がそのほとんどを占める人間世界にあつては常に孤独というべきである。

正にそうした孤独に、トーエは直面していた。幼少の頃からそれを意識していたのだ。

（私は、満たされている）

それは、自己を正しく考え、善に生きることをきめたからである。

（私は、寂しい）

それは、そうした、「独りでも生きていける人間」がまわりにいないためである。

幼い頃からそういうのだという考えをしてきたのが崩れることは良くある。サンタクロースはいる、親は理想的な聖人である、私は誰からも愛される、等等。

トーエの場合は、それが「私のように、人は皆独りでも生きていける」という勘違いだった。独りでも満たされるからこそ、そういった人々が集まったとき、「人と人がめぐり合う、本当の意味、幸

福」があると深く彼女は信じていたし、だからこそ人々の大半が空虚に「私は寂しいのだ」と叫んでやまないことを知って、どうしようもない哀しさを抱えていた。自分の空虚さに対抗する、つまりその空虚さを埋めることを知らない人間同士が集まって今度は集団でその空虚さを嘆く。だからこそ、社会は醜い……。

小学生にして、社会の汚さと、その原因……つまり人、それを知ってしまったことは、不幸というしかない。

つまり、簡単に言えばトーエは大変大人びたというかませたというべきか、人の愚かさに哀しさを覚えていたのである。

そして自らだけが美しくあればそれでいいという閉塞した考えに逃げて、家の推薦した学校から市井の一小学校へと編入すると親を説得したことも、責められる話ではないかもしれない。

しかし、そこで出会った。

子供の喧嘩である。誰がターゲットになってもおかしくないし、どういう理由で起こってもたいしたことではない。数日後には仲直りが済み、また別の問題が起こる。

その日体育館で行われていたことも、そういった他愛ないものの一つだ。数人の男子が、気の弱い一人の男子生徒を揶揄していた。陰湿ないじめにまで発展するかは未知数だが、見る限りその可能性も低い。トーエは壁際に薄い文庫を広げながら、横目で見るとともにしにその騒動を見ていた。

合同体育という名前で行われる、学年混合の球技の試合。あまり生徒に好評でないその催しへの不満がたまってもいたのだろう。攻撃側の陣営は標的の交友関係の少なさと彼自身の欠点を中心に時に小突きつつも軽やかに舌を動かして攻め立てている。地球人の子供が、と大きく叫ばれ、標的側の男子は小さく嗚咽を洩らす。

（まだそんな思想が生きていたんだ）

淡白に、トーエはそう思った。ユダと連合の争いは確かに数年前まで苛烈ではあった。その正で宇宙人と地球人という言葉が互いに差

別用語となつた時期もある。しかし停戦状態が続いている上に、戦争を潜つてきたわけでもない子供である。よほど親が思想的でない限りそういった物言いをする事もない。

と、その騒動から外れた地点、トーエの近くの少年が、小さく制止の声を上げた。

その声に含まれていたのは、単純に鬱陶しさへの不満さだった。その声に、グループは一瞬静まってから、やがて興をそがれたことへの怒りを顕わにした。

いくつかの言葉を交わして、そのうちに拳を交えた喧嘩へと発展する。その揉み合いの中で、少年が堪え切れないように荒い言葉を投げつけた。

「集まつてなきや安心して人を蔑むことも出来ないようなやつらが、何も知らないくせに！」

はつとして、そちらを向く。トーエの目に映つたのは、肩をつかまれ殴られながらも蹴り返している少年だった。

「ふざけるな、ちくしょう、なんでそうなんだ、なんで馬鹿ばかりなんだ！」

彼は既に、喧嘩相手に対しての直接的な怒りではない、どこかもっと大きなものへの憤懣を口にしていた。

細かな理由も説明もない。それは、誤解を恐れず無理矢理に表現するならば、直感だった。

（彼は、知ってる）

いる、ということかも知れない。自分以外にも、多くの人が見ていないものを見ている人間が、つまり、「ずれた」人間が。

そうして、後日、トーエがその少年と出会うことになるのが、町外れの宇宙展望室であつた。

\*

きみがやつたんですか？

ええ、そうです。僕が。

君の妹なのにな？

だからです。

理解できないよ。全く、理解できない。

しなくて、いいですよ。どうせ、出来ないし、する気もないんでしょう。

反芻してしまった記憶に、ヨセフは悲鳴を上げようとした。しかし、上手く声が出ない。

（勘弁してくれ！）

決着がつかうとどうしようと、いや、ついたからこそ、思い出すべきでないことはある。

自意識がはつきりと目覚める。知覚機能は冴えに冴えて、その「情景」をはつきりと見ることになる。

（なんだこれは）

悪夢。恐らくは悪い幻である。しかし、その不自然なリアルさと。

そのリアルさを自覚するだけの認知機能が働いているにもかかわらず不条理な夢から抜け出していない自分に驚く。

声が、匂いが、肌触りが、音とざわめきが、そして苦い唾の味が、再現されていく。

恐ろしいほど精密に再現された過去。忘れ去ったはずの細かな部分までが何故だか蘇る。

汚い嘲笑が。表面的な理解が。叩きつけられる罵声と悪意。不承不承といった親類の表情。それらが、爪の間に入り込む刃物のように、耐え難い苦痛を送り込んでくる。そして、その受け手であるヨセフの意識はいつも夢の中で感じる自分のようにどこか茫洋としたものではなく、はつきりとしたままでそれに耐えなければならぬ。（ふざけるな、ちくしょう、なんでそうなんだ……）

そうして一通り悪意の塊のような回想が終わった途端、視界が黒塗りに転じる。

じわじわと、その闇が、色づき、だんだんと辺りが見えてくる。

「眩しい」

知らずと、声が出た。

（僕は、寝ていたんじゃないのか？）

疑問が、驚きと同時に浮かび上がってくる。辺りの光は徐々に陰影をはつきりとさせて行き、そこが白塗りの部屋であることを知らせてくる。

静寂。空気はほんの少しだけ冷えて、混乱した頭を冷やしてくれる。

「ここは」

どこだ。後半は擦れた息として消える。辺りを見回すが、特に見覚えのある場所ではない。

（落ち着け……）

強く脈打つ胸を抑える。息を整え、軽く頭を振る。

ほんの少しだけ落ち着いてから、ヨセフは記憶を辿った。戦いの最中、自分が体当たりを仕掛けた敵の機体から見覚えのある少女が姿を現し、それに呆然とした。その隙に攻撃され、そこからは記憶が曖昧で、荒く削り取られた野菜の欠片のようにずぶずぶと細かく意識の水の中へと散らばっていつてしまっている。

そして、今はこの一面が白い部屋。壁も床も天井も、白い。一辺が三四メートルほどか。中央には椅子が置かれているが、それすらも、白い。壁の一つにはドアがあり、その反対側には飾り気のない寝台が固定されている。布団の敷かれたベッドを上手く寝袋と掛け合わせたようなもので、無重力空間用のものだった。

ふと、違和感を覚える。無重力空間でもこういった重力環境的な生活空間を演出することは珍しくない。だが、それら、椅子や寝台には妙な古さを覚えた。ユダではいかにも廃れた感じの……。

しかし、そんな想いがなんの役に立つわけでもない。溜息をつく。内心では、状況の不明瞭さが堪らなく不安だった。

そもそも自分が本当に起きているのか。先程のは夢なのか、それ

とも性質の悪い幻なのだろうか。

何もかもが、分らない。

あの機体には、二度と乗るんじゃない。

イマダにかけられた警告が、脳裏に過ぎる。

（破っちゃったからな。思いつきり）

言葉通り、不幸になってしまったのか。そんな馬鹿げたことを考えて、ヨセフは無理矢理苦笑した。

落ち着かず、不安感に潰れそうになるのを堪えるためだった。

そうして少しだけ平静さを手に入れたヨセフをあざ笑うかのよう  
に、何の前触れも無くドアが開く。瞬時にそちらを振り向き、身構  
えるが、そもそも身構えたところで何になるのか、ヨセフ自身疑問  
だった。

「起きていましたか」

扉を開けたであろう人物は素早く室内に入り込むと、隙なく扉を閉  
めた。意外に厚みのあるドアが閉じられ、ロックがかかる硬い音が  
する。

その人物には、見覚えがあつた。

（見覚えも何も……）

何もかもが、都合のいい偶然で解釈できることではなかったのだと、  
ヨセフはそれを認めなければならなかった。

そこに立つのは、小柄で華奢なパイロット。ヨセフ自らが砲火を  
交え、生死を肌で感じながら殺し合いを行っていた相手である。

「セシル……」

重々しく、その名前を口にする。こうした巡り会わせを司る神が目  
の前にいたならば、拳か爪先でも叩き込んでやりたい、と空想する。  
「ヨセフ……さん」

こんな状況でも「さん」付けか。笑い出したいような気持ちと、苦  
々しい現実への思いが胸の中で衝突する。

「私は、カナンです。セシルは、そんな人は、最初からいません」  
しばらく、沈黙が場を満たす。やや気まずそうに、俯きがちになっ

ている「セシル」を、ヨセフは正面から見つめていた。

申し訳ないという、そういった感じを出している彼女に対して、不条理だ、という感情が頭に芽生える。悪いと思うなら、そんなこと、やらないはずであるのに、それを……。

「ここは」

どうしようもない重い気分を抑えて、問いかける。

「ヘラクレイトス、私たちの戦艦の中です」

「戦艦、か」

とすると、ここは牢の様な場所なのかもしれない。ユダの船の内装に比べて前時代的な感じがするのは、ここが連合の船だからか。「あなたは、捕虜として収容されています」

予想を裏付ける言葉に、ヨセフは目を細めた。こうまで決定的な状況におかれると、どこか冷めてしまう。

「きみは、そうか……軍人だったのか」

その言葉に、セシルはほんの少しだけ顔を歪めた。幼さの多分に残る表情に葛藤の色が走る。

「だから、あの時いなくなったのか。僕に銃まで突きつけて」

それを、責める言葉と勘違いしたのだろう。セシルに決定的な悲しみと焦りが生まれる。

しかし、ヨセフは彼女を責めているつもりなどは無かった。もっと別のこと、巡り会わせや、彼女が敵として軍にいることそのものの許せなさについての怒りが、沸いていたのだ。

「私は……！」

何かを言いそうになってから、セシルは口を噤む。そうして、仕切りなおしてから改めて会話を続ける。

「……この部屋での会話は監視が出来るようになっていきます。余計なことを言わないでください」

軍人としての毅然とした振る舞い。それがまるで欠けている。たった一日足らずではあるがユダの軍人たちを見ていたヨセフにもそれは感じられた。

「あなたは捕虜として捕らえられましたが、実質軍人として扱われることありません」

「何故」

「それは……」

少し迷ってみせてから、声を潜めて答える。

「あなたの身分を私が保証して、進言しました」

つまりは、単なる民間人だから手荒く扱うなと言ってくれたということだった。馬鹿みたいな話だ、と淡泊にもそう思ってしまう。相手側から見て、自分が軍人で無い保障がどこにあるのか、最大限尋問でもするべきではないのか。

「僕が、軍人でない。そんなことが君に決め付けられるのか？」

そう言葉まで出てしまう。彼女はそれに対して慌てるように言葉を紡ぐ。

「そんなことは、アゴラでだって一緒にしたし」

「それで、君はパイロットだったと、僕の立場からすればそう言うことになる」

意地が悪いな、とヨセフは自嘲した。しかし、物事の不条理さへの怒りのようなものがそれを後押しするのである。

押し黙る少女を見てみると、全てが本当に夢ではないかと思えてしまう。何かの間違い。そう、こんな展開は間違っている。

「と、とにかく、これで大人しく私たちの指示に従っていただければ、それで安全は保障することが出来ます。多少は拘留期間がありますが、すぐにどこかの街に降ろすことだって不可能ではありませんん」

「そんなことをする必要が、君たちのどこにあるんだい」

「それは」

「……僕を無事にどこかへ？ 無茶苦茶だよ、そんなのは。君らの、この船だって撃墜していたかもしれないんだ。ぼくは、君たちが無理矢理に奪ったものと同じ、兵器に乗ってたんだよ」

自ら不利になることを言っている、その自覚はヨセフにもあった。



しかし、それ以上に、こんな立場で無事に解放されると一方的に言われるほうが異常すぎて納得できない。何より、これがセシルが無理矢理にでも自分からヨセフを遠ざけようとしているように感じられたのだ。

「それでも！」

声を張って、セシルが顔を上げる。

「巻き込んだじゃ、いけないってそう感じたから、だから、二度とあんなものに乗らないなら、それでヨセフさんは」

（それは、僕が君に言いたいことだよ）

反射的にそう思ってしまったから、そのおかしさにも気が付く。まだ知り合って少しの、素性の分からぬもの同士であるはずだ。どうしてこうまで、お互いに気を遣うのか。

「……済みません。また何かあれば、来ますから」

何かを押し殺したようにそっくり残して、セシルが退室する。

静まった空気に、どこか寒気のようなものを感じて、ヨセフは薄く息を吐いた。

（僕とセシルは、一体何を、分かり合っているんだ？）

それは、奇妙というよりはおかしいとすべきことだ。人が知り合っただけに、何が分かるものか。

しかし、あの機体越しに感じた感触は、疑いなく受け入れなければならぬような気がしている。

セシルは、戦いの中にいるべき人間ではない。自分や、トーエ、アラムと同じように。

（なんだって戦争なんか）

苛むだけの、さもない行為でしかないというのに。

二度目の訪問は、それから何時間かしてのことだった。チューブタイプの簡単な栄養食とドリンクを手に彼女が戸口に姿を現す。

「そういうのは、別の人の役割なんじゃないのかい？」

純粹に、興味本位から聞く。

「ええ。ですが、船にはヨセフさんを良く思うものも少ないんです」  
それで、セシル自ら、というわけか。納得すると共に、不思議にも  
思う。こんな無茶を容認させるとなると、艦長クラスの人間にも  
まともに意見できる立場にいるということだろう。高いパイロット  
としての能力は見たことがあっても、それがどうしても目の前の少  
女の姿とは一致しない。

無言で、食事を取る。大したものではないために、物の数分で終  
わる。

「……あと一日くらいで、出られると思います」  
「出られる？」

「月面の、中立地帯の観測基地に降ろされると思います。そこから  
ユダ側への発着便もありますから」

それで、またルール破りの戦いが必要がいいが。そう思いな  
がら、ヨセフは自分が戦争というものの、掟も何もあったものじゃ  
ないという本質を知りつつあることに嫌悪感を覚えた。

「僕は、僕だけが、そうして帰るのか……」

「お友達だって、民間人ならすぐ戦地からは離れて帰ることになる  
でしょう。……アラムさんだって、すぐに会えますよ」

「違うよ」

そんなことは分かっているのだ。そう、『自分たち』は確かに安全  
かもしれない、プリユタネイアーへと帰れるかもしれない。

「セシル」

「え？」

「君は、何だつて軍人なんかやってるんだ」

トーエ、何でトーエは軍人なんかやってるんだ。

それは、切実にして最も根深い疑問だった。彼女らはそうして何  
がしたいのか。まさか、戦争なんかで何かが変わるとでも思ってい  
るのか。

「私は……そうする以外に、なかったから」

「人殺しが好きかい？」

その問いに、彼女の表情が強張る。はつきりとひびが入ったと言ってもいい。見開かれた綺麗な瞳が震える。

「違います！」

ほとんど叫ぶようにして、そう否定する。罪悪感を覚えつつも、ヨセフは納得した。やっぱり、と確信する。唯一つ、反応を窺ったただけだが、十分だった。これまで触れあい、そして今この見事な拒絶を感じて、彼女という存在が掴める。

思い込みかもしれない。しかし、人と人との間で、ふと心に降りる確信を信じずして、何が出来るというのか。

「私は、私は、そんなこと！ 生まれたときから、そうしなければ」「ごめん、違うんだ」

謝罪する。人の奥を引きずり出すことが目的ではない。

手を取り、握る。はっとしてこちらに顔を上げるセシル・カナンを見つめて、告げる。

「君も一緒に、来い」

今度こそ。アゴラで断られた言葉を、再び投げかける。

言葉を失って、セシルがヨセフを見つめたまま固まる。

（何を言ってるんだろう）

ふと、ヨセフも自問してしまう。自分は、何を。彼女に何があるというのか、いや。

（許せないんだ。こういう人が、戦場にいるのが。）

それが『いけないこと』だと分かる。だからこそ、それを正そうとしているのだ。しかし、ヨセフ自身は気が付いていないが、複雑に入り組んだ悪意の迷路を解くのは、そう容易いことではなく、突発的で直線的な行為は時に、悪意に絡めとられるに過ぎない。

「……出来ません」

「何故？」

「私は、カナンです」

「僕にとってはセシルだ」

「違うんです」

その言葉の鈍い色に、気圧される。何かがあると直感する。

「私は、逃げられないんです。戦場から、『扉』から。そう造られたから」

「扉？ それは一体」

なんだと聞くよりも先に、セシルがドア近くのパネルを操作する。小さな電子音と共に、機械が停止する、駆動音のフェードアウトが耳に入る。

監視設備をいくつか切ったのだ。ヨセフは特に目に見えて分かるような証拠もなく、そう判断した。

「……ヨセフさんの乗っていた機体。私の乗ったあの機体」

最初の戦いで、殺し合いをしていたのも、このセシルであった。そのことを知って、ヨセフは嫌な予感が当たったときのような、不思議な感覚を感じた。

「あれに積まれているシステム、いや、ある物質、何でもいいですが、それが、わたしたちが『扉』と呼ぶものです」

彼女が、強い決意で以ってその事実を教えようとしているのは、その捨て身の姿勢からも見て取れた。監視を切って、敵かもしれない人間に機密情報が何かを話しているのである。

「あれは、半分冗談みたいな代物なんです。人の全体性、意識そのものの、全ての人間の大元へとアクセスするための、通り道。だから、『扉』」

いきなり、話がおぼつかないものに感じられてしまう。人の意識の全体に？ 性質の悪いSF映画か何かを連想する。

「あの機体は、それを利用した操作性と感知能力を持ったものです。現代の戦場では、脅威となりうる、索敵や追尾、無線通信というものに全く妨害も何も受けない非常識な存在」

そこまで聞いて、ヨセフにもある仮説が芽生えていた。イマダが自分に本当は何を言いたかったのかも、自ずと予想できてくる。

「でも、誰もが使えるわけじゃない。「それ」に気が付き、思いをはせて、自分の形にとらわれず時に溶け込むことの出来る感性の様

なものが、必要なんです。そしてそんな人は、本当に少ない……見つけることが困難なほどに」

「じゃあ、僕は」

「あれだけあの機体を使いこなす人は、稀です。あなたは、そう、適正がある」

機体へと自分が溶け込む不快感。辺りのことが一足飛びに、理屈を抜きにして知覚でき、反応が出来てしまう。そして、人を撃った際の強烈な苦しさ……。

それがつまり、その『扉』というもののなか。

「だからこそ、私はヨセフさんを遠ざけたいんです。こんな戦場には、いて欲しくない。あれが使える人なら、恐らくは利用されてしまう。そうして、苦しむべきでないはずのあなたみたいな人が、苦しむことになるんです」

「それは、僕が思っていることだ。セシル、君みたいな人が戦場にいるのがおかしいって、そう言う確信が僕にもある。それが戦場を通してその扉って物によって得られた君という人の特性だっていうなら、これは信じていいものはずだ。だから君も一緒に、遠ざかろうと言っている」

「出来ません……！」

ほとんど泣きそうじゃないか。首を振ってヨセフの手を払う彼女を見て、ヨセフは寂しい思いに駆られた。

「私は、私は軍から、連合からは逃げられません」

「それは、君自身の選択じゃないのか」

「違うんですよ」

弱弱しく、笑顔のようなものを作って、彼女が否定する。どこか痛々しく、ヨセフは目を逸らした。

「……昔、そう、凄く古い話です。ひどく昔に、『扉』は発見されました。そして、その扉が持つ意味に、機能に気づいて、更にその機能を最大限生かすことの出来た人がいた……信じられないほどに聡明で、自己意識を全体性に溶かして何一つ問題のない、奇跡の人、

それが」

溜めた息を吐き出すように。その言葉も、吐き出される。

「それが、ミウ・ミレトスです。私は、その体の一部から作り出された、人造人間みたいなものです」

理解するまでに数秒がかかる。常識からかけ離れた事実が脳を揺さぶって、ヨセフを昏倒させようとする。

馬鹿げている。ふざけるな、ちくしょう、何で……。

「クローン……？」

「正確には違います。でも、似たようなものです。私は、扉のために作られて、その為に生かされているんです」

激情に駆られそうになる。『キレル』ということがどういことなのか、ヨセフはこのとき始めて知った。怒りを向けるべきは、集団か。悪意にまみれた人類への、それは純粋な悲しみでもあったかもしれない。

「それなら、尚更だ」

押さえ込んで、呟く。

「尚更、君がこんな場所にいる必要もないじゃないか。見限って、いいはずだろう。連合を呪って、どこかへ逃げればいいだろう！」

「そうなれば、扉自体を保有し、扱うすべに長けたユダは、地球までも支配できるでしょうね」

冷静に答えたセシルには決意と、渴きが漂っていた。

「確かに、私は嫌いですよ。地球なんて。でも、そんな中でも大事にしてくれた人だっているんです。守っておきたい時間だって、そこにはあったんです。全てが不幸だなんてことは、なかった」

きっぱり言い切る。

（どうしようも、ないのか）

自問して、ヨセフは頂垂れた。

誰もが過去を持っている。それはつまり、その人の本質に関わらず、その人間を捉えて話さない、現実、規制があるということだ。本人が全く悪いということではないのに、身動きが取れなくなり、

善人同士が時に敵対する。

「だから、ヨセフさんには立ち去ってもらいます。私みたいな理由で縛られる前に、自由にもとの世界に戻ってもらいます」

そのために、敵の捕虜を逃がして欲しいと上司に掛け合ったのだ。この少女は。並大抵のことではない。

静かに退室したセシルの残滓を見つめつつ、ヨセフは心の中で一口にする。

過去が、既に起きた出来事が、人の行為を束縛する。その所為で、ほんの少しのいい思い出と優しい人々を守るためにセシルはカナンとして戦い続けるより他になく、ヨセフの誘いを断らなければならぬ。

しかし。

（過去が、出来事が人を縛るというなら）

そう、それが、ヨセフにも当てはまらない道理はない。

（僕だって、君やトーエに出会ってしまったんだ。今更自分だけ逃げられるものか！）

それは、決意というものだった。

## 7 新しい人々のゼルプスト（前編）

### 7 新しい人々のゼルプスト

月と地球との重力安定圏、月・地球におけるラグランジュポイント。

そのうちの一つ、L1、地球と月の間で、背後に地球を、前方に月を感じながら、グールド・イーグルストーン連合人類民主国首相は、広がる月の周囲の空間というものに、苛立ちを感じていた。

これまでの十五年間、有耶無耶になったまま実質的に続いていた休戦状態。その状況の下で、実質的に国境となっていたのがL1に築かれた連合の基地から月側に少し行った辺りであった。そこから先、月の表側から裏側までの距離は、連合のものにとっては非常に長い距離である。実際には大した長さではない。が、その間にはユダの全てが存在するのだ。裏側に存在するという国家群都市ブリュタネイアーまでの防衛網も当然ながらそれに含まれる。

逆にユダにとっては月の表と裏が交わる辺りから地球までの距離が果てしない。そこ辺りからは連合の人間も交易などのために見られるようになり、また月の表側、その中心部は完全に軍事施設しかないからだ。

地面が無ければ明確な国境線も引けないのが、宇宙に出るまで国境というものについて幼稚な考えしかもてなかった人類全体の愚かしさの一つということだ。

グールドは端正な顔立ちを歪めて嘆息した。苛立ちの混じった表情であっても、元々『連合創設以来の美しいトップ』と民衆が馬鹿な騒ぎ方をするだけのある、鋭く隙の無い印象が発せられている。

今現在グールドがいるのは、L1に点在する連合基地群の中心基地、『ダン』である。半ば要塞化されたこの観測基地は、元々は戦



争とは関係の無い、宇宙への入植、深宇宙の観察など希望に満ちた目的で建造された基地だったのだが、その後の戦争では最前線拠点として使われ、一時は敵の手に渡った場所である。その後連合に返還されたこの基地は、再度のユダとの戦闘に備えてその様相を大きく変化させていた。ダンは強力な観測能力にくわえて過剰とも思える武力を有し、一部の軍人たちはこれを「移動要塞」と呼んで笑う程になった。しかし宇宙での戦争は十五年前までに発展し続け、既に旧来のリーダーなど、無線通信の類は連合・ユダ共に妨害し合い使い物にならなくなってきた。短距離通信かレーザー通信、もっと原始的な光による信号などのみが今頼れる無線通信である。勿論広範囲の索敵やそれを利用したデータ・リンク、常時自軍の状況を詳細に把握しての戦闘は不可能に近い。戦いの場だけを見るならば、旧世紀の世界大戦のほうが圧倒的に近代的である。今はGPSも何も使えないのだ。

最も、そのお陰で超長距離での大規模破壊兵器の使用が制限され、進化したテクノロジー同士がぶつかる戦いでさえ、人類はその種を絶やすことなく生き残れたのである、ともいえる。精密な誘導が出来なければそう効果を発揮しない核爆弾は、既に脅威とはいえない。だからこそ、この状況下で一番恐ろしいのは、そうした通信網を牽制しあうという近代の戦いを否定するものの存在だった。ユダは元々連合よりも僅かに通信なども進歩している。このまま技術格差が広がれば、やがて戦場は一方的に長距離ミサイルを受け続けるだけのものになりかねない。

そうした状況を正しく心得て、グールドは行動を起こし続けた。

首相に就任したのはたった五年前だが、それ以前から使える人脈は全て使って計画を進めてきた。休戦状態が続きたるみきった民衆や政治家は軍備の縮小を提言し、ユダとの和解を求める愚かな声ばかりを投げかけていたが、グールドはそうした声に表縁的には答えつつも裏で進めるべきことを進めて来たのだ。

それが、実りつつある。

エフェソスで起こした作戦は、見事に成功したと言っている。手に入れるべきもの……『扉』はすでに基地に搬入されていた。

「『地球の』ソピステスも、無駄ではなかった」

感慨とともに、呟く。彼がユダを討つという目的のために打ってきた手はそれこそ数え切れないほどだった。その一つ一つに血のにじむような努力を重ね、しかし無常にも全く役立たずに終わった例も多い。その中で見事に結果として繋がってきたものの、なんと貴重なことか。

しかし、順調なことばかりではない。

元々民衆も政治家もたったこの十五年で態度を柔らかくし過ぎてしまっている。連合から一方的に攻撃をかけた事実を伏せなければならぬ。

そのために、月のユダの基地に不穏な動きありとの情報を作つて、軍部を動かした。情報自体は、半分以上が嘘っぱちではあったが、ユダが何かしら軍事的な研究を進め続けていること自体は事実であったので、グールドは自身のコネクションを巧みに操つてその事実一つを巧妙に作り上げた。それによつて連合軍は国境ぎりぎりでの警戒に当たることになった。

それこそが、ユダの軍隊と、連合の政治家両方を騙すための作戦だった。

連合の不穏な動きにとられたユダは自陣深く、エフェソスの守りを薄くし、またそこに至るまでの警戒網に粗雑さを生んだ。ほぼ百パーセント不可能だったはずのエフェソスへのヘラクレイトス単艦での侵入が成功したのはこのためである。

更に連合側の政治家たちまでもがそこに目を向けていたために、グールドの手先は法や組織の監視を受けずに暗躍する自由さを手に入れた。エフェソスでの事件は完璧ともいえる情報の統制によつて人民は愚か、グールドとそのシンパである少数の人間しか知らない。軟派な政治家たちの唱える休戦協定に上辺だけで同調していたの

も、グールドの策略の一つだった。安心しかけていたところで刺激された人心というのは、哀しいほどに脆い。いきなりの事件に、ユダは連合に対しての態度を硬化させ、もしかしたらまたも戦争へと突入するかもしれない。そしてそのいずれであれ、ユダの変化を見た連合の政治家も世論もユダに対して批判的になる。

そうなれば、グールドがユダを討つという目的も達しやすくなる。(そもそも)

休戦などと、何を馬鹿げたことを言っているのか。鼻で笑ってしまう。

連合の政治家たちの馬鹿なところは、自分たちが優位に立っているか、若しくは最悪でもユダと連合が同じ程度の戦力だと思っているところだ。

実際には、潜在的な脅威を入れればユダは天敵と言ってもいい。恐ろしい存在である。彼らの進歩の早い技術体系は、宇宙を拠点とすることもあり、その進化のスピードを速めている。

このままずるずると時間を引き延ばされれば、いずれ敗北するのは連合のほうだというのが、グールドの考えだった。

相手は、技術で勝っている。時がすぎれば過ぎるだけ格差は広がり、そしてある一転を超えたとき、例えば今とは比較にならない無線通信などが開発されてしまえば、それこそ連合はお仕舞いである。停戦したとしても、まさかユダが連合に取り込まれるわけも無い。ユダは連愚の根本的な思想、つまりは、「人類にとつての単一国家への帰属と、それによる安寧」に反発しているのだから。

人類単一国家への帰属。それによる平和、幸福。

その欺瞞は、グールドも自覚している。

そもそも、何故人類が悲劇的な歴史を歩んできたのか。その理由は、人そのものにある。「自分」などというものを、空虚さから逃がすために『国』などの共同体に帰属させるような愚かな意識が、無益な戦いを生み出すのだ。

何故生きているか、生きるとはどういうことか、生と死は何であ

るのか、愛するとは可能なことが、神とは、人とは、そもそも存在するとはどういうことか。

人類が生まれてから一度も絶えることのない、言葉をもった種族としては宿命的な、根本的問題。しかし、多くの人間たちはいつの時代も弱く脆く愚かしい。そういった問題に対して正面から考えることをせず、思考を停止して逃げる。そしてそのために分からないことすら分からなくなる。何が分かっていないか自覚することが無くなる。生きることの根本的な疑問を考えることなく逃げて、しかしそれでも生きなければならなくなった人々は、恐怖し、寂しさに震え、人生に意味を求め表面的な隣人を求めとにかく安心しようと奔走する。

そこで国家というものは彼らにとって理想的な寄る辺であったのだ。あなたは誰だと問われて、私は……と絶句し自分とは本来なんであるのかを問うことに耐えられない愚かしさを、「　という名前の　国人です」という名前と国家は容易く包んで保護することになる。

こうして、元々は生活をより安定させるための、便宜的なものでしかなかった手段としての「共同体」は、いつのまにか人の愚かしさに寄生された「偉大で壮大な概念」としてグロテスクに装飾される。

グールドが過去に読んだ書物では、ある島国の人間が戦争のときに叫んだ台詞がクローズアップされていた。

『お国のために』

不謹慎にもグールドは笑ってしまった。

単なる便宜であった国のために戦争し、死に行くとはどういうことか。彼らは国というものがなんだと思っていたのだろうか。国土は国の土地であり、国民は国の民であり、法は国の決まりごとであり、文化や風習は国民のものに過ぎない。

ここでも彼ら愚かなる人民は、分かっていなかったのだ。『自分がないを分かっているのか』分かっているなかった。だから何のため

かも知らないということ自体知らずに、国のために死ねることになる。

もう、何千年と繰り返してきた、これが人類の輝かしい歴史である。

人は革新しない。それが、グールドの結論である。数千年かけて、そしてこれからも愚かしい人間の中にほんの少数の天才が苦悩しながら生きていく。それが人類なのだ。

だからこそ、そんな人類には真の平和も何も無いのだから、欺瞞を使つてでも、「なるべくの」安寧が欲しい。悲劇の数が、無くせはせずとも、長きに渡つて減らせることが出来るのではないか。

統一国家は、理想的だった。圧倒的な力が、その中央に集まつてゐるために、異を唱えるものの肅清が容易い。事実三次大戦、民族統一戦では反対国家や組織を容易く潰したのだ。

ユダさえ月に逃れなければ、上手くいつていた。確かに人類は本質的に皆同じ国家になつたからと言って争いを止めるものではない。空虚なままの「自分」をより幸福にしようと馬鹿をやり続ける。だが旧来の国家体制であれば国家同士の大規模な悲劇になつていたのである。争いも、統一国家ならば、避けられる。反旗を翻した者の数が増える前に壊滅させることが出来る。統一国家であればこそ、面倒なくつもの国家同士の協定などなく、反対勢力を壊滅できる。

つまり、統一国家の利点は害虫が増える前に駆除できることにある。結果的に、悲劇の規模を抑えられる。それによつて人は更に愚かしくなるだろうが、元々愚かしさから抜けられないものである。「だからこそ」

少数の天才たちが悲劇の余波を受ける確率の少ない世界を、築くことが出来る。築かなければならない。

しかし、問題は起こり続けている。

『アゴラ』で起きたという戦闘は、予定外のものであつた。しかもこの戦闘は既に政治家たちの知るところである。先ほどからグールドにはどう動くかの指針を求める声がやまない。

深く息を吐き、決断へ静かにいたる。イラついていた頭を無理矢理冷やす。

とつくにグールド自身、オーバーワーク気味であつたが、やり遂げなければならぬという信念が彼を支え続けている。

「利用する、か」

アゴラの戦闘。月の、それもかなり遠方での出来事だ。関わった兵士も多く戦死している。生き残った戦艦は、幸運なことにグールドの息がかかった「ヘラクレイトス」だった。

『扉』をL1に送り届けた時点で彼らの役割は一応は終わつていた。しかし貴重な戦力であり実験体である「カナン」ややり手の部下も乗船している。出来れば帰還しろと言つていたが、その途中アゴラでのことに巻き込まれたらしい。

であれば。全ての状況が、上手く利用できる。

アゴラでの事件を逆にユダの非として公表し信じ込ませることが出来れば、これを開戦のための材料に出来る。

そして、勝つのだ。最後に残った害虫を潰す、うってつけのチャンス。

「裁き」の名を持つダン。その内部に運び込まれた『扉』によって。

\*

正式な実戦要員のパイロットとしての許可証が、トーエのパイロットスーツには新たに収められていた。数時間後に控える作戦、敵新型艦からの機密機体の取り返しを前に、群はトーエをテストパイロットから正式なパイロットへと転向させた。

薄く小さなカード。それが新たな身分証であり、同時にあの新型とこれから正式に付き合つていくことになるという証でもある。

自室で作戦時間までの待機を命じられたトーエは、簡素なベッドに腰掛けて目を閉じていた。ヨセフを敵の手に渡したショックは大

きく、気落ちしてはいたが、そのまま作戦に望めば死ぬことにもなる。

落ち着き、最低でも平時の実力を出さねばならない。それがたとえ、ユダ上層部の画策した汚い作戦であつたとしても。

新型のあの機体に積まれているシステムが戦場を一変させるだけでなく、およそ超常的と言つていいものであることは、トーエも知つていた。ミレトス家の一員ということは伊達ではない。半ば家を出た身ではあるが、その程度の情報は引き出せる。『扉』というものが一体どういうものか、トーエはこのアゴラでの補給時間を利用してアルバからその詳細を聞いていた。

特殊な操作法にも納得がいくものだった。その中核、『扉』は、兵器に転用すればそれは有用なものであつたが、しかしその意味を知つたトーエは素直には受け止められずにいる。

（『扉』が人の全体性、全ての心の深奥にアクセスできる鍵、いえ、名前の通り扉だとするなら）

それは、兵器などという矮小な目的の道具にすべきではない。

トーエ自身知らされていなかったが、元々『扉』はソピステスのミレトス家の中で代々守られてきたものだという。

アルバが神妙な面持ちでトーエに話した、『扉』の正しい運用というものが、思い起こされる。

『トーエ、扉は、だから、人の全てに通じる入り口だ。このことについての説明は難しい。それは、問題が、人そのもの、人の心、『自分』というものの存在構造の話だからだ。

トーエ、いや、姉さんは、自分というものが一体全体何なのか、考えたことがあるか？ 社会的立場のあれこれや、性別、何かへの帰属、そんなものは、移り変わったり、変えてしまつたりすることの出来るものだ。だがそれらを変えても自分であるという事実は揺らがない。本質的な自分は、だから、諸々の外的事実ではない。自分を『私』と呼ぶ、それは誰だ？ それこそが、自分というもので

はないか。瑣末な個人感覚ではない。例え全てのものの存在を疑っても、疑うことにおいて絶対的に存在する、自分というもの。名前は名詞であり私という言葉は代名詞だが、名詞も代名詞も「あるものをさすための語」だ。つまりそれこそが、名前よりも先にあるそれこそが自らというものだ。

では他人とは何者か。身体も痛みも別々の存在だが、それは単純に「自分ではないもの」と出来る存在なのか。

私たちの古い先祖は、とつくに考えていたよ。そして今も私は考え続けている。

いいか、自分という存在の意味の絶対性、自分が自分であるということは、他の如何なる存在にも依っていない。だからこそ、自分というのは、単純に個人ではない!」

そう、それは逆説的な事実。

『考えるのも見るのも聞くのも自分以外には無い。その意味で、世界そのものは、自分そのものだ……。そもそも他人が完全に隔絶された別存在であつたならば、会話が何故可能か。何故その感情に引きずられるか。言葉によつて、一瞬で同じ意味を共有できるのは何故だ? 人と言つて誰もが人を思い浮かべるのは。

自分というものは、考えつめれば、個人というものを通り抜けて、向こう側に落ちる。本質的な、如何なる外部属性にも依らない真実的な自分、それは同時に、『誰でもない』ということになる。誰でもないということは、反転、誰でもあるということだ。これは、どうしようもない、一足す一が二であるようにただそうなっているというしかない。論理がそうなっているのだから。

そもそも、私たちはあれそれと物を指しているが、この世はただ世界があるだけだろう。宇宙と言つてもいいが、この世界で世界に含まれないものは無い。自分も他人も、世界の一部だ。よく考えてみなくとも、いいか、それをそれと言わなければ、それは『無い』。言葉は、世界から意味を『切り取つて』成立するものだ。言葉なき世界は、何も無く、ただ世界があるだけだ。



だからこそ、自分と他人は、完全に分かれた存在ではない！

論理に従えば、自分とは、誰でもないが故に誰でもあり、それ故に他人でもありえるのだ。いや、本当は他人というだけではない。万物が、宇宙が自らの本質だ。ただそこまでをはつきり知覚するには歴史に名を残す天才でも、どんな聖人でも難しいことだ。だが、他人だけなら、実はそう難しいことではないのではないか……。全て知覚し思索するのは絶対に自分であるのに、その世界の中で『自分の外側』というのは不可能だろう』

驚異的なのは、その思考そのもの、自分と他人というものを巡る真実もそうであつたが、それを明確に語るアルバであつた。この言葉だけを抜き出してみれば、一体誰が彼女をトーエより六つも下の少女だと信じるだろうか。

『自分も、他人も、その最奥では、一つだといえる。誰もに深く鋭い思考があればその事実に気が付き、心を通わせられるだろう。もしかしたら、過去の地球で崇められていた偉大な人物の一部は、それを深く知っていた奇跡の人ではなかっただろうか。また、その深みにある一つの心のことを、ある学者は集合無意識と呼んだのではないか……』

話が逸れたな。『扉』は、端的に言えばその、個人の奥に広がる意識へアクセスする入り口だ。昔の天才たちや聖人たちが例えば上辺ではなく真人の痛みを共有したりするように、人全体というものに意識を溶かして分かり合い、互いの存在を正しく感じる事が出来る。心は物質ではないから、本質的には距離も物理的妨害も関係が無い。

本来そんな意識の境地ともいえるものに達することは容易ではない。たとえ人類の中に数人位はいたであろう圧倒的な天才であつても。しかし、この扉は、それを可能にする。その名前の通り、元々真実の自分と他人、全体性へ気が付くことの出来る人間であれば、その境地へ導かれることの出来る扉なんだ。

そして、その機能に、導かれることの無い人間たち、軍部と政府

そして悪しきことにソピステス内部に入り込んだ人間が目を付けた。その結果が兵器への転用だ。』

妨害を受けない知覚システム。計器に頼らない皮膚感覚での操縦。敵パイロットを捉えその感情の一部までも読み取るかのような不思議な感覚。意識を機体そのものに同化させる様な扱い方のコツ……。それらこそ、扉の存在がもたらした現象だったのだ。

『あれは、扉は、だからこそ兵器なんて矮小な存在に使うべきではないものだ……。人が真に分かりあい、そして仮に宇宙にい広く散らばっていてもその存在を肌で感じ、時間も空間も越えて共に生きることの出来る、その鍵だ。今はまだ愚かしい人類が、革新するきっかけになるかもしれない……。だからこそ、ソピステスはそれを歴史の中で隠し、今まで守ってきた。また、何台か前の頭首ミウ・ミレトスは愚かなままに寄り集まりソピステスをも飲み込みつつあった統一国家から扉とソピステスそのものを逃がしたんだ』  
それが、月のソピステスの物語の、始まりとなった。

船体が揺れる。その振動に気が付き、トーエは物思いから脱却した。閉じていた目を開く。

（私に、出来るのかな）

自問する。ソピステスが、ミレトス家がトーエがこれまで思ってきた、単なる歴史と地位のある『名家』というだけの存在ではないことをアルバから教わってしまった。過去のミレトス達が行ってきたことを、正しい形で継ごうとしているのがアルバである。

そして、その責務を捨てて、家を飛び出したのがトーエである。だが、現在トーエは重要なキーとなる扉の搭載された兵器を操ることの出来る貴重なパイロットとなり、アルバはその扉と戦争を巡る人類の業とも言える大きな敵、ユダも連合も無い、愚かな古い人々に飲み込まれぬようにアルバ自身の戦いを続けている。その戦いの中にいて、トーエは扉を巡る重要な立ち居地にいる。

何もかもを押し付けた妹に、手を貸すことの出来る、手を貸さな

ければならない機会。

しかし、壮大な話もここまで来ると眩暈を覚えるという物である。それでも、そのやらなければならぬ戦いの中には、ヨセフを助け出すことも含まれている。アルバは彼も扉を使うことの出来る人物だと断定していた。それはトーエも戦場で共に戦って知っていた。扉は、元々深い思慮と洞察、直感力のある人物、つまりは旧来の大衆の愚かさをもたぬ賢き人のみが見える物である。であるとすれば、ヨセフを無駄に死なせてはならない。

ふつつつと闘志が湧き出でる。

じつと前を見つめていたトーエの前で、部屋のインターフォンが鳴る。ドア横のモニターには通路に立っているアラムとアルバが映し出されていた。

（アラム？）

驚いて、すぐにドアを開放する。

すぐに二人が入ってくる。軽い音を立ててドアが閉じてから、アルバが口を開く。

「驚いたか？」

民間人は、再度アゴラに立ち寄った時点で降ろしているはずだった。これから行われる新型の取り返しのための作戦は純然たる戦闘行為なのである。

「どうして」

「アゴラで降りたからってあそこは既に半分機能の麻痺した街だ。ブリュタネイアーにかえるにしてもいつになったらシャトルに乗れるのか分からないあんな街に降ろしても仕方が無いだろう」

けろりと言ったのけるアルバ。対照的に、トーエは心底意外と思える展開に困惑を隠せないでいた。

「そんな、これからこの船は戦争しに行くのに……！」

「それでも、一人で返すわけには行かなかった」

アルバの口調には、何か含む物があった。

それに気が付き、トーエは追求を一旦止める。

「軍部も政治家たちも、ここまで状況が動いて、ようやく慌てだしている。アゴラでのことの少し後には月の表回りでも小競り合いがあつたと聞く。そんな中で、『扉』の件が予想外に知れ渡ってしまった」

はつとする。一部の、それこそソピステスと少数の関係者の間のみで扱われてきた『扉』。その機能を多くの上層に位置する人間が知つたならば。

「今はユダ内部も揺れ動いている。いきなりの戦争で、皆自分たちの立場と、ユダの存続を危ぶむあまり過激な行動にでかねない。アラムはヨセフと親しい間柄だ、それを一人で帰せば」

不味い事になりかねない。しかし、月の要人たちはそれほどに愚かなのだろうか。十五年の休息で、不慮の事態に敏感すぎる反応を示す組織が出来上がってしまったということか。

「あの、私が頼んだんです。アルバさんに」

申し訳なさそうに、アラムが発言する。

「ヨセフが、今はあんなことになって、一人で帰るのは嫌だったから、それでわがままを」

「それで利害が一致した。私もアラムのような友人を政争のネタとして使われてはたまらない」

「でも、それならソピステス伝いに他の船かどこかに乗せることは出来ない。既にソピステス内部も明暗入り乱れる場所だ。完全に信頼できる人物だつていないことは無いが、組織そのものが牙をむく可能性がある以上安心できない。そしてそれはミレトス家をとつてみても同じだ」

事態がそこまで素早く動いているということに、またも驚く。

単なるユダと連合の争いというだけならば、どれだけ楽な物だろうか。ヨセフもアラムもアルバも、安全な場所で暮らしていてくれたら。それを願って軍に入つたはずだったが、そういった個人の思い成しを容易く大きな組織のうねりは無視してしまう。

「あの、トーエさん」

アラムが芯に強さを感じさせる視線を向けてくる。

それを真正面から見返して、トーエは頷いた。

「分かってる。ヨセフは、絶対連れ帰るから」

アラムがヨセフに対してとる態度や視線の中に潜む特別な意味に、トーエは気が付いていた。だからこそ強めにそう宣言したが、アラムはなぜか困ったように表情を変えて、それからはっきりと言った。  
「違います」

「え？」

ふっ、と温度が変わる。心地よい柔らかな香りと、感触が身体に伝わる。

アラムは、トーエにその身を寄せて、ぴったりと寄り添うようにしてその耳元で続ける。

「私にとつては、トーエさんも大事です」

拙く、分かりやすい言葉。それがトーエの胸を打つ。

「ヨセフも、トーエさんも、大事なんです。二人とも、どうしようもなく、いい人だってわかるんです」

てつきりトーエは、ヨセフがさらわれてアラムはひどく狼狽していると予想していた。それが、ことはまるで逆なのかもしれない。少しだけ身体を離して、アラムはトーエの手を両手で握った。

「二人とも、無事でいて欲しいんです。だから、トーエさんには、勿論ヨセフは助け出して欲しいけど、無事に帰ってきて欲しいって言いたかったなんです」

喉が詰まる。上手く声が出ない。トーエは、じわじわとせり上がる感覚が何なのかおおよそ知っていた。

「私は、皆みたいに戦えません。ロボットにも乗れないんです。だからこそ、やらなくちゃいけないことがある、そう思っています。皆さんみたいな人が戦場に行かなくちゃなくなったら、それで皆死んでしまったら、後でそれを語る人がいない。

無事を祈って、正しく戦場の人たちを見る、そして覚えておく。それが、私がやるべきことだと思っています。ヨセフがこういうこ

とになって、それ始めて考えたことですけど」

その行動の理由、理念を、幼いと笑うのは容易いことだった。だが、それが真実の一側面であることもまた確かなのだ。誰もが正しさのために戦いに赴けば、それで何もかもが終わってしまう。

直感する。こういう人間のために、軍人はあるべきなのだ。

いつの間にか、アラムは涙目だった。震える言葉が宙に浮かぶ。

「なにもできない……！ たしかにそれはそうかもしれない、でも逃げられないって、そう思ったから、何かをするしかなくて」

それ以上を言わせないために、今度はトーエが彼女を抱きすくめた。喉の奥の感覚を無理やり飲み下して、切れのある声を出す。

「分かった。全部、成功させてみせる。だから、見てて」

満足げに、また安心したようにアルバはその二人を見ていた。

## 7 新しき人々のゼルプスト（中編）

敵は疲弊した戦艦一隻。その内部に存在する機密を取り戻すためには、完全な制圧こそが望ましい。船内まで制圧した上で、ゆつくり確実に物を運び出すのが最も安全だからだ。

そのために、ユダはデルフォイに加えて戦艦エングス、個別登録名イニシユモア号を作戦に割り当てた。

二隻というのもまだ心許ない話であるが、多くの戦力が月全域の警戒と、L1とのにらみ合いに回っている。ユダ領内での作戦ということもあって、多くの戦力は必要ないとの判断が下ったのだ。

実際、多くの兵たちは安心してしている。敵は先の戦闘で被害を受け、補給もままならないままに逃げ出したのだ。月で連合が補給できる場所は非常に少ない。厳しくはない戦いになると誰もが予想している。

しかし、アルバの表情は優れなかった。

トーエやヨセフが戦いに直接関与しているからというものもあるが、それ以外に『扉』の重要性についての認識が正しくあるのは、デルフォイの中ではアルバくらいだからだった。

（虚勢にも限界がある）

自室で顔に手の平を当てて、アルバは嘆いた。ミレトス家の、人類のための責務を果たそうとやれることは最大限やっている。しかし、圧倒的に実権も経験値も足りないという、じわじわとした閉塞感があるだけでそれほど効果を挙げていない。

それこそ妖怪じみた政治の世界の人間たちを相手に立ち回するには、幼すぎる。

今回の作戦が成功して、その後の展開も考えてはいる。しかし、人というものの強大さが小さな肩を押しつぶし、悲鳴を上げさせるのだ。

\*

特殊装備の中でもその質量において軍内部でトップ争いを繰り広げるであろう戦艦用の追加推進器。デルフォイとイニシユモアの巨体を通常の数割増しで加速させる使い捨てロケットのようなそのブースターが、凄まじい勢いで船を押し進める。

強襲。それが此度の作戦の肝である。

敵は手負い、追いつきざまに徹底的に叩き、目的を達することこそが理想であった。逆にもっとも避けなければならないのは、逃げ切りを許すこと。月面やその周囲に展開した観測班のお陰で、かなり相手の進路は特定できている。追いつくこと自体は容易と言っている。しかし、そこで上手く相手に対応してしまえば、いくらかの戦力を相手が割くだけで終わってしまうことも十分に考えられる。

戦力はデルフォイ側が相手の二倍以上。これを最大限活かして仕留めなければならない。

鍵となるのは、二機の新型。

ユダが製造した『扉』を内に秘めた新型機。

初めての实战から数日が経って、その正式名称がデルフォイにも届いていた。

『ゼルプスト』

大きく広がりを持った「私」という物の中心点にして、全体性との結節点。トーエとヨセフが共に駆り、そして一機は既に解体され扉を抜かれた抜け殻となっている。

デルフォイから、今ユダに残されているゼルプストの最後の一機が暗い宇宙に飛び立った。

\*



加速した戦艦から射出されたトーエは、非常識ともいえる速度で敵戦艦へと迫っていた。デルフォイが敵を発見してすぐのことである。超長距離では妨害されてしまう探知システムの性能により、敵を発見したときにはすでにかなり接近しているというのが現在の戦場の常識である。だからこそ、トーエもすぐに敵に至ることが出来る。

小さな粒ほども見えていなかった敵艦も、宇宙的な移動の最中では目の前にあるようなものだ。

ゼルプストは予備パーツでややおざなりにはあるが修繕され、アゴラで受け取った兵器で武装していた。レールガンは全て装備から外し、かわりに背中に背負っているのは両手で構えるやや長く大きな粒子ライフルである。ビームは、その特性や威力の事を考えればゼルプストに適した装備だというのが軍の考えである。トーエのものはセンサ類の改良された試作ライフルで、距離の近い敵が素早く動いても機敏且つ正確に狙いが定まる高性能品だった。

コクピットでトーエは静かに自分の意識を機体のそれと重ね合わせていた。

『扉』は自己意識の奥の奥、人全体の意識へ人を導く物である。そしてそれは同時に、個人というものの肉体感覚、物理的感覚をも全体性へと帰化させようとする。あくまで理論的にはだが、文字通りの意味で「人の痛みを知る」ことも可能なわけである。

その応用としてゼルプストに搭載されているシステムの一つが、意識と共に物理感覚を溶かした後に、『機体の感覚』と重ねて驚異的な精度、速度で機体を制御操縦するというものだった。

弊害は、人が自分の形を感じなくなったり、別の物になったりすることには、いうまでもなく不快感や不安感が付き物だと言うことである。並みの適正ではそこまで「自分」を全体性へと溶かせるわけでもないし、また完全に溶かせば帰ってこられなくなる可能性がある。

危険な機体なのだ。しかし、トーエはその適正を知る者ですら驚

くほどに見事に機体を制御し始めていた。

自分が機体になる。

意識が澄み、透き通ったままで形を崩してゆっくり広がる。やがて視覚でも聴覚でも、五感のどれでもなく宇宙を見ることが出来るようになる。

機体に溶けたパイロットの感覚に、機体各部のセンサーと、『扉』が通じる宇宙そのものの意識（とはいっても機体の機械部分の性能やパイロットの意識の限界により、期待の周囲のかなり広い範囲、という制限つきだが）がそのデータを『五感以前の感覚』、つまり五感はその感覚として別々に知覚するが人の感じるその瞬間においては『感覚』という一括りでまとめられるという意味での、『感覚そのもの』としてパイロットに与える。

涼しい。

トーエは途端にそう感じた。宇宙に肌を晒しているのだ、と直感的にそう解釈する。機体の装甲が、そのまま肌である。

その理解を得た瞬間に、トーエのゼルプストは戦闘機めいた形状を一変させた。身体がスライドし展開し、折りたたまれて固定されていた脚部が伸びながらその本来の形状を晒す。ミサイルラックのように見えていた部分が一気に開いてその中から五指をもった手の平がせり出す。

人型。

それは、『扉』によって得られる情報を最大限多くし、また扉のシステムによって機体を操るパイロットが最も扱いやすいようにと設計されたデザイン。

兵器という存在を愚弄するような、無駄の多いデザインだった。肩には小型のビーム砲が新たに取り付けられ、死角の少ない機体となっていた。

自分が身一つで宇宙を飛ぶその感覚は、一般人であれば悲鳴を上げるどころの騒ぎではなかっただろう。しかし、自分を溶かしつつもその自己が、『全体である故にまた自己でもあり続けられる』と

いうことを深く自覚するトーエは、冷たい表情を少しも崩さずに気を張っていた。

直線的な悪寒が走る。

敵間からの砲撃を『発射以前に』察知して、トーエは軽く身を傾けた。

ゼルプストの脇すれすれを、光が貫く。動きの遅い戦艦からの攻撃など、今のトーエには問題ではなかった。

人型に変形した、つまり本来の性能を引き出したゼルプストは、正規の訓練を受けたトーエと合わさって、その実力を遺憾なく発揮しようとしていた。

（艦載砲を潰す）

そう決心して、発砲する。ヨセフが乗る戦艦であるために派手に壊すことは出来ない。敵戦艦の装甲面をすれすれで薙ぐように、その船体からとび出た砲身を焼き払う。

「待つて。ヨセフ」

\*

ヘラクレイトスの格納庫には、戦力となる機動兵器のほかに小型の脱出艇や作業用の重機などが積み込まれている。それは連合に限らず宇宙用の大きな船であれば用意されていて然るべき最低限の装備である。

カナンは様々な種類の焦りに惑わされぬよう注意しながら、その目的のために移動しなければならなかった。

自分の船に追撃がかかる公算は高い。であれば、その前に厄介ごとを処理しておかなければ、生き残ることが出来ないというのが、今現在彼女の直面している最も大きな問題だった。

月の周りを離れてL1に向かう前であるのは当然のこととして、なるべく月の裏側、プリユタネイアーに近い場所でヨセフを降ろさなければならぬ。

彼を機体ごと撃ち落さずに捕縛したのは完全に彼女の独断である。軍は機体の奪取を評価し、ヨセフの処遇をカナンに任せることを渋々ながら承諾した。勿論そのことについては、カナン直属の上司であるベニヤミンの働きかけあつてのことである。

迷惑をかけるわけにはいかない。ゆつくりとどこか月の基地に接近してもらう時間はない。

そのため、カナンはなるべく早い時期にヨセフに小型の脱出艇を与えて月に降下させるつもりでいた。前大戦時から使われていた、今となつては時代遅れの代物である脱出艇だが、ヘラクレイトスをはじめとした連合の船には緊急用の資材として単なる荷物ながらも乗せられている事が多い。

三度目の食事を与える前に、彼女は行動に出た。ちょうど船が月の小さな基地の近くを通る少し前に、ヨセフを檻である個室から連れ出す。

「出てください」

あまり物のパイロットスーツを渡してからそう言つて、扉のほうへ彼を促す。先の言動から反発が続くかとも警戒していたが、意外にも彼は何も言わなかった。無言でスーツを着こんで指示に従う。ただ、繊細な顔立ちの中に強い意志の力のようなものを感じて、カナンは警戒を強めた。

他の兵士への体面と、もしかしたらということを考え、当然のことながら、彼女は銃を携帯していた。無反動式の拳銃である。片手でも十分に扱える大きさではあるが、その気になればマシンピストルとしても使用できる、非常に攻撃性の高い物である。

猛禽の瞳のような銃口を彼に向けて、部屋を出る。彼を先に立たせて、指示する。

「しばらく真つ直ぐです」

「こういうのは、一人でやるものじゃないんだろう？」

振り向かずに、ヨセフが問う。その疑問は、正しい物だった。

「……ええ。しかし、これが私に出来る精一杯なんです」

言い訳の厚かましさ。自分の言葉に、カナンは苦々しい思いを味わう。確かに、他の兵士を付けなかったのは、彼に対する配慮もある。それでもそもそも戦争に巻き込み殺しかけた拳句、彼の申し出を断り、一敵兵として振舞った自分のいうことではない。

ヨセフは、それに関して気が付いているだろう。カナンはそう思った。が、帰ってきたのは厳しい言葉ではなかった。

「そうか……有難う」

どこか大人しい、大人しすぎる言葉。

何かが、事実と表面的な出来事の見え方の間で、乖離している。

そんな予感を抱えつつ、しばらく通路を進む。突き当りでエレベーターを使って移動し、格納庫への通路に躍り出る。

そこで、ヨセフの足が、というか身体が止まった。

「なにを」

言いかけて、それをヨセフが遮って宣言する。

「悪いけど、降下する気はない」

いきなりのことだったが、その言葉に、カナンは銃を向ける手先に神経を集中させた。

反抗するというのは。彼は、この状況で。自問するが、答えが出る前に彼が続ける。

「……皆がそれぞれに勝手を言っ、それで僕が勝手を押し通せないなら、そんな状況、許すつもりはないよ」

「今更、何を……。止まらないで、進んでください」

警告も、無視される。

「子供じみた、理屈ですらないって言われるかもしれない。でも」振り向く。もし彼がこれ以上妙な真似を起こせば、強制的な措置をとらなければならない。強制的な措置。カナンは手元の銃を意識して、鳥肌が立つのを自覚した。

彼を、撃つて、殺して、それで？

「でも、僕は馬鹿げたことなら、それを叩き潰して知らせてやりたい。トーエも、君も」

「戯言を」

言うな！

銃口を彼にポイントするより早く、彼は床を蹴って、そして奇妙なことに身体を丸めた。それはまるで対シヨック姿勢のようで……。カナンがその疑問に見切りを付けて行動を起こすより早く、ヘラクレイトスを大きな振動が襲った。

「！」

声にならない悲鳴を上げる。足元の床に弾き飛ばされて、カナンは天井となる部分にしたたかに背中を打ちつけた。息が強制的に搾り出されて、痛みが脳髓を支配しようと猛る。

しかし軍人としての行動原則、そして矜持も忘れない。天井と壁で身体の勢いを殺して、体勢を直して顔を上げる。

その反応自体は優秀な物だった。突然の事態に翻弄されず、すぐに立て直したのである。しかし、ヨセフはそのカナンよりも早くその身を翻し、カナンから遠ざかっていた。

（まるでこの衝撃が予想できていたみたいだな！）

驚くべき反応。少し遅れて、艦内に警報が響く。

敵機に補足・攻撃されたとの放送が流れて、カナンは舌打ちした。「やられるまで気が付かないでいたのか！」

お粗末な観測でもしていたのだろうか。ブリッジに対する疑念を無理矢理封じて、改めてヨセフを追おうとするが、その姿は既に格納庫へと消えつつある。

「馬鹿なことを！」

急いで後を追う。後手に回らなければならぬ愚を冒してしまった。そのことが彼女を苛んだ。

\*

敵艦はどこにそれほど積み込んでいたのかと、少しばかり不思議に思えてしまうほどに多くの艦載機を抱えているようだった。そし

てそれを惜しみなく出撃させてくる。

当然だろう。トーエは納得していた。敵にとっては敵の領内深くで、増援も難しい。となればここを全力で切り抜けるしかないのだろう。

三機のウルゴスがトーエに迫る。

一斉に行われた射撃を機体を右に左にロールさせて、かわしながら、ライフルを構える。

すつ、と目を細めて、トーエはモニターの映像と、体内に流れ込む感覚を探る。動き回る敵機、その内部の人間を、意識をして捉える。

（捕まえた）

彼らがそこに「いる」ということをはっきりと感じ取る。その感覚を今度は機体へ流してライフルなどの火器管制システムにリンクする。

ライフルの照準機が小刻みに動き、相手を補足する。ここまでは、既に敵は手の平の中にいるのも同然だった。

立て続けに三発、抑え目の出力で発射する。敵機がその胴体の真ん中、どう誤魔化すこともできない急所を射抜かれて、トーエの傍を通り過ぎてはるか後方にまで流されてから小さく光を上げて崩れる。

敵兵の痛みや恐慌をまで感じ取ってしまったわぬよう、『扉』へのリンクを一時的に弱める。しかし、身体を透過していく叫びにも似た痛みにトーエは軽く呻いた。

しかし、気にもしていられない。

敵が予定外の戦力を有しているならば、それを全て取り除かなければ制圧はありえない。

索敵を続ける。扉によって拡大された意識が、近くに存在する人間の意識を、『物理的距離を半ば無視する速度で』感知して、自己意識へと送り込む。

ゼルプストの『扉』のシステムは、集合意識へパイロットを導く

と共に、集合意識側から他者の個人的意識を感知する。それはつまり、物理的な、視覚や熱、電磁波などに依存しない、最強のレーダーであるということだ。近代に発展した多くの妨害技術、それによって長距離攻撃を不可能とした戦場を生み出だすこととなった技術たちも、関係がない。

そしてもう一つ。

意識とは、無論のこと非物理的なものである。つまり、その感知と伝達は、扉と人の間だけならば、それこそ『光の速度』すら超えることが可能である。あくまで『扉』によって直接感じたものに限られることだが、その速度は他の通信とは比較にならない。

この戦場に、トーエを超える速度は存在し得なかった。

カタパルトから出撃する前のウルゴスを、トーエは意識の中心においた。戦艦まではまだ人間的感觉では大変な距離が存在するが、すでに射程県内、それも精密射撃の有効な範囲である。

貫く。

戦艦を少しだけ離れた連合の戦闘機が、全く活躍しないままに光の玉になって、やがて消える。

それを見ながら更に前進する。その頃には、イニシュモアからも部隊が迫っていた。ラゲルを先頭としたコリユーン部隊がトーエのすぐ後ろに控えている。

その部隊こそが重要である。いくら強くとも、トーエやラゲルだけでは制圧など出来ないからだ。戦艦の火力のこともあるし、内部制圧となれば白兵経験や訓練のある一般の軍人が最も心強い。その点トーエは満足に生身の人を撃ったこともない元テストパイロットである。

機体を先行させて、戦艦からの放火を避ける役に徹する。自分が狙われれば、その分後方が安全になるとトーエは踏んで、トップを務める。射撃自体はレールガンやビームが多い。それは、互いが感知できる程度の距離では撃った瞬間着弾するほどの圧倒的な速度ではあるが、その発射の気配が感じられるトーエには当たり難いもの



だ。

軽々と防御放火を掻い潜る。感覚としては、自分の身体（つまりは機体のボディ）に向かつていくつもラインが伸びてくる、そしてその一瞬後にそのラインをなぞるように攻撃が通り過ぎていくといった感じである。

宇宙を軽々と泳ぐ。それだけで、トーエは敵艦に接近し続けた。

\*

ヘラクレイトスは最大の危機を迎えていた。他に言いようがないピンチという言葉が細大漏らさず具現化したような状況に、ベニヤミンは血の気の引く思いだった。

しかし、諦めの悪さでは、彼もまた、艦長などという役職を受け持つだけの男であつた。

敵の戦力を様々な情報と分析結果から、憶測して、行動をとる。

「出せる機体はすべて出せ！ 正面の敵に構うな、やつは規格外だ、化け物に手を焼いている時間はない。放火を後方の母艦と部隊に集中させる、最終的に戦力差が上手く逆転すれば勝てる」

しかし、それは困難そのものだ。

上手く逃げ切るためにも判断としてはそれしかないが、成功させるとなると辛い。敵母艦は二隻確認済みだが、いずれも距離が遠い。遠くから機動兵器部隊を送り込んで安全圏に近い場所で見物しているのだらう。それは、戦力差を考えれば賢い方法ではある。

（上手く接近しなければならんな）

そのためには、敵部隊を突破する勢いが必要なのだが、それを許さないのが敵のあの『新型』である。アゴラで交戦した際はそれほど脅威には感じなかったのだが、今猛威を振るうそいつは、無茶な奪取計画を上が計画しただけあると感じさせるものだった。

「カナンは。出ていないのか」

管制官に尋ねる。

「まだです。例の捕虜を外に出すってその途中だったはずなんです  
が……」

ならばおかしい。戦闘が始まり、最初に軽い攻撃を船が受けてから  
もう中々の時間がたつ。

（何かあったか……）

未だに彼女が出撃していないということは、そういうことだ。連行  
中に振動が走ったために、不慮の事態があってもおかしくはない。

身体を焼くようなカナンへの感情を抑えて、落ち着いた声音です  
ぐ隣に座す副艦長に呼びかける。

「すまない、ここを頼む」

自分よりもよほど艦長らしい。そう常々ベニヤミンが思っている、  
叩き上げ、といった風体の中年男が、軽く笑いながら了承する。

「出撃なさるんで？」

「ああ。それと、カナンの様子も確認する」

ベニヤミンとカナンは表面上は単なる部下と上司である。が、見よ  
うによつては親子に思えなくもない二人は仲がいい。ベニヤミンは  
彼女の実直さと高い能力、そして連合の上層部に爪の垢でも飲ませ  
てやりたいと思うほどの聡明さを気に入っていたし、華南のほうは  
といえば、まともに自分を扱ってくれる数少ない連合軍人の一人だ  
った。

その関係の微妙さについて知っているものは少ないが、この副長  
の椅子に座る男はベニヤミンがカナンと共にこの船で最も信頼でき  
る男である。全て分かってくれている。

「それはそうしたほうがいいでしょう。でも急いでください。時間  
がありません」

「勿論だ。頼んだぞ」

シートから立ち上がり、椅子と自分のパイロットスーツとの接続、  
固定具を外す。無重力を上手く活かして急いでブリッジと各階を繋  
ぐエレベーターへと乗り込む。

（また、あの不細工な機体に乗ることになるな）

テオグース。試験機体ながら高性能機として仕上がったその機体は、しかし形が気に入らない。

だがカナンと二人で出撃できれば、戦況も変えられるだろう。非常識な艦長の出撃は、この船では珍しくない。ベニヤミンは生粋のパイロットなのだ。だからこそ、その能力において十分艦長役の務まる男が副長に就任しているのだ。

厳しい戦いだとはやいて、ベニヤミンは格納庫へと向かった。

## 7 新しき人々のゼルプスト（後編）

その反抗を思いついたのは、偶然が重なってしまったからだ。

ヨセフは衝撃に備えた姿勢をとって、それから予想通りに振動が走ると、その混乱を利用してその場を離れ、セシルからの監視を逃れた。

味方がこの戦艦に攻撃をかけようとしていることは、セシルとの二回目の面会の後に分かったことだった。何も出来ない部屋の中でヨセフが思いついたのは、自分の乗ってきた機体のシステムの活用だった。

セシルからの言葉と、依然扱ったときの感覚で、ヨセフはある仮定をしていたのだ。もしセシルが言うとおりの非常識な物が搭載されているのがあの機体であるのなら、拘束され機体と離されても出来ることがあるのではないか。

『扉』が意識の大元への通り道、ゲートというなら、それは物理的制約の中にはいない。であれば、自分がそれを意識さえ出来るならば、例えばコクピットにいたくともシステムの一部を使えるのではないか。

その読みが的中した。

無論機体そのものはジェネレーターの灯もおちており、起動する状況にはない。そもそも機体の機械類は物理的に操作しなければ扱えない。

ヨセフは、だから、純粹な『扉』だけを扱って、辺りの状況を探ったのだ。彼自身は気がついてはいないが、それがどれほど異様なことであるか言えば、トーエモカナンも機械的な補助と、コクピットという非常に『扉』を感じやすい近い場所にいて初めて扱えるも

のであるのを、遠隔操作したということになる。

多くの人間の意識を、集合した意識の側から見て感じ取り、更にその物理的位置、そして意図まで感じ取る。

自意識がばらばらに砕け、拡散する不快感に耐えつつも、閉じ込められていた部屋でヨセフは友軍、トーエの意識を感じたのだった。あとは笑ってしまうほどに大雑把な計画だった。味方からのアクション、そのとき出来るであろう船内の混乱を最大限利用して、目的を果たす。

目的。取り合えずは脱出し、生き延びること。

（そして、トーエやセシルやアルバ、それにアラムのために出来ることがあるはずだ……）

無茶な行為であったということは自覚している。いつ撃ち殺されてもおかしくない。丸腰の捕虜などというものは獲物としては三流以下だろうが。

本当ならば無理にでもセシルを連れ出したいところだが、彼女本人と分かりあえてもいない上に銃を持った軍人に何を強制できるものかという現実もある。

ひたすらに、格納庫を目指す。やがてそれらしき扉を開いて、躊躇なく踏み込む。迷うことは今更では命の危険しか生まない。

セシルの用意してくれたスーツが、役に立つことになった。同じ物を着ているパイロットの中で、ヨセフの姿は上手く埋没している。そのことに感謝をしながらも、ざっと格納庫内を見回して、自分の機体を捜す。相当派手にやられたが、まだ動くはずだ。動かないときのことはあまり考えなくなかった。

「ヨセフ！」

背後からの甲高い叫びに、心が引きつる。

（もう追って来たのか）

セシルの声だった。

彼女が追ってきてくれたのは、嬉しい。しかし、今は逃げなければならぬ。

（すぐに騒ぎになる）

彼女が自分を追っているのだと分かれば、周りの軍人たちが一斉に牙をむく。蜂の巣にされるのは勘弁してくれ、とヨセフは祈りながら、床を蹴った。

格納庫は、大抵の戦艦のものがそうであるように、広大な空間である。なにせ全高や全長が十から二十メートルにも達する機動兵器を複数有するのだ。天井は高く、低めのビルくらいはある。

そんな場所だから、船の各階から通じているし、各階の高さに合わせた通路がベランダのように壁にいくつも張り付いている。

そのうちの一つ、十メートルくらいの高さの通路に、手すりに掴まって降り立つ。

高い場所から眺めて、自分の機体を探す。

すぐに黒い影を見つけて、そちらへと身体を向ける。ちらりと後ろを窺うと、カナンもこちらを見失わずに跳躍している。

（何故騒ぎにしないんだ）

疑問を感じる。

銃でも何でも撃って、と言うのは大げさかもしれないが、周りに状況を知らせてかかればいいものとは思える。何しろ格納庫と言えどヨセフにとっては敵の坩堝である。

もしかしたならば、カナンは気遣っているのか。ヨセフの事を快く思わないであろう軍人たちの中でそれでもヨセフを助けようとしていたのが彼女なら、あまり騒ぎにしたいくないという思惑があるのかもしれない。

（そんな優しさがあるなら、ここを自分も抜け出す事を考えるべきだ）

思いつつ、機体まであと数メートルという所まで辿りつく。

戦闘機たちの中にあって、異形の巨人。扉の主。

しかし、それに取り付こうとしたヨセフの横合いから、声がかかった。

（手錬が出てきた）

実感する。敵戦艦を目前にして、トーエたちは手間取っていた。さすがに短艦でエフェソスまで出向いてきていただけはある。精鋭ぞろいだと言うことなのか、ここに来て敵の動きは鋭い物になっていた。

（奇襲の効果が薄れつつあるということかも知れない）

まともに対応しだした敵に、止められているのだ。

ラゲルという軍人の特別機と、自分のゼルプストだけならば突出することも可能なようだったが、敵艦の撃沈が目的ではない。二機が先行してどうなる話でもないのだ。

時間をかけすぎだ、と焦りが芽生えてしまう。一気に制圧できなかったのは痛い。

敵機は連動して防衛を始めていた。味方の急造の連合艦隊などとは比べ物にならない錬度である。

二機のウルゴスがトーエの周りをやや遠巻きに取り囲む。積極的に仕掛けてくるわけではないが、上手く牽制はしてくる。無視して振りきろうとすれば容赦ない砲撃が来るであろうし、撃墜してしまうのが手っ取り早いことだが、その距離はやや遠い。完全に相手が警戒して回避する状況では厄介だった。

ロックして、ミサイルを撃ちだす。その機動を意識しながら、相手の二機の回避機動を先読みして、ゼルプストを加速させる。敵の後ろに位置取りして、ライフルを振るう。

センサーが捉え、意識へとフィードバック。あとは撃つだけだった。

コンパクトな動きで、二連射する。一瞬の間において二発の光弾が二機の敵へと迫り、その機体を射抜こうとする。

狙い通りに命中したのは、一機だけだった。残り一機はぎりぎりで逃れる。

更に撃てば楽に落とせたのであろうが、その時には背後に別の敵が迫っていた。

「何！」

感覚でそれを捉えて、危機感におぼれないよう注意しながら機体の向きを変えつつ移動する。

（いつの間に背後に入られた？）

見ると、味方の何機かも同じような状況に陥っていた。数機撃墜されている。

（おかしい）

疑念と共に、トーエは一旦下がって、意識をより拡散させる。機体の操作に割いていた注意を全て索敵に向ける。自分を中心に宇宙へ感覚が広がり、イメージとしては『白い宇宙』が展開する。圧倒的な空間のスケールに眩暈を覚えつつも、そのなかで他人の意識を探る。

（一、二、三、四……）

確かに囲まれている。自分たちユダの機体を、五機ほどの敵が囲んでいた。敵戦力の大半が既に外に出ているであろうから、これは最後の戦力の一部なのだろうが、しかし、それがいつ出撃してきたのか、カナンには思い当たる所がなかった。

もしかしたなら。

「最初から、いた」

それが、最も可能性の高いところだった。奇妙に多い敵の数も合わせて考えれば、考えられない事ではない。

アゴラから持ち出した戦力も合わせて、母艦の周囲に常時が警戒時かは知らないが、何機かの戦闘機を展開しつつ移動していた。誘い込んだ敵を上手く攻撃できる陣形を組んでいた。

たった戦艦一つ、頼るものなく帰還する途中。採用された無茶な方法が、それかも知れない。

だとすれば、まんまと引っかったというわけだ。

敵の優秀さに齒噛みする。幸運なのは、戦力差のある有意な側と



して追撃できたことだが、目的事態の困難さが合わさって、状況は全く樂觀できないところまで、と言うよりむしろ奪還の任を達成できるか不透明なところまで後退していると言っている。

そもそもイニシユモアのコリューンは十機に満たない。デルフォイはいえバゼルプストとその飾り程度の戦力しか積んでいないのだ。それでも敵艦一つなら、という意識がそもそも間違っていた。「なら！」

自棄になったわけではない。トーエは、脳裏に呼び起こされるアラムたちの姿と声に押されるようにして、敵艦へと機体を加速させた。「おい、出過ぎるなよ」

警告してきたのは、デルフォイの艦長、バートという男だった。トーエも何度か話をしてはいるが、それほど有能な軍人でもなければまして思想家であるというわけでもない。よくいるタイプの凡庸な軍人だった。個人的な見立てではイニシユモアの艦長の方が戦いに関しては経験がありそうな雰囲気だった、とトーエは勝手に想像していた。

「今のままじゃ膠着したまま両者疲弊するだけで、目的は達せません」

告げてやる。

「そりゃそうだが……」

そこで惑うのではなく、自分の認識と対応の指針を示すのが長と言うものだ。二流だということは、可哀想ではあるが、ハッキリした「なら先行して奪還に移ります」

「しかし、あまりに危険だ。敵の防衛が崩れたわけではないのだから」

「だからこそ、包囲に穴を開ける意味でも突出します。皆さんは崩れた敵を殲滅しつつ徐々に援護に回ってください」

途中から、短距離通信を他の期待にも回す。感のいい者なら意図を汲むはずだ。それを他の機体に伝えてくれればいい。

しかし、包囲の突破を自分が出来たとして、この状況で相手を押

し切ることができるかどうか、トーエには疑問であった。

制圧という作戦事態を見直すときが来ているのかもしれない。だとすれば、少々無茶でもやってのけるしかなかった。

（それが責任、だろうから）

ヨセフやアラムに対して払わなければならない、そういったものがある。

若い感性が、その搭乗機と共に、俄かに熱を帯び始めた宇宙を疾走した。

\*

「君がここまでの少年だとは思わなかった」

声はどちらかと言えば穏やかな物だったが、立て続けに響いた銃声は、ヨセフにとっては冗談ではなかった。

一瞬身を縮こまらせてから、そのどこにも傷みがないことを確認する。しかし、そうして立ち止まってしまふことが、発砲の意図だとすぐに気がついて、舌打ちする。

「カナンを惑わせたということも納得できる。真に考えて行動できるといふ人間は少ないし、何より彼女はそういった実直な人間に惹かれるだろうからな」

片手にまるで旅行先の土産のように軽々しく拳銃を持って、しかしその視線だけでしっかりとこちらをマークしているその男は、どこか皮肉げな、大人だった。

それほど歳をとっているようには見えない。二十台だといえは大体の人間が信用するであろう面立ちをしている。何よりしっかりと伸びた背筋や鋭い視線、引き締まった肉体が若さを強調している。

だからといって、青さまでは感じない。

「か、艦長」

横合いから、カナンがそう言ってその男に近づいた。

「す、済みません。その、彼は」

取り逃がした事の弁解を仕様と口を開いて、しかし、すぐに噤む。自己に弁護できる余地が残されていないとカナンは発言に少しだけ遅れて理解していた。

「今はいい。そも襲撃時の混乱を利用されたのだから、仕方ない」無論、仕方ないわけがない。処分は重くなくてはならないが、そんな事を言っている場合ではないし、元々無茶な捕虜の扱いを半ば独断で彼女に一任したのはベニヤミン自身である。

「動くなよ。こうなれば残念だが君を月に返すことも難しい」淡々とそう言う。カナンは小さく息をのんだが、軍と今の状況を考えれば、当然だった。

「……元々あなたたちに善意として返していただこうとは思っていませんでしたよ。僕が勝手にここを出るだけです」

「そうなれば撃つことを躊躇う理由もない。何か考えがあるならそれを実現する自分の身と言う物を大事にすることだ」

すらすらとそんなことを、銃を向けての会話で発言できるベニヤミンは、今ここで出会ったばかりのヨセフにも聡明に見えた。

それで、直感する。『扉』の使用で先鋭化した意識がヨセフの口を回す。

「あなたが、セシル、……カナンを戦争に仕向けている人ですか」  
「違う、ヨセフ、その人は」

慌てて否定するカナンの態度を見て、ヨセフはますます納得する。信頼感の見える二人。カナンが連合で軍人を続けていくには、上層部や何かの拘束だけでは成り立たないだろう。実験体であり消耗品である人造人間、そういったひどい立場の者を、受容し人として扱う人間がいるということだ。

それが見せかけであれ本心であれ、カナンを連合に縛るほんの少しの材料というのは、恐らくそういった物だ。ヨセフがアラムやカナン、トーエやアルバといった一部の人間の事を考えてカナンの好意としての月への降下を拒否していたように。

「そういったつもりはない」

これは本心から、ベニヤミンが答えた。

「軍人が軍人同士として、関係性を築くことは、そう言うことでしよう。人の立場として、個人を縛るのは、本人が思っているより簡単に出来てしまうことです」

少々の怒りと共に、ヨセフは一気にそう言っていた。それに対して、ベニヤミンは軽く自嘲気味に笑ってみせた。

「人の中に生まれて、縛られない人間などいる物か」

「人々が真にそれを願えば、可能でしょう！」

「ならば数千年間人はそんな願いを本気で描いた事などないということだ。その意志の大きさを無視できるのか、少年」

「……ヨセフです。少年だなんて」

「耳に残したくない名前だ。革命思想の人間は嫌いでね」

そこで初めて、ヨセフは彼の本章に触れた気がしていた。理想、人の革新。無意識にそういった物を胸に抱いて発言していたヨセフに、やや過敏に反応する。

「待つてください、艦長」

その底に涙声が詰まっていそうな声音で、カナンが声を立てる。しかし、冷たい目でベニヤミンは応じた。

「こいつの処遇は任せて、出撃しろ。船を守れ」

「……私は」

何かをいおうとするが、遮られる。

「大丈夫、極端な事はしないさ。ただ、今は戦闘を切り抜けなければ、この捕虜の扱いも満足には出来ない」

「分かりました。信頼しています」

きつ、と顔を上げて、そう言ったカナンに、ベニヤミンは危うくうめき声を洩らすところだった。面と向かって信頼していると、そんなことが言われる自分と、その自分が何を思っただけカナンを下において行動しているかということを考えて、ベニヤミンは複雑な思いに駆られた。

その場を立ち去り、テオグースへと乗り込むカナンを目で追った

りはせずに、ヨセフは目の前の男をどう振り切るかと考えていた。カナンのような自分に対しての思いやりがある相手だとは思えない。「もう一度拘束室に戻ってもらう。戦闘が終わったあとでそれなりの処遇は考えよう」

「寛大そうな物いいですね」

時間稼ぎにそう受け答えると、ベニヤミンは手元の銃をしっかりとヨセフに向けた。

「仕事だからな。で、どうする」

「断ります」

そういったのと同時か、少し早いくらいだろう。

銃口から、弾丸が射出される。それは、ヨセフの肩を狙っていた。しかし、否定の意志を表明すると共に、ヨセフはその場を跳んでいた。すでに先程の銃声によって集まっていた視線が、更に絡みつく。格納庫にいるパイロットや整備士のどれだけが銃を持っているかはヨセフは知らなかったが、とにかく自分の機体まで辿りついてコクピットに逃げ込むべきだと考えていた。

しかし、甘い事ではない。銃弾が腕をかすり、衝撃と痛みがヨセフを揺さぶった。

なんとかそれで体勢を崩してあさつての方に中を飛んでいつてしまうことは抑えて、コクピットに入り込む。

が、手遅れも苦し紛れもいいところだった。

「パイロットを直接生身で撃ち殺しても、いい気分ではないな！」

そう強く声を張って、ベニヤミンはコクピット内に銃口を向けた。

今度は至近から、額に狙いを付ける。

（殺される）

そう自覚して、ヨセフは声すら上げられなかった。何もかも、間に合わない……。

しかし、彼が今座っているのは、まだその名前はヨセフは知らないものの、ゼルプストと呼ばれる特殊機体のシートである。その事が、事態に働きかけを行った。

一瞬の知覚。およそ人には信じがたい速度で、意識に『扉』が情報を送る。

知覚。近く。戦艦の周囲、すぐに傍。そこに、ヨセフにとっての希望が、迫っていた。

そして扉がもたらしたその情報は、すぐ近くにいたベニヤミンもヨセフほどハッキリとしてはいないものの、感じていた。

「トーエ！」

腹のそこから嬉しさを感じて、やや場違いながら、ヨセフは力強くその名前を呼んでいた。

同時に、激震が走る。ベニヤミンが体勢を崩し、コクピットの入り口からその身体が引き剥がされる。それを見て、ヨセフはハッチを閉じた。

\*

ヨセフを知覚して、その位置や状況には出来るだけ意識を向ける。『扉』の真髄ともいえる常識はずれの知覚は、役に立った。

ヨセフの窮地を、ゼルプストはトーエに教えてくれたのだ。

そして、彼が自分に向かって指示をするようにして、声を上げた。それが、合図であり、引き金のきっかけ。

トーエは敵戦艦の後部、船体そのものに致命的なダメージを与えず、しかしバランスは大きく崩すであろう位置に狙いを付けて、ライフルを使った。光があっけなく貫く。

必死で防衛しようとして縋ってくるウルゴスを最後の小型ミサイルで牽制して、船に更に近づく。既に突出という段階ではない。いつ撃墜されてもおかしくはない、危険な行為だった。

しかし、分かる。彼が出てくる。それを、向かえに行かなければならない。

\*

「いつけえええええ！」

叫んで、ヨセフは機体を動かした。まだエネルギーが残っていたのは幸いだったし、コクピットや機体そのものに細工をして動かないようにされていないのは、幸運中の幸運である。元々一度奪われた機体でまた逃げると言う行為自体がそういった運勢と言う物に左右される儚いものである。

コクピット内のモニターの多くは死んでいるが、操縦はできる。

『扉』の知覚した情報と、そのフィードバックを受けられるヨセフは視覚を制限されたゼルプストでも、ある程度は動かせる。

片腕のない機体はややバランスが悪いが、そんな事も気にしてはいられない。

スラスターを使って、無理矢理に機体を移動させる。固定用のアームを引きちぎって、カタパルトデッキと思しき方へと突っ込む。

「ちゃんとどいていてくれよ！」

願いつつ、先にカナンのテオグースが発進したばかりで開いていたエア・ロックの扉をくぐる。慌ててヘラクレイトスの乗務員が、その扉を閉じるが、すでにヨセフは船のカタパルト側に出てしまっている。

そうなれば、機密扉を閉じてくれたのは、ヨセフにとって有り難かった。人的損害を余りださずに済む。

残っていたほうの腕を機体の前に出して、体当たりをかけるようにして、外へと繋がる最後のハッチへぶつかる。

「ぐ……！」

衝撃に、声が漏れる。銃創も小さな傷ながら、その痛みはヨセフを蝕んでいた。

しかし、ゼルプストの堅牢さは、少なくともヘラクレイトスの外部ハッチに勝っていた。破れたハッチから、外へと這い出す。

ぼろぼろだと言って良かった。捕虜として監禁され、撃たれて、片腕の機体で脱出する。泥にまみれて、捕食者の巣から何とか逃げ出

したようなもので、ヨセフは既に限界が近かった。  
しかし。

何とか出てきた宇宙空間で迎えてくれた大きな影、自分と同じ機体の、その主の存在が、ヨセフを救った。

「ヨセフ！」

甲高い声が、ヨセフのいるコクピットに反響する。

「トーエ！」

溜まらず、ヨセフもそう返す。互いの名前を呼びあって、やがてその機体同士が触れ合う。

トーエはコクピットを開いて、手を伸ばした。ヨセフもそれに答えてハッチを開き、トーエに捉まる。二人で同じコクピット内に入り込み、ハッチを閉じる。

ずっとその存在は感じていた。『扉』を使って、互いが不完全ながら連携してはいた。

しかし、直接こうして会うことの、どれだけ鮮やかなことか。

例え世界の人類全てが距離や時間に関係なく分かりあい関係しあえたとして、こうした触れ合いを何一つ否定することはできないのではないか。人は、互いに合うその奇跡的瞬間のために、出会わぬ時間を誠実に生きるのではないのか。

それが、二人の実感であった。

「ヨセフ……生きていて、良かった」

「僕も……そうだ。トーエに会うために、這い出してきた」

「離脱するから、掴まって」

そう言うと、トーエはヨセフのゼルプストを片手に掴んで固定し、ヘラクレイトスに背を向ける。

それを許さないといった風に、背後から二機のテオグースが接近してくる。

しかし、ヨセフもトーエもその動きを完全に捉えていた。二機のゼルプスト。二つの扉。そして、二人の適応者。それが、トーエの機体を有利にする。



一人であれば。意識を溶かすことには絶大な苦痛が伴う。自分が溶けて輪郭を失い、しかしそこに没することなく主体を保たなければならぬ。

しかし、二人ならば違う。

二つの点があれば、互いの位置を容易に知ることができる。君がそこにいると、言い合うことができる。

それが、『扉』の一つの本質だった。

テオグースが光の筋をいくつも発射する。しかし、ヨセフ機を抱えて鈍重になったはずのトーエに、かすりもしない。

ぐんぐんと距離が開く。

まるで手を取り合って踊るように遠ざかる二人を前に、カナンは自機のコクピットで、コンソールによりかかって寒々しい息を吐いた。

彼が帰る。ユダの軍隊に。

もしかしたら、致命的な間違いをしたのではないか。

「私は、ヨセフと……」

それ以上は声にならなかった。自分は、トーエではないからだ。

カナンをやらなければならない自分。セシルでいたい自分。

責めたてられる感覚に、カナンは押しつぶされた。

## 8 鉄と鋼 距離と心

### 8 鉄と鋼 距離と心

「壊滅だと！」

怒声、いや、いつそ単なる叫び声だと言ってもいい。

薄暗い室内、二重の円卓に数十人ものユダの『上層部』が終結している中で、そんな無様な声を上げていいものは、誰一人としていいはずはない。のであるが、この瞬間、誰もが同じ悲鳴を上げようとしていた。それを、率先して一人の男が上げてくれたおかげで踏みとどまれたのだ。

ユダの本来の政府、「国家間評議会」は、各国、ブリクタネイアⅠの中に区分けされて存在する国家たち全ての存在を最大限尊重して造られた組織であり、その結果不便極まりないシステムとなってしまうていた。組織図も何も異なる国家たちがユダの指針を決定する、その議会とは『国家間の相違』という、ユダ内では認めるしかない理念を盾とした利権争いに他ならず、また各国に勢力差があまりない事も議会の動きののろさを助長している。

しかしそれでもユダが連合と競い合いこれまでやってこれたのは、一つは月というある意味極限的な場所で寄り集まって生きているという連帯感と、もう一つは議会を補助し、必要とあらば「事後承諾」で議会を納得させられる一般には知られていない機関のおかげだと言えた。

その一つが今行われているこの会議であり、集まっている者は各国、企業、そういったものに煩わされにくいことを確認してから集められた、ユダの中枢に名を連ねる要人達である。

彼らは評議会の議員のように愚かしくも自国の権益のためにユダ全体の行動を阻害する事などは先ず考えず、その即断と行動力、そ

のあとで議会を黙らせユダに平穩をもたらすという、いわば影の最高機関であると言う自負がある。しかしそれも今は吹き飛びかけている。多くの議員の顔には驚愕と焦りと混乱、そんなものしか浮いてはいないのだ。

二重の輪の形に置かれた机の中央、ドーナツの穴に当たる部分には、大きな球体が吊り下げられて固定されている。

どの座席からでも見える、球状モニター。普段は各員の発言内容や顔が映し出されるそこには、軍部から入ってきた情報がずらずらと並べられている。その情報の羅列が、この秘密議会を嘲笑っているのだ。

「月の表に集まっていた警戒部隊は壊滅、その戦力を三分の一以下に減じて、防衛線を後退させました、全てが失われたわけではありませんが、戦場においてそれだけの戦力の損失は壊滅を意味します……」

「分かっている！」

説明のためだろう。地位だけで中身の伴っていないさそうな軍の高官が、いつもは無駄に尊大な身を縮こまらせて発言し、その舐めきった内容に先ほどとは別の議員が強い口調で遮った。

状況は単純にして明快、しかし納得できない不思議さが一つだけ、と言うものだ。

月の表側、連合にとってもユダにとっても最前線になるであろうL1と月の中間を警戒していたユダの艦隊が、数時間前に壊滅的打撃を受け、既に築いていた防衛ラインを月よりの位置に敷き直したというものだった。

不審な動きを続け、更にエフェソスやアゴラでいいわけのきかない事を起こした連合の戦力。それがついに本格的に月に向かって進み始めた。それは誰もがあつて欲しくないと思いつつも予想していたことだった。

しかし、その連合がたった一度の戦闘、数時間ほどで防衛線押し崩したのだ。

連合の物量、戦力は確かにユダの比ではない。しかし宇宙関連の技術で一世第遅れ、軍人の錬度でも劣るとされていた連合だからこそ先の戦争では五分以上の戦いがユダには出来ていたのだが、それが今回はまるで話が違ふ。

そういつた異常な状況が、今この秘密議會を平時の静寂から怒号の飛び交う愚劣な空間へと変えている。

しかし誰もが慌てふためくその中で、例外も存在した。

外側の机の一角を数名で占拠している議員達。彼らだけが神妙な面持ちで、静かに背もたれによりかかっていた。

「最悪の、本当に最悪の展開ですな」

ポツリと、どこか子供じみた口調でその中の一人がそう言った。

それに対して無言を貫きながらも、他の男も気配だけで同意していた。

彼らは、ソピステスと呼ばれる組織の一員であり、政府とソピステスの両方に深く食い込んだ人物である。

『扉』が奪われるということがどれだけ危機的な事か、彼らだけが深く知っていたと言っている。『扉』はユダ全体でもその実相を知る者がほんのごく少数しかいない、機密中の機密である。ソピステスでも一握りの人間だけがそれを真の意味で知っている。

『扉』が奪われ、その取り返しにも失敗、小型輸送機が連合の元へと飛んでいってしまったことが分かってから、彼らソピステスのメンバーはその危険性を訴え、連合への先制攻撃と、前線への戦力の大量動員を主張してきたが、『扉』の危険性を説明されてはいても実感できていない日和見議員達に却下され続けてきた。

その結果が、この有様である。

そもそも敵がどのように『扉』を運用したのかはまだ分かっていないが、警戒舞台の数は十数隻といった生易しいものではない。あっさりと壊滅させられたのは、敵に何か決定的な戦力が存在する事の証だった。そしてそれが先刻奪われた扉であるというのはもっとも分かりやすい話である。であれば1前に集結しつつも不穏な動

きだけで留まっております、いきなりタイミングを見計らったかのように仕掛けてきた連合の動きも納得できる。

いつも愚かで、一手遅い。

その実感は、政治の世界で生きる人間の仲でも希少な、「優秀な」人間であれば皆感じたことのあるものだ。

\*

その数時間以上前。

目も眩むような物量。圧倒的な資源と人員。それが、グールドの目にはハッキリと見えていた。

地球に加えて宇宙から得られた多くの物資が、惜しみなくつぎ込まれた兵器。それが今グールドの座しているダンであり、そのダンを中心とした凄まじい量の戦艦や機動兵器であった。

ダンは移動可能な要塞であり、その巨大さは戦艦と比べても圧倒的である。大きな物でも数百メートルの戦艦に対してこのダンは外郭や武装も含めれば一キロほどもある。その形状は旧世紀に米軍が使用していたナイトホークと呼ばれるステルス戦闘機に近い。平面が多用され、触れれば刺さりそうに尖った先端が全体のイメージを神経質でシャープな物にしている。様々な箇所にハッチが目立たないように設置されており、全部で数百にもなるそれらは中に砲等やセンサー、カタパルトなどが収納されている。また広大なブリッジはこれまた偶然か、戦闘機のコクピットの位置に存在する。

その巨大な黒い鳥のようなダンを囲むように、ダンを一回りだけ小さくしたような要塞が十機。ダンの「裁き」の名に対してそれぞれが「聞いた」「感謝する」「側につく」「顧みる」などの名を持っている。

更にこれはいうまでもなく、要塞の周囲を隙間なく警戒する二百近い戦艦と、その艦載機である軌道兵器。

凄まじいまでの布陣だった。

宇宙に出てからの、ユダと連合の戦争でこういった量の部隊による陣形が築かれた事は余りない。個々が満足に通信を行えず、精密な爆撃も連携もできない状況では量が集まりすぎれば危険性が一足飛びに増大するからだ。

しかし、今のダンにはそういった心配はなかった。

グールドが一步踏み出し、ドアを開きブリッジに入ると、ちよつとした競技場のような空間に散らばって各々の仕事をしていたスタッフ達が一斉に視線を寄こした。ざわめきがなくなり静まり返る。

誰もが、グールドの声を待ちわびていたかのように、いや、事実待ち望んでいたのだろう。

そのスタッフ達の全ては、グールド自身や、直属の配下によって様々な場所から引き抜いたりその際各を見込んで学生のおかげから育て上げてきた者だ。

その目的、月の打倒と占領を、政治的な部分をグールドが掌握し動かすまでの長い時間耐えてこなければならなかったと言う意味では、皆同じものを胸の奥に抱えている。

短く息を吸い込み、それを声に変える。

「言わずとも分かるだろう、進めてきた事の多くが、その結実を私の手の中に落とした」

アゴラでの一件を持ち出し、政治方面での臆病者を黙らせて、合法的にこのレーにこれだけの戦力が集まっている事自体がその証明だった。

「『扉』も今このダンの中枢に埋め込まれている。そしてそれを扱うことにかけてこれ以上ない人材も、同じくこの要塞内に伏している」

その言葉に小さくスタッフの表情が変わる。

彼らにとってもグールドにとっても最大の懸案事項が「扉」とその扱い手だった。それも、今は完全な状態にある。

ダンはそのシステムの全てが『扉』の使用によって有効性を持つ。『扉』が鍵となるというとおかしな言い方だが、そういった代物だ。

「月を、ユダを討つ。確実な占領、そこで得られるであろう大きな見せかけの平穩、それは、政府や軍部の愚か者どもにくれてやる。だが、その平穩の中で僅かながら光を見せる真の安寧、それは、個々に集う者達の、安らぎを司るだろう」

端的で、救いのない言葉。しかし、統一国家の膿を知るスタッフ達にとつてはそれこそが救いなのだ。

（俗物め）

そんな様子に、グールドはひっそりそう呟いた。

世界に天才は少ない。それは、俗人が考える少なさの更に百分の一程度に。

\*

ダンの『扉』はその性能を遺憾なく発揮するよう、最大限のデータ・リンクが連合の部隊には敷かれていた。L1にダンと護衛要塞十機と共に集まった部隊は「ダブリン」と名づけられ、ここ数十年では間違いなく最も「現代的な」戦闘システムを共有していた。

ダンはその内蔵された扉の力と、圧倒的な機械的索敵能力で、クルマで捕らえられる距離を越えた位置の敵までをも感知する・熱、動き、振動、様々な情報を細かく、大量に取り入れ、それを処理する。

そうしてろ過された情報は、要塞全てに留まらず、戦艦の全て、軌道兵器の全てにリンクされる。リアルタイムで変動する情報は随時更新され、全体が完全に一丸となつての作戦が立案、実行、常時修正され続ける。

また情報の共有は可能な限り多くの線で結びつくように設計されており、例え一つの要塞が破壊されようともその要塞に指揮されていた大量の戦艦が孤立する事はない。戦艦も機動兵器も、各々が直に使える戦艦や要塞以外にも、機動兵器であれば戦艦を飛び越えて直要塞からもリンクがなされており、それは戦艦も同様である。全

ての要塞が全ての戦艦に、全ての戦艦が全ての機動兵器に、全ての機動兵器が至近の要塞にと言った具合に張り巡らせる事のできる網は全て洩らさず繋がれているのだ。

それは、だから、「戦術データリンク」ではなく、「戦略データリンク」と呼ばれた。

奇襲は、奇襲であるのだから当然なのだが、それを受ける側にとって予想もしない方法で行われた。

超長距離からのミサイル攻撃。

十五年以上前の戦争でも、長距離ミサイルの攻撃が消えていたと言っただけではない。誘導してぶつけるのが当たり前の長距離ミサイルは情報の遮断が流行した戦場においてお荷物になるかとも思われていたが、とにかく長距離を直進する遠距離攻撃の方法として見れば、使い道がないわけではなかった。牽制以外にも、敵の位置を完全に分析して、例えるならば人間が自分で狙いを付けて弓から矢を射るの中央に放つように、発射する。

いくら情報戦が進化しても、恐ろしい威力を持ったミサイルの物理的効用までを妨害できるわけではない。宇宙空間の中では核ミサイルさえも何度も使用されていた。

しかし、月の表側、それからやや地球より布陣を敷いていたユダの軍隊に襲いかかった物は、やや小型のミサイルの群れであった。勿論、ミサイル自体は何の変哲もない、使い古されてきた物である。その中に『扉』を仕込んでいるわけでもないのだから、それは電波などの妨害された戦闘空間においてはただ事前に設定された軌道で飛んでいくだけである。

最初に飛来したそれらミサイルに対して、優秀なユダの戦艦達は冷静に対応した。迎撃と回避を繰り返す、ただそれだけ。広大な宇宙空間であるために、ほとんどは回避することになる。

しかし、二波、三波と更に攻撃は続く。その感覚は次第に縮まり、短い間をも置かずに次のミサイルが飛んでくるようになる。



そして、何より奇妙な事に、その攻撃は、撃ちっぱなしのミサイルとしては異常な攻撃力を持ち始めていたのだ。回避した戦艦の移動を見計らったかのようにその地点をめぐって飛んでくる。そんな事が繰り返し起こり、事態のおかしさにやがて艦長達も気が付き始めた。

言うまでもなく、それは『扉』を使った連合の策の一つであった。ユダの妨害領域に入るまで、ミサイルは連合のコントロールの元にある。『扉』が細大漏らさず読み取った遠方のユダの動きを受けて、ダンとその他の要塞は高速で情報をまとめ、その結果をミサイルの軌道にフィードバックさせた。妨害領域には言ってから数度の軌道変更をするようにプログラムがなされたそれらは、「誘導なしでのある程度のピンポイント攻撃」という珍妙な技を体现する。

連合にとってこれはここ十五年で無駄に作った兵器の使い捨て以上に、『扉』の運用テスト、それにちよつとした場の優位性を掴むための攻撃でしかない。

混乱しながらも、ユダの艦隊は前に出る事を選択した。長距離とは言っても、ひどい距離が離れているわけではなく、近づけば近代の、接近戦が展開できると言う目論見だった。奇策のない戦いならばまずユダは地球人達の群れである連合相手に遅れはとらない。その判断は、普通であれば英断であったのだ。

しかし、グールドと扉、二つのイレギュラーが、それ以上の数のイレギュラーを呼びこむ。

ユダには、要塞と二百以上の艦隊という常識外れの戦力が予想できてはいなかったのだ。更に言えば、その全てにデータ・リンクが搭載されているなどとは。

幾百もの火線が、しばらくは接近したユダを一方的に焼き続けた。ユダの軍人は優秀である。少なくとも比較で話をするならば、その平均値は連合の軍人を大きく凌駕していると言っている。

だからこそ、彼らは壊滅する前に自分達の妨害を止めて、広域センサーと通信に頼る戦闘に切り替えようとしたのだ。

しかし、十五年前の時点で既に十年以上培い、その後十五年暖めてきたユダの軍は通信妨害による戦いを旨としすぎていた。そもどんなに高性能なデータ・リンク・システムをこの時にユダが持っていたとしても、『扉』を上回る物は存在しない。部隊の数でもその中核をなすシステムでも圧倒的にユダは劣っていた。

淡々とした地獄絵図。真空の宇宙は阿鼻叫喚を誰の耳に届かせる事もなく命を霧散させた。

十数条のビームが一斉に煌き、ユダの戦艦を粘土細工のように引きちぎり、その船体が小さなコリューンを巻き込み不気味な泡のよう

に爆発していく。

四方から一斉にウルゴスによる射撃を受けた戦艦は、その一機でさえ索敵に成功していなかった。広い宇宙の闇は、『扉』だけがその全貌を知ることのできる恐ろしい樹海となり、遭難したユダが次々に食いちぎられる。

ダンのブリッジではスタッフ達が抑えきれない歓喜の声を洩らし、それに対抗しているはずの戦艦のブリッジでは悲鳴を上げられるかどうかといったタイミングで致命的な一打が飛び込んでくる。

殲滅戦と言うものの心地に、グールドは本当に久しぶりに、偽りではない笑みを浮かべていた。

愉快である。

\*

「混乱は利用する。騒動は味方に付ける」

ヨセフは淡々とそう宣言した。

「本気？」

ヨセフよりも多分に光を湛えた瞳が見開かれ、驚きの色に塗りつぶされる。

ヨセフとヨセフのゼルプストの救出から、数日が経過していた。

ヨセフにとってはエフェソスでの事件に巻き込まれてからの数日と

は別の意味で密度の濃い数日間。

状況は目覚しく流転し、取り返しのつかなくなった物も多い。二日ほど前にL1の艦隊が大敗し、その防衛戦がユダの領内ぎりぎりにまで後退しているという事態については、ヨセフたちも知らされていた。

「出来ることやれる時期が重なり合う点を狙うしかないんだ。そのためには、この船を利用できなくちゃならない」

ヨセフたちがいるのは、トーエの自室である。

ヨセフが船に戻ってから、デルフォイは月の表側よりの軍事基地に寄航していた。満足に街があるわけでもないその場所で、ヨセフやアラムはデルフォイを拠り所としている。

「でも、そんな、軍隊の船でしょ？ これ」

壁際に立っていたアラムが控えめにそう主張する。

救出されてからのヨセフは、その立場の危うさをより増大させていた。『扉』という物が戦場で持つ意味に気がついたユダの上層は『扉』の存在そのものと同時にその扱いにおいて必須となる適性を持った人間という物に対してナイーブにならざるを得ない。

ヨセフは、端的に言ってしまうえばデルフォイに軟禁されているのだ。しかしその立場をそこまで不利にしなかったのは、アルバとイマダ、ソピステスの力である。

決定的な不利と言うものを実感したユダは、これまでになく追い詰められている。もしかしたならば、宇宙に上がらざるを得なかった時よりも。

「そこは、だから、アルバの力も借りることになると思う」

その申し出に、ベッドに座っているアルバが小さく微笑んだ。子供ながらここ数日間様々な情報の統制とソピステスの下手な動きの阻止で疲れきった風な様子は見受けられるものの、目の奥に潜む意志の力までなくなっているわけではない。

「私の？」

「そう。この船を、僕とゼルプストを、連合との衝突に際して使え

るように仕向けて欲しい」

アラムと、トーエが息をのむ。

「ヨセフ、そんなことは」

トーエが慌てて静止する。しかし、アルバは笑みを崩さぬままにヨセフを見ていた。その体躯に宿る意志を値踏みしてから、答える。

「私は、どうあっても『扉』を戦争なんかには使わせたくなかったのだ。それは止められなかった。これから起こるであろう全面戦争にまで、ゼルプストを使えと？ 人の英知のための『扉』が殺し合いを行い、更にその中で宇宙に散るのかもしれないのだぞ」

「……このままいけば、ユダは負ける。一方的な戦闘になれば、被害は計り知れない」

一つ一つ、慎重に言葉を選ぶ。

「デルフォイには、二つの『扉』が存在する。そして残りの一つが、連合の新兵器の中核としてある。なら」

ヨセフは身を屈めた。アルバに視線を合わせて、同じ高さから物を言う。

「この船こそが敵の『扉』を奪取すべきだと思う。どの道あれに対抗できるのは、同じ『扉』の力くらいのもものだから……それに、開いての扉を取り戻せたとき、この船には三つの『扉』が揃う。それは、好機だ」

「扉は全部で十二ある。残りは月にあるが、それで、どうする？」

「兵器として使われてしまった物は、三つで全てだ。ならそれを回収しきることができれば、一旦事態を収束できる」

すらすらと言葉を続けながら、ヨセフは自身の内に宿った新たな意識の脈動を感じていた。戦場を通し、扉によって新たに形成された心と言う物があるのかも知れない。

「そのあとは、月の残りの『扉』をどうにかする。実質脅威となる『扉』は全て手の内にあるということになるから、ここからは政治的な駆け引きも大きくなってくるだろうけど。その中で月の主だった意志に逆らうということは、その……」

「現今のソピステスの瓦解を意味するだろうな」

言いよどむ事を許さずアルバがかわりに断言した。話のスケールという物に当人達以外は圧倒されている。

（いつの間に、こんな）

トーエは驚きと共に、そう呟いた。自分が皆を守れるだろうと軍に志願したその意志は、今のヨセフやアルバほどに覚悟と思考に満ちた物だっただろうか。

「それで、扉全てが集まって、戦争が『普通の兵器』で行われるようになって、理想的に両陣が膠着状態に陥り、休戦が戻ってきたとして、そのあとは？　扉は今回の一件でその危険性と有用性を暴露してしまった」

「いずれまた大きな戦いにおいて利用される、か」

「戦乱は続く……数千年間続いてきたのだ、今更ばたりとはやまない」

「……ずっと、引きずってきたことだね、それは。人の道に答えを指し示して導くほどの事は、もう僕には出来ない。時間も関係性もそれを許さないだろう」

「それならば」

今度は、静止しかけたアルバを、ヨセフが遮った。

「破壊してしまおうと思う」

一同に、肌と心で感じる類の刺激が走る。

「『扉』は、導きであって、道そのものじゃない。アルバが守ろうとしている物は、扉を壊しても残る」

宣言に、アルバはすつと臉を降ろした。

人や、世界の本質に迫ろうという本質的思索において、元々優秀だった者達の集まりである昔のソピステスを後押しした奇跡。それが、『扉』。人が本来持つ全体性と言う深みを感じるために最も簡単な手段。それなしで集合意識へ没入するなど、誰が出来たのか……。

いや、それは、『出来る』

人の痛みを感じ、他人が自分でもあったのだと得心し、好き嫌いに関わらず互いを認め、愛の元に生きていた人間は、確かに存在していたではないか。聖人と呼ばれた人間や、誰も知らないような農村で一生を終えた穏やかな農夫、周囲の慌しさに引きずられることなく、都会の中心で自然と人に感じ入りながら笑みを浮かべて暮らした人々。その数は希少ながら、確かに、彼らはいた。

「分かった。ヨセフ、いつだって次代を創る心地を持って、ことに当たれ」

アルバをそう言って、その手をヨセフに差し出した。握り返したヨセフは、力強い笑みを浮かべた。

## 9 戦争の始まり（ソフィストエリミネート）

### 9 戦争の始まり（ソフィストエリミネート）

カナンは、今は既に仮の家名すらない彼女は、疲弊していた。ダンの中枢、『扉』の制御は彼女を中心として行われていたのだ。殺風景な球体状の部屋を抜け出して、息をつく。先の戦場で一体どれだけのユダを駆逐したのか、見当もつかない。

そして、『扉』の、ゼルプストよりも広大な範囲をカバーするため、その機能を最大限引き出す負荷によってカナンの疲労はもとより、カナンを補佐するために割り当てられていた少年少女の数人が意識不明となっている。一人で扱いきれる物ではないこのダンのシステム、『扉』の持つ力をより大きく引き出す装置の運用のためには、適正の極めて高いカナンの他に『補助人員』を必要とした。

それが、十数人の子供達である。カナンが扉を制御する球状コントロールルームの周囲に作られたドーナツ状の部屋でカナンの真似事をして彼女の仕事の負担を軽減する。しかし、その子供達はカナンや、連合の研究者達の唱える「適格者」のデータを元として作られたデザイナーズチルドレンにすぎない。カナンの数分の一の適正も持たない身には、これほど大規模な『扉』の運用は重荷でありすぎる。

そもそも、とカナンは一人ごちる。

どこからおかしかったのか。どこからが間違いであるのか。

地球上にいくつかの拠点を持っていた「ソピステス」がその扉と共にユダと手を汲み宇宙へと上がった、その残り物として少数のソピステスが地球に残留していた。

それが、「扉と誠実さ無き」「地球上のソピステス」とでも言える研究者のグループを連合内に作らせることになった。

邪なるものの想念が、今に至らせているのである。

（次の戦いは、いつ起こるんだろう）

不安ではある。恐らく勝てる戦いになるが、それには多くの敵を屠る事になる。そして、味方の子供も消耗する。

しかし、いずれどちらが勝とうが負けようが、戦争が起こる事に変わりはない。人全体の性は、多数の犠牲を無くして成り立ちはない。それは、ここ数千年同じだったはずだ。

しかし

それは、甘んじていい事なのか。どうせ、と嘆息しつつ、同じ歴史ばかりを続ける事の価値はいかほどの物だろうか。

まるきり無価値ではない。悲劇の中でも人は輝ける。輝くべき人間は輝く。

しかし、こうも同じ事ばかりでは……

（ヨセフは、彼なら、どうする？）

自問する。意味のない感慨かも知れない。

しかし、考えずにもいられない。

もしかしたならば、状況の仕方なさを盾にただただ大きな意志に巻き込まれて利用されている自分こそ、最も悪者なのではないかと、そう思ったからだった。

\*

誉めてやってもいい。

本気でそう思いながら、ラゲルは機体の加速によって身体に走る重み、慣性重力に心地よさを感じていた。カタパルトデッキを一瞬で通り抜け、宇宙へ躍り出る。

幼少の頃から、戦争ということに関して、政治的な駆け引きを抜きにすれば天才的な才覚を持っていたのがラゲルという男、その全てであると言ってもいい。

初めて軍部に入り、たった数年でどんな上官も圧倒してきた。同



じように敵となるものも、振り払い深遠に叩き落としてきた。

「先行して攻める。艦の守りには雑兵を使ってくれ」

イニシユモアにそう告げて、敵陣へと急ぐ。誰も文句を言う者はいなかった。ラゲルの性格は軍では誰であれ知るところだったし、その運用法については、「死んでもいいパートを任せる」というのが暗黙の了解だった。無謀な事をして、それで何か戦果を上げるのであれば良し、ただ死んでしまっても、もともとはねつかえりで済むような程度の問題児ではない。ユダの総意としては、そんな軍人はいなくても何一つ問題は無いと言うことである。

ラゲル自身それを知らないわけが無い。しかしかれはそういった諸々を甘受していた。最も自分の望むところだったからだ。

戦争と共に生まれて、十五年前まで、或いはそれ以降も、戦争以外と共に生きた事などない。

主婦が主婦として平和に生きることしか出来ないように。

優男が恋人の事しか頭に無いように。

そうとしか生きられない。戦場で生きる以外に生があるとは思われない。実感の問題もあるが、それ以前の事でもある。

「運命って言うんだろ。生々しくて反吐が出るがね」

誰とも無く呟く。

どんなに人が奇跡的な平和を形作ろうとも。自分のような運命性の元に生まれる男がいる限り、人殺しなんて物は日常その物だ。

戦争であれば、言い訳も、贖罪も無くていい。ただ、自身の欲、或いは自身を超えた欲に突き動かされて、人形のように戦っていればいい。

甘美な、眠りのような物だった。

\*

続々と、月の表側に集結しつつある。

無数の影が月の姿を覆い隠さんと、羽虫の群れのように集ってい

る。無論、月の広さに比べれば集まったユダの艦隊は微々たる量である。それがユダの今出せる最高の戦力であり、凄まじい数の機械たちであっても。

地球の人間は、少しも変わらない月の光を眺めていることだろう。見えない戦いと、見えない死者に祈りはいらない、それを勝手と笑うことは、死んだ後にしかできない。

ユダはほんの少数の予備戦力を除いた全てを、L1での決戦に備えて防衛線に集めていた。本来以上ともいえる行為ではあるが、連合との戦争において首都ブリュタネイアーにまで攻め込まれたならばその時点で負けである。宇宙という、後の無い土地に住む彼らは、最初のぶつかり合いで負けることが全ての終わりを意味する。

あるいは、最初に防衛線を後退せざる負えなくなった時点で、負けであるのではないか。

政治家達は震え上がっていた。逆に軍部は活気付いているようにみえて、その実恐慌状態に陥る一歩手前で踏みとどまるために自身を鼓舞しているにすぎない。

そんな中で、『扉』はまさしくこの戦いの鍵となる。

それを戦場に投入することには賛否両論綺麗に分かれて存在したが、それが既に兵器として完成し、戦艦に搭載されている事から、軍部は使用を押切った。

広大な空間を隔てて睨み合う両軍。

世界が滅ぶ、その鍵がどこにも無いのだと高をくくった人間だけが、戦争に打ち込める。

連合は、十一機の要塞を後方に置き、その周囲に無数の戦艦が展開している。要塞の中で一つだけ他より一回り大きな物は、十機以外の要塞の中心に腰を据えている。

対してユダは突撃特殊艦を前方に配置した攻撃的な陣形をとっている。とにかく相手を突破し、要塞の破壊を狙う。

ゆつたりと動き出したユダの船から、コリューンが一機突出する。戦争のトリガーを、そのパイロットが引いた。

連合の頂点、グールドが叫んだ。

「望みを断ち切ってやる。諦観の中にしか、安寧など存在し得ない！」

ユダの一番槍、粗暴な戦争人が、吼える。

「戦争に善悪もその後もあるものか！ 戦争以外の物を持ち込むやつは、片端から死ね！」

混乱とは、いつも食事以外の何かに飢えた人間から発せられるものである。

\*

燃え残った子供。それがヨセフの原点の一つである。しかし、正確に言えば、燃え残ったのは彼だけではなかった。

いつも甘え下手で、そのせいか不機嫌顔を見せる事が多く、時折やや強引にヨセフの手を掴み何かをねだる、そのくせ兄や両親はあまり困らせないように振舞っていた、少女。妹は、事故の後、ヨセフと同様奇跡的に回収されていた。

が、それを妹だと紹介した所で趣味の悪い置物だと思われるのが落ちである、そんな状態の妹をどう扱えば良かったのか。元々小さかったその体躯は既にまともな大きさが残っていない。

面会を許されていた当時のヨセフは、自力での呼吸どころか五感のいくつが残っているかも怪しいその「残り物」に向き合って、正気ではいらなかった。

冒読だ

全てが衝動。流れるままの行動は、驚くほどにスムーズで、また大胆だった。

思い返す。それは確かに単なる衝動的行為だったのだ。何を考えていたということもない。

解放？ 尊厳？ 自身を保つため？

どれも、欺瞞に満ちている。ただ反射しただけなのだ。生命維持を片っ端から停止させ、やがて「残り物」は単なる「肉袋」になった。

その事の善悪など、問えるのか……。

あらゆる具体的な贖罪は、意味をなさないとヨセフには思えた。罪の意識というが、それを感じていたとして、償いとは、では一体何か。償おうと思う限り、人は、それがいい事だと思うからするのだろう。しかし、それならば、罪を犯した人間が償いを行うとは、利己的な行為でしかなくなってしまうのではないか……。

一切の具体的な償いは意味をなさない。どころか、邪悪さを含む。そもそも妹の死は、どう捉えればよいのか。そこに罪や善悪は存在するのか。

いや。

（してたまるものか。そんな事のために、誰だって死んだりしない）

その後廃人同然の生活を送っていたヨセフに、トーエがかけた短い言葉が、蘇る。

『目を開いて、顔を上げて、人の言葉を聞いて、それで、ずっと正しく生きようとする。それだけで、いいんだよ。難しいことだけど、きつと出来る。だって』

触れる肌の温もりと共に伝わるのは、決意と共感であった。

『ヨセフの前には、いつも私がいるから、ね』

\*

戦闘配置、それが発令されてから既に十分ほど経つ。しかし、時期を考えればデルフォイが本格的な戦闘に出るのはまだ先のことがある。

トーエは、高鳴る心臓を抑えながら、格納庫に程近い一室、パイロットの待機のための部屋で出番を待っていた。

しかし、出撃を控えて、大きな懸念が、彼女のすぐ傍に存在する。トーエはしばし迷ってから、問いかけた。

「ヨセフ、本当に、ヨセフも出撃を？」

それは、あまりに予想外ではあった。しかし、反面そうなるための布石も揃ってはいたのだ。ヨセフは切り札たる『ゼルプスト』のトーエを除けば唯一のパイロットである。その扱いは、先の戦闘である程度保障されていたし、ここ数日は訓練も行っていた。

正直な事を言えば、その適正は、トーエに迫るものがあった。並みの軍人ではこうはいかないだろうし、戦闘で遅れをとると思えない。

しかし、彼はつい半月前にはハイスクールに通っていた少年である。

そして、トーエにとっては「たった一つの願い」でもある。

そんなトーエの胸中を、ヨセフもある程度は感じ取っていた。バツが悪そうな表情を向けてくる。

「……やらなきゃいけないこと、出来ちゃったから」

エフェソスでの事件以来、急激に大人びたようにも思えるその顔は、しかしトーエをこうして会話する間は昔のままであるようにも見える。

「セシルのこと？」

聞くと、ヨセフは首を振った。

「それだけじゃない。トーエもアラムもアルバも、結局はみんな、僕の見捨てられないもののために、戦わなくちゃ出来ないことがあるって気がついたんだ」

「そう……」

「何もかもを解決は、恐らく出来ない。だけど、だからって今起こってる事を放っておいて悪い結末を迎えさせたくは無い。最低限守り通したいところがある」

「私は」

言うつもりではなかったが、気がつけばトーエの口は勝手に動いていた。

「……私にとっては、ヨセフが、守っておきたい大事な一人なんだよ」

弱い。そんな声音になってしまふことが、どうにも情けなかった。

ヨセフはそれを聞いて、顔を伏せた。

「本当に、勝手ばかりだと思う。アルバにもトーエにもアラムにも迷惑ばかりかけてる」

沈黙が、漂う。心地が悪い物ではない。疑問だけが、残り香のよう

に心をつく。

「いつも皆それぞれで決めて、譲れなくて、それで時々すれ違い続けるんだよ」

トーエは、俯くヨセフの目を見て、ゆっくりと言葉を選びながら、告げる。

「だけどヨセフは、私に気を使わなくてもいいよ。ヨセフの前にいるって決めたのは、私だから」

そう言つて、二人とも互いをしばらく見つめてから、軽く笑つた。懐かしさを肌で感じて、戦場にいることとは関係なく気が晴れる。

「なんだ、ラブラブだな、君らは」

突如やや芝居がかつたイントネーションでアルバの声が横合いからかけられ、二人は驚きに息を絞られて振り向いた。

「他のパイロットが既に周辺に出払っているからと、気を抜くところやうって奇襲を受ける」

にやりと歳に相応しくない意地悪な笑みを浮かべて、小さなアルバが冗談めかして言う。

しかしその背後に更に別の影が立ったことに彼女は気が付いていない。影はアルバの肩に手を置いて、呆れたように、また茶化するように声を出す。

「戦ってもいないのに奇襲かけてどうするの。それともアルバもヨセフとそういう関係になりたいの？」

アラムだった。大人しいように見えて強かな、芯の通った人物。  
「なっ……！ 全く、アラムは案外意地悪だ」

少々頬を紅潮させて、アルバが小さく反撃した。軽く笑って、アラムが二人の方を向く。

「二人とも、出撃だって？」

明るく聞いてくるその声に、ヨセフは少々ながら申し訳無いという心地を抱えながら、答えた。

「ああ。ちよつと、人手不足らしくてさ」

「軍人なんて余るほどいるように見えるけれど」

「それは」

「いいよ、分かってる」

頷いたその顔は、何もかもを承知していることを如実に表していた。思えば、自分だけがこういった形で巻き込まれてしまい、アラムが置き去りになっていた。そのことに気がついて、ヨセフはその皮肉さに倦怠感めいた物を覚えた。

「大変なことになっちゃったね」

どこか寂しげな笑みを浮かべる。軽く息を吐いた後に、その手をヨセフの肩にかけて、すっと身を寄せる。驚くヨセフを無視して、アラムは続けた。

「私はここで待ってる。戦えはしないから、戦場で何が出来るというとも無い。だけど、外から戦う人を見ている人がいなきゃ、それに終わった後でまた普段どおり生きていく人がいなきゃ、こんな戦争なんて元々空虚なのに一層何も無いことになる。だから」

最後の一言は、力強い。

「帰ってきて。絶対」

耳元にそれだけ残して、身を離す。

「それは」

「絶対に死なない心積もりをもって無い人は、送り出せないよ。私

はヨセフが好きだもの」

反駁しかけたヨセフを遮ってけろりと言ったのける。ヨセフの背後でトーエが目を見開いて驚ききっていた。うすうすは彼女も気が付いてはいたが、唐突さに不意打ちをくらった形だった。

その場の誰かが何かを言う前に、格納庫に出撃準備の号令が走った。場に満ちていた雰囲気というものを霧散させて、再び戦いの匂いが漂う。

「行つてらっしゃい。気を付けて」

アラムは何でもないように、そう言つて送る。

「私の真の味方は、ここにいる三人のような人間だ。得がたい友人なんだから、わきまえてな」

珍しくどこか素直でないアルバが、締めくくる。

二人はそれに手を振ると、部屋を出て格納庫へと向かい、それぞれのゼルプストへと向かった。

その途中、トーエが独り言のように、小さく呟いた。

「全く……結局、自覚が無いままに、つてことだよな」

それはヨセフにも聞こえていた。その意味は、ヨセフにも分かる。さすがに、分かる。

平時ならばどれだけ浮かれていいことだろうか。どんなことにも、戦争は皮肉以前の愚かしさを持っているのだと、感慨と共に彼はそう感じていた。

\*

世の中には、いくつもの間違いという奴がはびこっていると云つていい。

戦争には大儀がある。平和が体制の变革によって実現できる。民主政治は理想的である。それ以前に人民と言うものは理想的なものであり、その総意はやはり理想的である。

並べて見ればきりが無い。いくつもいくつも、夏場の害虫のよう



なものである。汚水の流れるほつたらかしの台所のようなものなのだ、『世間』という言葉によって一括りにされるものは。

そして、ここにも一つ。

『敵は、本気で戦っている』

嘘。笑ってしまうほどだと、ラゲルは実際に笑いながらそう思っていた。

一部の人間以外は所詮烏合の衆である。戦いたくて戦っているのではないと軟弱なことを言う人間は、敵ではない。好きでない事を仕方なくやっているのだと、戦いに対してそんな失礼な事もないだろうに。

特別仕様のコリューンが、敵の最前線と接触する。

一機で先行して来たその機影に、連合の戦艦にも動揺が走る。その位置や速度は大まかながらダンの『扉』のレーダーに引つかつて丸見えになっているのだが、動揺した軍人達は勢いと殺気の両方に満ち満ちたラゲルについていけない。

「百二百の戦艦を落として、要塞を全て叩く。シンプルでいい」

別々の方向を狙ったレーザーが、二機のウルゴスを同時に落とす。ビームやレールガンに比べればエネルギー消費の大きな武器であるが、ラゲルのお気に入りだった。

いくつかの攻撃をかわし、その間、隙間を狙って撃つ。一種単純なゲームのようなものである。

しばらくすると、後方にいた本隊も合流する。ユダの戦艦も数隻が前に出て、戦闘機を出撃させる。

ラゲルが戦場、連合の部隊に与えた混乱は、初手として有効に働いた。その後のユダが攻撃を受けつつもさほどの被害もなく連合と本格的に戦える位置にまで接近できたのである。

しかし、それもすぐに収まってしまふ。連合にとってラゲルの脅威は、純粹なその戦闘へのセンスだけになる。

ダンの力が一方的な索敵をするものだとしりながらも、ユダは通信の妨害を全てきってしまうわけには行かなかった。ダンの『扉』

の力はいくまで索敵に応用できるだけであり、遠隔操作の類を可能にするわけではない。ここで全ての妨害を無くせば、索敵という面では双方同じステージに立つことが出来るかわりに、連合は大量に保持した遠距離ミサイルを大手を振って使うことになる。核でも乱発されれば、資源に乏しいユダは終わりである。

それが、ユダの不利を招いている原因だった。

艦砲射撃が、ユダの側から一斉に行われる。

眩しいほどの光が空間を引き裂くように直進し、連合へと襲いかかる。が、大して効果を上げるものではない。船の位置を察知されれば、そこからの攻撃もそんなものになってしまう。

「頼りにならないもんだな」

毒づいて、機体を更に操り続ける。

錬度で言えば、ラゲルは自分がほとんどの相手よりも上回っている確信があった。しかし、こうも敵ばかり多く、援護の頼りにならない状況では動きがとりづらくて仕方が無い。

「くそつたれ」

とにかく、素早く、機敏に動かなければならないと直感する。相手に動きが悟られているのはし方がない。であれば、それに対応することを許さず迅速に叩く。

加速して、敵艦へと攻撃をかける。防御射撃の正確さに心地のいい寒気を感じて、気分が更に高揚する。周辺に護衛のウルゴスは残っていないかった。

「どけ！」

短く言い放って、撃つ。

ピンポイントにブリッジを貫かれて、不恰好な自動車のような形状の連合戦艦が機能を停止する。

敵の陣に穴が開く。それを見逃してはならない。

埋められる前に飛び込み、最大限破壊する。

大いなる愉悦、それを感じると共に前進するラゲルの前に、一機の敵が飛び出した。

「不恰好人形が、出てきやがった」  
両腕のない巨人。テオグースだった。

## 10 リズミカルハート

### 10 リズミカルハート

爆音や衝撃は一瞬でいい。というより、感じるのはたった一瞬にしかないかもしれない。  
破れかぶれな計画を携えて、戦いに出向く気分は、いいとは言えない。

「ヨセフ機射出、コントロール移行」

オペレートに従って、機体のコントロールを全権掌握する。ゼルブストの全身がヨセフとリンクし、マン・マシーンという関係ではなく、無理矢理表現するなら『マシンマン』にでもなるのだろうか。悪趣味な考えを振り払い、カタパルトへと信号を伝える。

原始的な押し出し式の射出機が作動し、体と心が遊離してしまうような急加速が大きな慣性重力を生み出す。

「ヨセフ」

すぐ耳元で声が聞こえたような気がして、思わず身を震わせてしまう。

それは勿論機械越しの声だった。トーエのクリアボイス。扉のリンクによってゼルブスト二機はダイレクトに繋がれている。大規模な装置はないために、連合のように軍隊すべてにリンクすることは出来ない。データ処理のための設備もない。単体としての能力は圧倒的でも、所詮は『扉』内臓式軌道兵器に過ぎない。

「狙うは扉を内蔵していると思われる要塞。唯一つ」

「分かってる」

この戦闘が始まってから数時間。その要塞がどれであるか、捕獲した敵戦艦などから割り出しを行い、判明させることには成功している。

「ダンと呼ばれる要塞は中央奥に鎮座してる。これでもかつて位に大将気取りね」

「ルート上には？」

「エシエル、ゼベド、アーサフがほとんど移動せずに鎮座してる。防衛網は完璧というか過剰なほど。こいつらをどうにかしないと」

実視界と重ねて、扉のリンクと意識上で作り出した擬似視界が浮かび上がる。その上に侵攻ルートや分かる範囲での敵の勢力が描かれる。一部は分かりやすさを重視して次元を無視した描画の仕方が成されている。

元々物理的作用ではない心理的並列状態を最大に生かすために、相性のいいと判断されたヨセフとトーエは二人の間での共感覚を構成することを訓練で課されてきた。

五機のコリューンが彼らに追隨する。先行するイニシユモアに合流し、敵の防御に穴を開ける。速さと攻撃力に物を言わせて相手の切り札を無効化しなければ、皆殺しが待つだけである。

加速する。まだまだ本格的な戦闘域は先だが、恐ろしく黒々とした想念の渦巻く宇宙の気配が、二人を圧迫していた。

\*

もつずっと昔から、人の世はこうであつた。戦争と平和、戦争と平和、戦争と平和！

いくら悪臭と粘っこい妄念に満ちた世界でも、それは絶えず今まで続いてきた。

「なにがいけない」

小声で呟き、表情筋を少しも動かさずに機体を操る。淡々と、しかし正確に。

敵はどうやら特別仕様のコリューンのようである。死角が少なく、拳動が機敏で、これはパイロットの腕によるものか、危機察知も早い。

手強い相手ではある。が、臆する必要はどこにもない。

「なにがいけない」

繰り返す。フラッシュバックするのは、少年の姿であった。諦観を知らず、挫折を知らず、膝をついた後の脱力感を知らない憎らしい顔。

（確かに、そうだ、いつまでこんなことを、とも思う）

愚かな意思で人同士仮初の支配を行い、何一つわからぬままに殺し合い嘆き死んでいく。数千年も繰り返された愚かな営み、人の営み。

ベニヤミンにも分かっていることは多い。

一つ。体制の変革は人類の変革には無意味である。なぜなら、人が変わらず体制が変わろうとも何一つ変わっていないからである。過去多くの革命が歴史には存在するが、未だに平和で美しい社会が存在しないのは、そういうことである。

一つ。人を変えるのに最も手っ取り早い方法は、体制を変えることである。が、体制は人が変わる事を必要条件として変化しなければ真の変化にはならない。

カナンを戦争利用することで、自分は悪を犯している。

世の多くが、悪に塗れている……。

そんな社会が、数千年続いてきた。今も昔も。

「なにがいけない！」

三度目。声と共に脚部のレーザーを撃つ。牽制にして距離をつめる。

が、相手は素早くコミュニケーションの尾部を振ると、小刻みに方向を変えて回り込もうとしてくる。戦闘機然とした形状の機体がこのテオグースを相手に。

（馬鹿め）

速度を逆方向へと入れ替える。宙返りを行って反転し、正面にのるまなコミュニケーションを捕捉する。一瞬とはいえかなりの距離が開いてはいる。が、関係ない。

「カナン、手を貸してくれ」

意味のない感傷的な言葉を囁いて、照準をデータ・リンクシステムと合わせて定める。敵の位置、速度、次の一瞬の予測。扉の力は凄まじい。

撃つ。光が立て続けに発射される。

「外れるか」

トリガーを引いた直後にそう予感する。当たらない。

敵はそんなところだけ素直にこちらに従うようにして、無茶とも思える方向の急転換で攻撃を凌いだ様だった。

追い討ちをかける。小型のミサイルを適当にばら撒きつつ、スラストを酷使して敵へと距離をつめる。

（長いときを、人は悪辣なまま生きてきたといえる。愚かと嘆き続けてきた。だが、そうしながらも結局今まで生きてきたじゃないか……）

そしてそのなかで、ささやかではあれ誰も批判することの出来ない無垢な幸福だってあったのではないか。心から賛美できる事だってあっただろう。

例え人生の多くが、人々の多くが汚らしく生きているだけだとしても、その中にはほんの少数のイノセンスな人間や時間が存在するだろう。

（それではいけないのか……それだけでは……！）

コリユーンが回避行動に専念する隙を見計らって、再度狙いをつける。

「ヨセフ、カナン、お前達は……」

続く言葉が見つからず、黙ってしまう。自分は一体何を言いたいのか。

若い意志。諦観を知らない愚かな意志。数千年成しえなかった人の変革などと、そんなものは単なる妄想ではないのか。

いや、諦観を知ることがむしろどうでもいい事かもしれない。どうにもならないという認識は、どうにかしようとする欲望と表裏一

体である。

が、それを裏返す気力は、様々な人生の不幸で奪われていくのだ。懐に飛び込むイメージで、その姿がはっきり目視できるほどに接近する。理論的に避けられないという射撃。ほとんど完璧に近い包囲射撃を行う。

時間差で発射されるミサイルとレーザー。それが、コリューンを取り囲む。

しかし、相手はそれを単純な方法で回避する。

包囲の穴、即ち前方への急速回避。

ベニヤミンのテオグースと接触するコースであり、無論そんなことになれば唯ではすまない。

「正気か？」

焦りを殺し、更に引き金を引く。正面から来るなら狙いも何も無い。潰すだけである。

安心すると共に一瞬気が抜ける。危険なその瞬間を狙い済ましたかのように

激震が走った。

\*

ラゲルは少し前に宇宙空間に放り出しておいたミサイルを作動させ、むきになって追い込んできた敵の二本足にぶつけた。ブービートラップである。有利を信じて疑わない敵には効果が高い。

二発が着弾し、足の片方がちぎれる。代わりと言ってはなんだが、ラゲルのコリューンもレーザーに武装の一部をそぎとられた。

しかし、状況は逆転した。勢いよく回転しながら吹き飛んだ二本足は、内部の人間を無茶苦茶に揺さぶり、大きく体勢を崩している。

「落ちろオ！」

叫んで、撃つ。当たる。撃つ。当たる。

接近しつつ撃つ。それだけでいい。それだけで勝てる。



信じて加速する機体を、二本足が不意に蹴り上げた。

\*

意識の空白は一瞬のことか。

その一瞬のうちに致命的に事態が進行していようと、一瞬は一瞬である。

「ぐっ……」

歯を食いしばって身を起こす。血の味が宇宙の寒々しさに似つかわしくない、と暢気にも思う。

（何が、どうなって？）

辺りを見る。モニター、計器、レーダー……。敵はすぐそこにいた。

「！」

叫びを上げた、と口が開く感触で自覚しながら、ベニヤミンはテオグースを操った。向きを変える、速度を変える、攻撃する。とにかく変化し続けなければならない。停止した物から壊される。

恐怖と焦燥が脳を焼く。癇癪を起こした子供のように引き金を引き、わめく。

「なにがいけないなにがいけないなにがいけないなにがいけないなにがいけないなにがいけないなにがいけない！なにが」

いけない？

今のままで何が悪い？ ほんの少しの幸福を味わって、ほんの少しの賢い魂だけが誠実に生きる人の世で、何がいけない？

（良いわけが、ない）

音が消える

耳鳴りのように続いていたうるさい雑音がなくなり、静寂が戻る。宇宙の静寂。生き物とそうでないものの境目が見える静けさ。昇っていた血が頭から体に回り、彼は冷静さを取り戻した。

目の前には、ずたばろのコリユーンの残骸が漂っている。自分のテオグースも片足を失い、様々な損傷を受けているが、相手のそれはすでに兵器というよりは金属塊でしかない。

その一部の黒い金属から、何かいやに鮮やかなものが遊離する。

（いや……）

それは、幻覚かもしれない。遠目に、モニター越しに見えているに過ぎない。そんなものがはつきり見えるはずはなかった。機体同士は接近していたが、それは宇宙で戦うという意味においてである。拡大してモニターに表示しているからこそその姿は見えるのであって、実質的な距離はひどく大きい。

パイロットの残骸など、モニター上でも見えるはずはない。

自分に言い聞かせるように納得する。吐き気がおさまるまで呼吸を止める。

（何をやっているんだ）

戦争も、人殺しも慣れている。ただそれが少し

（嫌になったのか。カナンにあんな役目を背負わせておいて？）

自責と自嘲。

こんなことだから、ヨセフという少年は自分に本能的に反発したのだろうか。

（撃ち殺しておけば、どれだけよかったか）

後悔しつつ、機体の向きを変える。一時帰還しなければ戦えない。

## 10 リズミカルハート（後書き）

久々に更新いたしました。一月も空けてしまい、本当に申し訳ありません。やっと色々落ち着いたので、また続きを書いていきます。宜しければお付き合ってください。

## 11 呪いの子ら

### 11 呪いの子ら

エシエルと呼ばれる要塞の姿が近づくと、その威容にヨセフは息を呑んだ。一キロほどもあるそれは黒塗りで、大きさと宇宙のスケールが合わさり距離感が掴みにくい。

その不安を感じ取ってか、気のせいほどにヨセフのゼルプストは手に持った兵器をその身に引き寄せた。飾り気のない三角定規のよな形のそれは、小型戦艦用のマシンガンを持ち兵器に改造した物である。ビームを様々な形で撃ち出す事が出来、ペレット状にしてマシンガンとしても、中途半端なライフルとしても使える。

（穏やかな宇宙なんて幻想みたいだな）

目の前に広がる光景に、内心で呟く。何隻もの戦艦が敵味方入り乱れ、小型兵器が複雑な線を描いて移動する。光の筋が断続的に煌き、爆発も見受けられる。

そんな中に、これから入らなければならない。

「怖い？」

トーエがすぐ隣で平坦に尋ねてきた。

「ああ、とてもすごく本当にびっくりするくらいに」

「私も」

やり取りして、一息をつく。冷たい呼吸が終わるかどうかといううちに、ヨセフとトーエ、周りのコリューンは加速をかけた。目一杯の急襲。

「突っ込むよ！」

トーエの号令で、一気に部隊は（と言ってもトーエとヨセフ以外は寄せ集めに近い）エシエルに接近する。巨体とはいえいくつか攻撃を当てれば、道は開ける。ビーム兵器や攻撃性の高いその他の兵

器を、この部隊は有している。

問題は、その攻撃のための接近をどこまで許してもらえるかだった。

（まだだ……まだ行け……）

念じるように祈るように、進む。敵がいつ迎撃してくるか、その初撃で自分やトーエはやられないか。

まだ誰も撃たれてはいない。数字に直してから始めて自分でも驚くような速度でぐんぐんと近づいていく。エシエルがゆっくりと、そしてその周囲の敵戦艦がそれよりは幾分か早めに、大きさを増していく。

更に数秒。もう数秒。

（どこまでだ？）

もういつ迎撃されていてもおかしくはない。むしろそろそろされていないとおかしいほどに踏み込んでいる。

接近できるのはいい。それが最も困難で、エシエル攻略のための鍵なのだから。しかし不気味に沈黙したまま待ち受けられているのは恐ろしかった。

敵はダンの力でこちらの動きを見ている。隠密が不可能な以上迅速な突撃はしょうがないことだが、突然の反撃と損害の多さは用心しなければならぬ。

接近し続け、遠近という関係性の変化に従って光学的映像として巨大化し続ける敵。

内臓が冷える。ひりひりと肌が痛むほどに緊張が張り詰める。

編隊を乱さず、滑るように音のない宇宙を進む。深海を高速で泳いでいるような気分にもなる。あるいは沈み続ける気分か……。

（どれ位経った？）

時間の感覚を取り落としそうになり、慌てる。が、すぐに時間ではなく距離を測る。

既に危険域に入っていた。相変わらず敵は押し黙っている。

部隊の誰もが押しつぶされそうな威圧感を受けていた。ともすれ

ばもう発砲してしまいそうなくらいに。だがもう少し距離をつめなければ有効打にはならない。敵は要塞の周りに戦艦で防御を固めているし、機動兵器の武器はそれほど長射程ではない。無駄に撃って反撃をくらえば致命的である。

耐えて耐えて、それから撃つ。鉄則だった。

（いい加減）

おかしい。震える指が武器のトリガを操作しそうになった、その瞬間。

エシエルの無数のハッチが一斉に開いた。

統制されたオーケストラのように、隙も狂いもなく洗練された優雅さで次々と穴が開き、その内部から一撃一撃が間違いなく直撃すればコリユーン程度ゴミ屑と化す攻撃が放たれる。

ゼルプストの外部センサーやカメラがそれを分かる範囲で全て捉える。

同時に、ヨセフの意識にイメージが投射される。敵の攻撃の全て。どこからどこへ、その速度、ルートが次々と描き込まれる。

だがそれまでだった。扉は人が感知している情報を意識のプールからアクセスして知覚させるが、解決策を示す道具ではない。

「あああ！」

眼前に迫った何か、恐らくはミサイルをかわして、一気に動き始める。

四肢を伸ばして行きたい方向に落ちるイメージ。それが重力も地面もないこの空間では一番機体を正確に操るすべだった。扉のシステムを介してゼルプストを操作する利点は高い反応性と繊細さだが、逆に機体とのシンクロが過ぎれば行き着く先は真空の宇宙に裸で放り出されたような感覚に苛まれ恐慌状態に陥る。

攻撃を受ければ貫かれたのが装甲でなく皮膚と内臓だと錯覚することすらあるのだ。

内臓が乾ききり、宇宙の涼しさが骨を直接伝わって抜けていく。

（全て夢想だ　集中しろ！）

自らを叱咤して、回避に専念する。

遠くでは細く糸のように見えた粒子砲の光が機体を掠めて通り過ぎる。瞬時に機体を側転するように動かしてかわすが、弾けとんだ余波、微細な粒子が肌に当たった。

「く！」

マシンガンライフルを構えながらロックを解く。

それと同時にトーエ機が前に出た。出撃前に識別のため塗装がなされており、ヨセフのそれが漆黒であるのに対してトーエのそれは純白だった。光の粒子が放たれているのではないかと思えるほどの見事な輝きは、悪辣さを負うことのないトーエという人物によく似合っているとヨセフには思えた。

体を回転させつつ戦場を前に進む。エシエルの第二波が一斉に放たれる。

今度は冷静に見る。が、混乱していたほうがましかもしれないとすぐに思い直した。

数え切れないほどの光の直線が一気に広がるその様子は、まるでエシエルそのものが爆発したのではないかと思ってしまうほどだった。

コリユーンが一機、三方からの光に貫かれて消える。

網の目のように広がり、時に収縮する敵の攻撃。空間の隙を見つける作業を怠れば即被弾してしまう状況だが、それをするには敵の人数が多すぎる。

コリユーンのパフォーマンスでは捌ききれないようだと判断して、ヨセフは意識を尖らせた。

ゼルプストはその知覚能力（機体の外部感知装備の及ぶ範囲全と、意識が広がる範囲全で、つまり人が介在する事象であれば心の負担への耐久力が許す限り無限に）と機体と人との重ねあわせによる鋭い挙動でコリユーンよりは有利に動ける。

（死ね）

ぼそりと。意識の底から自然に沸きあがった言葉に自分自身愕然

としつつも、攻撃をかける。

ヨセフのゼルプストが放った光が冗談のように正確に近くの敵艦に突き刺さる。たった数発。それだけであっけなく敵は砕けた。

（やった……！）

続けて動く。後方でトーエがロングレンジ用のライフルを使い、遠方のウルゴスらしき影を撃ち落とす。尋常ではない遠距離での狙撃だが、ゼルプストであれば可能だった。

背中から頭部。意味のないイメージを頼りに宙返りでミサイルを回避する。カウンターで射撃を加えて、更に前進。

そろそろエシエルも射程内かというところまで来て、いよいよ敵の攻撃も苛烈になっていた。雨霰とレールガンやビームが降り注ぐ。もはや自分が何をしているのか分からなくなりかけて、ヨセフは唇を噛んだ。強く、噛み千切る。

だが、血の味はいつまで待っても広がらず、痛みも一瞬で霧散してしまった。

「なんだ？」

手で唇に触れる。

（唇に……どこのか？）

頭を振る。パニックに陥らないように息を吐く。自分は噛み千切ってはいなかった！

機体との同調の加減が、危機的状況が続くせいで強くなり続けてしまっていた。

「ヨセフ！」

朦朧とする頭の中に、トーエの声が滑り込む。

トーエ。親友。昔からの。支え？ 存在の肯定点……？

（いや）

違う。

「トーエ！」

答えて、意識の霧を払う。

孤独を知り、そこにおいて一人であっても自らを存在させ続けて



いられる人間同士。だからこそ、知り合い、触れ合うことに価値があるという、その関係性。

（トーエは、彼女は……）

これ以上なく大切なもの。いくらでもある。

二機のゼルプストが呼吸を合わせる。ヨセフが前に出て、多くの攻撃をひきつけ、その元を次々に断っていく。その動きが阻害されるのをトーエが許さない。激しく乱舞する嵐の中の木の葉のように、二機が動く。素早く、急制動をかけ、緩やかに動き出し、突然にはじける。

眼前に迫ったウルゴスを蹴り上げてその先端を撃ち抜き、更にミサイルへの盾とする。振動の大きさに怯えつつもそのまま突き進み、戦艦ヘビームを着弾させる。

ヨセフ達の部隊は味方戦艦を戦域に近づけ大きな打撃を与えうる攻撃をかけさせるための要員である。普通の戦いであれば陽動部隊ということになるか。

だが『扉』によって相手だけが戦場のすべてを詳細に知ることが出来る状況では、陽動もなにもあったものではない。例えば敵陣近くにすべての動力を落とした状態の機体を潜ませて置けたとしても、そこに乗組員がいれば意識の意図を辿ってたちまち位置がばれる。

（いや、辿るだけじゃない）

ヨセフは気がついていて、機体の装甲越しに伝わるのは振動だけではない。剥き出しの敵意や混乱、様々な感情がおぼろげながら入り込んでくる。意識の海から個人を知覚する扉が、個人の意志や思考を勝手に読み取っているのだ。

「もしかしたら、敵はこちらの一人ひとりの思惑まで感じているかもしれない……」

寒気がする。ヨセフは強い感情をおぼろげに感じる程度だが、トーエなら、或いはセシルなら……？

「危ない！」

トーエの声にはっとして、意識を引き戻す。目の前に高速で飛来

した、二十メートルほどもある残骸めいたものをすんでのところ  
よけて、舌打ちする。

油断だらけだ。

戦闘の緊張は、むしろその時間が長引けば長引くほどに疲労を蓄  
積し、油断を生む。素人同然のヨセフにとっては特にそれが顕著で  
あった。

（いけるのか……？）

問いに答えるものはいない。皆殺しあうことに手一杯だった。

\*

既に包囲されている。一瞬だけ扉の抽象イメージに視界を占領さ  
せて、すぐに解除する。網膜　なのかどこなのか知らないが、焼  
き付けたイメージは、大量の敵の位置、数、行動を大まかに表して  
いる。自分とヨセフ、そしてコリューンが残り十二機。増援は後方  
すぎてすぐには追いついてこない。そもそもエシエルとその周囲の  
注意をひきつけないければ主力がここまでたどり着けない。

通常の視界のままで、今度は思考を引き伸ばす。

（いちいち意識しないと出来ないところは、ヨセフよりも下手なの  
かもね）

扉のオペレートは機械的な動作によるところが少なく、コクピッ  
トに座った人間が意識的操作として行わなければならない。ヨセフ  
は感覚的に連続して行っているようだが、トーエには難しかった。  
だが意識してチャネルを切り替えるように操作するために、早  
くもないが無駄も少ない。

周囲の敵の狙いを察知して、次瞬を予測する。機体のコンピュー  
ターの計算と、広範囲にわたる情報の収集のあわせ技である。

機体を小刻みに動かし、向きを変えた後で変形する。戦闘機と化  
したその機首をエシエルに向ける。

（今！）

包囲に歪みが生じる隙をついて、突っ込む。前方からの重力に肺が潰れ皮がはかれるような痛みと不快さを無視して、背中の特特殊なミサイルを解放する。

短距離のルート設定が成されたそれらが一気にエシエルへと走る。当然迎撃に敵が動くが、それを許す気もない。

「当たれエ！」

瞬時に制動をかけて、人型に戻る。

扉を使って機体が捕らえている全方位の情報を知覚する。視界がありえないことにもかかわらず、三百六十度を一度に映す。

ライフルを振るう。撃てるだけ撃つ。限界を超えた連射で敵のウルゴスや戦艦の砲身を貫く。

それにあわせてヨセフも「迎撃の迎撃」を行ってくれていた。連射の効く手持ちの武器でミサイルを捌き、上手く威嚇している。

結果として、エシエルに数発のミサイルが着弾する。

特殊仕様のそれらは、着弾と同時に閃光を放って球状に光を膨らませた。その爆発に連鎖するように巨大なエシエルの外郭の一部が崩壊していく。

ざらりと、思考の流れを絶つような感触が周りに立ち上がった。敵が動揺している。

機を逃すことなくコリューンたちも搭載した対要塞用重兵器を使用する。多くは阻まれてしまうが、いくらかはダメージが突き通る。  
(いける……)

押し通すことが出来る。確信して、ライフルを牽制に使いながら敵を掻き乱すことに専念する。

扉によって情報を得ている相手をはめることは非常に難しい。だからこそ、高性能機での突撃と迅速な打撃が必要だった。

やがて。数分か数十分か。朦朧とする時間を挟んで、その時が訪れた。

味方艦隊の姿を確認して、ヨセフや仲間の部隊がその場を下がる。トーエもそれにあわせて後退して、場所を空けた。

胃の底が解け崩れるような冷えた感覚がしばしその場を支配する。空間を見つめる。地球をバックに体勢を立て直しつつある敵の姿。彼らも、既に迫りきっている危機に気がついているのだろう。ひどく慌てた様子だった。

「間に合わない」

ついそう言ってしまった、トーエは苦い味のする唾を飲み込んだ。すぐ後のことを考えれば、気分は悪いを通り越して暗く陰る。

そして。

光が目を焼く。実際にそれほどの光量があるわけではない。だが味方の精一杯の数の戦艦が一斉に放った攻撃は圧倒的な量で敵へと襲い掛かり、それは圧倒される光景だった。敵要塞の砲撃も凄まじかったが、多数の敵に対処するために分散していた。今のこの攻撃は、敵要塞とその周辺めがけて一つの方向から行われているのである。

十数隻の大型艦と、更にいくつかの小型攻撃艦。その砲撃が津波のように要塞を飲み込もうとする。

要塞は瞬時にその表面を変化させて対応したようだった。ハッチが閉じ、ハッチの間の装甲が盛り上がるように出てきたと同時に展開、要塞表面のいくらかを覆う外殻となった。

いくらかは攻撃を受けて剥がれ落ち、防御に貢献したその装甲も幸いなことに凄まじい一斉放火を浴びてすぐになくなる。

一旦射撃が収まりかけた頃には、すでにエシエルは半壊していた。綺麗な直線で構成されていたその姿は、今はあちこち犬に噛み千切られたようにみすばらしい物へと変わってしまったている。

「やった」

疲れきっていると自分でも分かる声で、そう一言言葉を紡ぐ。

それすらも許さないとでも言うかのように、一条の光がトーエの脇を通り抜けた。

意識の空漠を突かれて、反応が遅れる。

（攻、撃？）

後方の戦艦が火の手を上げる。たった一瞬で百名近くが艦と共に爆散する。

更に十本ほどの光線が一度に宇宙を切り裂く。  
すべてが戦艦を貫く。

（こんな……これは）

ひどく狼狽しつつも、確認する。扉で知覚できるはず……。

それは、たった一機の敵からの攻撃だった。しかも、尋常ではない距離からの、狙撃。扉の情報があるにしても、それは異常だった。敵は要塞の一つであるダンに扉を積んでおり、そこで得た情報を共有しているとユダでは解析されていたが、それだけで出来る芸当とも思えない。送られた情報処理し攻撃するのは唯の兵器であり、敵は扉を一つしか所有していない。

これではまるで。

（扉を持つ要塞と……同じく扉を持つ機体との連携みたいな……）

「そいつ」は高速で接近してきていた。

人に酷似したようどこかいびつな手足。変形機構を有していることが知れる腹部。大きさは、まさに巨人と呼ぶに相応しい。

いや。

遠回しにすることもない。トーエだけでなく、ヨセフも、そいつの姿が何であるのかを知る者の全てが驚愕していた。

「ゼルプスト」

ヨセフの呆然とした声が、優しくトーエに届いた。

## 11 呪いの子ら（後編）

「なにがいけない？」

問いは中空に浮かび、誰にも聞かれること無く消えていく。しかし、それは認めがたいことだった。問いに答えるものは誰か、そう考えて、ベニヤミンは濁った瞳で前方を凝視した。

二機のゼルプスト。情報では、あのヨセフという少年と、もう一方も歳若い少女が操縦を担当しているらしい。

ベニヤミンは疲弊していた。始終息苦しく、神経がささくれ立っている。長い戦闘の中で、たった一日足らずながらやつれたようにも思えた。

テオグースが半壊して、その代わりに与えられたのは後方待機でも艦長としての任でもなく、この『パラメデス』という人型のトンデモ兵器である。

誰が問いに答えるか。

問いを抱え、その答えとして覚悟の元に戦争を行うベニヤミンは、それに答えるものの最低条件をあげることが出来る。

同じだけの覚悟を持ち、立ちはだかる者。

今日の前にいる、二機のように。

「カナン、機体を手伝え……ゼルプストを撃墜する」

低い声は、しっかりと彼女の耳に入っていたはずだった。

無理矢理に感覚を引き伸ばして、ベニヤミンはその絶大な不快感に掠れた笑い声で耐えた。

\*

消えた。

そう感じるほどの急加速。視界から逃げたどこか違和感のある偽ゼルプストは、その速度への驚きから意識が回帰する前にトーエの

後ろに回っていた。

「この……！」

ぞつとしながら振り向いて、トーエはライフルを闇雲に撃った。牽制程度に働いてくれればというのが狙いだったが、相手は全く気にせずに背後に回り続ける。

そのまま後何秒か経てば圧倒的に不利になる、というところで、ヨセフ機が後方から射撃し援護してくれる。

さすがに敵も一旦回避に専念するが、すぐにまた消える。

（追いきれない）

おおよそまともな相手ではなかった。ゼルプストですらその姿を追えない。コリューンでは歯が立たないだろう。

であれば、扉の力を存分に使わなければならない。そう判断してトーエは出来る限りの迅速さで知覚を広げた。周囲の広大な宇宙空間の中で先ほどの敵を強く意識してその移動を追う。

峻烈な意識。それを見つけると同時に、相手の感情が表面的な意識か、とにかくそんなようなものが流れ込んでくる。

『なにがいけない』

危険さを察知して、前に出る。トーエは自らの機体を前に出して、狙撃を試みようとした。

が、そのために使った僅かな時間で足元に敵のゼルプストが滑り込んでいる。

（あ　　）

覚悟する間もなく、一度に三条の光が通り抜ける。自分が体を置き去りにして心だけで飛び出してしまったのではないかと思うほどの機体の姿勢の崩れ。瞬く間に一撃をどこかにくらったその反動で一気にコクピットを含めた全てが仰向けに倒れるように（といって地面などどこにもないのだが）回転した。慣性が脳を揺さぶり、死んだほうがマシだと思つようなめまいの究極系と単純な痛みに悶える。

半ば反射的になんとか立て直すが、飛びかけていた意識が戻るま

では少々の時間が必要だった。

（私は、どうなった？）

恐る恐る、確かめる。足は取れていないか、腕は、あるいは首は。そのどれもが、肉体の上でも機体の上でも無事だと分かったが、しかし手に持っていたはずのライフルは握り手と共に消し飛んでいた。

舌打ちして、トーエは破損した手の平を腕ごとパージした。バランスは崩れるが、軽くなる。

もっともそれでどうなるものでもないが……。

再び敵を探さなければ。自らを叱咤してトーエが集中を取り戻した正にそのタイミングに、近くで閃光がはじけた。

ヨセフだった。トーエが追い切れなかった敵に同等の速さで戦いを挑んでいる。

（そうか）

納得する。相手の速さは機体の速さではない。扉の運用に優れた操縦士の腕によるものだ。様々なものの位置関係を処理し、瞬時に機体にするべき行動を命じられるだけの技量。

「ヨセフは……」

私よりも数段優れている。普段であればそれも嬉しいことの一つだろうが、こんな血生臭いことに彼が適しているということに、トーエはひどい憤りを感じた。誰に対してでもなく、皮肉な人間の関係とこれまでの導きに対して。

加勢しようと思うが、トーエの機体はまともな武器が残っていない。

そもそも敵とヨセフ、二機の動きはついていけそうなものではなかった。

互いがなにか高貴な舞踏でも行つかのように無駄なく優美で、かつ剣呑な気配を持った動きで致命的な一打を放つそのために動いている。

洗練されたボードゲームを思わせる攻防。ヨセフが左右に敵を振



つて接近すれば、敵は機体の各部からビームを発射し、ヨセフの機動を妨げる。その牽制がそのまま攻撃の初手にもなり、続く射撃をヨセフに集める。だが、ヨセフは信じがたいことにそのすべてをほとんど移動せずにかわして見せた。機体の四肢を器用に操り、すれすれで致命打を的外れな攻撃へと貶める。

獣のような勘のよさと俊敏さに、とてもそれが人の操縦する兵器などには思えなくなってくる。

しかし、互角と思えたその攻防も徐々にだが敵が有利な位置を独占していく、その流れが出来てきてしまう。機動力、耐久性、パイロットの質。そのすべてに目立った差はない。

あるとすれば、火器の量。敵の機体は各部に粒子砲がいくつも搭載され、更にそれを運用するための十分なエネルギーが詰め込まれている。瞬時に狙いをつけて四方八方どこの敵をも狙える恐ろしく陰湿なビーム砲。

（連合がこんな物を作っていたなんて）

焦りつつ、敵を追う。背後を取ろうと躍起になるが、敵はヨセフとトーエの二人を同時に相手取っても余裕を残した動きで自らの優位性を崩さない。

この　！　意識の軋みと共に、残された腕を一振りする。手首の内側からせり出してきた小さな刃を手にとつて、攻撃をかける。硬く握ったそれは微細な振動と共に敵を突き刺し、その刃ごと破裂する使い捨ての装備だった。緊急時用の補助的な装備　のさらに試作品であり、信用性も攻撃力も低い。

それでもこれで一撃されて平気なはずはない。奇妙に形の異なるゼルプストらしき機体に肉薄しようともがき、視覚を三重化する。一瞬前と今現在と短期的な予知。

脳が焼ける。体の中が爛れる。

幻覚に身をよじることも出来なかった。今のトーエは（そして恐らくヨセフもだが）扉の性能、扉を内蔵したゼルプストの性能を、開発者の理解を大きく越えて引き出している。その確信があった。

「そうじゃなきゃ、こんな無茶な物……」

ちかちかと目の中で光が踊る。たまらない恐怖が背骨の感覚を歪める。

ヨセフがこちらの意図を読んで敵を上手くあしらう。今やヨセフとの意識は混在と言ってもいいほどに通じていた。互いに意識の海に沈み溶けつつある二人。

そこに、無数の他者がいる。この戦場の人々、地球上の人々、宇宙の人々。

それらはほとんど見分けのつかない細々としたものたちだった。ヨセフとトーエだけがその場ではつきりと見える。

いや。トーエは、ヨセフと共に『三人目』に意識を向けた。見たことのない男。ヨセフの記憶には既に存在する男。ヨセフを介してトーエはその人間が誰かを知った。

（ヨセフを捕らえていた、敵艦の長？）

男は、手負いの猛獣のようだった。低く落ち着き、しかしいつでも爆発できる。

妄想なのか……その意識的空間の中で、男はトーエたちのほうに向かつて思念を投射した。

『なにがいけない』

『なにが……？』

思わず答えてしまう。男は笑ったようだった。かすかに、口元が震える。

『これまでも多くの戦争があつた。多く死んできた。多く不幸を積み重ねた。犠牲は数え切れず、人はずっと罪科の中にいた』

『ならこんなこと早めにして、無垢なものを守れ』

その声は自分ではなかった。ヨセフが鋭く男をねめつけている。言葉を交わす必要は、あるのだろうか。そう考えてしまう。この場は、扉によって繋がった意識の場、全精神の海への入り口の辺り。考えは手に取るように分かる。

『そのためにまた殺し合いか。ふん、革命家の思想はいつも人の愚

かさを置き去りにする」

「何故人を変えるために動けない！　あなたがやっているのは単なる政治的体制のための戦いだ！」

「何故いけない！」

何度目か。絶叫に、ヨセフが思わず口を噤む。

「何故だ。確かに好ましい物ではないさ、戦争の歴史など。だが、それでも不幸だけで生きてきたわけではあるまい。中には奇跡のように正しく生きる個人も存在したし、誰もが純粋な幸福くらい、微量であるかもしれないが所持はしていた！　そうでなければ生きてなどこれなかったはずだ」

際限のない空間に、しかし何故かその声は反響した。

「今のこの状況に、何千年と続いた人の歴史を全肯定して、何がいけない！　不幸さは幸福さを駆逐は出来ない。完全な人の革新を夢見て凄惨な殺し合いをするよりも、単純に多くを生かせる『普通の戦争を続けたほうがマシだ』と何故言えない？」

「そうやって言い続けて、数千年の不幸を抱えたんだろう！　順序が逆だ！　お前は」

やりきれないのと、溜まった不満をぶちまける、二つの表情がごっちゃになったような顔でヨセフはそれを口にした。

「信じられないだけだ。人も、目の前に既に示された可能性も。だから簡単に他人を犠牲に出来る。可能性を自ら潰す。勝手にやっつればいいさ」

きつ、とヨセフの瞳が引き絞られる。明確な意思が場を貫く。

「だけど、そんなことのためにトーエもセシルも、犠牲にはさせない。馬鹿は一人でやってろ」

男は、ベニヤミンはその姿を消し飛ばされて霧散した。

「現実のトーエ」は、意識世界での会話を聞きながらも、その精神の半分を現実で動作させていた。ほんの少しだが停止したヨセフと敵機。インナースペースでの会話に集中しているのだろうか。

好機はこの一瞬しかないように思われた。ヨセフを失わないために、敵を殺す。

（ヨセフは……）

トーエにとつての願い。そのもの。

幼い頃からの友人であり、繊細で、賢しらで、どうしようもなく善人。

思い出されるのは、アラムの言葉だった。ヨセフが好きだった？

（私も。おんなじだよ、アラム。ヨセフが好き）

「ああああ！」

咆哮と共に突進する。片腕を伸ばして、リレーのバトンパスのように相手に小さな刃を近づける。

（だから、アラム、ヨセフは私が絶対無事に帰してみせる。あなたも私も好きな彼を……）

切っ先が突き刺さる。同時に、甲高い悲鳴が頭の中に響いた。

やめて！

遅い。既に敵機にはその武器ごと腕が半ばめり込むように突き立っていた。ちょうどゼルプストであれば、コクピットを貫いた形である。

（……だれ？）

疑問の声を、実際には出せなかった。なぜなら、それは知っている声だ。ほんの少しだけ触れ合った少女の声。

ひっ……！

引きつるような絶望の呻きに、トーエは肺の中の息を全て搾り出さなければいけなかった。

「セシル」

全て瞬時に直感していた。自分が今殺した男が、その声の主にと

ってどういった人物か。

（なぜ、いけないのか）

血の気が引く。何をやってしまったのか。いや、しかしやりようはなかったと自己弁護して、その気持ちの悪さにトーエは悲鳴を上げた。

「ヨセフ！」

\*

いつの間にか意識が復帰して、しかも敵はトーエに仕留められていた。突如として扉を経由したセシルの声が響き、トーエが自らの名を呼ぶ。

ヨセフは意識して肉体を動かし、口を開こうとした。

しかし答えるよりも早く。

常識外れの遠方から飛来した光の一撃が、敵の機体とトーエの機体を巻き込んで通り過ぎた。

後には目立つ破片一つ残ってはいない。黒々とした小さな欠片がいくつも撒き散らされて漂うだけだった。

名前も呼べずに。

ヨセフはねじれて千切れた宇宙の中で吐いた。

## 12 夜

### 12 夜

まともなことなど無い。

まともであるというラインが一体どこにあるのか。誰もそれを知らないがために戦争など起こりうるのだが、一方ではつきりとまともではないと知ることが出来るのも人間である。

意味は直覚されるものであり、定義され線引きされた時点で偽物となる。

ベニヤミンは自らのことをどう思っていただろうか。カナンは何度も繰り返し返したその問いを今もまた反芻し、そしていつも通りにすぐに答えを出した。

彼はカナンを単なる研究素材の地位から実験的な立場の軍人へと変えた。その理由を尋ねたことはある。

決まって口ごもってから、ベニヤミンはゆっくりと首を振った。

恐らく彼は、カナン自身に対して怜悯な感覚と同情を同時に抱いていたのではないか。戦場に引きずり出すことで死の可能性を引き上げてくれ、同時に人殺しが延々と続く場所への招待でもあった。

彼はどうしたかったのか。カナンは問うが、それには誰も答えることが出来なかった。彼は死んだ。死んだ意識は、どこにいる……？

扉は彼の元へは導かない。

爆発的な衝撃が、彼女の全身を揺さぶった。

\*

トーエの使っていたものと同じ物を用意してもらった。右手にはマシンガンタイプを、左手にはトーエ機と同じライフルを装備して

の再出撃。

いまや戦場は混濁し続け、有利な陣営も安全な場所も分らない。ただただ濁った土のように混ざり滞る。

体の関節が悲鳴を上げて悶絶しそうになりつつも、ヨセフは要塞の一機の攻撃を全てかわしきり、返す刀でその一部を徹底的に破壊した。

「今です！」

叫びに呼応して、艦隊が援護射撃を行う。二度三度とそんなことを繰り返せば要塞も落ちる。

連合は扉の支援を欠き始めていた。その理由は分らないが。

（いや……）

理由は知っている。恐らく、自分とトーエだけが。最も、トーエはこの宇宙のどこからもいなくなってしまうたが。

（違う）

自らの思いを、否定する。存在していた物が存在しなくなるというのは、論理に反する。鉄と鋼の論理に。

トーエは死んだ。あっさりと蒸散した。チリと化した。それだけである。

敵は、扉の制御にカナン セシルを置いている。あの一瞬、ベニヤミンらしき男のゼルプストフェイクを破壊する際の意識の交差そこには、散りつつあるベニヤミンとヨセフ、トーエと、そしてあのセシルがいた。

はつきりと分かった。彼女が、敵の中枢である。

あの一件が戦闘の長さともあいまって、彼女を不安定な状態にしている、それが敵に扉の恩恵を十分に与えない要因だと推測することは出来た。

（その隙をつく）

シビアに行かなければならない。おかしな格好付けも情念も挟んでいる余裕は無いのだ。

近づいたエンガスを蹴り飛ばして、折れ曲がった腹に粒子を撃ち

込む。

（トーエを撃ったのは、セシルだ）

黒々とした息を吐き出す。遠方からの攻撃は、あれはダンから放たれた物だった。ピンポイントでトーエを打ち抜いた光。

どうするべきか。

散々自分も人生の中で使ってきた文句である。だが、真実追い込まれたときにこの言葉は馬鹿馬鹿しかった。

「決まってる」

ひとりごちて、不規則な機動でダンへと接近を書ける。もはやその要塞を守るものは存在しない。鋭角だらけの巨体は静かに周囲を威圧しているように見えたが、すでに連合とユダの状況は五分五分かそれ以上になってきている。ユダは全戦力を投入してその多くを失い風前の灯だが、敵はとうとう中枢に踏み込まれつつある。

何人死んだのか。それはあまりどうでもいい話かもしれない。

（何人死んでいようと、トーエは確実に死んだ）

その確実な死の集合が、何人死んだかという統計数字になりえる。ひどく馬鹿馬鹿しい空しさに捉われて、目を細めながらヨセフは流れるような動作で狙いをつけて撃った。

衝撃、振動、爆発。

めくれた船体の内部から内臓を吐き出すようにいろいろとこぼれさせつつ、敵艦が二つに折れる。

\*

理想とは、どういうものか。

クソツタレなお膳立ての集合だと、どこかで感じ続けてきた。

「戦争がなくならない理由を考えたことがあるか？ まあ、あるか」  
グールドは、ダンの一室で密やかに語っていた。相手は、誰でも良かった。今日の前にいるのはドリンクを運んでくれた化粧の濃い女である。

「誰もが平和を望みながら、なんでだろうと、それこそ愚かな問い



だ。理由は単純明快、人類の大多数は平和より善より愛より何より個人の瑣末で矮小な願いを一番に欲するからさ」

一口チューブから啜ったそのドリンクはひどく良い匂いの紅茶だった。気に入らない。放り捨てる。

「そしてそいつらはそうしていることすら良く分かっていない。無知の無知だな。それで戦争は恒久的に続いてきた。大抵の場合はそうだ」

だが、と、グールドは目を閉じて唇をなめ、続きを気持ちゆったりと言葉に変えていった。

「一部は、違うんだろうな。理想を見つめた賢しらかな人間がその理想を目指して突き進み、周囲の愚かさを摩擦が起きる。両者が譲らないその溝に、戦争が起きる」

分かるか、と訊こうとして、女が退室しようとしているのにグールドは気がついた。その背中に拳銃を向けて躊躇無く発砲する。

足でも踏まれた鳥のように奇怪な声を上げて動きを止め、宙を漂う女を哀れんで、拳銃を手放す。

「結局、戦争のもう一つの側面は、賢しらかな天才と、そうで無い愚か者の生存競争だ。私は、自分が賢しらかな者としてその闘争を休止させられるんじゃないかと思ったのだが」

無理だったようだ、という前に、背後の壁が一瞬膨張した。目の錯覚かもしれないが、振り返ったグールドには確かにそう見えた。

一瞬で色を変え粘土を変え、醜く破壊された壁の向こうから鋼鉄の巨人が飛び込んできても、グールドは取り乱しはしなかった。

\*

文字通りの一番槍となって、ヨセフはその要塞に突撃した。

言うまでもなく自殺行為に等しい。足をもぎ取られ、ゼルプストがバランスを崩しかける。意識にも強烈な亀裂が走りかける。

右手のマシガンに取り付けられたグレネードを打ち込み、さら

に銃自体を投げ捨て腕に収納された短いブレードを振り上げて機体の前に構え、要塞に開いた穴へと突き込み突入を試みる。

見方は口々にヨセフの暴走行為とも言える単独での攻撃に制止をかけていた。が、全くそれは意に介さずに、ヨセフはただただその深みを目指した。

要塞の奥深く。セシルのいる場所へと。

（僕は、ベニヤミンになんて言った？）

お前のために、トーエを犠牲にさせはしない。

（これじゃ、まるで）

自分のことではないか。

暗い穴を開けた内心に食い殺されるよりも早く、そこに到達することが出来た。

「セシル！」

獣の絶叫に近い。自分でもぞつとする声音で叫んで、ヨセフはゼルプストの両腕を使ってその場所の壁を押し広げた。だだっ広い広間に作られた奇妙なオブジェのような部屋たち。

リングのように並んだ部屋の中央には、球体状の大きな壁があり、正面には扉が付けられている。

（急がないと……敵軍の人間が駆けつけてきたらまずい）

そこに彼女がいるということくらい、『わかる』。

瓦礫や、出力を絞りきったライフルなどでその場へ度出入りする通路などを塞ぐ。時間稼ぎではあるが、効果のほどは疑わしい。

機体を降りる。「扉」の運用が終わり、過剰な意識の広がりは収まるが、代わりに戦場の空気が装甲を通さずにパイロットスーツに染みこんでくる。

泡立つ肌を自嘲しつつ、機体を蹴って移動する。扉に向かって腰から抜いた銃をでたために発砲する。さらに接近して、ロック部分と思われる部分を徹底的に打ち抜く。

が、当然開くはずも無い。

思い切り、扉に拳をたたきつける。手首に嫌な痛みが走り、骨が

異常を訴えるが、気にせずにもう一度叫ぶ。

「セシル！ 開ける！」

まるで暴力亭主みたいだな、と、こんな状況でもおかしいことを考えながら、待つ。

一秒、二秒。一分近く経っただろうか、それとも案外短い時間だったのか。

扉が開く。内側からロックを解除され、つんのめるようにしてヨセフは室内へと足を踏み入れた。

明るく、ほとんど何も無い。その部屋の中に、銃を構えた少女の姿が屹立していた。

それに応えるようにヨセフも構える。

「……なんで、来たの」

その声は、涙ぐんでいるようにも聞こえた。

「君は、トーエを殺した」

ヨセフは淡々と告げた。

セシルは一瞬だけびくりと震えてから、しかし銃を持つ手にこめた力は抜かずに続けてきた。

「ベニヤミンを殺した！」

「ああ、そうだな」

淡白に。余裕すら含んで、ヨセフは応えた。

銃声が、耳を焦がす。

ヨセフのすぐ脇を通過した弾丸は背後の扉に小さな弾痕を残していた。

「セシル」

慎重さを重ねに重ねて、その言葉を吐く。

「人殺しと善人の話をしに来た。撃つのは、それからしてくれ」

### 13 暖かさの終わり

#### 13 暖かさの終わり

「間違えちゃいけないことがあった……取り違えちゃいけないことがあったんだよ、セシル」

滑り込ませるようなヨセフの声に、セシルはその肩を僅かに動かし、濡れた瞳に判別しがたい色を灯した。パイロットスーツのようなものは着込んでいるが、メットはしていない。

「あなたは、なんで、そんなこと！」

「何度でも繰り返して言うさ。君がトーエを殺したから」

引きつった痛みが耳を襲う。弾丸がかすったかもしれない。だがヨセフはふらつきもせず、その場に銃を構えたまま留まった。

「殺し合いをしておいて、言うことじゃない！」

セシルのその叫びは最もな話だった。だが、反駁する。

「違う」

首を軽く振って、努めて平静な声を意識する。

「裏切っちゃいけないことがあるんだ。セシル、僕とトーエはベニヤミンを殺した」

「彼は、私を外に連れ出してくれた……恩人だった！」

「だが同時に戦場におき続けた。君を匿いはしなかった」

「それは……仕方がないことじゃない！ 私は、連合の」

「関係ない」

ピシヤリと遮る。セシルが気圧されていることが、その素振りから見て取れた。逡巡が体内に蓄積している、年端も行かぬ少女。それだけのものだった。

「君は、君を助けるかどうか迷い続ける男に恩義や慕情を感じたんだろう。それはいいさ。だが、少なくとも」

銃を持つ手に力をこめる。スーツ越しで分らないが、指の皮が真っ白になるほどに。

「トーエは、迷ってはなかった！ 君や僕を助けようと戦場に立っていたんだよ！」

「それで戦争の中死んだんでしょう？ 私が責められる事なんて！」  
「純粋な気持ちから動いている人間を、個人的な迷いと思い入れから殺したんだよ、君は！」

沈黙が唐突に訪れ、しばらくその場を支配した。聞こえようもない吐息の音が二人分、交差して消えていく。

ほんの少しだけ目を伏せて、ヨセフは掠れるぎりぎり手前の声で告げた。

「……トーエはもういない。僕や君みたいな馬鹿に手を伸ばして、死んで、いなくなつた……遺志を汲まなきゃ、僕らは生きる価値なんて無い」

「勝手です」

「ベニヤミンだってもういない」

「勝手です！」

セシルが足を軽く開いた。安定させた上体、その手の中から弾丸が飛び出す。正確にヨセフの胸を狙った一撃だった。

咄嗟に横っ飛びに避ける。同時にこちらでも発砲する。

牽制の射撃を終えて顔を上げると、セシルは銃のマガジンを外し素早く次を装填しようとしていた。

「いつまでも愚か者に引きずられて！ ベニヤミンは君にとっての父でも兄でもない、ただ同情しただけの男だ！」

叫びを力に、接近する。一足飛びに彼女へ近づき、その手を蹴る。  
「くっ！」

呻いて、セシルが銃を手からこぼす。それをさらに手で弾いて遠ざけたところで、今度はヨセフがセシルに殴られていた。よろめいて、仰向けになりかける。

そこにセシルが追撃をかけてきた。覆いかぶさるようにして、腰

から引き抜いた小さなナイフを振りかざしている。振り下ろされたその手首を握って止めると、彼女の顔とヨセフの顔はすぐ近くにあった。

「私は生まれたときからゴミ扱いだった！ 研究材料で、道具で、実験動物！ あなたとは違う、トーエさんとも違う！」

ダンの中は既に無重力地帯である。二人は纏れ合うようにしながら、空中で抱き合っているかのような構図を保ったままゆっくり回転している。

「それで、どうしたってんだ！」

ナイフを持った手を捻ろうとして、セシルの逆の手に邪魔される。拳をこちらの受け手に叩きつけられ、力を緩めてしまう。滑って落下したナイフを、ヨセフは覚悟を決めて肩で受け止めた。

しびれるような重い痛みが突き抜ける。じわりと広がる熱に構わず、ヨセフは刺さったそれを引き抜いて棄てた。

「そんな勝手で、誰彼殺して許されると、思ふな」

叫んで押し返す。拮抗した力が空しく振るえだけを生む。

「あなただって 何が違うの」

ふっと、突然セシルの力が抜けた。涙が零れ落ちて、散らばる。重力に導かれない涙は神秘的で美しかったが、反面どこか恐ろしい物でもあった。

（何が違う、か）

そんなことは明白だった。ヨセフはトーエが死んだ時点で気がついた。全て大切なこと。それは本来、トーエのような人間を守るために気がついておかねばならないことだった。

何を大切にして、何をすべきか。愚かな意思が多数で蠢く人の世において、どう動き、覚悟し、次に進むべきか。

自分が、どれほどの男か。

「何も変わりはない」

「え？」

「変わりはないよ、セシル……ベニヤミンを大切にすぎで間違

いを犯したのが君なら、そんな君を大切にすぎで間違えたのが僕だ」

トーエのような、真実良い人間を、そうでない人間を救うために利用して、殺してしまった。

悔やむことも出来ない。過去未来全て、その事実を抱えられる。

「ただ、僕は気がついた。だから、君に伝えに来た。僕らは完全な善人ではない。トーエのような曇りのない人間じゃない……ただその他の愚か者よりも少しだけ賢しかな、矮小な人間なんだ」

「私は……ベニヤミンは」

「そう言う人間が、どうするべきか、それを僕らは間違えた。僕も君も、生き方を変えるべきだ。それができないのなら」

セシルの顔を見るのはつらい気分だった。その悲しい表情を視界に入れば、嫌でも引きずられてしまう。悲劇と周りの愚かさ、自分のほんの少しの賢しさに逃げ込んで、籠りたくなる。

「死ぬべきだよ。沈黙を保ったまま生きて、独りで死ぬべきだ」セシルは目を見開いた。未成熟ながら綺麗に整い、未来に期待できそうな形の造作。見つめる顔の全てが、許容できる情感という物を超えてしまったかのように凍り付いていた。

「どうしようもないことが憎いかい、セシル？ 生まれたときから酷い環境におかれたことが、愛のないことが、人々の賢くなかったことが。或いは生まれてしまったことが」

ゆっくりと、彼女は頷いた。

「僕も憎い。巡り会わせだけで家族は死んで、妹は殺すことになった。それでも僕は生きていたし、生きているってことは死ぬまで生きなくちゃならなかったってことだ……でも」

力をこめる。死者と生者。覚悟を示すならば、これしかない。

「どうしようもないことはどうしようもない。僕らは、それによって特別な存在にはなれない。どんなに酷い状況に生まれたって、善に生きていかなきゃいけないって論理の基本は変わらない」

「それは……苦しいよ、ヨセフ」

「ああ、そうだね。だけど、そうするしかないだろう？　悪いことが悪いと分かれば、僕らは善い事しか出来ない、そう言う風にできてる。率先して無知であることはできるけど、そうやって生きたって苦痛の量は変わらない」

「嫌だ……嫌だ……！」

嗚咽と共に、セシルはその顔をヨセフの胸に押し付けた。苦痛の多い世界に生きることだけをただひたすらに拒否して、力の入らない手で肩をつかんでくる。

その姿に一瞬、ヨセフは妹を夢想した。生きていればこれくらいの体格差だっただろうか……？

すぐにそんな馬鹿げた思いは振り払い、セシルの肩をだきすくめる。

「どうしたい？」

間が空く。しばらく迷ってから、彼女は答えた。

「――」

ヨセフもそれに応えて、動いた。宙を漂うセシルの銃を手に取り、腕の中の主へと向けた。

\*

デルフォイの小さな一室。トーエの私室に、アラムはいた。ぼうつと外を眺めて、ヨセフを心配する。

トーエはいない。部屋の荷物は、全て遺品になる。死体は塵と消え、匂いすらベッドから消えていく。「その人が死んだ」という事実を味わうだけ味わって、アラムは泣けもしなかった。

（最低）

自らの中途半端な感性は宇宙のどこかで一瞬にして塵になったという死に様が上手く想像できず、さらに言うなら想像できないことでも上手く悲しめない。

そんなイメージ一つでしか悲しめないことも、無理に悲しもうと



していることもまとめて、

（最低）

何が見ている、だろう。自嘲する。自らは何をしているつもりになっ  
ていたんだろうか。

何かが出来ると思っ  
ていたんだろうか。ずるずる着いてきて、死人に無礼を重ね続けている。  
と。

「……何？」

脳内に棘が刺さるような痛みが体を駆け抜けた。様々な幻視が駆け抜ける。音、香り、痛み、色、遠近、様々な感触が入り乱れて高速で浮き沈みをする。

（これは……誰？）

多くの人間がいる。この宇宙の近く、そして遠くの月と地球にも多くの意識と、その根本。

（ヨセフ）

名前を意識した途端に、その人が見つかる。

銃を手に、少女を見つめて引き金に指を乗せた少年。その銃口は、間違いなく少女 セシルというあの少女に向いていた。

「やめて」

伝わらない。距離は絶望的な溝となって横たわっている。それでも関係なく、アラムはもう一度呟いた。

「やめて、ヨセフ！」

\*

銃声が響き渡り、そいつの体は跳ねて吹き飛んだ。すぐに動かな  
くなる。

「……………」

息を吸って吐く。二度繰り返してから、ヨセフは叫んだ。

「くそつたれえっ！」

銃を棄てる。

「ヨセフ？」

腕の中でセシルが顔を上げた。

遠くで漂う連合の兵士　要塞内の白兵戦を、この中枢に乗り込んだヨセフに対して行いに來たのだろう　を一瞥して、荒い息を無理矢理に整える。

「何が、何がどうしたいか、だ。結局これじゃあ、僕はトールを殺し続けるだけだ」

「ヨセフ、何を……」

戸惑うセシルの手をとって、ヨセフはゼルプストに駆け寄った。

コクピットに滑り込み、ハッチを閉じる。

「逃避は無しだ。セシル、君は、僕と同じく、死ぬまでどうすればいいのか分からない善良さを目指してもらっ」

素早く機体を立ち上げて、すぐに発進する。そのころには要塞の兵がその場に集まりだしていたが、関係ない。無理矢理に背後に向かって進み、ある程度行ったところで向きも変える。

片足の機体が、宇宙へと戻る。

（デルフォイは？）

一瞬で探し当てる。だがその一瞬でゼルプストは新たに被弾した。  
「がっ！」

振動に息が勝手に排出される。咳き込みつつも、立て直す。腕が片方なくなったらしい。

ライフルを構える。デルフォイまではまだ少しある。敵は完全に中枢を失い混乱しているが、その層は厚い。恐らく月側が時間をかけて制圧していくことになるだろうが、それまで待っているのは死ぬだけだ。

「ヨセフ！」

「掴まってて！　無事に母艦までたどり着く！」

宣言して、加速する。味方もちらほらと見えるが、この周囲は敵が圧倒的に多い。つい先ほどまでは大将がいた場所である。当然か

もしなかった。

回りこんでくる三機の戦闘機を撃ち落して、振り返ってさらにもう一機。

しかし前に進もうとする隙を気取られ、戦艦から集中砲火を浴びてしまう。意識を拡散しきって無くなる寸前まで広げて攻撃の軌道を読む。信じ難い動きで交わしていくが、何発かはかすり、一撃は残っていた足の足首から先を消失させた。

「くそおおお！」

回避の速度を殺さず敵戦艦に接近し、弾幕をくぐり、ブリッジへと壊れた足を叩き込む。もう一隻の戦艦はその攻撃と同時にライフで落とす。

腕を使って戦艦から身を放し、再びデルフォイへと向かう。  
しかし。

「ヨセフ……」

か細いセシルの声は、眼前の状況と合わさってヨセフを打ちのめしかけた。

感じられる。そうでなくとも背部カメラは捉えている。敵の部隊がさらに接近していた。戦闘機が無数にヨセフを取り囲むように移動してきている。遠くからゆつくりと、数で押し込むように。

（どうにもならない、か……？）

デルフォイの位置、ここからの距離。すべてを考えの中で溶け合わせ、掻き回し、飲み込む。

「……セシル、これを」

コクピットに置いたままになっていたスーツのヘルメットを渡す。無理矢理取り付けてみると、何とか規格が一致したようだった。トエのスーツは宇宙服として完成した。

「ヨセフ？ 何を」

「賭けに出る。もしかしたら、ここで二人で死んだほうがマシかもしれない賭けだ。だけど、僕はトエに報いなきゃならない。もしかしたら、ベニヤミンにもね」

「待つて、ヨセフ、私は」

「君は、デルフォイという船へいけ。そこにはアルバがいる。彼女は、君を匿ってくれるよ」

「私のことを知っているの？」

「今から伝えるさ」

「どうやって」

「船は『扉』を積んでいない。このゼルプストだけじゃ、一方的なアクセスしか出来ない。だけど」

人の心は、もともと繋がっている。一であり全であるからこそ、個人性である。扉はその全体性へアクセスし易いようにしてくれるガイドでしかない。だとすれば。

「届くはずだ……元々人と人の間に、距離は無意味だ」

ヨセフはアルバとアラムへ向けて、扉の力を借りずに、すべてを伝えようと試みた。相手が聞こうとしていることを一方的に信じ込み、強く想う。

「でも、それでヨセフはどう」

するのか、と言わせずに、ヨセフは自分も予備のメットをかぶり、ハッチを開く。

「さよなら、セシル」

軽く彼女の肩を抱いて、すぐに突き放し、集中する。

「この方向だ。出来るだけ真っ直ぐに、この先にある船のことを思い続けて」

それだけを伝えて、背中を押す。まだコクピット内に空気があるうちに、ヨセフは叫んだ。

「出来るだけ加速して！ 間に合うかどうか、賭けだ！」

「待つてヨセフ、私は、あなたを」

そこから先は聞こえなかった。真空の壁に阻まれて、不安に崩れかけたセシルの顔だけが空しく映る。

「さよなら」

もう一度だけ繰り返し、ハッチを閉じる。やるべきことが残っ

ていた。

「足止め、か。悪戯が過ぎた身には、お似合いかな」

方向を百八十度変えると、そこには小さな光点として凄まじい数の敵が迫りつつあった。

## エピローグ

### エピローグ

乾いた空気が静かに循環している。宇宙が近く、しんとした静けさは優しく耳に馴染む。

「ここが……？」

セシルは、背後に立つ少女に問いかけた。

「そ。トーエとヨセフが出会った場所。秘密の展望台。二人は二人だけの秘密にしていたみたいだけど、私も実は知ってた」

そう懐かしそうに言うアラムの顔を、セシルは恐ろしくて見上げることが出来なかった。

「学校で出会うより先に、私はここでヨセフに会ってたんだ。声はかけられなかったし、隠れてたからヨセフのほうも気づいてなかったと思うけど。それでも、ずっと前から知ってた」

「そう……ですか」

\*

連合とユダは、またもいつまで続くか怪しい休戦状態へと移行した。ほとんど意地と意地のぶつかり合いになってしまったこの両者の間柄をどうにかしたいと考える政治家は多いが、実現するのは当分先になることだろう。

戦後デルフォイは行方をくらし、一部の乗員を小型艇に残し戦域を離脱している。記録によれば、船内の一部の人間達がその機能を制圧し、いずこかへと消え去ったということだった。

そのため、その時点で船に乗っていた多くの人間が今も行方不明となっている。

アルバ、イマダ、アラム、そして捕虜として奇跡的に捕獲された生身で宇宙を漂っていた少女。

丸ごと消えて、また月と地球は、多くの人間は冷え切った宇宙の間に横たえて生活している。

\*

夜。静かな片隅で。

抑え目に駆動音を響かせて、巨人がその姿を現した。

『……よし。全て良好、いつでもいける』

『本当に大丈夫か？ 扉を二つも載せたんだ。意識への弊害は』

『くどいよ、アルバ。散々その話はしたし、実際乗ってみて大丈夫だつて言ってる。それにもし無理なものでも』

『ものでも？』

『やらなくちゃいけないよ。残りの扉を破壊する。一歩間違えば、今度はユダすべてを敵に回すことになるんだから』

## エピソード（後書き）

完結いたしました。

ここまで読んでくださった方がいたとしたら、私はその方々に土下寝して感謝を示していることでしょう。本当に有難うございました。ここまで書けたのは、読んでくださる方がいればこそ、でした。筆舌に尽くしがたい、様々な感謝や感動があります。

また別の作品で、私が作者としてか、もしくは読者としてか。それは分かりませんが、お会いしましたら、そのときはまたよろしく願います。

宜しければ、感想等、お気軽に書いていただければ今度の参考に  
なります！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1682i/>

---

ゼルプスト・ミュトス

2010年10月9日10時38分発行